オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー

【Ｎコード】
Ｎ５２２６Ｘ

【作者名】
イマジンカイザー

【あらすじ】
グリードとの戦いも終結し、平和になったオーズの世界に、光のオーロラを超えて、突如謎の怪人集団「アポロショッカー」が攻めてきた！相対するは世界の破壊者ディケイドと、平成ライダーのコアメダルを手にした火野映司！鴻上ファウンデーションやクスクシエの面々も巻き込んでの一大戦争が今、始まる！

第一話：「羊とオーロラとピンクの男」（前書き）

※本小説は『仮面ライダーＯＯＯ』最終回後の展開を踏まえ、千回記念回（本編に於ける第２７、２８話）及び『レッツゴー仮面ライダー』に相当する出来事がなかった世界観での二次創作です。

※本小説では、食玩及びカプセルトイでしか登場しなかった『平成仮面ライダーのコアメダル』が、『オーズ本編に登場したコアメダル』の”代わりに”登場します。

※ディケイド側はオーズを知っていますが、オーズ側は一部を除いて自分たち以外の仮面ライダーを知りません。

これらの点をご理解いただいた上で本編をお楽しみください。

第一話：「羊とオーロラとピンクの男」

※※※

その日の高原は雲一つない、澄み切った空だった。牧草の乾いた匂いが鼻孔をくすぐり、少し冷やかな気候と相まって、嗅ぐ者に落ち着きと安らぎを与えていた。

青々と茂った草原の上を、肌触りの良さそうな真白い毛の羊の群れと、それらを連れた十数人の男女が横切った。上は老齢ながらも矍鑠（かくしゃく）とした女性。下は羊たちを先導する馬の上に乗った小さな少年。どうやら彼らは良質な牧草を求め、北へ南へと旅をしている羊飼いの遊牧民のようだ。

皆一様に羊毛で拵（こしら）えられたコートや帽子を纏っているが、その中に同じ服装をしている割には、妙に顔立ちの異なる男がいた。

馬に乗って列の先頭を陣取る、立派な顎髭（あごひげ）を蓄えた男性は、隣で馬の手綱を引いて歩くその男に声をかける。

「嫌な風だ。山の向こうから嵐が来る。早い所ここから離れるぞエジー」

「あぁ、はい。って……俺はエジーじゃなくて『映司』ですよ、サヴァンおじさん」

「うぅむ。お前の言葉は訛りが強くてな、済まんかった、エッチ」

「いや、だから……。エッチでもスケッチワンタッチでも、お風呂に入ってアッチッチでもありませんって。映司です、火野映司（ひのえいじ）」

「そんなことはどうでもいい。さっさと馬に乗れ。手遅れにならんうちにな」

映司、と名乗る男は「また名前を覚えてもらえなかった」と落胆しつつも、馬の背に腰を据え、一団の遥か後方に指示を飛ばす。引き返せという命令は瞬く間に伝わり、皆馬の背に乗って羊を先導しつつ、踵を返して元来た道を引き返し始めた。

手綱を握って馬を操る映司の肩を、背後から優しくつつく者がいる。彼と一緒に馬に跨る小さな少年、末っ子のパドルだ。
「ねぇ、ねぇねぇエイージ。あの話の続き、また聞かせてよ。ねぇねぇ」
「エイージじゃなくて映司。いい加減覚えてくれよパドル。えぇっと、どこまで話したっけ。俺の初恋の話？　それとも正義の味方になりたい御父さんと男の子の話？　じゃなきゃ、爆弾作りが大好きで、自分のために他の人たちまで吹き飛ばそうとした人の話……かな」
「うぅん。パパスのダディさんが、敵の一味と仲間になっちゃうところー」
「あぁ、もうそこまで話してたっけか。えぇっと……」
目を輝かせて催促を続けるパドルに応じ、映司は記憶を反芻させ、。

仮面ライダーオーズ・火野映司。世界を丸ごと喰らわんとする途方もない欲望を持ったメダルの怪物・グリードたちを下し、世界の終末を阻止した彼は、少しのお金と明日のパンツ、今は亡き相棒の形見を手に、自らが欲した絆の手を結ぶため、世界中を巡る旅を続けていた。
彼は今、旅の途中でモンゴルの遊牧民たちと行動を共にしている。名前をきちんと覚えてもらえないのは悔しいが、皆人当たりが良く、流れ者の自分を快く受け入れてくれたことを喜んでいた。
「――というわけ。尤も、伊達さんはその手術に成功して、最後の戦いの前に帰って来てくれたんだけどね」
「ふぅん。最後……、ってことは、エイージの戦いはもう終わったの？」
「あぁ、そうさ。世界を滅ぼそうとする化け物たちはもういない。俺たちみんなでやっつけたからね。……そう、もう終わったんだよ」

”戦いは終わった”。そうだ、世界の終末もグリードが全てを喰らうこともない。何もかも元に戻ったんだ。喜ぶべきことじゃないか。

しかし、それを手放しに喜べない自分もいた。世界を救った代償も大きかったからだ。映司はそんな複雑な気持ちを振り切るように、ズボンのポケットに収まった「かつての相棒」を握り締めた。

「エイージ、どうしたの？　そんな浮かない顔してさ」

「何でもないよ。さてと、次のお話は……」

何も知らないこの子にそれを話して何になる。映司はポケットから手を出して迷いを振り切り、先程までと変わらない笑顔を見せた。

だが今度はパドル少年の様子がおかしい。嵐とは別の方向を指差し、不安げな表情でそちらを見つめているのだ。

「エイージ、エイージ。大変だ、嵐だ。嵐が来るよ」

「それは分かってるよ。だから必死に引き返してるんだろ」

「違うんだ。雨とか風じゃない。もっと恐ろしい”何か”が」

促され、パドル少年の指す方を向く。映司が見る限り、後方の嵐より危険なものは見当たらなかった。

彼は一体何を恐れているのか。首を傾げつつも「大丈夫だよ」とパドルをなだめる映司だったが、彼らの遥か前方に、不気味な色合いの『光のオーロラ』が現れ、状況は一変した。

押しても引いてもたわむだけで、通り抜けられないオーロラに、羊たちはおろか、飼い主たちも戸惑って足並みを崩してしまう。口々に何がどうなっているんだと愚痴る中、二つの『何か』が光のオーロラを砕いて飛び出し、平野の上に降り立った。

――――逃がさんぞ、仮面ラァーイダ・ディケーイ！

――――俺は別に逃げちゃいねぇぞ、人聞きの悪いことを言うな！

一人は煤けた銅の鎧を全身に纏い、蠍の絵柄の盾と柄に鎖が付いた斧を構えた、炯炯（けいけい）とした目付きと口髭顎髭が印象的な男。もう一人は、斜めに黒線が入った剣を構え、四角い柄ピンク地の顔に黒の縦縞が無数に刻まれた、緑色の複眼の戦士だった。顔どころか体じ

ゅうがピンク色で、鎧の男に負けず劣らず不気味な印象を受ける。
各々武器を構え、緊張した面持ちで向かい合っていることから、少なくとも彼らが仲の良い間柄でないことは理解した。しかし映司にとってどちらが敵か味方か、はたまた双方が敵なのかは分からない。
周囲の空気が徐々に張り詰めて行く中、先に言葉を発したのは鎧の男の方だった。男は歯を見せてにやりと笑い、向かい合うピンクの戦士にかかって来いと手招いた。
「この『ドクトルG』相手にここまで粘れるとはな、敵ながら天晴れだ、仮面ファーイダ・ディケーイ。しかしそれも終わり。この世界を貴様の墓標にしてくれよう」
「墓標を刻むってんならよ」ピンクの戦士が息を弾ませて言い返す。「刻む名前くらいきちんと覚えろ。俺の名前はディケーイじゃねぇ、仮面ライダー・ディケイドだ」
”ディケイド”と名乗るピンクの戦士は言い返しつつ立ち上がり、鎧の男に向かって駆ける。男の方も待ってましたと言わんばかりに、手にした盾と斧を構え、挑み来るディケイドを迎え撃つ。
映司と遊牧民たちの前に現れた謎の闖入者。不気味な風貌の彼らに皆困惑し、馬や羊が乱れ始めた。
「おいおい、エジー、ありゃあ何なんだ」
「俺が聞きたいくらいですよ。それよりも早くここから離れましょう。この壁を伝って行けばどこかで切れ目に辿り着ける筈です」
異様な光景だが、それに気を取られて困惑している場合ではない。とばっちりを食う前にこの場を離れなければ。幸い、彼らはこちらに気付いておらず、自分たちの戦いに集中している。逃げるには今しかない。
「サヴァンおじさん、みんなに合図を。兎にも角にもここから離れなくちゃ」
「分かった。とっとと逃げるぞ！」
サヴァンは馬の尻を叩いて走らせ、家族に羊たちを囲い込んだ上

で自分の後に続くよう指示を飛ばす。遊牧民たちが離れて行く中、ディケイドとドクトルＧとの戦いが始まった。

第一話：「羊とオーロラとピンクの男」（後書き）

◆ドクトルＧ

「仮面ライダーＶ３」に登場した初期の大幹部。Ｖ３のことを『仮面ライダー』ではなく「仮面ファーイダ」と独特のイントネーションで呼ぶ所が妙に印象深い悪役さんですね。

一応、この話を書くにあたって彼（及び彼の怪人態）が登場する回を視聴して勉強してはみたのですが、文面には一切反映されていないのが悲しい所。

◆”エッチスケッチワンタッチ、お風呂に入ってアッチッチ”って、ここで書いても今の人たちには通用しないんでしょうかね。自分が母親伝いに聞いて、強烈に頭に残った言葉なので、そもそも母の造語なのかも知れませんが。

第二話：「斧と鎧と甲殻類メダル」

※※※

ディケイドの武器・ライドブッカーのソードモードがドクトルGの盾にぶつかり、釣り鐘を撞木（しゅもく）で叩いたような轟音が周囲に響く。よろけはしたが、男に手傷を負わせることは出来なかった。

「硬いな……。面白ェ、斧には斧でどうだ」

――――FORM　RIDE　「DEN－O　AX」

このままでは立ち居かないと判断したディケイドは、ライドブッカーを左腰に戻し、そこから「フォームライド」のカードを抜いて腹部のバックルに装填。彼の体は電車の警笛のような音と共に、金色の鎧に身を包んだ仮面ライダー、『電王・アックスフォーム』へと変わった。

「小賢しい、姿が変わった所で、我が鎧は貫けぬ！」

それが何だと、今度はドクトルGがディケイドに飛び掛かる。ディケイドはそれを避けることなく受け止め、近寄ってきた彼の右手を掴み、アックスフォームの専用武器『デンガッシャー・アックスモード』で袈裟に裂いた。

「なな、なっ！　おの、おのれェ……」

盾で凌ぐことすら失念し、斧の強烈な一撃をその身に浴びたドクトルGは、傷口から赤い火花を散らして吹き飛んだ。ディケイドは相手が起き上がるよりも前に接近し、斧を二三度振って確実にダメージを与えて行く。

「くうぅ……、調子に乗るなッ」

だがドクトルGも負けてはいない。斧をその身に浴びてよろけた瞬間、態勢が崩れたことを利用してディケイドの胸部を蹴り付け、距離を取りつつ立ち上がる。

「やるな、ファーイダ・ディケーイ。しかァし、貴様の付け焼き刃

の斧捌きでは、このドクトルGの首は取れぬ。絶対に取れぬのだ！」
「そうかい」ディケイドはライドブッカーから新たなカードを抜き出して言葉を返す。「だったら一つ勝負と行くか」
――――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「ｄ－ｄ－ｄ－ＤＥＮ－Ｏ」
「面白い、望むところ！」
ディケイドが金の縁取りのカードをバックルに装填し、軽く手を叩いたと同時に、血気盛んに斧を構えたドクトルGが襲い来る。ディケイドはデンガッシャーを構えて迎え撃つ「振り」をし、斧を天高くに放って、ドクトルGが斧を振り下ろすよりも早く、彼の左頬に回し蹴りを叩き込んだ。
「なっ、何故……」
「馬ァ鹿。誰も”斧で”勝負するとは言ってねぇだろ」
不意を付かれ、　大きく態勢を崩すドクトルG。そこに先程ディケイドが振り上げたデンガッシャーが降りてきた。ディケイドは高く飛び上がって空中で斧を掴み、そのままドクトルGに向け真一文字に放った。
構えた盾すらも砕かれる程の一撃を喰ったドクトルGは、切り裂かれて離れそうになる右半身と左半身を両手で押さえ付けつつ、『卑怯者め』と思い切り叫んだ。
「よくも騙してくれたな！　戦士の風上にも置けん奴め、もう許せぬ！」
「それ、お前らが言えた義理かよ……」
そう言ってやれやれと両手を振って溜め息をつくディケイド。ドクトルGは懐から一枚の黒い『メダル』を取り出して、額の前で構えた。
「見るが良い、仮面ファーイダ・ディケーイ！」
ドクトルGがそう言うと、彼の額に自販機の投入口のようなものが現れ、手にしたメダルが一人でに吸い込まれて行く。
瞬間、彼は黒い煙の中に姿を消し、頭には蠍の鎧、腕に逞しい蟹

鋏、脚には海老の殻を模した外殻を纏った怪人へと姿を変えた。
「これぞ、我が真の姿にして新たなる力！　重装綱（じゅうそうこう）カニレーザー、だ！」
「おいおい、なんだそいつは。ナントカの仮装大賞の時期にゃまだ早いぜッ」
　言うが早いか、ディケイドは相手が動き出すよりも先に、カニレーザーの眉間を狙って斧を振るう。しかし平たく変形した蟹の鋏に阻まれた上に、叩き折られて使い物にならなくなってしまった。
「何ッ！　なんつう硬さだ……よッ！？」
「ふはは、重装綱カニレーザー様に、薪割りの斧など効くわけなかろう。アポロ首領に仇なす愚か者め、このまま叩き割ってくれる」
　カニレーザーの巨大な鋏がディケイドを襲う。ディケイドは姿勢を低くし、バックステップで距離を取ると、焦りの色を浮かべて「参ったな」と呟いた。
「あぁ硬くちゃ外側からぶっ壊すのは無理だな。だったら、内側から蒸し焼きにしてやる」
――――ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　「ＨＩＢＩＫＩ－ＫＵＲＥＮＡＩ」
　ディケイドはカニレーザーに対抗すべく、赤く燃え盛る鬼のカードをバックルに装填。青い御霊と赤い炎に包まれたディケイドは、その姿を「響鬼・紅」へと変質させた。
――――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「ＯＮＧＥＫＩＢＯＵ－ＲＥＫＫＡ」
　姿を変えると同時に、一対の撥（ばち）を呼び出し、硬い外殻で守りを固めるカニレーザーを叩く。殻には傷一つ付かないが、清めの音撃と共に放たれた熱き炎は、カニレーザーの外殻を貫いて、奴に呻き声を上げさせた。
「熱……熱い！　だが、負けん！」
　攻撃を受けて尚襲い来るカニレーザーに、冗談じゃないぜとぼやくディケイド。蒸し焼きにするという考えは有効らしいが、倒し切るには力が足りない。蟹鋏を掻い潜って、奴の腹に直接叩き込まな

ければ意味がない。
　鋏の動きは見た目よりずっと素早い。ただ懐に入るだけでは捕まって胴から下を切り落とされるのが落ちだろう。素早いだけではいけない。何かで隙を作らなくては。そう思案していたディケイドに向かい、黒色の光線が放たれた。
「うわっ、と！　危ねぇな、当たったらどうする気だ」
「それならば万々歳よ。超装綱カニレーザー様を鋏だけの怪人と思うな。発射、発射、発射ーッ！」
　頭部と両手の鋏、三ヶ所から放たれるレーザーがディケイドを襲う。数は多いがかわす分には大したことはない。ディケイドはプロボクサーのように腰のフットワークでレーザーを巧みにかわし、徐々に間合いを詰めて行く。
　懐に近付くディケイドを間近に、カニレーザーの心に焦りが生じて狙いがさらに粗くなる。鋏で裂くには近付かれ過ぎた。外殻の内部を蒸し焼きにされては、さすがのカニレーザーもただでは済まないだろう。焦るカニレーザーの目に、オーロラから逃れんとする遊牧民たちの姿が留まった。
　この機を逃す手はない。カニレーザーは仮面の下でにやりと笑い、遊牧民たちの殿（しんがり）を行く映司とパドル少年に照準を合わせ、両腕のレーザーを放った。
「戦士だとか言っておいてやることが汚ねぇぞ、ちきしょう」
「そんなもの、貴様に言えた義理か」
　放たれた光線が自分を狙ったものではないと気付いたディケイドは、ライドブッカーをガンモードにして構えるも、光線は彼らの目と鼻の前まで迫っており、相殺は間に合わない。ディケイドはやむなく二枚のカードをドライバーに装填し、踵を返して駆け出した。
――――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＫＡＢＵＴＯ」
――――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「ＣＬＯＣＫ　ＵＰ」
　ディケイドが変身（カメンライド）したのは、赤き一本角の仮面ライダー、カブト。

カブトの持つ超高速移動能力『クロックアップ』で、光線が映司たちに当たるよりも早く、光線と彼らの間に先回りしようと言うのだ。
二人に当たる前に光線を追い越したディケイドは、腕を胸の前で十字に組んで、カニレーザーの光線を受け止める。もんどり打って宙を舞ったディケイドは超加速空間から投げ出され、青々と茂った草木の上を暫く転がった。
「勝機！　喰らえ、仮面ファーイダ・ディケーイ！」
仰向け大の字になって倒れ込むディケイドに向け、カニレーザーは頭部のレーザー射出口の裏、後頭部から毒針を伸ばし、彼の背中に思い切り突き刺した。
背中から毒を注入されたディケイドは、全身を襲う激痛と痺れに耐えかね、両膝をついて倒れ込んでしまう。

「エイージ、何だったのさ今の。あの赤い、なんであそこで倒れているの？」
「俺にだって分からないよ。でも……」
あの二人が何故戦っているのかは分からない。しかし一つだけ分かった事がある。ディケイドと名乗るピンクの戦士。彼は今、己の身を省みず、自分たちをカニレーザーの光線から庇ってくれた。その彼が今危機に瀕しているのだ、見過ごせる訳がない。
しかし、今の自分に何が出来る。嘗ての戦いに於いて、全てのコアメダルとオーズドライバーを失い、ただの人間となった自分に、あの化け物と戦う力など皆無だ。下手に手助けに入っても何もならないのではないか。
どうすればいいかと思い悩む映司だが、そんな自分を誰かが”呼んでいる”ことに気付く。耳に届いた声ではない。頭の中に直接響いてくる声だ。
やはり放ってはおけない。映司は自身の懐を探って何かを確信すると、馬をディケイドたちの方に向け、後ろに乗るパドル少年に「降りて」と言った。

「そこで待っててくれパドル。俺、あの人を助けに行かなくちゃ」
「助けに行くって……」パドル少年が不安そうな声で言う。「エイージはもうオーズじゃないんでしょ？　助けるったってどうするのさ」
「大丈夫、何とかなるさ。なんとか、ね」
映司は自分自身に言い聞かせるようにそう言うと、鞭で馬の尻を思い切り叩き、彼らの元へと走らせた。

第二話：「斧と鎧と甲殻類メダル」（後書き）

◆ディケイド本編で登場しなかったカメンライド・フォームライドカードはそれなりに使うつもりです。響鬼・紅ってあれ、ディケイド放送時にはスーツがなかったのでしょうか。それとも単に使うタイミングがなかったのか……。

◆そういえば、「超装光ギンガマン」なんてものがありましたね、そういえば。あっちの方が見てて語感が良いのに、読みは一緒な筈なのに、超装鋼だと妙な気持ちになるのは何故なのでしょう。

◆基本的に状況説明→戦闘→状況説明……を交互に繰り返して行くようになるかと思います。

　ほぼ日更新で全２０～２５話構成で終わらせたいと思っているのですが、こちらの都合でズレ込む可能性もあるので、現時点ではなんとも……。

第三話：「青色メダルと輝く勇気と心に剣」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、火野映司が所持しているメダルは――

◎ヘッド・コア：割れたタカ・コア……一枚

第三話：「青色メダルと輝く勇気と心に剣」

※※※

「ふふふ、貴様もこれで最後だな、仮面ファーイダ・ディケーイ」
毒に侵され突っ伏したディケイドにカニレーザーが迫る。なんとか逃れようと地を這うも、彼の鋏は目と鼻の前まで迫っている。カニレーザーは彼の首を刎ねんと鋏を振り上げるが、ディケイドの足元に転がった二枚の“メダル”を目にして、鋏を止めた。
「赤に青……、首領が探していた”残りの”メダルではないか。成程、どおりで見つからぬ訳よ」
「くそっ、お前には……渡さねぇ、ぞ」
そう言って手を伸ばすも、毒に侵されたディケイドの手は震えるばかりで、落としたメダルを拾うことすら出来ない。カニレーザーは彼の手を軽く払い除け、二枚のメダルに手を伸ばす。
しかし、彼がメダルを握ろうとしたその時、彼の視界を夜と見違えんばかりの漆黒の煙幕が遮った。
――タコ、カン！
「なな、何だこれは！　くうう、何も見えんではないかッ」
突然視界が遮られたことに取り乱すカニレーザー。ディケイドはその隙に体勢を立て直して距離を取り、何が起こったのかと辺りを見回した。
見ると、「タコ」の形をした一匹の機械が墨のようなものを吐きつつカニレーザーの周りを浮いている。どうしたことかと首を傾げるディケイドに、馬に乗って戻ってきた映司が声を張り上げた。
「今の内です、逃げてください！　ピンクの人」
「ピンクの人だぁ！？」唐突に現れた謎の男に対し、ディケイドは驚いて言葉を返す。「俺のことはいい、助かったんならとっとと逃げろ！」

「今にも死にそうな人を見捨てて逃げろって言うんですか？」映司が声を荒げる。「そんなこと、俺には出来ません！」
「ンなこと言ってる場合か、戦いの邪魔なんだよ、逃げろって！」
「退きません！　逃げろって言うなら、あなたも一緒に逃げましょう」
「馬鹿言うな、俺が逃げたらあいつが追ってくるだろ！」
「じゃあ俺だって退きません」
あぁ言えばこう言う、こう言えばあぁ言う。ディケイドと映司の間で両者一歩も退かない言い争いが続く。
言い争いに夢中になっていたからか、二人はカニレーザーがタコの煙幕を振り払い、タコカンを砕いたことに気付かなかった。
カニレーザーは右の鋏で映司の胴を、左の鋏で彼の首を絞めつつ言う。
「何処の馬の骨か知らんが、神聖な戦いを汚す輩は許せぬ、断じて許せぬ！」
戦いの邪魔をされ怒り心頭のカニレーザーは、映司を地面に押し付け、ゆっくりと力を込める。映司は引き剥がそうと鋏に手を掛けるが、怪人と人間との力の差は歴然であり、引き剥がすどころか逆に絞め付けられていく。
――――もう駄目なのか……諦めるしかないのか？
――――嫌だ。諦めたくない。パドルもそこのピンクの人も、俺を受け入れてくれたサヴァンおじさんたちも皆！　誰も護れていないじゃないか。
――――力だ、力が欲しい。繋いだ手を離さなくても済むだけの力が、皆を護れる力が！
首と胴を絞められ、気が遠くなりかけた映司は、左腕を鋏と自身の首との間に割り込ませ、力を欲して辺り構わず右手を伸ばす。カニレーザーは彼のそんな様を見、悪足掻(あが)きはよせと映司の右手を踏みつけた。
「無駄だ無駄だ。ただの人間であるお前に、超装鋼カニレーザー様

は止められぬ！　死ねェい」
　嫌味たらしくにやりと笑い、両の鋏に思い切り力を込めるカニレーザー。しかし彼は、映司を殺そうとするあまり二つのことを失念していた。一つはディケイドが先程、赤と青の二枚のメダルを落としていたこと。もう一つはそのメダルが、自分たちのすぐ近くに落ちているということだ。
「ぬぅ……おぉおおおッ！？」
　そしてそれは、超装鋼カニレーザー最大の誤算だった。彼に踏み付けられる寸前、映司はその場に転がっていた青のメダルを掴み取っており、同時に彼の胸から勢いよく飛び出した「柄」によって、カニレーザーは跳ね飛ばされてしまったからだ。
「なん……なんなんだ？　今何か、俺の……って、なな、何だこれ！」
　跳ね飛ばされたカニレーザーもそうだが、当の映司も、自分の胸から剣の柄が飛び出ているという、訳の分からない状況を把握出来ず戸惑ってしまう。
　戸惑いはしたが、驚いてばかりもいられない。胸に刺さっているようだが、血は流れておらず痛みもないので、とりあえずその柄を抜くことにした。
　柄は何のとっかかりもなく引き抜け、ヘラクレスオオカブトの角を象った見事な剣が現れた。
　引き抜くと同時に映司は気付く。先ほどまで握っていた青色のメダルがない。体の中に吸収されてしまったのか、それともこの剣が青色のメダルそのものなのか、それは分からない。しかし、一つだけ分かることがある。
「ここに剣があって、奴が吹っ飛んでいるってことは……戦えってことなんだろう？　なぁ、そうなんだろう！」
　映司は剣を支えに立ち上がり、体勢を立て直している最中のカニレーザーに斬りかかった。完全に不意を突かれたカニレーザーは、胸を打たれて転げ回るも、その後何事もなかったように立ち上がる。

「ぐぅう、人間ごときがよくもやってくれたな！　容赦せぬ！　ああ容赦せんとも！」
　カニレーザーの怒りに任せた鋏が映司を襲う。映司は剣の刀身で攻撃を受け、丁寧に捌きつつ、カニレーザーの堅牢な鎧に一撃一撃を丁寧に入れていく。その都度よろけるカニレーザーだったが、装甲を貫くことは出来ず、決定的なダメージを与えられずにいた。
「何かと思えばこんなもの、屁でも無いわ！　そぉれぃ！」
「うわ、あぁ！」
　力負けし、刀身で防御しつつも吹き飛ばされて宙を舞う映司。上手く着地出来ず、足を挫いてふらつく彼に、ディケイドは何をやっているんだと檄を飛ばした。
「仮面ライダーの力を使ってそのザマか？　期待外れにも程がある ぞ！　もっと真面目に戦え！」
「真面目にって……俺は十分本気ですよ、これ以上何をしろって言うんです！」
　映司の尤もな言葉に、ディケイドは彼の持つ剣と、彼の足下に転がった赤色のメタルを見て言葉を返す。
「剣の柄だ。そこの窪みにもう一枚のメダルをぶちこめ、お前の足下に落ちているそれだ！」
「足下、ですか？　メダル、メダルと……」
　言われて、足下を見回しメダルを探す映司。赤のメダルはすぐに見つかった。ディケイドの言う通り、拾い上げて剣に嵌め込もうとするが、カニレーザーがそれを見過ごす筈がなかった。
「言った筈だぞ人間よ、無駄な足掻きはやめろとな！」
　そうはさせるかとカニレーザーが迫る。彼にメダルを奪われる前に剣の柄に嵌め込めた映司だが、刀身を盾として構えるには近付かれ過ぎてしまった。
「小癪な、このまま真っ二つに裂いてやるわ！」
「くぅ……こうなったら、喰らえッ」
　守りに入る時間はない。ならば駄目元でも攻めるだけだ。映司は

懐に入り込んだカニレーザーに対し、逆に一撃見舞ってやった。
「逃げずに斬り返して来るとは……、なかなかやるではないか。しかァし、武器を持とうが不意を突こうが、人間ごときにこのカニレーザー様を跪かせることは出来ぬ、絶対に出来ぬのだ！」
彼の不意を突いた一撃は、カニレーザーの胸部に届いた。届いたは良いが押し込んで斬り崩すことは敵わず、勢いを殺されてあっさりと止められてしまう。
カニレーザーの額の水晶が輝いた。殺人光線発射の合図だ。押さえ込まれて動けないでいる映司は、最早これまでかと歯噛みするが、瞬間、刀身から発せられた”雷”によって、カニレーザーは火花を散らし吹き飛んだ。
「なっ！　何だこれは！？　何故私が吹き飛ばされているのだッ」
「何だったんだ、今の……」火花を散らし、弾ける音を響かせる赤のメダルを見、これがピンクの男が言っていた力かと驚く映司。
そして同時に、オーズドライバーを用いずに力を発揮出来るメダルなどあるのか。あるとしてこれは一体何なのか、これを持ち込んだ仮面ライダーディケイドとは何者なのか――様々な疑問が頭の中で駆け巡る。
しかしその事について考えている暇はない。不意打ちを喰らって倒れていたカニレーザーが、再び起き上がって来たからだ。
「なんと言う、なんと言う失態！　一度ならず二度までも！　人間ごときに遅れを取る……とはッ！　許さぬ、絶対に許さぬぞ！」
「あれでもダメ……なのか」二枚のメダルの力を用いてなお、カニレーザーを倒せない事実に愕然とする映司。しかし、その様子を傍から見ていたディケイドは、彼に「もういい」と言って下がらせ、一枚のカードをドライバーに装填した。
「よくやったな旅人。後は俺に任せな」
「任せろって……」不安げな声で映司が言う。「そんなにふらふらで大丈夫なんですか？」
「心配ねぇよ。お前が時間稼ぎしてくれたお陰で、十分休めたしな」

―――――FORM　RIDE「AGITO　BURNING」
カードをドライバーに装填すると共に、燃え盛る業火の戦士、「アギト・バーニングフォーム」へと姿を変えた。
「面倒なもんぶちこんでくれやがって、一発で仕留めてやるぜ」
―――――FINAL　ATTACK　RIDE「a－a－a－AGITO」
同時に、金の縁取りに六本角の紋章が象られたカードを装填。ディケイドの右手に炎が灯り、その勢いのまま、煙幕に気を取られたカニレーザーの胸に叩き込んだ。
「ふっ、ふふふふふ、そんなもので我が鎧が砕けると……でも……んん、んんん！？」
受けた直後こそ高らかに笑っていたカニレーザーだったが、その衝撃で胸部から亀裂が走ったことで、笑顔が焦りに変わる。
亀裂の生じた箇所は、先程映司が剣を振るったあの部分。不発に見えたあの一撃で、カニレーザーの装甲にわずかにヒビが入っていたのだ。そこに叩き込まれた強烈な炎の拳。ヒビを通じてカニレーザーの体内に直接叩き込まれた熱は、瞬く間に彼の体を蒸し焼きにした。
「おぉ……おッ……、ここまで……か。だが、私は始まりに過ぎぬ。すぐさま第二陣が、アポロ首領の手の者が貴様たちを、おおッ！！」
全て言い終わらないうちに、カニレーザーは目や口から炎を噴き、堅牢な殻の内側から爆ぜる音を響かせて倒れ込む。そのまま二度と立ち上がることはなかった。
ディケイドは安堵の溜め息を漏らして腰を下ろし、腹部のバックルを左右に引いて変身を解く。ピンクの戦士が端正な顔立ちの青年に変わったことに、彼を助けた映司は驚きの声を上げた。
「あ……。人間、だったんですね」
「何だよ、その棘のある言い方。それはそうと色男、お前に聞きたいことがある」

「聞きたいこと、とは？」首を傾げ、映司が聞き返す。
「自分で言うのも何だけどよ、ピンク……あぁいやマゼンタにバーコードみたいなラインの入ったカイブツを、どうして助ける気になったんだ」
「簡単なことですよ」青年の問いに、映司は当然だとでも言わんばかりの顔で言葉を返す。「あなたは自分の身を省みずに、見ず知らずの俺たちを助けてくれた。そんな人が悪い奴だとは、思えなかったからです」
「あんなもん、偶然だ偶然。まぁ、それはさておき……」
青年は気恥ずかしそうに後ろ手で頭を掻くと、映司の前にそっと右手を差し出した。
「色々あったがまァ、助かったことは確か、だな。礼を言う。俺は門矢士（かどやつかさ）。写真家で通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」
「仮面ライダー……ですか」映司は門矢士の妙に尊大な態度に戸惑いつつも、彼の差し出した右手を握り返して言った。「俺は火野映司。こちらこそ、危ないところを助けて頂いて」
「気にするな。そういやお前、旅人なんだってな。どおりで胆が据わって居る」
「いや、それって旅人かどうかなんて関係無いんじゃ……というか、今の怪物にさっきのオーロラ……これは一体何なんです」
「気持ちは分かるがな」はやる映司に、士は落ち着けと促した。「順序良く行こうぜ。話すと少しばかり長くなる」
「長く……なるんですか？」
「何だ。事情は聞きたいが、長話には耐えられないってんじゃないだろうな。そんなガキみたいな言い訳は通らねぇぞ」
「いえ、そうじゃなくて……」子どもを待たせているんだと言おうとした瞬間、映司の背に遠くで待っていた筈のパドル少年が抱き付いた。
「パドル？　なんでここに！　危ないから待っててくれって言ったじゃないか」

「悪いやつはエイージがやっつけてくれたんだし、いいじゃん」パドル少年は目をきらきらと輝かせて言葉を継ぐ。「僕、全部見てたよ。エイージ、すっごく格好よかった。エイージは本当に”オーズ”だったんだね」
「いやいや、やっつけたのは俺じゃなくて、この人だよ。俺はその手助けをしただけさ」
　映司はそう言って、士の方へと手を述べるが、当の士はどうしたことか挨拶もせずに、パドル少年の両肩を掴んでこう言った。
「小僧、お前今……この旅人のことを”オーズ”って言ってたな。そいつは本当なのか？」
「ほ、本当だよ」パドル少年が言った。「エイージはいつもオーズだった時のお話聞かせてくれるし、さっきだって蟹のお化けをやっつけてたじゃん。あれでオーズじゃないわけないよ」
「なるほど……な」士は顎に指を乗せて暫く何かを考えると、そういうことかと一人で結論付け、映司に言った。
「この世界の仮面ライダーオーズ。そいつがお前なのか、火野映司。どうりでそのメダルを扱える訳だ」
「この世界の、って……」聞き間違いかと思い、映司は士に尋ねた。
「会ったことがあるんですか？　その……俺じゃないオーズに」
「一度だけな。あの時はお互い素性も聞かず、変身も解かなかったから、仕方なかったんだけどよ」
「それはそうと、この世界とかあの世界とかって……士さんこそ一体何者なんです。訳が分かりませんよ」
「面倒臭いが仕方ねぇ。俺はだな、お前らとは別の……」
「えっ？　何ですって？　聞こえませんよ、士さん」
「何ぃ？　だから、俺はお前らとは別の……」
「何ですか！？　風の音がうるさくて……」
「ちゃんと聞けよ！　っていうか、なんなんだよこの風は！」
　両者の言葉を遮る荒々しい風に、何だ何だと空を見上げる二人。彼らの目に映ったのは煤けた緑色の大型のヘリコプターだった。

「何だッ、やろうってんなら相手になるぜ」士はかかってこいとディケイドライバーを取り出し、迎え撃とうとするが、ヘリの側面を見て「何か」を感じた映司に止められた。
「待ってください、あのマークって、まさか……」
映司が目を付けたのは、ヘリ左側部に描かれた水鳥を模ったマークと、その下にローマ字で書かれた”ＫＯＵＧＡＭＩ　ＦＯＵＮＤＡＴＩＯＮ”と言う文字。もしやと思った映司は士たちを下がらせ、ヘリを着陸させて中から人が出てくるのを待つ。

「――お久しぶりです、火野さん」
ヘリのタラップの中から姿を見せたのは、映司の良く知る人物だった。艶のある亜麻色の髪に端正な顔立ち、体のラインがくっきりと見えるライダースーツを身に纏った美女。鴻上（こうがみ）ファウンデーションの秘書・里中エリカだ。
「旅の途中、お呼び立てして申し訳ありません」里中が言う。「ですが、事態は一刻を争います。どうか、私と一緒に日本まで来ていただけないでしょうか、火野さん。それと……門矢士さん」
「日本に……ですか？」顔に疑問符を浮かべて映司が言う。「一体何があったんです」
「いや、ちょっと待て」二人の会話に士が割って入った。「アンタ一体何者だ？　何故俺のことを知っている。答えろよ」
何故だと詰め寄る士に対し、里中は眉ひとつ動かさず、淡々と答える。
「それは機内で説明します。さぁ、お早く、世界の破壊者・ディケイドさん」
「破壊者……か」士は里中のことを訝しげに見つつ言葉を返す。「オーケイ、そこまで知っててそう言うんなら、大人しく話を聞いてやろうじゃねぇか。乗せてくれ」
「了解しました。足下にお気をつけ下さい」
士が里中に手を引かれ、ヘリに乗り込む中、映司はパドル少年の

手を握って言った。
「ごめんな、パドル。俺、行ってこなくちゃいけないみたいだ」
「オーズとして、なんでしょ？　でもさ、でもさ。ちゃんと帰って来てくれるよね？」
「勿論さ。まだ話してないことも一杯あるしね。約束するよ」
「うん。約束だよ」
指切りで約束を交わし、ヘリに乗り込む映司。パドル少年は残された馬と共に、だんだん離れて行くヘリを見送った。

「おぉい、パドルやぁい、大丈夫かあ？」
「サヴァンじぃちゃん。そっちこそ、みんな大丈夫？」
そんな中、オーロラから離れていた遊牧民の一団が戻ってきたパドルと映司が一団から外れ、見慣れないヘリコプターが出てきたことで、不安に思ってやってきたのだ。
「うん？　パドルや、エジーはどこに行ったんだぁ」
「行っちゃったよ」パドル少年は小さくなっていくヘリを指差して言う。「あの飛行機に乗ってね。行かなきゃいけないところがあるんだって」
「行かなきゃいけないって……、壁はまだ消えてないし、あんな奴らがまだ一杯いるかもしれないんだぞ。大丈夫なのか」
「大丈夫だよ、じぃちゃん」パドルは晴れやかな顔で言った。「だってエイージは”オーズ”だもん。どんな奴にも負けないって」
パドルは消え行くヘリに向かい、行ってらっしゃいと見送った。

第三話：「青色メダルと輝く勇気と心に剣」（後書き）

◆オーズに変身すると思った？　残念、生身でした。
「オーズ」としての出番についてはもう少々お待ち下さい。

◆一話がピンクで二話が黄色、三話で緑。以後、背景はタ→ト→バローテーションで行こうかと思ってます。
タトバなら赤で行けよ、と言われそうですが、赤に設定すると文章が読みづらくなるので薄めの色でごまかしを……。

◆筋肉モリモリマッチョマンが好きです。アギト・バーニングフォームは全ライダーの中でも三本の指に入る程好きです。
扱い的には中間フォームのようなものだけど、最強形態に匹敵するキャラをフォームライドで出していいのか？　と悩みましたが、そこは暖かい目で見てやってください。

第四話：「アポロショッカーとライダーメダルとコウモリ襲来」

※※※

「――現在、鹿児島上空を通過。機体、天候、共に良好。敵機影無し。順調に航行しております」
「了解。引き続き宜しくお願いします」

火野映司と門矢士が、鴻上ファウンデーション所有の輸送ヘリに乗り込んでから、約半日が経過した。ヘリは三度の給油と休憩を取って順調に航行し、日本の領海に到達した所である。
操縦士に現状を聞いて、里中が映司たちの所へと戻ってきた。映司は先の休憩時に街で購入した肉まんを頬張っており、士は眉間に皺を寄せ、貧乏揺すりを行っていた。

「航行は順調です。後三時間程で財団に到着するかと思われます」
「日本かぁ。比奈ちゃんたちとも長いこと会ってないし、楽しみだなぁ」
「楽しみってお前、そんなこと言ってる場合かよ」浮わつく気持ちの映司に、士が言う。「あの平原を発ってもう半日だ、それなのに何故呼ばれたのかすら聞けていないんだぞ」
士はとうとう痺れを切らし、映司の制止も聞かず、里中に掴み掛かった。
「いい加減に話したらどうだ。こちとらもう、黙りにゃあうんざりなんだよ」
「落ち着いて下さい門矢さん」里中は表情を変えずに言葉を返す。「こちらで何も話さなかったことは謝ります。ですが、説明は自分の方で行うと言うのが鴻上の指示でしたので」
「その口ぶりからすると、鴻上ってのはお前の上司か何かか？」

「はい。丁度通信の準備が整いましたので、説明は彼の方から……」
里中は士の手を引き剥がすと、鞄の中から一抱えもある液晶モニタを取り出して、士たちの方へと向ける。白黒の砂嵐の後液晶モニタに現れたのは、画面全てを埋め尽くす、色黒に壮年の暑苦しい男の顔だった。
「やぁ！　久しぶりだね火野君！　元気そうで私も嬉しいよ！」
「あ……鴻上さん。そちらこそ、お元気そうで何よりです」
鴻上（こうがみ）と呼ばれた男は、映司と簡単に挨拶を交わした後、士の方に目を向けた。
「そして君が……」意味深に間を取って鴻上が叫ぶ。「世界の破壊者・ディケイド！　門矢士君だね！　君に出会えて、私はヒジョウに嬉しいよ！　共にこの出合いを祝おうではないか！　ハッピバースディ！」
付き合いの長い映司はあっさりと流したが、初対面の士はそうはいかない。鴻上が喋り続けている間、彼は辟易とした顔で耳を塞ぎ続けていた。
「会長」このままでは話し合いにならないと危惧した里中が動く。
「そこまで叫んで頂かなくても声は届きます。それと、もう少しカメラから顔を離していただけますか？」
「おお、失礼、失礼」彼女に言われ、カメラから顔を離す。液晶モニタには、目が痛くなりそうな程派手な緑色のスーツを纏った男が映った。
「君たちが私の所に通信してきたと言う事は、もう日本のどこかに到着したということかな、里中君」
「現在鹿児島県上空を通過。後数分程で熊本の県境に入ります」
「熊本、か」鴻上は顎に指を乗せ思案する。「ならば私が説明するよりも、”見せて”しまった方が早いね。里中君、パイロットに高度を下げ、『熊本城』上空を通過するよう伝えてもらえるかね」
「了解しました」里中はモニタを置いて即座に立ち上がり、操縦士に鴻上の指示を与えに行く。

説明する、と言っていたのに何だこれは。鴻上の態度に苛立ちを覚えた士は、モニタにかじりつかん勢いで言う。
「待てよ。遊覧飛行なんか後でもいいだろう、さっさと状況を説明しろ」
「そうカリカリしないでくれ門矢君。この方が説明するには手っ取り早いのだよ。見たまえ、これが今の……この国の”惨状”だ」
「惨状って何だ、惨状って……」
鴻上に言われ、ヘリの窓越しに熊本市街の様相を目の当たりにした士は、驚きのあまり声を失ってしまう。どうかしたのかと遅れて窓の外を見た映司は、想像を絶する惨状に息を呑んだ。
「何だよ……これ」
「一体、どういうこと何ですか！　どうして、どうして……。熊本城がセルメダルの山になってるんですか！」
二人は自分で自分の目が信じられなくなった。そこは確かに熊本県の観光名所・熊本城の筈だ。ならば今目に映っているものは何だ。城の形をしてはいるが、銀色のメダルが城の形に積み上げられただけではないか。
驚いてそれ以上声が出ない二人に対し、鴻上は「驚くのも無理はない」と言葉を紡ぐ。
「こんなもの、人間業じゃあないからね。それに、ここだけじゃない。三日……、たったの三日でこの国の主要都市、軍隊、在日駐屯米軍の基地は全て、セルメダルの塊に変えられてしまったんだ。『アポロショッカー』の手によって」
「アポロ……ショッカー？」映司がオウム返しに言葉を返す。「そいつらが熊本城を、この国をこんなにしたって言うんですか」
「そうだ。信じられないかもしれないが、それが事実なのだよ、火野君」
「そんな……無茶苦茶な」
パニック映画と見紛う程の熊本の惨状を目にし、映司は茫然自失となって膝を付く。逆に士は、「やはりやって来たか」と眼をぎら

ぎらと輝かせ、割れんばかりの勢いで眼前の窓硝子に力を込めた。
「アンタ、鴻上だとか言ったな。教えてくれ。『ヤツ』はこの世界で何をしたんだ」
「彼のやったことは至ってシンプルだよ」鴻上が言葉を返した。「突然光のオーロラから現れて、”全世界の人間たちに次ぐ。この世界は私のものだ。命が惜しくば速やかに降伏せよ”と我々に迫ったのさ。当然、誰も受け入れることなく交渉は決裂。彼は腹いせと力の誇示のために、この国の軍隊を全て無力化させたと言う訳だ」
「相変わらずやることがえげつねぇな。他の国はどうしているんだ？」
「彼らの力に恐れを成して降伏するものと、最後まで戦い抜くと息巻く国で真っ二つさ。現状では降伏した方が利口だと思うがね」
「違ぇねぇ」
「ちょ、ちょっと待ってください二人とも」映司は何の話をしているんだと二人の間に割って入る。士と鴻上の間で話がどんどん進んでいるが、彼には理解できず、置いてきぼりにされたのが我慢ならなかったのだ。
「もっとこう……分かるように説明してくださいよ。アポロショッカーってのは何なんです。それに、何で俺たちを日本まで呼び寄せたんですか」
「あぁ、お前にはまだ話していなかったな」士は面倒臭そうに後ろ手で後頭部を掻きつつ言う。「今から少しばかり前の話だ。俺たち『仮面ライダー』が、”ショッカー”と言う大組織と戦い、勝利を納めてからすぐの、な」
「俺”たち”って……仮面ライダーって、士さん以外にもいるんですか？」
「あぁ、いるぜ。それこそうじゃうじゃとな。だがその話は後にしろ。続けるぜ」長くなるからと椅子に腰掛け、士が再び口を開く。
「仮面ライダーとショッカーの戦いは、山のようにドでかい大首領を倒し、幹部たちの殆どがマグマの底に落ちて行ったことで決着し

た筈だった。少なくとも、あの時戦った奴らは、仮面ライダーオーズだってそう思っていた筈だ」
「仮面ライダー”オーズ”って……、さっき士さんが言ってた、あの」
「その通りだ。面倒臭いから掻い摘んで話すが、俺はこの世界の人間じゃない。お前がさっき見たあのオーロラ、あれを通って様々な世界を巡るのが俺の本業なんだよ」
「本業って……、士さんも旅人だったんですか？」
「あぁそうだよ、いちいち話の腰を折るな。話を戻すぞ。……だが、戦いは終わっちゃいなかったんだ。幹部連中が落ちて行った火口から、赤く輝く、禍々しい六枚の翼を羽ばたかせ、そいつは俺たちの前に現れた。赤に朱色にオレンジ、”三色が混ざり合った”メダルを使って戦うあいつに、俺たち仮面ライダーはなすすべなく倒されちまった。ヤツの名は”アポロガイスト”。例の軍団の頭目だ」
　映司は信じられないと言いたげな顔で士を見る。彼の強さは間近で見ていて知っている。そんな彼が、仲間たちと徒党を組んでも負けたと言うのか。彼の言うアポロガイストとは、どれ程の力を持っているのだろう。
　しかし、それら以上に疑問な点が一つ。三色が混ざり合ったメダルとは何か。今までの話から察するに、アポロガイストという怪人がコアメダルを用いて戦っていたことは理解できた。しかし、コアメダルの色はどれも単色で、色が混ざったものなど存在しない筈だ。これは一体どういうことか。
「待ってください、士さん。色の混ざったメダルって何ですか。そんなもの、存在するわけが……」
「そう言われてもな、俺は実際にこの目で見たんだ。三色に分割されて、それぞれに鳥の紋章が刻まれたやつを」
　嘘を言っている様子はない。信じられない話だが、門矢士は三つのメダルが混ざり合ったものとやらを、本当に目撃したのだ。
　しかし、そんなものあり得るのか？　世界が違えばそんなメダル

も存在するのだろうか。映司が一人思案を巡らせる中、今まで聞き手に回っていた鴻上が口を開く。
「成る程、そういうこと……か」
「鴻上さん、何が”そういうこと”なんですか？」
「火野君。君はドクター真木と戦った時のことを覚えているかね？」
「何です藪から棒に。コアメダルとオーズドライバーがブラックホールに飲み込まれたあれ、ですか？」
ドクター真木との最後の戦い。鳥系グリード・アンクと協力して挑み、恐竜メダルの無の欲望を光弾として放ったことで、ブラックホールに全てを飲み込んで決着したあの戦いのことだ。
しかし、それがこの話と何の関係があるというのか。顔に疑問符を浮かべる映司に、鴻上は「その通りだ」と言葉を返した。
「時に火野君、君は『ホワイトホール』と言うものをご存知かな」
「えぇと、ブラックホールと繋がっていて、そこで飲み込んだものを放出する天体がホワイトホール……なんでしたっけ。でも、何で今そんな話を」
「関係があるからさ」鴻上は自信ありげに答えた。「君の話じゃあドクター真木と恐竜メダルは粉々に砕け、他のメダルと一緒にブラックホールに吸い込まれていったんだったね。そこでさっきのホワイトホールだ。ブラックホールとホワイトホールは表裏一体の代物。この世界で発生したブラックホールが次元を越えて、門矢君たちの世界と繋がったのだよ。
門矢君が見た異質なコアメダル。あれは恐らく、ブラックホールを抜ける中で砕けたメダルたちに”消えたくない”という欲望が生じ、互いに引き合って出来たものではないかな。コアメダルの三枚揃いの力がどのようなものか、君はよく知っているだろう？　成る程、それを使用した怪人がライダーを圧倒できたのも頷ける」
「アンクの体みたいなことが、あの中で起こったって言うんですか」
映司は訝しげな目で鴻上を見る。「でも、行く先が別世界だとか、意思の消えたメダルに欲望が芽生えるだなんて、突飛過ぎて現実味

がありませんよ」
「現実味があろうがなかろうが、実際に起こったのだからしょうがないだろう。それに、今気にすべきことはそこじゃない。そうだね、門矢君」
鴻上に唐突に話を振られ、士はやや戸惑いながらも言葉を返す。
「俺たちの世界にいたアポロガイストが、なんでこの世界に攻めて来たのか……ってことだろ？　ヤツは俺たちライダーを倒した後、ろくでもないことをしでかしたんだよ。
ショッカーと言う組織は、古今東西の優秀な技術に目を付け、次々に吸収して発展した組織。コアメダルの事も研究を行っていたらしい。ヤツはあの戦いの後、アジト跡地に残された技術を応用し、とんでもねぇものを作りやがったのさ」
「とんでもないもの……とは？」
「人を直接メダルに変える装置さ。詳しい仕組みは知らないが、人間ってのは頭のてっぺんから足の先まで欲望の塊だからな、変換されちまえば同じになるって訳だ。それは仮面ライダーも例外じゃねぇ。
俺以外のライダーはみんなやられた。やられただけならまだよかったんだが、ヤツはライダーのメダルに宿る力を利用して、”全平行世界”を繋ぎ、自分の支配下に置こうとしやがったんだ。
ヤツの元にはほぼ全てのメダルが集まり、辛うじて一人生き延びた俺にも止めようがなかった。しかし……」
「しかし？」
「奴らは失敗したんだよ。ライダーメダルの力を甘く見すぎてたんだな。全ての世界を繋ぐ所か悪戯にいじくり回したせいで、制御が効かず、奴らのアジトと大多数の怪人を巻き込んで消えやがったのさ。俺はその隙に二枚のライダーメダルを奪って、無差別に発生したオーロラの一つに飛び込んだ。後は奴らの放つ刺客たちと戦いながら、ヤツの居場所を探し回ってたって訳さ」
士はそこまで話し終えると、ゆっくりと深呼吸をして言葉を継い

だ。
「俺から話せることは以上だ。さて鴻上会長とやら、俺たちをそんな物騒な戦場に呼んだ訳、そろそろ聞かせてもらえるか？」
「いいだろう」鴻上は真剣な顔付きで言う。「では、本題に入ろうか。里中君」
鴻上の一言に、今まで黙っていた里中が口を開いた。
「お二人にやっていただきたいのは、アポロショッカーの撃退及び、現在敵の捕虜となっている鴻上の救出です。会長なしではライドベンダーもカンドロイドも自由に使用出来ませんので……」
「ちょ、ちょっと待ってください里中さん」彼女の口を突いて出た一言に、映司は目を見開いて聞き返す。「捕まってるんですか！？鴻上さんが」
「はい。会長、カメラをもう少し引いてもらえますか？」
「うむ、少し待ちたまえ」
里中の求めに応じ、鴻上はカメラを引いて、周囲の様子を映司たちに見せる。
彼が立っていた場所はいつもの応接間ではなく、薄暗くて何もなく、微かな明かりだけが灯った硝子張りの部屋であった。
鴻上が上の方へとカメラを向ける。部屋の天井に供えられた小箱の中で何かが動いた。長くうねうねとした何かが、火花を散らしながら箱の中で這いずり回っているようだ。
「鴻上さん、これは一体……」
「コアやセルの使い道を知っているのは、この世界じゃ我が財団だけだからね、真っ先に奴らに狙われたのさ。勿論ライドベンダー隊や仮面ライダーバースを出動させて応戦させたのだが……結果は惨敗。私も捕らえられ、ライドベンダーやカンドロイドの使用権も彼らに奪われてしまったんだよ。捕まる際に上着の中にこっそりと、テレビカメラ内臓型のバッタカンドロイドを忍ばせておいたから、こうして君たちと話が出来るのだけどね。
この牢獄には上の電気ウナギカンドロイドから供給された5万ボ

ルトの電流が流されていてね、自分の力じゃ脱け出せないんだ」
「脱け出せないって……、バースも倒されて、鴻上さんも捕まって、全く勝ち目がないじゃないですか！　これじゃ俺が来たって何にも……」
「落ち着きたまえ火野君」狼狽える映司を鴻上が宥(なだ)める。「確かに絶望的な状況だ。しかしね、君がいて、仮面ライダーディケイドがアポロショッカーからライダーメダルを奪ってきた、という情報が手に入った今、逆転のチャンスは大いにあるのだ」
「逆転のチャンスって……、俺はもうオーズじゃないんですよ、何をしようって言うんです」
「そうだね、その通りだ。しかァし、里中君！　火野君に例のものを」
「かしこまりました」
　里中は鴻上の求めに応じ、モニタの入っていた鞄に手を伸ばし、虹色のリボンが巻かれた白いプレゼントボックスを取り出した。
「……これは？」
「開けてみたまえ。そうすれば分かるさ」
「はぁ……」
　訳が分からず、疑問は拭えないが、映司は里中が差し出したプレゼントボックスを掴むべく手を伸ばす。しかしそんな疑問も、ヘリの操縦席から聞こえてきた悲鳴で掻き消えた。
「な、なんだ今の声」
「操縦席からだぜ。何かあったんじゃねぇのか……わわっ、と！」
　驚いたのは悲鳴のことだけではない。それと同時にヘリの高度が下がり始めたのだ。どう考えても普通じゃない。
「私が見てきます。二人はそこで待機していて下さい」
　まずは私がと操縦席に向かう里中。そこで彼女が見たものは、首と体が皮一枚で繋がって事切れた操縦士と、血に塗(まみ)れた右手の爪を舐めて拭う、筋骨隆々としたコウモリの怪人の姿だった。
「”リント”ザボゾグ。リンバボゾグ！　ゴゼ、ゴオマ。ゴゼ、ゲ(おれ)(おれ)(えぇ)(みんなころす)(はころす)(らくなる)

ゼブバス、ロドドロドド（もっともっと）！」

第四話：「アポロショッカーとライダーメダルとコウモリ襲来」（後書き）

◆鴻上会長のあのキャラクタを再現できません。つくづく小林脚本は変なテンションのオッサンを描くのが巧いなぁと実感させられます。

◆説明回！　絶対に説明回！
　全体的にごちゃごちゃしててすみません。次回は多分バトル一本です。

◆里中さんは無理に喋らせるより、常に冷静で、会長や後藤さん及び伊達さんの異常行動にしれっとした顔で突っ込みを入れる時が一番輝いていると思います。主観ですが。

第五話：「蠍の置き土産と８００年前の遺産と復活のオーズ」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、火野映司の使えるメダルは――

◎ヘッド・コア：クウガ・コア
◎アーム・コア：ブレイド・コア

第五話：「蠍の置き土産と８００年前の遺産と復活のオーズ」

※※※

「リント、ボソグ。ダブガンボソグ。ゴゼ、シュゲゲグス」

「うぐ、くぅ……」

何も知らずに操縦席に入ってきた里中は、コウモリ怪人・ゴオマの格好の標的だった。ゴオマは彼女があっと声を上げるよりも早く、その細くしなやかな首を掴み、力を込めて絞め上げる。

息が出来ない。気がだんだん遠くなって行く。助けを呼ぼうにも声が出ない。抵抗しようのない里中を目にし、ゴオマの勝ち誇った笑い声が機内に響く。

――――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＤＥＣＡＤＥ」

だが、その笑い声が仇となった。里中とも操縦士とも違う不気味な声を聞き付けた士が、ディケイドに変身して向かって来たのだ。

「ヘリに乗り込んで来るとはいい度胸じゃねぇか。相手になってやるぜ」

ゴオマを床に押し付けて馬乗りになり、顔に何度も拳を見舞うディケイド。ゴオマの首絞めから解放され咳払いをする里中を、映司は優しく抱き止めた。

「里中さん、大丈夫ですか？」

「えぇ……なんとか」

「こいつらは俺たちで何とかします。里中さん、ヘリの操縦は」

「問題ありません。行けます」

「すみません、お願いします」

映司に促され、里中は事切れた操縦士をどかして操縦桿を握る。著しく高度を落としていた輸送ヘリはあっと言う間に持ち直し、再び空へと舞い上がった。

機体は持ち直したが、ヘリの急上昇で体勢を崩したディケイドは、

四五度転げ回ってヘリ後方のタラップに叩きつけられてしまう。顔を殴打されて怒り心頭のゴオマが頬を擦りながらゆっくりと立ち上がる。
「ちきしょう、面倒臭ぇな。なら一気に……」
「あわわ、待ってください」ライドブッカー・ガンモードを構え、遠方よりゴオマを撃ち抜かんとするディケイドを、映司は彼の前に立ちはだかって制止する。「ここはヘリの中、地上数千メートル上空なんですよ！　銃なんか使ったら燃料に引火して、俺たち全員海の藻屑ですって」
　映司の言葉を聞き入れたディケイドは、舌打ちをしつつライドブッカーをブックモードに切り替え、発砲の代わりにと一枚のカードを取り出した。
「わぁったよ。なら、コウモリにはコウモリだ。接近戦でカタつけてやる」
――――ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ「ＫＩＶＡ　ＤＯ－ＧＡ－ＢＡ－ＫＩ」
　カードを装填すると同時に、青に緑に紫の三つの彫像がディケイドの体に取り込まれ、三体のアームズモンスターの力を同時に扱える形態『キバ・ドガバキフォーム』へと姿を変えた。
「士さん、だから暴れちゃまずいんですって」
「安心しろ。ヘリを壊さなきゃあ、いいんだろ？」
　ディケイドはそう言うと、胸の前で両手を十字に組んで力を溜め、充実した所で解き放った。
　瞬間、彼とゴオマの周りの足元が”水溜り”へと変貌し、ゴウマの足を封じた。
「覚悟しろよコウモリ野郎。速攻でケリつけてやる」
　動きを封じられたゴオマの顔を、胸を、腹を、ディケイドの重く鋭い拳が貫く。身体中を稲妻が走ったかのような痛みがゴオマを襲うが、それだけでは終わらなかった。いつの間にか彼の足下は凍り付いており、いくら拳を喰おうが攻撃の反動で起き上がって来るのだから、喰らう方はたまったものではない。

拳の連撃にゴオマが弱った所を、右腕から呼び出したガルルセイバーで袈裟に真一文字に唐竹に、斬って斬って斬り捲る。ゴオマの体はあっと言う間に刀傷で埋め尽くされた。
「さぁてと、一気に決めちまうか」
ガルルセイバーを右腕の中に戻し、胸部から巨大な槌（つち）・ドッガハンマーを呼び出して構えるディケイド。雷の力を宿したこの槌で、一気に叩き潰すのだろう。
冗談じゃない、こんなところで死んでたまるものか。ゴオマは懐から赤い”コウモリ”の紋章が刻まれたメダルを取り出して、ディケイドが槌を降り下ろすよりも先に飲み込んだ。
「これで終わり……じゃあ、ないのか！？」
ゴオマは、自身の胴体ほどの大きさの槌を片手で受け止め、その上で指先に力を込めて槌を砕き、床の水の拘束も気合いで弾き返す。
メダルの力の影響か、両腕に生えていた翼が消えて、代わりに背中から赤いマントのような布が生えた。上半身の筋肉が異様に盛り上がり、金色の外殻に包まれる。
『キバ』のメダルを飲み込んだゴオマの強さは圧倒的だ。よろけるディケイドの胸部に、纏っている装甲が凹む程の蹴りを叩き込み、仰向けに倒れたディケイドの首根を掴んで持ち上げ、狼の牙のように鋭く尖った爪で肉を裂く。
ディケイドはやられてたまるかと、再びガルルセイバーを手に反撃を試みるが、ゴオマの金色の鎧の前に歯が立たず、逆に奪われ、ゴオマに似合いの禍々しい造形の剣となって、ディケイドの体を斬りつけた。
「士さんッ」ディケイドの窮地に映司が動く。彼から預かっていた『ブレイド』のメダルを握り締めてあの剣を呼び出し、『クウガ』のメダルを嵌め込んで雷の力を刀身に宿らせ、ゴオマに斬り掛かった。
彼が襲い来ることを察知していたゴオマは、振り向き様に映司の剣を受け止めると、指先に力を込めて剣の刃先を叩き折る。まさか、

そんなことはと呆然自失の映司に、ゴオマの後ろ足蹴りが炸裂した。
「嘘だろ……、そんな！　叩き、折られるなんて……」
横隔膜を刺激され、一時的に呼吸困難に陥る映司。しかし、仮面ライダーの力で精製された剣が、いとも容易く折られたという事実が、これから自分たちが戦うべき相手の恐ろしさが、息苦しさをも掻き消したのだ。
ゴオマに対抗出来る手段を失ってしまった映司だが、同時に彼は、刃先を折られるその瞬間、どこか奇妙な感覚におそわれた。言葉にするならば、互いに『引き合う』とでも言うべき不可思議なもの。
これは一体何なのか。気のせいや勘違いでないのなら、これには何か意味があるはずだ。映司は刃先の折れた剣を見つつ思案する。
――――あのコウモリは仮面ライダーのメダルを一枚飲み込んでいる。奴が飲み込んだあのメダルと、剣に変わったこのメダルが引き合ってるって言うのか？
――――だったら何の為に。仲間同士だから？　コウモリから離れたがっているからか？　それとも……『俺に』何かを伝えようとしていたのか？
――――反響は奴の”喉笛”から響いて来た筈だ。それで俺に伝えたいことがあるとすれば……。もしや！
この不可思議な現象に隠れた意味を見出だした映司は、何を閃いたのか、揺れる機内を壁伝いに進み、操縦席に座り、必死に操縦捍を握る里中に声をかけた。
「お忙しい中すみません。お願いがあるんです、里中さん」
「お願いですか？」珍しく、落ち着きのない声で里中が答える。「申し訳ありませんが、揺れが酷くて、機体を安定させるだけで手一杯なのですが」
「機体を安定させるのが大変なんですか？」映司が念押しするように聞き返す。「なら行けます。里中さん、俺が合図するほんの一瞬、一瞬だけで良いので、機体を大きく右側に傾けて貰えませんか？」
「そんなこと言われても……、その状態から立て直すのは困難です

し」
「ほんの一瞬でいいんです。それで揺れは収まりますから」
「コンキョは……有るんですか？」
「俺を信じてください、お願いします！」
一歩も退かない上に根拠はないと来た。彼らだけでなく自身の命も預かって操縦捍を握っている以上、滅多な真似は出来ないのだが、映司の必死な顔と言葉に里中もとうとう折れた。
「……分かりました。一瞬だけ、ですよ」
「ありがとうございます」言って、映司は再び壁伝いに士たちの所に戻る。
彼の目に映ったのは、纏った装甲の殆どを剥がされ、身体中に怪我を負い、虫の息で横たわるディケイドと、そんな彼を無慈悲かつ嬉々として蹴り付けるゴオマの姿だった。
時間の余裕はあまりない。改めてそう確信した映司は、ゴオマに気取られぬように彼の背後、折れた剣の放られたあの場所へと向かい、折られた刃先を握り締めた。
「里中さん、今ですッ」
折れた刃先を握り締めて映司が叫ぶ。里中は映司の求めに応じ、今まで水平に保っていた操縦捍を思い切り右側に傾けた。
ディケイドを思い切り蹴飛ばしてやろうと、右足を大きく振りかぶっていたことが仇となり、ゴオマは揺れに足を取られて、重力に従い体をくねらせながら落下して行く。
そこに待っていたのは、鋭く尖った剣の刃先を手にした映司だ。映司はゴオマが自分の方に顔を向けたその瞬間、手にした刃先を彼の鳩尾に刺し入れる。
鳩尾を刺激されたゴオマは、そのショックで猛烈な咳に襲われ、喉笛に填まっていたキバのメダルを吐き出した。同時にメダルの力で強化されていた外見が、元の姿に戻って行く。
「士さん、後はお願いします！」
「言われなくとも……ッ、おぉ、おぉっ！？」

後はこっちのものだ。映司はキバのメダルを拾い上げて距離を取り、ディケイドに止めを刺すよう促す。ディケイドは彼の求めに応じ、ふらつく体に鞭を打って立ち上がった。
しかしどうしたことか、彼が身に纏う仮面ライダーの鎧は、彼の意思と関係なく、何の前触れもなく消えてしまったのだ。
全く持って予想外の出来事に戸惑う士に対し、ゴオマはその隙を逃さなかった。変身せず棒立ちの士の頭を鷲掴みにし、ヘリが横揺れする程の衝撃を伴って壁に叩き付けたのだ。
「くそォ、やめろ、やめろよ！」映司は我慢出来ず、武器も何も持たずゴオマに掴みかかるも、赤子の手を捻るように容易く引き剥がされ、爪による一撃を喰って三度床に突っ伏した。
「ゴボゼラデデソ（そこでまってろ）。ゴラゲザ、ガドゼボゾギデジャス（おまえは あとで ころしてやる）」
メダルを奪って有利になったと言うのに、それでもなお手も足も出ない現実に歯噛みする映司。
非力な自分を呪い、何も出来ないことに悔しさを募らせる中、映司は足元のモニタから、自分の名前を呼ぶ声がすることに気付く。ゴオマがヘリを襲うまで話をしていた鴻上だ。
「火野君、火野君。無事かね」
「俺は平気ですけど……士さんが」
自身の不甲斐なさに意気消沈する映司とは裏腹に、鴻上は彼が手にした『三枚のメダル』を見て、「素晴らしい」と声を上げた。
「おわっ、一体何なんですか」
「遂に、遂に三枚のライダーメダルが揃ったんだね。ならばもう何も言うまい。さぁ、私のプレゼントボックスを開けるんだ、火野君」
「えぇっ！　こんな時に何を悠長な」
「さっきも言った筈だ、こんな時、だからこそだと！　さぁ、開けたまえ火野君」
何を馬鹿な。こちらは死人が出るかどうかの瀬戸際なんだぞ。映司はそんな文句を喉元で引っ込め、足元に転がっていたプレゼントボックスを手に取り、リボンを解いて箱を開く。

映司は驚きのあまり目を見開いて息を呑む。箱の中に納められていたのは、メダルを入れる三つの窪みが付いたバックルと、それを読み込む円形のスキャナー。アンクともう一つの相棒、変身ベルト『オーズドライバー』だったのだ。

「驚いているね。まぁ、無理もないか」息を呑んだまま声の出ない映司に鴻上が言う。「それはコアメダルを作った錬金術師、マスター・ガラが作った、オーズドライバーの『プロトタイプ』。ドイツのとある遺跡で封印されていたものを発掘し、我が財団で保管していたのだよ」

鴻上はそこまで言うと、驚き戸惑う映司に対し、大きく息を吸い込んでこう言った。

「さぁ、オーズドライバーを手に取りたまえ火野君！　世界中の人々を救いたいと願う君の欲望に、仮面ライダーのメダルは必ずや応えてくれるだろうッ、さぁ！　変身するんだッ！」

耳をつんざくような大声に、映司は漸く我に返った。改めて周囲を見回すと、身体中傷だらけの士がゴオマに成すがままにされている。力は今、自分の手の中にあるんだ。何を躊躇(ためら)う必要がある。映司はドライバーを腰に巻いてクウガ・ブレイド・キバの三枚をセットし、『オースキャナー』を握り締めた。

「仮面ライダークウガ、ブレイド、キバ……。皆さんの力、お借りします。変身！」

――クウガ！　ブレイド！　キバ！

バックルに嵌ったメダルを横一文字にスキャン。メダルの名前が発音されると同時に円形のエネルギーが現れ、映司の体に取り込まれて行く。

一瞬の光の後、彼は金色の角に赤き瞳、中世の騎士のような青色の鎧に、両足に銀色の拘束具の付いた足の、異形の戦士にその姿を変えていた。胸には赤・青・赤で縁取られたプレートが発生し、それぞれにクウガ・ブレイド・キバの紋章が浮かび上がっている。

映司の変身をモニタ越しに目にした鴻上は、惜しみない拍手を送

って感嘆の声を上げた。
「素晴らしい、実に素晴らしいッ！　仮面ライダーの力で変身したオーズ！　これぞまさしく、仮面ライダー・オーズ！　新たなるオーズの誕生だよ！　ハッピバースディ！」

――――うおぉおおおおおッ！
オーズは変身と同時に駆け出して、士の息の根を止めんと腕を振り上げるゴオマを蹴り飛ばす。事態を把握出来ずにふらつくゴオマの首を鷲掴みにし、腹部を何度も殴り付け、前蹴りでヘリ最後部の機材搬入口に叩き付けた。
「士さん、大丈夫ですか？」士を壁にもたれ掛けさせつつオーズが言う。「後は俺に任せてください」
「お前……火野、か？」
その言葉にオーズは何も答えず、首を縦に振った。
壁に叩きつけられたゴオマが血走った目を見開き、牙を剥き出しにして立ってきた。オーズは来るなら来いと拳を握り、襲い掛かって来たゴオマを掴んで、彼を壁ごと外に放りだした。
同時に彼もヘリから飛び降り、落下して行くゴオマを追う。胸のプレート『オーラングサークル』の脚部分が光り輝き、足全体に灯る。瞬間、彼の両足に付いていた銀色の拘束具が弾け飛び、その中から真っ赤なコウモリの翼が現れた。
赤き翼は風を受けて気流を掴み、オーズは水の中を泳いでいるかのように自由に空を舞う。対するゴオマも、腕の翼を展開させて風を掴んだ。熊本上空千メートルでライダーと怪人が睨み合う。
鋭い爪と牙を武器に、先んじてゴオマが飛び掛かって来た。空中での戦いにはゴオマに一日の長があり、変身したてで動きがぎこちないオーズは、相手の動きに翻弄されるばかり。
しかしオーズも手を拱(こまね)いているばかりではない。オーラングサークルの光が頭部に灯り、クウガの複眼が光り輝く。同時に頭部の角から強烈な雷が放たれ、ゴオマの体を撃ち抜いた。

「バゼザ……バゼゴセグボンバレビ……」
黒焦げになって落下して行くゴオマを見、オーズは右腰のオースキャナーを取り外し、バックルに嵌った三枚のメダルを再スキャン。『スキャニングチャージ』の音声と共に、オーズの両腕の手首の先から剣が飛び出し、脚部から供給される深紅のエネルギーによって更に長く伸び始めた。
そこにクウガの雷の力が加わり、自身の背丈の数倍近くまで伸びた剣を、ゴオマにかわす手立てはなかった。ゴオマは巨大な雷の剣を袈裟に一撃、逆袈裟にもう一撃喰らい、セルメダルの山と化した熊本城の天守閣に吹き飛ばされた。
「ゴンバ……ギジャザ、ギジャザ！　シュゲゲザ、ゴゼボシュゲゲザ……ゾグバスンザアァア！」
必殺の一撃を受けて肉体の限界を超えたからか、ゴオマの体は『セルメダルの塊』となって崩れ去り、天守閣の中に埋もれて行った。ゴオマの消滅を肉眼で確認したオーズは、ふらつきながらもなんとか航行を続ける輸送ヘリ操縦席の窓際に回り、額に汗して操縦桿を握る里中に外から声を掛けた。
「里中さーん、後は俺が運びます。道だけ教えてもらえませんかー？」
「その声……火野さんですか？　運ぶって、一体どういうことですー？」
「いいからいいから。後は俺に任せてくださーい」
訳は分からないが、機体が安定しているのは確かであり、聞こえてくる声も映司のもの。そもそも自分の任務は映司にオーズドライバーを渡して、日本まで到着まで護衛することであり、輸送ヘリの操縦は業務に含まれていない。操縦を肩代わりしてくれるのなら任せるのが一番だろう。里中はオーズの提案を受け入れ、彼に通信用のバッタカンドロイドを渡してヘリの底に向かわせた。

なんとか危機を脱し、東京に向けて突き進む映司一行。
歴代仮面ライダーのメダルを用いて、再び『オーズ』への変身能力を獲得した火野映司。彼と彼を取り巻く者たちの戦いは、まだ始まったばかりに過ぎない。

「くそう……なんだったんだ、さっきのは……。ディケイド（コイ）ライバー（ッ）に変身を『拒まれた』？　いや、変身するだけの『力』が、なくなりかけている（……）のか……？」
そして、彼も――――

第五話：「蠍の置き土産と８００年前の遺産と復活のオーズ」（後書き）

◆お待たせ致しました。”仮面ライダー”オーズの登場です。初顔見せなのでコンボ（に準ずる形態）を先出しすべきかどうか悩み、そうでない”亜種”を最初に持ってくることに。

今後他の亜種やコンボに準ずる形態も登場しますが、面白いコンボメロディその他を思い付かなかったので、例の”歌”や形態の名称等は設定しておりません。皆様各自でお好きなようにお付けくださいませ。

◆ズ・ゴオマ・グ

「仮面ライダークウガ」に登場したグロンギ怪人。最下層グロンギで、正式なゲゲル開始前に人を殺したことで、ゲゲルへの参加資格を失い、以降上級集団にパシられ、虐げられ続けることとなった悲しいお人。

終盤、頭目であるダグバのベルトを横領して超パワーアップを遂げるも、ダグバの強さを見せつける噛ませ犬として処刑されてしまう可哀そうなお人。

出世に固執するあたり、アポロショッカーでも下層の怪人だったのでしょうか。

◆オーズが熊本城ごとゴオマをぶった切るという展開も構想していたのですが、国の重要文化財をヒーローがぶっ壊すのはまずいよね、と言うことであぁなりました。

第六話：「クスクシエと腕相撲と龍のメダル」　（前書き）

オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー！　前回までの三つの出来事！

一つ！　旅を続ける火野映司の前に、ドクトルGと仮面ライダーディケイドが現れる！

二つ！　世界の壁を越えて、謎の怪人集団『アポロショッカー』が襲来。日本の殆どを手中に収めてしまう！

三つ！　鴻上からもたらされたプロトタイプ・オーズドライバーと、クウガ・ブレイド・キバのライダーコアメダルを使って、映司は仮面ライダーオーズに変身した！

◆◆◆

前回書き忘れていたのでここで補足。

◎クウガ・コア

昆虫系に属するヘッド・コア。使用者に雷の力を与え、自在に雷を発生させることができる。

◎ブレイド・コア

昆虫系に属するアーム・コア。変身時にはスライド式で迫り出す剣「ブレイドソード」が出現し、斬り合いが可能となる。クウガ・コアと同じく雷の力を宿しており、クウガ・コアを組み合わせることで刃に雷を纏わせることも可能。

ブレイドソードは変身前でも使用出来るが、変身後には遠く及ばない。

◎キバ・コア

パワー系に属するレッグ・コア。拘束具で封印された「ブラッディ・ウイング」を解放することにより、空中を自在に飛ぶことが可能となる。

また、他のコアメダルの潜在的な力を覚醒させる効力を持つ。

第六話：「クスクシエと腕相撲と龍のメダル」

※※※

アポロショッカーからの刺客・コウモリ怪人のゴオマを倒した火野映司一行は、その後何の問題もなく東京に到着し、変わり果てた街の様相に愕然としていた。

高いビルの殆どがセルメダルの山と化し、街の人々は皆誰しも元気がなく、黒タイツの怪しい集団が肩で風を切って歩いている。戦争映画か何かと見紛い兼ねない、嘘のような光景だが、頬をつねって痛みを感じる以上、この馬鹿みたいな惨状は現実なのだと認めざるを得ない。

映司たちはアポロショッカーの雑兵たちに気取られぬよう身を隠しつつ、里中の後に続いて、鴻上が捕まっているという『監獄』を目指し、先を急いでいた。

「しっかし、物騒な街だな」物陰から様子を伺いつつ、士がぼやく。

「そこらかしこに戦闘員がうじゃうじゃと……。大丈夫なのかよ」

「それを言うなら士さんだって」彼のぼやきに映司が言葉を返す。

「さっきから少し顔色が悪いですし、俺がキバのメダルを奴から奪ったあの時だって、士さんの変身が解かれなければ、俺がオーズにならなくても勝てた筈です。そんなに具合が悪いんですか？」

士は「よく観察しているな」と目を伏せる。確かにここ数時間の士はどこか妙だ。鴻上や里中との会話でも変に苛立っていたし、変身を持続させられないでいる。

彼は誤魔化しても無駄かと溜め息をつき、後ろ手で頭を掻いて言った。

「お前らには話しておくべきかもな。察しの通り、今の俺は不調も不調、絶不調さ。あのサソリ野郎に喰らった毒のせいだろうな。休んでもイマイチ疲れが抜けねぇし、変身も長く続かねぇ。正直なと

ころ、一人で戦い続けるのは厳しいかもな」
やや青ざめた顔でそう語る士に対し、映司は辛そうな顔をして項垂れる。自分を庇って、カニレーザーの攻撃を受けさえしなければ、士がこうなることはなかったというのに。
苦し気な表情で「すみません」と頭を下げる映司に対し、士は「謝るなよ」と言って彼の頭を小突いた。
「お前らを助けたからこそ、お前はオーズになれたんだし、奴らを倒す突破口が見えたんだ。後悔なんかしてねぇよ」
「でも、このまま治らなかったら……」
「そんときはそんときだ。それに、俺に対して申し訳ないって思うんならよ、俺があまり変身出来ない分、しっかり働いて貰うぜ。分かったな」
「は……はいッ」
映司の顔から暗さが消え、再び明るさが戻って来た。問題は何も解決してはいないが、士が自分を恨んでいないことが分かって、少しだけ安心出来たのだろう。
その最中、二人を先導する里中の足が止まった。士と映司は「いよいよか」とバックルを手にして身構える。しかし、彼女が示した”監獄”を目にした映司は、そんな馬鹿なと声を上げた。
「ちょっと待ってくださいよ里中さん、ここがその監獄だって言うんですか！？」
「間違いありません」
「いや、でも、おかしいですよ。だってここ……『クスクシエ』じゃあないですか！」
多国籍料理店”クスクシエ”。かつて火野映司が住み込みで働いていた場所だ。仲間たちの多くがここに訪れ、たくさんの思い出が詰まったこの場所が、監獄なんてものにされていようとは。
里中の言葉や態度に嘘や誤魔化しはない。となれば比奈や店長の知世子はどうなってしまったのか。
まさかの事態に狼狽える映司に対し、士は彼の頬を思い切り叩き、

彼の胸ぐらを掴んで言った。
「落ち着けよ。俺たちはそいつらを助けるためにここに来たんだぜ。焦って慌てて狼狽えてちゃあ守れるものも護れねぇ」
「ご安心ください火野さん」そこに里中が口を挟む。「会長からの情報によれば、泉さんも店長も無事とのこと。ここを攻め落とせば大丈夫です」
二人の言葉を聞いて、映司は漸く我に返った。痛む右頬を擦りつつ、彼らに礼をして平静を取り戻す。
「あそこが監獄になったのは理解しました。でも外から見て特に変わった所はありませんよ。”囚人”をどこに収容しているんです？」
「それも分かっています。会長たち、アポロショッカーに歯向かった者たちは『地下』の牢屋に捕まっています」
「地下、ですって？　あの店に地下室なんてなかった筈じゃあ」
「特別に穴を掘って作ったそうです。地下への通路は厨房の中にあるとか……」
「おい、ちょっと待てよ」あまりに詳しすぎる情報に、士が待ったと声を上げた。「いくらなんでも情報が筒抜け過ぎるぞ。俺たちを捕らえる為の罠なんじゃねぇのか、そいつは」
「その心配はありません」里中は即座に言葉を返す。「このことは街の人間全てが周知の事実です。それに、正面口以外の窓や裏口には特殊なセンサーが仕込まれていて、侵入しようとすれば瞬く間に発見されてしまいますからね」
「防犯対策は万全って訳か。だが一つだけ分からねぇ。あそこが監獄になっていると、お前らだけならまだしも、どうして街のやつらまで知ってるんだ」
「理由は簡単です。火野さん、門矢さん。お店の看板をよぉく見て下さい」
言われて、クスクシエの看板に目をやる二人。よく見ると、看板の前にホワイトボードを持ち上げた、不気味な瞳に、レスリングウェアを身に纏った小さな人形が立っている。

ホワイトボードには蛍光ペンをふんだんに使い、女性らしい可愛い丸文字で『囚人救出！　秋の行楽アームレスリング大会会場』と描かれている。
訳が分からないと渋い顔をする二人に対し、里中は坦々とその理由を語った。
「ここには『最強の番人』と　渾名（あだな）される、小細工を考える必要がない程強力な怪人が縄張りを張っているんです。
これは彼が作った所謂余興。中で待つ彼に『腕相撲』で勝利すれば、全ての人質を解放すると言う、たちの悪い余興なんです」
ここを根城にしている怪人が、悪趣味で意地の悪い奴だと言うことは理解出来た。しかし、人質の開放条件が腕相撲とは、随分子ども染みて拍子抜けしてしまう。
士は上等だと腕を捲り、クスクシエに乗り込もうと一歩踏み出すが、店から出てきた一人の男の姿を目にし、踏み出した足を引っ込めた。
「そんな……おれが、あんな“ガキ”に……。うっ、うぅ……」
士たちは自分の目を疑った。男の頭だけが灰に変わり、風に舞ってさらさらと散ってしまったのだ。
「馬鹿な、一体何が！」
「オルフェノク、か……」男性の奇妙な死に方を目にし、士が目を伏せて呟く。「しかし頭だけ灰にするとは、成る程、監獄の番人を務めるだけのことはある」
「厄介ですね」男の無残な死に様に恐怖を覚えた里中が、怯えた様子で士に言う。「正面突破を避け、張り巡らされたセンサーをどうにかした方が……」
里中の策に士は無言で頷くが、映司は強張った顔で「それじゃあ駄目だ」と首を横に振った。
「クスクシエの厨房……、地下の牢屋に行くためには、どうやったって店の中に入らなきゃいけない。敵が一階フロアを陣取っているとすれば、見つからないように侵入するなんて不可能だ。だったら

正面から乗り込んで敵の親玉の目を引き付け、そこから助けに言った方がよっぽど簡単です」
「しかしですね火野さん」すぐさま里中が言い返す。「貴方も見たでしょう、今の男性の死に様を。腕相撲勝負を受けて負ければ、貴方だってあぁなってしまうのですよ？」
「そんなことは分かってます。そもそも、里中さんこそちゃんと見たんですか？　あの人の死に様を！　あんなことが平気で出来る奴を放ってはおけません。俺が勝負を受けて囮になります。その隙に二人は厨房から牢獄に行ってください」
「しかし……」
無鉄砲で向こう見ずな映司の考えに、里中は困惑して言葉に詰まってしまう。士はそんな彼女の肩に優しく触れて、「もういいだろう」と声をかけた。
「安全策を取るのも一手だが、それが回り道になるのなら、俺は迷わず危険な道を行くぜ。考えてみりゃあ、こんなもんただの通過点に過ぎねぇンだ。最初っから尻込みしていて、この先でふんぞり返ってる総大将に勝てるもんか。安心しろよ里中。俺もあいつも仮面ライダーだ、負けやしねぇさ」
二人の男の決意を込めた眼差しと熱い言葉に、里中もとうとう折れた。彼女は映司に向かって軽く頷き、長く伸びた後ろ髪を髪止めで括った。
「お二人に従います。けど、ちゃんと生きて帰って来てくださいよ」
「勿論」
「誰に物言ってンだ、誰に。俺は、俺たちは、通りすがりの仮面ライダーだぜ」
「……俺もですか？」

※※※

――――たのもーう！

威勢の良い掛け声と共に、出入り口のドアを開け放し、クスクシエに入店する映司。
里中と士の二人は店の前で待機。彼が中の怪人の隙を作るのを待って、店に飛び込む算段だ。
「はぁあ、また挑戦者の方ですか？　言いにくいんですけれど、止めた方が……あ！」
歳不相応な程露出度の高い、派手なレースクイーン衣装を纏った女性は、映司の顔を見て声を上げた。彼女こそクスクシエの店長・白石知世子（ちよこ）。コスプレ好きの気のいいお姉さんだ。
映司の姿を見込んだ知世子は、目に一杯の涙を溜めて彼に抱き付く。
「あぁあ、映司君！　今まで何処に行ってたのよう、もう！　帰って来てくれたのね、ねっ！？」
「ろくに連絡も出来ないですみませんでした。それより、知世子さんはここで、何を？」
「見て分かるでしょ？　腕相撲のレフェリーよレフェリー。あたしだけ牢屋じゃなくて、ここで審判をやらされてるのよ、“あのコ”の命令でね」
「あの……コ？」
映司は知世子の指差す方向に目を向ける。店内中央、豪勢な五人掛けソファの上にふんぞり返って眠っていたのは、襟元がだらしなく垂れ下がった灰色のティーシャツを身に纏った、映司よりもずっと若い、強い癖っ毛の少年であった。
少年は映司と知世子の声に目を覚まし、気だるそうに欠伸をして、彼らの方に顔を向けた。
「あぁあ、また挑戦者？　さっき一戦やったばかりで眠いんだ。後にしてくれないかな」
映司は少年の風貌に戸惑いつつも、拳を堅く握り締め、ふざけるなと声を荒げた。
「どんな奴の挑戦でも受けるんだろ。俺と勝負しろ、逃げるつもり

か？」
「逃げる気はないよ」少年は軽く首を鳴らして起き上がる。「でもさ、みんな張り合いがないんだよね。せっかく“人質を全て解放”するって条件付けてやってるんだからさ、もっと真面目にやってくれないと」
起き上がってきた少年の顔を、映司はまじまじと見つめた。人を殺すことに何の躊躇いも感じさせない、何処までも暗く、薄気味の悪い目をしている。話し合いでなんとかなる相手ではない、勝って精神的に屈服させなくては。映司は負けるものかと彼を睨み付けた。
「怖いなぁ、そんな顔しないでよ。腕相撲がしたいんでしょ？　いいよ、受けてあげる。キミで丁度“五十人目”、だしね」
「五十人？　何が五十人目なんだ」
「僕の勝ち数さ。いや、僕に倒された数、って言った方が分かり易いかな？」
少年はそう言うと、碌に歯磨きをしていないであろう、形の歪んだ永久歯と、ぼろぼろの歯茎を見せてにやりと笑った。映司はその笑いに嫌なものを感じて背筋が震えたが、ここで気圧される訳にはいかない。
映司は少年に先んじて台の上に肘を乗せ、先程よりも鋭い目付きで彼を睨んだ。
「やる気満々だね。ずいぶんと細い筋肉だけど、キミ、そんなもので僕に勝てるの？」
「御託を並べるのは勝ってからにしろ。とっとと始めるんだ」
「ははは、つまらないなあ」少年は映司を鼻で笑った。「そういう台詞を吐いた奴、君でもう二十人目だよ。他の奴らはみんな、死んじゃったけどね」
「いいから早くしろ。お前だけには絶対、負けない」
「うるさいなぁ。分かった、分かった。おねーさーん、審判、おねがいねー」
少年は知世子に審判を任せると、台の上に肘を乗せ、映司の右手

を強く握り締めた。子どものものとは思えない程の力が、彼の掌に重く圧し掛かる。
「ルールの説明をするわよ。そのままがっちりと握って引っ張り合い、台に自分の手の甲が付いた方が負け。肘を浮かせたり、台の外に出したら反則負けになるから気をつけて」
「分かってるよそんなこと。早く吹いてよ、ホイッスル」
「俺も問題ありません。合図をお願いします」
知世子は苦しそうな顔をする映司に不安を覚えるも、少年に促されて試合開始のホイッスルを吹き鳴らした。
その華奢な体からは想像もつかないが、少年の力は圧倒的だ。映司の手は瞬く間に台の方へと押し込まれて行く。
「ぐっ、ぐうう……」
「だから言ったじゃない。そんな細い筋肉で、僕に勝てると、本気で思ってたの？　もういいや、さっさと勝負、決めさせてもらうね」
少年は止めだと言わんばかりに右腕に力を込める。映司の手の甲が台に付くまで、もう三センチもない。少年が勝ち誇った顔で笑い、知世子がもう駄目だと目を伏せたその時、その場にいた誰もが予想しえない、不思議なことが起こった。
「な……なにッ」
「う、うそ。どうしたのよ……一体！」
彼らが驚くのも無理はない。少年は映司を追い詰めていた筈だった。事実映司はぎりぎりまで追い詰められていた。しかし今はどうだ。逞しく膨れ上がった映司の右腕は瞬く間に少年を押し返し、逆に台ぎりぎりまで追い詰めているではないか。
「言ったはずだぞ」目を血走らせ、額から血管が浮き出るほど踏ん張りつつ映司が叫ぶ。「お前だけには、絶対負けないって！」
映司のズボンのポケット、その中に収まった『キバ』のメダルが、彼の感情に呼応するかのように熱を発して輝いている。『キバ』の“使用者の力を解放させる”能力が、映司の体の中のリミッターを外し、常人以上の力を彼に与えているのだろう。

少年は訳が分からなくなった。追い詰めていたのは自分のはずなのに、気が付けば追い詰められる側になっている。こんな馬鹿な話があるか。人間如きに負けてなるものか。少年は薄ら寒い笑みを見せ、肘から腕へ、腕から手へと灰色の不気味なオーラを生じさせた。

灰色のオーラは少年の腕を通り抜け、映司の腕へと取り憑いた。映司の右腕が徐々に灰色に染まって行く。あの男が殺された時と同じだ。彼の腕を灰に変えようと言う算段か。

映司は自身の手に起こる異変に気付いたが、今更どうすることも出来ない。オーラは映司の右腕の肘まで浸食し、彼の腕を灰へと変える、筈だった。

映司の右腕は灰色のままで、今尚形を保っている。どういうわけか、オーラと腕との間に何かが挟まって、浸食出来ないでいるのだ。少年は何故なのかと彼の腕をじっと見つめる。少年は自身が発したオーラと腕との間に、火花を散らして巻き付く“雷”が生じているのに気が付いた。

気付いた時には最早遅し。映司の腕から生じた雷は灰色のオーラを掻き消した上で、手を組み合う少年の体に伝わり、彼の体を数万ボルトの電流が襲った。

電流を受けて、少年の腕に掛かる力が緩んだ。映司はこれを勝機と見て、頭の血管がはち切れんばかりの力を込める。少年の手の甲は台の上に激突し、それでも勢いを殺し切れず、台をも砕いて床に叩き付けられた。

「どうだ、勝ったぞ！　さあ、捕まえた人たちを解放するんだ！」

右肩を脱臼し、目に涙を溜めて歯を食い縛る少年を見下ろし、捕まえた人々を解放するよう要求する映司。少年は外れた肩を自力で入れ直すと、大粒の涙を流して、鼻声で思い切り叫んだ。

「ふざけるな！　ふざけるなよ、痛かった……、とっても痛かったんだぞ！　ふざけるなよ！　お前なんか……、死んじまえ！」

瞬間、少年の体は“龍”を模した怪物へと変貌し、両手の重く巨

大な爪で映司に襲い掛かる。
映司は側転で攻撃をかわすと、上着のポケットからバックルとメダルを取り出して、素早く腰に巻き付ける。
「やっぱりそう来るか。だったらもう、容赦しないぞ！」
――――変身！
――クウガ！　ブレイド！　キバ！
同時に映司もオーズに変身。入口の前で身を潜めていた士たちに「お願いします」と叫んだ。
彼の叫びに応じて、士と里中がドアを蹴破ってクスクシエに突入。彼らの侵入を察知した少年は、士たちを狙って襲い来るが、オーズに取り付かれて動きを止められた。
「お前の相手は俺だろ。あの二人を追いたかったら、俺を倒してからにするんだな」
「そうかい、そうかいそうかい。そこまで僕と決着を付けたいか。いいよ、やってやろうじゃないか。“消し炭”になっちまいなッ」
少年――龍のオルフェノクはオーズに対抗すべく、『赤き龍』のメダルを飲み込んだ。
瞬間、彼の周囲で炎が舞い、オルフェノクの体に吸い込まれて行く。
炎を全てを体内に取り込んだ龍のオルフェノクは、銀色の外装に身を包んだ、四足歩行の怪物へと姿を変えていた。

第六話：「クスクシエと腕相撲と龍のメダル」　（後書き）

◆バトルの合間の小休止として書いた筈なのに、前回よりも文面が長くなってた件。雀の涙ほどですけれども。

◆執筆中にオーズ本編を見返してみましたが、映司ってそれほど不測の事態に動揺しませんね。これだと平和ボケしてしまったからか、大分焦ってたりするのですが。

◆思えば、前回のサブタイトルの『蠍の置き土産』はこちらで使うべきだったんじゃないかと今更思いました。もうどうにもなりません。

第七話：「再会と脱出と火を噴く赤のコンボ」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、オーズの使えるメダルは――

◎ヘッド：クウガ・コア
◎アーム：ブレイド・コア
◎レッグ：キバ・コア

第七話：「再会と脱出と火を噴く赤のコンボ」

※※※

オーズの協力を得てクスクシエの地下に潜入した士と里中は、形ばかりの門番である黒タイツたちを片付け、牢獄の前へ辿り着いた。
士をくり貫いて鉄格子を差し込んだだけの粗末な牢だが、小さな箱に押し込められた電気ウナギカンドロイドが、格子に四六時中電流を放出し続けており、無理に出ようものなら焼け焦げてしまう。
二人は数多く作られた檻のなかから、硝子張りにされた独房を探し出し、中で窮屈そうにしている鴻上に声をかけた。
「よぉ、オッサン。助けに来てやったぜ。バイト代弾めよな」
「会長、御無事ですか」
「おぉ、門矢君に里中君！　よく来てくれたねぇ」
「よぉし、そこを動くなよ」
士は近づく鴻上を御しつつ、懐からライドブッカーを取り出し、ガンモードにして構え、箱の中を這いずり回るウナギたちを撃ち抜いた。ウナギたちは一瞬で鉄屑へと変わり、硝子張りの牢獄を流れる電流はあっという間に掻き消えた。
「ま、ざっとこんなもんだ。もう出てきていいぜ」
「いやぁ、助かったよ門矢君。その調子で私の部下たちも助けてはくれないかね」
「分かったよ、そう焦るなっての」
鴻上に請われ、士は牢屋に巣食うウナギを次々に撃ち抜いて行く。捕まっていた人々は皆開放され、歓喜の大声を上げた。
「にしても、とんでもねぇ数だな」士は捕虜の多さに溜め息を一つつく。「これ全部、アンタの部下か？」
「私の部下が殆どだが、自衛隊や在日米軍、民間でアポロショッカ

ーに反抗し、投獄されたものもいる。理由は皆それぞれだがね」
「そうかい。しっかし、狭い場所で密集されると暑くてしょうがねぇな。今外に出たって捕まるだけだぞ。お前ら、もう少し牢屋の中で待ってろ！　散った、散った！」
息苦しくて敵わないと、牢屋から出た人々を再び押し込める士。その殆どが大人しく戻って行ったのだが、一人だけ士の前に立ったままの女性がいた。彼女はすがるような目で士を見つめて言った。
「あの……門矢士さん、ですよね？　そうなんですよね！？」
「何だよ騒々しい。いかにも俺が門矢士だが、それが何か？」
目の前の男が門矢士だと知った女性は、「あなたを探していたんです」と言って、彼の手を握った。
「私、泉比奈って言います。ある方からあなた宛に預かっているものがあるんです。受け取ってください」
比奈は有無を言わさず、士の手のひらに『それ』を掴ませる。何なんだとそれを見た瞬間、士の目の色が一気に変わり、彼女の肩を掴み激しく振った。
「お前……この“メダル”、一体どこで手に入れたんだ！　答えろ、答えるんだ」
「おお、落ち着いてください」比奈はその手を払いつつ答える。「一緒に独房に入れられていた人から託されたんです。『いつか君の前に”門矢士”という男が現れる。そのメダルの使い道が分かるのは彼だけだ。助かりたければ、間違いなく彼に渡してくれたまえ』って言って、私に……」
「たまえ、って……」独特の言い回しに覚えがあったのか、士はふんと鼻を鳴らし、歯を見せてニヤリと笑った。「そうか、あいつも無事だったんだな。それで、野郎はどこに行ったんだ？　ここにはいないようだが……」
「分かりません」比奈は目を伏せて首を横に振る。「何だかよく分からない光の壁の中に消えてしまって……」
「光の壁、ね。まったく、いつも唐突な奴だよ、ホントに……」

「あの。お知り合いですか？　その人と」
「そんなことはどうでもいい。何はともあれ、助かったぜ泉比奈。一緒に来い、上で火野映司が戦っている」
「映司くんが！？」比奈は驚いて声を上げた。「ここにいる……というか、戦っているんですか？　あの怪人と」
「”仮面ライダー”オーズとしてな。再会がてら助けに行ってやろうぜ。来いよ」
「……は、はい！」
比奈は士の差し出した手を強く握り返す。手を差し出した当人は、彼女の馬鹿力に手を痛め悲鳴を上げたのだが、それはまた別のお話。

※※※

「仮面ライダーのくせに弱いなあ、お兄さん。あぁ、そうか。僕が強すぎるだけかぁ。こりゃあ失礼」
「く……そォ……」
仮面ライダーオーズと龍のオルフェノクとなった少年との死闘は、クスクシエを半壊させた上で戦いの場を近くの道路上に移していた。
”龍騎”のメダルを取り込み、四つ足の怪物となった少年の力は凄まじく、丸太のように太い四肢から繰り出される一撃は、腕を十字に組んで踏ん張っても御し切れず、堅牢な白銀の鎧でより強固となった外装に、オーズは傷一つ付けられず、アスファルトの上にうつ伏せになっていた。
「これ以上苛めるのも可哀想だし、とっとと止め、刺しちゃおうかな」
オルフェノクの口元にエネルギーが集まり、火球の形を成していく。オーズは感付いてかわそうとするが、今から体を起こしていてはとても間に合わない。
そう判断したオーズは、両腕のトレイ型の手甲から、備え付けられているトランプのカードを扇状に広げ、盾として展開。両腕を顔

の前で組んで向かい来る火球弾を受け止めた。
「避けられないなら……、受け切るまでッ」
「小癪な、でも……どこまで耐えられる……かな！？」
オルフェノクの放った火球弾は、カードの盾に防がれはしたものの、その勢いまで殺すことは出来ず、オーズは着弾の瞬間よろけて体を反らせてしまった。
効き目があるのなら使わない手はない。龍のオルフェノクは防がれた事など意に介さず、次々と火球弾を放って行く。オーズの体力が消耗し、防ぐことすら出来なくなるのを待っているのだ。
対するオーズは、彼がそう考えているだろうと見越し、弾かれてよろけるのを承知の上で、腕を顔の前で組み、ただただ前に進み続ける。火球弾を放っている間は、前足や尻尾などでの小細工を使ってこない。いくら堅牢な鎧を纏っていようとも、鎧に守られていない弱い部分はきっとある。楽に懐に近付かせてくれるのなら、利用しない手はない。オーズはよろけながらも一歩一歩、確実にオルフェノクに近付いて行った。
「くそっ、いい加減に諦めろよ！　疲れただろう」
「たとえ疲れ果てたとしても、お前相手じゃ一歩だって退けないね」
疲労も恐れも省みず進み続け、遂にオルフェノクに潜り込んだオーズ。狙うは鎧で守られていない口の中。ブレイドの剣で舌を引き抜き、メダルを無理矢理抜き取ろうという算段だ。
クウガ・コアの雷の力が刃に込められ、光輝く。オーズは右腕を大きく振り被り、龍の口目掛けて剣を叩き込んだ。
「決まった！　……と、思った？　残念、それじゃあ僕には勝てないよ」
「な……にッ！」
オーズの一撃は、確かに奴の口内を貫いた筈だった。火球弾を撃とうにも、前足で叩こうにも近すぎて、彼には何も出来ない筈なのだ。

ならばこれはどういうことだ。オーズ渾身の一撃は、彼の両肩口から生えてきた一対の腕に阻まれて、オルフェノクの口内に届かないでいるではないか。
見立ては良かった。上手く行きさえすれば、龍騎のメダルを取り戻せていただろう。だが”力”が足りないのだ。何に阻まれようと押し通すパワーさえあれば、肩口の腕に防がれても、押し通せたことだろうに。
攻撃が通用せず戸惑うオーズに、龍のオルフェノクは剣を掴んだままで一歩距離を取り、残った前足で彼の体を思い切り蹴り付けた。あまりの力にオーズの変身は解け、散らしたメダルのうち一つ、腕のブレイメダルがオルフェノクに奪われてしまう。
「はは、残念だったね。頼みの綱のメダルはここに一枚。仮面ライダーにすらなれないキミは、この先どうやって僕と戦うつもりなのかな。よかったら教えてくれよ」
「そんなの決まってる」映司は唇を噛み締め、二枚のメダルを握って立ち上がった。「仮面ライダーになろうとなれまいと、一歩も退かず戦うだけだ！」
メダルを失い、仮面ライダーになれない映司に策はない。人々を守るため、自分の身を犠牲にして戦うだけだ。勝ち目などまるで無いのに、それでも尚自分の前に立ちはだかる映司を見て、龍のオルフェノクは侮蔑を込めて大いに笑った。
「キミって本気で馬鹿なんだね。そんなことしたって報われるわけないのにさ」
「見返りなんて求めちゃいない。俺はただ、この世界に生きる皆が幸せでいて欲しいだけだ。それを壊す奴らは誰であろうと、どんなに強大だろうと、絶対に許さない！」
「あぁ、そう」オルフェノクは映司に興味を無くし、つまらなそうな顔で彼を見た。「んじゃあさ、とっとと消えちまいなよ」
龍のオルフェノクは、これまで以上に深く息を吸い込み、火球のエネルギーを増幅させていく。変身し、盾で防いでなおよろける程

の一撃を、生身の彼が喰らってしまえば――消し炭になるのは避けられない。避けようにも疲労で足は動かず、防ごうにも身を守るものは何もない。
今まで以上に強力な火球弾が龍の口から放たれた。映司は気持ちで負けてなるものかと、目を見開いて真正面から立ち向かう。接触まで後数十センチ。今から避けても間に合う訳がない。
だが、火球弾が映司の目と鼻の先まで近づいたその時、横から放たれた一発の光弾によって火球は細かく砕け、アスファルト上に散ってしまう。オルフェノクが光弾の放たれた方向に顔を向けると、そこにはライドブッカー・ガンモードを構えて不適に佇む士と、彼に助けられてやって来た泉比奈が立っていた。
「士さん、それに……比奈ちゃん！　無事だったんだね！」
「映司くん、捕まっている人たちは皆助かりました。思う存分やっちゃってください！」
「ちょっと見ねぇうちに、ずいぶんとやられちまって……」ふらつく映司を見て士が言った。「力が欲しいならくれてやる。真ん中をこいつに変えろ。一気に叩き潰してやりな」
士はそう言って、映司に”三珠”が象られた紫のメダルを投げて寄越す。「力」、「紫のメダル」という言葉に戸惑いを覚えつつも、映司は奪われたブレイド・コアの代わりに紫のメダルをバックルに挿入し、オースキャナーを真一文字に滑らせた。
――クウガ！　ヒビキ！　キバ！
バックルから流れるメロディに乗せ、映司は再びオーズに変身。騎士の鎧と飛び出す剣に代わり、盛り上がった紫色の筋肉と、背面には一対の撥（バチ）が備え付けられた。
これならやれると確信し、背中の撥を抜いてオルフェノクに向かうオーズ。龍の化物はそうはさせまいと火球弾を放って彼を牽制するが、彼の放った炎は撥の先に吸い込まれて行き、一発もオーズに当たらない。オーズが地を跳ね、オルフェノクの頭上に回った。龍の化物はやむ無く肩口の腕を十字に組んで防ぐが、火球弾を吸って

強化された撥を防ぐことは出来ず突破され、オルフェノクの額を炎を纏った強烈な一撃が襲う。
額を割られて朦朧(もうろう)とする龍のオルフェノク。オーズは彼が纏う堅牢な鎧を、撥で太鼓を叩くようにリズミカルに突いて行く。炎の力が綴じられた攻撃に、龍の白銀の鎧は耐え切れず、そこらかしこに亀裂が走っていった。
オーズの猛攻に形状を維持出来なくなった鎧は、ひとりでに崩れ去って赤色のメダルを吐き出した。彼が飲み込んでいた龍騎のメダルだ。、オーズは砕けた鎧の中からそれを拾い上げ、まじまじと見つめる。
「こ……のォ、よくも、よくも僕に土を付けてくれたな！　ちきしょう、ちきしょう！」
メダルを奪われて怪物から人間の姿に戻った少年は、「殺してやる」と“金色のメダル”を取り出した。一枚だけでも苦戦したというのに、これ以上使われては勝ち目がない。
「野郎ッ、まだメダルを持ってやがったか。返しやがれ！」少年がメダルを飲みこむ前に、士はライドブッカーの引き金を引き、彼の手を撃ち抜いた。少年の手から零れたメダルは道路脇へと転がって行く。
士の行動に怒り狂った少年は、我を忘れ再び龍のオルフェノクに変身。士に向かい飛び掛かるが、彼はそれを難なくかわした上で、オーズに向かいこう言った。
「今のうちだ映司、頭をそのメダルに変えろ！　ヤツにトドメを刺してやれ！」
「このメダルに、ですか？」
「そうだ。響鬼とキバ、そして龍騎のメダルが揃えば、さらに強力な力を発揮する！」
「分かりました……やってみます！」
士に言われるまでもなく、オーズにはそのことが解っていた。先程龍騎のメダルを手にした時に感じていたのだ。キバと響鬼と龍騎

のメダル。特別強い結び付きを感じる三枚のメダルを組み合わせれば、今まで以上に凄まじい力を発揮出来るだろうと。
オーズはクウガのメダルの代わりに龍騎のメダルを嵌め込み、オースキャナーで読み込んだ。

――リュウキ！　ヒビキ！　キバ！

クウガの頭に代わり、銀色の甲冑に赤い複眼の顔が現れる。同時にキバの足の拘束具が弾け飛び、キバ・メダルの力で腕部及び胸部の筋肉が膨れ上がった。
それまでばらばらだったオーラングサークルの色も真っ赤に染まり、アスファルトが溶け出す程の熱を放出し始める。数あるライダーメダルの中でパワーを最も引き出せる組み合わせ。それがこの三枚、『赤のコンボ』なのだ。
オーズが新たな姿に変わった事など意に介さず、龍のオルフェノクは彼に向かい、巨大な右腕を振り下ろす。しかしオーズはその腕を容易く受け止め、自分の胸の前まで引き寄せると、左手の付け根から鋭利な鉤爪を引き出して龍の右肩に引っ掛け、そのまま思い切り力を込めて、オルフェノクの肩から舌を引き千切った。
オルフェノクの悲鳴が街中に響き渡る中、オーズは拳を固く握り締め、全身に力を込める。オーラングサークルの上部が光輝き、龍の手を模した肩当てが展開し、独立した一対の腕となった。
オーズは傷口を押さえて震えるオルフェノクに向け、四本の手で猛烈な拳の雨を見舞う。機銃掃射のごとき勢いで放たれたそれは、倒れることすら許さず、花瓶を槌(つち)で叩いて割ったような音が辺りに響く。
止めの一発がオルフェノクの頬を貫いた。彼の顔はひしゃけて斜めにひん曲がり、アスファルトの上を四五度跳ねて、電柱に叩き付けられた。
「よぉし、決めちまえ映司」
「分かってますって」

――スキャニングチャージ！

再びオースキャナーでバックルを読み込み、メダルの力を最大限開放させるオーズ。彼の足の下に真っ赤に燃える『キバの紋章』が現れ、折れた電柱の下で突っ伏すオルフェノクに向かっていく。

紋章はオルフェノクの背面に回って、火花を散らして彼の背中を焼き、オーズの方へと撥ね飛ばす。同時に赤き龍の形に変わった龍騎の顔から、強力な火球弾が放たれる。放たれた火球は『龍騎の紋章』に形を変えると、接触したオルフェノクの体を焼き焦がして後ろに撥ね飛ばす。その先にあるのはキバの紋章だ。この哀れな少年は最早どうすることも出来ず、パンとパンの間に挟まれたチーズのように、紋章と紋章に挟まれ、全身をくまなく焼かれてしまった。

しかし、それだけでは終わらない。炎燃ゆる背中の撥を引き抜いて構えたオーズは、紋章に挟まれ満身創痍のオルフェノクに向かって駆け、彼を紋章ごと撥で思い切り叩いたのだ。

強烈な音撃を喰らったことで少年の体は内側から崩壊し、膨大なセルメダルの塊となって街中に降り注いだ。

第七話：「再会と脱出と火を噴く赤のコンボ」（後書き）

◆コンボに相当する形態の登場です。コンボですが、良さそうなコンボメロディと名称を思い付かないので名前は決めておりません。何でもお好きなものをどうぞ。

◆やっぱりほぼ日更新だけで終わらせようなんて虫が良すぎたんや……。

第八話：「追いかけっこと後藤の帰還と準特急地獄行き戦車」

「アポロガイスト様、アポロガイスト様ーッ」
仮面ライダーオーズが龍のオルフェノクを倒したのと時を同じくし、都内某所のとある場所では、ツタンカーメンのマスクにライオンの顔をくっ付けた不気味な怪人が、『アポロガイスト』の名を呼んで建物の中を走り回っていた。
やがて彼は窓のない暗がりに、大型のマッサージチェアが置かれた部屋を見付け、そこにアポロガイストの姿を見込む。怪人は失礼しますと一声掛けて、マッサージチェアの部屋に足を踏み入れた。
「何なのだ『デッドライオン』、そんなに慌てて」アポロガイストと呼ばれた壮年の男は、マッサージの邪魔をされたのが気に入らないらしく、明らかにうっとおしそうな顔で怪人・デッドライオンの顔を見る。
「お休み中大変申し訳ございません。しかし、早急にご報告したいことがありまして」
「ふむ……」アポロガイストはチェアのモードを『揉み』から『叩き』に変えつつ言った。「宜しい、申してみよ」
「大変申し訳難いのですが……我らが同志、ドラゴンオルフェノクの小僧が、『仮面ライダー』を名乗る男たちに敗北し、多数の囚人共が脱走した、と……」
「ほぉ、ライダー……。ディケイドの事だな。他にそんなことが出来るライダーは残っていまい」アポロガイストはマッサージの強度を二段階上げ、その心地に満足しつつ言葉を継ぐ。「して、他には？」
「他には……と、言いますと？」アポロガイストの余りに淡白な答えに、デッドライオンは言葉に詰まり、オウム返しをしてしまう。
「馬鹿者。他に報告すべきことはあるか、と聞いているのだ。ディケイドが他に何か、我らアポロショッカーの不利益になることをし

たのか？」
「い、いいえ。それだけ……にございます」
「それだけ、ねぇ……」
アポロガイストはマッサージチェアを回転させてデッドライオンの方を向き、何とも言えない表情で彼と向かい合う。デッドライオンは下手を打って彼の機嫌を損ねたのではないかと狼狽え、額に汗を溜めて、瞬きせずにアポロガイストの顔を見つめた。
その様子が面白かったからか、アポロガイストは満足した様子で再びチェアを壁の方に向け、彼にところでと問い掛けた。
「”ガンガンライナー”は今、どこにいるのだ？　北の方を攻めさせていた筈だが……」
「ガンガンライナー……、ですか？　奴なら北海道の函館に上陸し、現在札幌の街をセルメダルに変えている最中かと」
「札幌、か」アポロガイストは顎の下に指を乗せて考え、決めたぞと声を上げた。「ガンガンライナーに伝えるのだ。北海道は後回しで良い。東京に戻り、ディケイドたち邪魔者共を排除しろとな」
「ははッ。今からですと、約三十分程で東京に到着するかと」
「遅いな……」アポロガイストは不満げな声を漏らした。「二十五分で到着するよう通達するのだ。さぁ、行けィデッドライオン」
「は……ははぁッ！」
デッドライオンは慌てた様子で敬礼をした後、そそくさと部屋を出ていく。アポロガイストはそれを横目に見つつ、マッサージチェアの強度を一つ下げつつ、一人呟く。
「やはりこの世界にやって来たかディケイド。しかしこちらとしても好都合よ。我が野望成就の為にもな……ふふ、ふはははは」

※※※

「さて、と……あった、あった」
オーズは龍のオルフェノクの死骸、大量のセルメダルの山から奪

われたブレイドメダルを探し出して変身を解き、士たちの方へと戻って行った。
「ヒヤヒヤさせやがって。ライダーの力を借りてんだ、もっとスマートに勝てないのか」
「す、すみません。かなり手強かったですし、それは……」
「まぁ、勝ったんだから文句は言わねぇよ。やったな、映司」
「はい、ありがとうございます！」
士の嫌味な言葉など気にも留めず、誉め言葉だけ素直に受け取って頭を下げる映司。そんな彼の元に、クスクシエの前で戦いを見守っていた泉比奈が駆け寄って来た。
「あ、比奈ちゃん。無事で良かった！　どうしてあんなところに捕まってたの」
「そんなことよりも」比奈は映司の話を遮って言った。「映司くん、いいんですか？　確かもう一枚、道路脇に墜ちたメダルがあったんじゃ……」
「メダルって……あっ、あぁ！」
安堵してすっかり忘れていたと、驚いて呆けた顔をする映司。少年は赤い龍騎のメダルの他に、金色のメダルを使おうとしていたのだが、士によって撃ち抜かれ、道路脇に転がって行ったのだ。
映司は急いで探さなくてはと必死に辺りを見回すが、士はそんな映司に落ち着けよと声を掛ける。
「そう焦るな。落ちている場所は分かっているんだ、ゆっくり拾えば……あッ」
メダルが落ちていると思しき場所に顔を向けた士は、予想外の展開に目を見開いた。少年が落とした金色のメダルは、偶然通りかかったアポロショッカーの戦闘員によって拾われていたのだ。
組織の下っぱである彼らに、メダルの価値は分からない。しかし、士たちの視線に気付いたその戦闘員は、まずいと思って駆け出した。
「野郎待て、待ちやがれッ！」その様子を見た士は、目を血走らせて戦闘員を追う。

「焦らなくても良かったんじゃないんですか？　待って下さいよ士さん」映司は呆れた顔をして士の後に続いた。

「む、火野君たちはどこかな。姿が見えないようだが……」
「六枚目のメダルを追って走り去って行きましたよ、会長」
士たちが去ってから暫くし、半壊したクスクシエの中から鴻上と里中が現れた。鴻上は二人がもういないことを知ると、里中に向かい「これはまずい」と声を上げた。
「いきなり何ですか会長」唐突な叫びに驚き、里中が言った。「何か……火野さんたちに伝えていないことでも？」
「そうじゃない。そうじゃないんだよ里中君。彼らはライダーメダルを使う怪物を下し、順調にメダルを取り戻している。しかし、しかしだ里中君。幹部が一人倒され、ディケイドがこの世界に現れた事を知ったなら、必ずやアポロショッカーは本腰を入れてライダー掃討に乗り出すだろう。門矢君が満足に戦えず、ライダーメダルが十分に集まっていない今、
”あれ”を呼ばれでもしたら、二人に勝ち目はないのだよ」
「”あれ”……ですか」里中は不安そうな口調で言葉を返す。「しかし、あれをこんな都心で暴れさせてしまえば、彼らにとっても痛手の筈。そう簡単に呼ぶとは思えませんが」
「いいや、それでも彼ならやるだろう。彼らにとっての障害は仮面ライダーだけだ。街一つ潰したとしてもお釣りが来る」
鴻上は暫く思案を巡らせた後、「やはり」と言葉を継ぐ。
「呼び戻しておくべきか……『彼』を」
「あぁ、その件に関しましてはご安心下さい」里中が言う。「帰国の折に『彼』に連絡しておきました。もうまもなくこちらに到着するかと」
「ほぉ、流石は里中君。その抜かりの無さ……実に素晴らしいッ！」
「ですが会長」里中が口を挟む「今回の業務の範囲外ですので、後で特別手当をお願いします。輸送ヘリの操縦代行の分も含めて頂き

ますので、そのつもりで」
「どこまでも抜かりが無いね里中君！　素晴らしい……実に素晴らしいッ！」

※※※

門矢士と火野映司が、金色のメダルを奪った戦闘員を追い掛けて三十分程が過ぎた。
追いかけ始めた時点では、俺が戦闘員ごときに負けるか。速攻で捕まえてやると息巻いていた士だったが、パスにフェイント、数にものを言わせた妨害に苦戦を強いられ、未だに追い付くことすら出来ないでいた。
「ちきしょう……雑魚のくせに、雑魚のくせに！　俺がここまでコケにされるとは……。許さねぇ、絶対に許さねぇぞこの野郎！」
「落ち着いてください士さん。焦ってちゃ捕まえられるものも捕まえられませんって」
「これが落ち着いていられるか！　あぁもう、これ以上我満出来ん！」
――――変身！！！
――――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＤＥＣＡＤＥ」
――――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＦＡＩＺ」
――――ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ「ＦＡＩＺ　ＡＣＣＥＬ」
戦闘員たちのおちょくりに堪えられなくなった士は、ディケイドに変身し、ファイズへのカメンライドを経て、超加速形態「ファイズ・アクセルフォーム」へと三段変身。通常の千倍の速さで地を駆け、周囲の戦闘員たちを散らして金色のメダルを掠め取った。
「はっは、どうだこの野郎。俺が本気を出しゃあこんなもんよ」
「大人げないですよ、その台詞」メダルを奪い返して高笑う士に、映司は冷静に突っ込みを入れる。
丁度その頃だっただろうか。二人の耳に、電車の警笛のような妙

な音が届く。電車のものにしては音が荒々しすぎるし、そもそもここに線路はない。
何の音だと首を傾げる二人の遥か頭上に、正面に二つの砲門を備えた、巨大な重武装『電車』が現れた。
「なッ！　なんなんだありゃあ！」
「分かりません、分かりませんけど……逃げましょう！」
故意かどうか定かではないが、『電車』はこちらに照準を合わせて砲弾を撃ってきた。狙いが粗いお陰で事無きを得たものの、砲弾を受けた家屋や商店などが、一瞬にしてセルメダルの山へと姿を変えている。
二人はこの電車が敵のものであると即座に認識し、とても敵わないと物陰に身を潜めた。
「士さん、何なんですかあの電車……っていうか、電車なんですか、あれ！　電車というか”戦車”ですよ、あれじゃあ」
「そんなこと、俺が知るか！　アポロショッカーの侵略用兵器であることは確かみたいだが……」
あれは何だと思案してみるが、妙案も対抗策も浮かびはしない。ならば行動あるのみだと結論付け、動き出そうとしたその瞬間、彼ら二人の頭上から、ビルの上部が瓦礫となって降って来た。重武装砲門付き車両の攻撃を受けて“中程”だけがセルメダル化し、支えを無くして落ちて来たのだろう。
映司はメダルをバックルに嵌め、士はカードをドライバーに挿入するが、変身までに間に合いそうもない。ビルの瓦礫は二人の男を押し潰さんと、重力に従い無慈悲に堕ちて行く。

――――セル・バースト
――――ブレストキャノン・シュート！
しかし、そこで彼らの命の灯が消されることはなかった。何処からともなく放たれた緑の閃光が、落ち行く瓦礫を消し去ったからだ。
「あ、あれ……？　俺たち、生きてる？」

「なんなんだ、一体……」
「――火野、それに門矢士。大丈夫か？」
二人が驚き戸惑う中、空から一人の戦士が降り立った。カプセルを模した球型のパーツが全身に施され、顔にはU字の赤いライン。コアメダルの力で戦うオーズとは逆に、セルメダルの力だけで稼働する戦士、仮面ライダー『バース』だ。
涼やかでよく通ったその声に聞き覚えがあったのか、映司は驚いて声をかける。
「その声……“後藤さん”、ですよね？」
「あぁ、日本の危機に居ても立ってもいられなくてな。暫くの間は鴻上ファウンデーションのライドベンダー隊隊長さ」
映司と士を救ったこの男。名を「後藤慎太郎（しんたろう）」と言い、かつてのグリードとの戦いでバースとして活躍した元・警察官だ。
「あ、紹介します士さん。彼は後藤さんと言って、以前……」映司は後藤のことを士に紹介しようとするが、当人は「そんなことは後でいい」と突っぱね、士もそれに頷いた。
「俺は会長の指令でここに来た。お前たちの助けになれとな。と言うことは差し詰め……」
後藤は空を見上げ、青空を自由自在に飛びまわり、砲弾を滅茶苦茶に撃ち捲る電車を指差して言った。
「あれをぶっ壊す手伝い……、ってところか」
「そうなるな」士が言う。「奴は“電王”のメダルを持ってる。俺たちが乗り込んでぶっ壊すさ」
「乗り込むって……、士さん、あんな暴走特急に、どうやって乗り込もうって言うんです？　戦闘員から乗車券を奪ってこいとでも？」
映司の言うことは尤もだ。ディケイドもオーズも空は飛べるが、あぁも攻撃の激しい電車にどうやって乗り込めと言うのか。映司が腕組みをして悩んでいると、後藤が彼に話しかけて来た。「そのために俺がいる。あの電車の動きと攻撃を封じればいいんだろう？　そいつは俺に任せろ、火野」

「そんな簡単に言っちゃって……出来るんですか？」
「一瞬で良ければな。異論はないか？　門矢士」
「問題ない」士は首を縦に振った。「後は俺たちで勝手に乗り込む。あぁ、それと……足になる車、バイクが欲しいな。そいつはどうだ？」
「そいつも大丈夫だ。ほら」後藤はバッタ型のメカを士に手渡した。「通信機だ。そいつで会長と話が出来る」
後藤から手渡されたバッタのメカは、士の手に渡った瞬間、鴻上の声でひとりでに喋り始めた。
「――やあ、元気かね諸君。君たちに嬉しいお知らせだ。先程アポロショッカーに掛けられたロックを解除しておいた。これで君たちもカンドロイドと『ライドベンダー』を自由に使うことが出来る。戦況は未だ敵側に傾いているが、これらを駆使して頑張ってくれたまえ。では、失礼するよ」
鴻上は言いたいことだけ言い切ると、こちらの言葉も聞かぬまま通信を切ってしまう。彼のマイペースな態度に士はただただ茫然としていた。
「何なんだ一体。カンドロイド、ってのは分かるが……らいどべんだぁ、ってのは何だ？」
「あ。それはですね……あれです、あれ」
映司はそう言って、街中に無造作に置かれた自販機を指差す。士にはその意味が全く分からない。
「いや……だから何なんだよ。レッドなんとかを飲んで翼を授かれとでも言うのか？」
「そうじゃないんです。ほら、こうして――」
映司は持っていたセルメダルのうち一枚を自販機に投入し、中央の一番大きなボタンを押し込む。瞬間自販機は大型の二輪車に形を変えた。
「うおっ、自販機がバイクになりやがった！　どういう仕組みしてんだコイツ」

「まぁ、仕組は置いといて……、あとは後藤さんに任せて、俺たちも動きましょうよ」
気にはなるが仕方がない。仕組みのことはとりあえず放ってライドベンダーに跨り、後藤が電車を引きずり降ろし、動きを止めるのを待つ。

「ずいぶんと物騒な電車だが、駅で利用客が待ってるんだ。少し停車してもらおうか」
――クレーン・アーム
――ドリル・アーム
後藤はバックルに二枚のセルメダルを挿入し、ハンドルレバーを回す。同時に右腕全体にワイヤー付きのクレーンが、その先端にドリルがセットされた。後藤は先端にドリルの付いたクレーンを電車の二両目に叩き込んだ。空に架かる線路が徐々に逸れて行くが、勢いは止まらない。仮面ライダーに十両編成の重武装列車を止めることなど、出来はしないのだろうか。
「そうさ、俺には止められない。けどな、これなら……どうだッ！」
後藤は電車を止めようとしてアームを放ったのではない。彼が行く手を変えた先には、セルメダルの山と化したビルがそびえ立っていたのだ。電車はそれ以上進路を変えることが出来ず、メダルの山に激突して強引に『停車』した。
電車はすぐさま体勢を立て直し、再び動き出そうとするが、そうは問屋が卸さない。車輪と車輪の間にセルメダルが挟まって、エンジンが空回っているのだ。
「今のうちだ、二人とも、行けーッ」動けないでいる電車を見て後藤が言う。
「おうよ、そうさせてもらうぜ」
「ありがとうございます、後藤さん！」
――――変身
――――変身！

――KAMEN　RIDE　「DECADE」
――リュウキ！　ブレイド！　キバ！
二人は仮面ライダーに変身し、停まったままの電車に乗車券もなしに乗りこんで行った。

第八話：「追いかけっこと後藤の帰還と準特急地獄行き戦車」（後書き）

◆戦車なのか電車なのか。『電車をけん引する戦車』という言葉の響きが気に入ってあんなものが出来ました。

◆書く方の負担が多くなってきたのでペースを落とした筈……だったのですが、いつもと同じ分量書いているという不思議。

◆大ボスって最後の戦いまで基本的に動かないじゃないですか。と言うわけで、脇で変なことしている奴にしようとしてマッサージチェアに座らせてみたら、演者の方のイメージも相まって妙にマッチして一人で勝手に笑ってました。

第九話：「暴走特急戦車と自称最強の戦士と重量系メダル」

※※※

「来たぜ映司、団体さんがウジャウジャと」
「ですね。避けて通る訳にも……行かないみたいですし」
重武装電車に乗り込んだ二人のライダーを待っていたのは、二人掛けの椅子が向かい合う車両の中を埋め尽くすアポロショッカーの戦闘員たちだった。ディケイドはその多さに辟易し、変身を解除して溜め息を着いた。
「これって、さっきのメダルですよね。それになんて変身を……」
「この先に大ボスが控えてんだ、変身出来る時間を無駄遣いしたくねぇ。こいつを使って奴らを蹴散らせ」
士はそう言うと、ポケットからさっき取り返した「アギト」のメダルを取り出し、オーズに投げて寄越した。
「構いませんけど、なんだか使い道を分かっているような口振りですね。さっき奪い返したばかりだというのに」
「あぁ、『だいたい』な。頼むぞ」
――リュウキ！　ブレイド！　アギト！
含みのある士の言葉に疑問を覚えつつ、『キバ』のメダルの代わりに『アギト』のメダルを嵌めて、オースキャナーを読み込ませるオーズ。彼の足がキバのものから、アギトの金色のものに変化した。
「えぇと……何だかよく分からないけど、行くぞ！」
襲い来る戦闘員たちに対し、拳を構えて立ち向かうオーズ。第一陣を右ストレートに左アッパー、右回し蹴りに左後ろ蹴りで蹴散らすが、戦闘員たちは『イー』と掛け声を上げて何事もなかったかのように立ち上がり、再びオーズに飛び掛かってくる。
「何なんですかこいつら！　俺の攻撃が効いてないみたいなんですけど」

「そんなこと俺が知るか！」溢れた戦闘員たちを殴りつつ、士が答える。「殴る蹴るで駄目ならメダルの力だ。ケチってねぇでガンガン使え！」
「は、はは……はいっ」
オーズは士に促され、胸のオーラングサークルに力を込める。脚の部分が光輝き、オーズの右足の爪先と左足の踵から、三本角の鋭利な暗器が飛び出した。
「おおっ、何か出て来た！　よぉし」
足先と踵から飛び出した暗器を武器に、襲い掛かる戦闘員たちに再び立ち向かうオーズ。金色に輝く鋭利な刃物は、戦闘員の胴を腕を首までも、容易く裂いて地に伏せさせて行く。
戦闘不能となった戦闘員の体は泡となり、一枚のセルメダルを残して消え去っていく。彼らはアポロショッカーに作られた『屑ヤミー』の一種だったのだ。
彼らがその事に驚いたのも束の間。騒ぎを聞き付け、前の車両に乗っていた戦闘員がこちらに移って来たのだ。二人は「まだやるのか」と、敵の数の多さに溜め息を着く。
「困ったなあ、まだあんなに居るなんて……。一人一人倒してちゃ日が暮れちゃいますよ」
「だな。面倒だ、全部焼いちまえ映司。『龍騎』のメダルだ！」
「は、はい」
士に言われ、再びオーラングサークルに力を込めるオーズ。胸に灯った赤色の光が顔まで昇ると、鎧で覆われた龍騎の口が開き、その周囲に灼熱の炎が集まり始めた。
「はぁあぁーっ……、セイヤーッ！」
集束された炎を円形に纏め、戦闘員たちに放つ。彼らは瞬く間に消し炭へと変わり、目の前の扉に大穴を開けた。
「凄いですね。ライダーメダルの力ってのは」
「当たり前だ。それよりも映司。お前も何か……感じないか？」
「”何か”……そうですね。確かに」

彼らが感じていた”何か”。それは背後の車両から伝わってくる他のライダーメダルの気配であった。恐らくこの電車のような戦車は、アポロショッカーの攻撃の要であり、物資を運搬する輸送列車でもあるのだろう。

「”電王”のメダルだけじゃなく、他にもたくさん載せてるぜこいつは。不用心というか、俺たちを舐め切ってるというか……」

「メダルを載せてるということは、敵がそれを俺たちとの戦いに使う可能性だってあります。どうしますか？」

「ンなもん決まってる。先に奪い返してこっちの力にするまでだ。後に続け映司」

”そこに山があるなら”とでも言うような勢いでオーズを先導し、後方の車両に向かわんとする士。しかしそんな彼らを阻むかのように、後部車両への入口は厚い扉で封鎖され、野太くけたたましい警笛が鳴った。”ガンガンライナー”が体勢を立て直し、街を破壊すべく再び動き出したのだ。

「くそっ、もう動きだしやがったか。後藤の奴、もっと長く留めておけなかったのか」

「最初っから一瞬、って言ってたじゃないですか。あまり多くを求めるのは酷ですよ。それに……」

オーズは憤慨する士に対し、外を見てくださいと促す。電車を牽引する重武装戦車は再び宙を舞い、辺り構わず砲弾を街に撃ち込み始めていた。メダルのことは気がかりだが、蹂躙（じゅうりん）される人々をこのまま放っておく訳には行かない。オーズは士をなだめすかして納得させ、操縦者がいると思しき先頭車両へと歩を進めて行った。

※※※

「ここ……ですね」

「嫌な雰囲気が漂って居やがる。間違いないな」

一両一両が１ｋｍ程もある長い車内を進み、漸く先頭車両に辿り

着いた二人。途中残りの戦闘員が何度か襲い掛かって来たものの、今の彼らの敵ではなかった。
二人してドアを蹴破り、揺れる車内に戦車の操縦士を探す。辺り一面白黒の市松模様で、異様に奥行きのある不気味な空間であった。
部屋の奥にこの戦車を制御していると思しきコンピュータがあるが、肝心の操縦士は何処にも見当たらない。無人の自動操縦なのかと首を傾げる士たちの前に、市松模様の床下から一台のロボットがせり上がって来た。赤き四つの目をし、上半身には豊富な重火器を装備。下半身は重量感のあるキャタピラになっており、『戦車』と言うのに相応しい姿をしている。
「よくぞここまで来たな、仮面ライダーディケイドにオーズ。俺はアポロショッカー最強の戦士、怪魔ロボット・ガンガディン。この”ガンガンライナー”はアポロショッカー発地獄行き急行だ、貴様たちのな！」
「お前がこの電車の運転手か」ライダーカードを胸の前で構えて士が言う。「悪いが俺たちは途中下車させてもらうぜ、地獄にはこいつと一緒にてめぇが行って来い」
「これ以上、街の人々や建物をセルメダルなんかにさせない！」
――――変身
――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　「ＤＥＣＡＤＥ」
士がディケイドに変身すると同時に、コンピュータを守るようにして立つガンガディンに向かい駆ける二人のライダー。周囲の市松模様のせいで分かりにくいが、その距離は目算にして約二百メートル。仮面ライダーである二人にとって大した距離ではない。
あっという間に端まで辿り着き、ガンガディンを殴らんとするディケイドだったが、何の前触れもなく彼の右側から伸びた、『市松模様の壁』に跳ね飛ばされた。
「な、なんだこいつは……はっ！？」それは隣を駆けていたオーズも同じだ。彼も左側から迫り出した壁に跳ね飛ばされて宙を舞う。どういうことだと困惑する二人に、ガンガディンは笑いながら言っ

た。
「貴様らライダーを相手に、何の対策もしていない訳がなかろう。この空間は俺の思いのまま、如何様にも動かすことが出来るのだよ！　喰らえィ」
説明と同時に、ガンガディン自身の砲門から銃撃が飛ぶ。二人は飛び退き、側転でそれをかわそうとするが、迫り出す市松模様の壁に押されてそれを喰い、元の位置まで戻されてしまった。
「ちきしょう、厄介な壁だな」ディケイドはライドブッカーの刃を支えにして立ち上がる。「協力して突っ込むぞ、手伝え、映司」
「分かってます」そう言って頷くオーズに、ディケイドは『響鬼』のメダルを投げて寄越した。
「力押しで一気に行くぞ。辛いだろうが『赤のコンボ』で頼むぜ」
「大丈夫です。俺が道を開きますから、士さんは奴を」
「おう。背中は預けたぜ」

――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　「ＲＹＵ－ＫＩ」
――リュウキ！　ヒビキ！　キバ！
ディケイドは『龍騎』のカメンライドカードをドライバーに装填し、オーズはアギトとブレイドのメダルの代わりに、龍騎とキバのメダルをバックルに嵌めこむ。姿を変えて仕切り直した二人のライダーは、オーズが前衛に立って壁の妨害を挫きつつ、後衛のディケイドがガンガディンに向かって駆ける。
「役割分担したところで俺には届かぬわ、それ、それッ！」
だが、そう易々と通す程ガンガディンも無能ではない。自身の持ち得る重火器をディケイドに集中させて、一斉掃射を行って来たのだ。
「同じ手を二度も喰うかよ。こいつでどうだ！」
――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　「ＧＵＡＲＤ－ＶＥＮＴ」
ディケイドは『赤き龍の腹部』らしきものが描かれたカードをバックルに装填。同時に彼の手にそれを模した盾が装備され、ガンガ

ディンの銃撃を防ぎ切った。
　オーズが迫り来る壁を破壊し、ディケイドが敵の攻撃を防いで近付く。このままではまずいと感じたガンガディンは、彼らを押し潰さんと左右の壁を迫らせた。
「こんなものッ！　士さん、これは俺がなんとかします、行ってください！」
　しかし彼らの足は止まらない。オーズは壁と壁の間に自分の体を潜り込ませ、自慢の腕力で突っ張り棒代わりに留まった。
「よくやった、映司！　後は俺に任せな」
――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　「ＳＴＲＩＫＥ－ＶＥＮＴ」
　オーズと壁との間をすり抜け、直接ガンガディンを攻撃できる距離まで迫ったディケイドは、『ストライクベント』のカードを装填し、『ドラグクロー』を右手に構えて、強力な火炎弾を放った。
「ぬお……おっ！　熱い、熱いが……こんなもの、アポロショッカー最強の戦士・ガンガディンには通用せんわ！」
　しかし相手はライダーメダルを持ち、この戦車の操縦を任されるほどの実力者。火炎弾を浴び、外装こそ解かせたものの、完全に破壊することは出来なかった。
　攻撃は不発に終わり、隙を見せたディケイドをガンガディンの砲撃が襲う。彼は火炎弾の放たれた真正面に、ありったけの爆弾や光線を叩き込むが、ディケイドは何の反応も示さない。今の一撃で跡形もなく消え去ったかと笑うガンガディンの頭上に、無双龍・ドラグレッダーを引き連れたディケイドが現れた。
「ンなことは分かってるよ。だからとっておきで決めてやらぁ」
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　「Ｒｙｕ－Ｒｙｕ－Ｒｙｕ－ＲＹＵ－ＫＩ」
　その瞬間、ガンガディンは唐突に理解する。先の火炎弾は、自分の目を正面に釘付けにする為の目くらましだったのだ。ディケイドは自分の目と攻撃を正面に集中させ、頭上から放たれるこのキックを決める隙を作ろうとしていたのだと。

気付いた所で時遅し。ドラグレッダーの勢いを借りて放たれた『ドラゴンライダーキック』は、ガンガディンの胸を穿ち、体内のネジ一本も残さず吹き飛ばした。
同時に迫り出す壁の動きも止まり、オーズも壁と壁のサンドイッチから漸く解放された。
「俺たちが本気を出せばこんなもんよ」疲労に息を弾ませながらディケイドが言う。「思い知ったか鉄屑野郎」
「ずいぶんと息が上がってますよ。もう休んだ方が……」
「馬鹿言え」ディケイドがぶっきらぼうに言葉を返す。「この電車を止めてからだ。えぇと、どうすりゃいいんだ」
口は悪いが、ディケイドの言うことは尤もだ。操縦者であるガンガディンが破壊された今も、ガンガンライナーは空を駆け、街の中を攻撃し続けている。彼らの戦力ではこの頑強な戦車を破壊することは難しい。となれば、内部から運転を停止させ、破壊活動を止めさせるしかない。
ディケイドが何か仕掛けはないかと、操縦席のコンピュータに触れようとした、まさにその時だった。彼とオーズに目に見えない不可思議な力が掛かり、抵抗する間も無く床に押し付けたのだ。
「な、何だ、何なんだッ！」
「この感じ……まさかッ」虚を突かれて驚くディケイドと対照的に、覚えがあるのか殆ど動じないオーズ。ディケイドは「これは何だ」と彼に問うた。
「はっきりとしたことは分かりません。ただ……」
「ただ？　ただ、何だ」
「戦いは多分……終わっていな」
――そうだ、その通り！
オーズが「戦いは終わっていない」と言い掛けた瞬間、コンピュータに備え付けられたスピーカーから、酷く鼻の詰まった男の声が響き渡る。何故なんだと困惑する二人の頭上に、人の手を模した八

本のアームが現れた。
アームは各々機械の部品のようなものを手にしており、積み木を組み立てるかのように如くそれらを繋ぎ合わせ、部品がなくなれば屋根の上から取り出して組み立ててを繰り返す。暫くしてそこに立っていたのは、たった今倒した筈の怪魔ロボット・ガンガディンであった。先程スピーカーから聞こえて来た声は、彼のものだったのだ。
「お前、どうして！」ディケイドが声を荒げる。「今さっき倒された筈だろう！」
「さっき言っただろう、仮面ライダーディケイド。俺は怪魔“ロボット”のガンガディン。俺は改造人間や怪物たちとは違い、頭脳さえ無事なら、外装など何度だって作り直せるのだよ！」
ガンガディンは押し潰されて動けないでいる二人のライダーを、手に備えられた光線銃で撃ち抜くと、先程以上に嫌味な高笑いをしてこう言った。
「貴様らライダーに俺は倒せない。“電王”のメダルでガンガンライナーを操縦し、“サゴーゾ”のメダルで周囲の“重力”を操作する、このガンガディンにはな！」

第九話：「暴走特急戦車と自称最強の戦士と重量系メダル」（後書き）

◆ここのところのライダーメダル攻勢が凄まじくて、作者ですら存在を忘れかけていた『合成コアメダル』の復活です。そろそろ話にがっつり絡んでくる予定なので、今のうちに思い出してもらえればな、と。

ここ数日かなり無理をしていたので、当分はやや緩やかペースでやってきます。ほぼ日更新は出来ればやる、ってな具合で。

◆最強の戦士

「仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸ」作中に於いて、敵組織“クライシス帝国”の四大幹部が、自身の使役する怪人に対して与える称号。言葉通りに解釈すれば恐ろしいことになるが、作中ではＲＸの強さが異常な上に（しかもかなり序盤から既に使われている）、そいつが倒された後、何事もなく次の怪人にその称号を与えるため、本当に最強なのかどうかは不明。

たまーに自分でそう名乗ることもあるが、最強の戦士と名乗らなかった怪人の方がＲＸを苦しめたりするので油断ならない。

◆怪魔ロボット・ガンガディン

「ＲＸ」第四話：「光の車ライドロン」に登場した、怪魔ロボット大隊隊長・ガデゾーン配下のロボット。“改造人間”が敵の主流となっていた昭和ライダー作品としては珍しい“ロボット怪人”であり、しかもこいつは下半身が“四輪”になっているという変わり種。ＲＸと彼の常用マシン・ライドロン破壊を目的とし、街を破壊し尽くした。

怪魔ロボット、というカテゴリで言うとコイツよりも「デスガロン」や「トリプロン」の方が好きなのですが、上記で書いたとおり珍しい形状をしているのと、電車をけん引する戦車というしょうも

ないギャグを成立させるためにこいつを登板させました。撮影開始序盤のキャラだけあって、ぬいぐるみの出来が丁寧です。

第十話：「無重力と綱引きとあの男リターンズ」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、オーズの使えるメダルは――

◎ヘッド・コア：クウガ・コア、リュウキ・コア
◎アーム・コア：ブレイド・コア、ヒビキ・コア
◎レッグ・コア：キバ・コア、アギト・コア

第十話：「無重力と綱引きとあの男リターンズ」

「重量系コア……、こいつが持っていたのか、くそ……ッ！」
「不意打ちにも程があるぞてめぇ、ちきしょう……」
「ははは、潰れろ潰れろ、ぺしゃんこになってしまえーッ」
重力操作能力を持つ”サイ・ゴリラ・ゾウ”の三枚の融合メダル・『サゴーゾ』の力に、二人のライダーは成す術なく床に押し付けられ、再生ガンガディンの砲撃を喰って再び車両の奥まで追いやられてしまう。
「くうぅ……、動けない、ならッ！」
動けないが、それならそれで手の打ちようはある。オーズは『響鬼』と『龍騎』のメダルを抜いて、『剣』と『クウガ』のメダルを嵌め込んだ。
――クウガ！　ブレイド！　キバ！
「これでどうだ……喰らえ！」
オーズは頭のクウガの雷の力をブレイドの剣に集め、それを床伝いに放つ。雷はガンガンライナーの中枢コンピュータを直撃し、軽く火花を散らしたが、破壊するとまでは行かなかった。
「ぐぬ……ぬ！　下らん小細工を……。だが、その程度でやられる俺様ではないわ！」
彼の行動は悪戯にガンガディンの怒りを買うだけだった。逆上したガンガディンは市松模様の床を操作して横穴を作り、オーズを放り出さんと壁を押す。重力に押し潰され手も足も出ないオーズは、抵抗すら出来ずガンガンライナーの操縦席から叩き出されてしまった。
「うおわっ！？　く、くそぉ……落ちて、たまるかァ」
――クウガ！　ブレイド！　アギト！
オーズは叩き出された瞬間、足のメダルを『アギト』に変え、腕のブレイドソードを引き出し、足の『クロスホーンクロウ』を車両

の底に突き刺し、間一髪踏み留まった。揺れと吹き荒ぶ風に注意を払い、ゆっくりと出入口に近付いていく。
しかし、それにガンガディンが気付かない筈がない。彼はオーズがまだ健在なことを知ると、電車の行き先をセルメダルの山と化したビルに変え、出入口に手を掛けたオーズを無理矢理振り落としたのだ。
「映司、映司ーッ！」ディケイドの叫びも虚しく、オーズは降り注ぐセルメダルの雨と共に落ちていく。

――俺の手を掴め、火野ーッ！
そんな彼の手を掴み、欲望の雨の中から救い出した者がいた。ガンガンライナーの動きを一時的に止め、オーズたちの侵入に一役買った後藤だ。
後藤はオーズを抱きかかえて体勢を立て直すと、『クレーン・アーム』と『ドリル・アーム』を組み合わせ、ライナーの一両目に突き刺した。
「大丈夫か、火野」後藤が声を掛ける。「……まぁ、お前が叩き出されるぐらいだ、かなりまずい状況なんだろうな」
「えぇ。あいつ、『サゴーゾ』のメダルを持っていました。部屋の中の重力と壁を操作して、操縦席に近付けなくされてしまって……」
「重力……か」後藤は顎に指を乗せ、暫しの間思案を巡らせる。「火野、それなら俺の力で何とかなるかも知れない」
「何とかって、どうするつもりなんですか。相手は重力なんですよ」
「重力が相手なら、こっちは『無重力』を作ってやればいい。このワイヤーを伝って操縦席に戻れ。後は俺に任せろ。必ずなんとかする」
重力に対抗すべく、無重力を人の手で作る。オーズにはどういうことなのか、如何にして作るのか全く分からなかったが、後藤の自信満々な態度と言葉を信じ、彼の体から離れ、クレーン・アームのワイヤーを握った。

「士さんの体力もそろそろ限界ですし、お願いします」
「あぁ、任せろ」
オーズは後藤の言葉に頷き返すと、ワイヤーを伝って重力負荷の強い操縦席に舞い戻った。

「よぉ、戻ったか」床に突っ伏し、息も絶え絶えのディケイドが言う。「どこで油売ってたんだ、えぇ？　こちとら振り落とされねぇよう踏ん張るので精一杯だったってのによ」
「すみません。ならついでに、もう少しだけ踏ん張って貰えませんか？　この重力、外の後藤さんがなんとかしてくれるらしいので」
「何、あの後藤がか」信じられないと言いたげな顔でディケイドが聞き返す。「重力をどうやって無くすってんだよ」
「それは耐えてみてからのお楽しみですよ。もうひと踏ん張り、頑張りましょう」
「病人に無茶言うぜ。分かったよ」
後藤のことを信用しているわけではないが、一切攻め手がない今、可能性があるならそれに賭ける他無い。　ディケイドは重力負荷に苦しめられながらもゆっくりと立ち上がり、ライドブッカーからカードを抜いてドライバーに差し込む。
――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＨＩ－ＢＩ－ＫＩ」
――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「ＯＮＧＥＫＩＢＯＵ－ＲＥＫＫＡ」
彼が装填したのは『響鬼』のカード。青白い炎に包まれ、紫の鬼の姿となったディケイドは、一対の撥を構えて市松模様の床を思い切り叩いた。
音撃の波動は床を伝って操縦席のコンピュータに届き、機能を歪みを生じさせた。
「今だ映司、やれ！」
「はい！」
――クウガ！　ヒビキ！　アギト！
生じた隙を逃さず、オーズはディケイドの声に合わせ腕に『響鬼』

のメダルを嵌め込んでスキャン。彼と同じ一対の撥を手にしたオーズは、音撃で敵の行動を狂わせつつ、不安定な重力に逆らって壁に沿い、一歩一歩確実にコンピュータの元へと進んで行く。
「おの、おの、おのれ。まだ抵抗するのか、しつこいぞ！」
重力負荷をものともせず進むオーズと、弱っても尚歯向かうディケイドに業を煮やしたガンガディンは、彼に向けて市松模様の壁を放った。
壁は、接近に気付いて顔を上げたディケイドの左こめかみに直撃し、彼を入口まで引きずって叩き付けた。
「どうだ仮面ライダー、最早立ってはいられまい！」
「……面白ェ、こっからは俺とお前の根比べだ。せいぜい楽しもうぜ、なぁ！」
「アポロショッカー最強の戦士をここまで愚弄するとは……、貴様だけは絶対に許せん！」
ディケイドの一言で完全に逆上したガンガディンは、彼のこめかみだけを狙って壁を伸ばして叩き付ける。普通なら卒倒しかねない一撃を何度喰いながらも、ディケイドは床を叩くことを止めなかった。
そうこうしているうちにオーズが操縦席の目と鼻の先まで近付いてきた。撥がコンピュータに触れんとしたまさにその時。ガンガディンは重力ではなく床を操作して坂を作り、彼の行く手を遮った。
只でさえ無理をして前に進んでいたオーズに傾斜の付いた坂を越せる訳もなく、重力に従って入口まで転げ落ちてしまう。
「くそぉ、後少しだったのに……！」
「そう簡単に通す訳が無いだろう。ぶっ潰れろ、ライダー共ォ！」
ライダーたちが入口に戻されたのを見、ガンガディンは今まで以上に密度の高い壁を放って、二人を再び押し潰す。高密度の壁に押され、二人の骨が音を立てて軋み始めた。
「まだだ……まだ、やれる！」
辛うじて壁から右腕だけ脱け出したオーズは、両足を突っ張り棒

代わりにして押し留め、メダルを取り出して手に取る。しかし、オーズが『剣』のメダルを手にした瞬間、電車は方向転換の為に大きく揺れ、彼の持っていたメダルを弾き飛ばしてしまった。
オーズの手を離れ、床の上を転がる剣のメダルは、密度の高い壁を作るために生じた隙間に入り込み、そのまま街の中に落下してしまう。
「そんな……、メダルが、メダルがッ」
「ふはははは、残念だったなオーズ！　最早何をしても無駄だ！　潰れてしまえーッ！」
二人を確実に仕留めるべく、今以上に壁に圧を掛けるガンガディン。足を突っ張り棒にしても耐え切れなくなり、彼らに絶体絶命の危機が迫る。
無重力を作ると豪語していた後藤は、一体外で何をしているのだろうか。

※※※

「くそ、くそぉ！　駄目なのか、一人だけでは、駄目……なのかッ」
オーズとディケイドが壁に押し潰されて窮地に立たされているのと時を同じくし、仮面ライダーバース――後藤慎太郎は、クレーン・アームで電車の引き上げるべく尽力していた。一旦空まで持ち上げた上で地表に向けて全力で加速し、人工的に無重力を作ろうと言うのだ。
しかし方向を反らすならまだしも、車両の一つ一つが１ｋｍ近くある、十両編成の電車を持ち上げるのに、後藤一人では無理があり過ぎた。『セル・バースト』で『カッター・ウイング』の推進力を全開まで高めても、上まで押し上げるのは無理があった。
悪いことはもう一つある。推進力強化に注ぎ込んで来たセルメダルが底を尽いてしまったのだ。中の様子は一両目の隙間から見て取れる。今からセルを補給している時間はない。

カッター・ウイングの推力が落ち、バースの高度が徐々に下がって行く。セルを消費し尽くし、電車を引っ張るだけの力がなくなってしまったのだ。

どうにかする、と言っておきながらこれは何だ。後藤は自身の不甲斐なさに歯噛みして頭を垂れるが、同時に彼は、電車がまだ“下がりきっていない”ことに気付く。どういうことだと辺りを見回す彼の目に、大型のメダルタンクを背負い、自分と異なる“目に緑色のライン”の入ったバースが映った。

「おいおい、何弱気になっちゃってんの後藤ちゃん。らしくないぜ」向かいで後藤と同じく電車を引くバースが話しかけて来た。その勇ましく、どこか軽い声に聴きおぼえがあったのか、後藤は目を見開いて声を上げた。

「その声……伊達さんですか？　どうしてここに！」

「ぴんぽん。帰ってきた伊達明（だてあきら）、リターンズ、ってとこか」

『伊達明』。仮面ライダーバースの初代装着者にして、後藤にとっては師のような男だ。嘗ての戦いの後、医療チームに戻って世界を回っていた筈の彼が、何故こんな所にいるのか。伊達はふふんと鼻を鳴らしてその問いに答える。

「いやね、会長からまた“お仕事”を頼まれちゃってさぁ。まぁ、日本だってこんな状態になってるんだし、ほっとけないでしょ」

「お仕事……って」後藤は彼の変わらなさに苦笑した。「それよりその機体、バースの『プロトタイプ』ですよね。何故ドリル・アームとカッター・ウイングを装備しているんです」

「古いねぇ後藤ちゃん、古い古い」伊達は人差し指を振って答える。「ずぅっとプロトタイプのままにしておく訳ないでしょうよ。今のこいつは“伊達明・専用機”。武器は全部使えるし、出力は通常の三倍だぜ三倍」

自分たちがいなくなった間に、そんなことまでしていたのか。後藤は鴻上の準備の良さに驚くが、今自分がすべきことを思い出し、伊達に指示を飛ばす。

「説明は後でします。こいつをなるべく高く空まで引いて、その上で勢い良く急降下してください。……出来ますか？」
「誰に物言ってんの後藤ちゃん」伊達は自信ありげに鼻を鳴らした。
「そんじゃ、頼むぜ。ゴリラちゃん」
伊達の声に従い、メダルタンクの中から『ゴリラ』のカンドロイドが飛び出した。カンドロイドは素早く回転する腕でタンク内のメダルを投てきし、後藤の持つボックスをセルメダルで満たして行く。
「伊達さん、ありがとうございます」
「説明もお礼も後、後。さっ、とっととやっちまおうぜ」
「はい！」
後藤は再びセルメダルをバースドライバーに補給し、ウイングの推力を高めて上昇する。
二人のバースの力が加わったからか、電車は徐々にレールから浮き上がり、空に向かって昇って行く。
「おぅ、おぉ……！ベルトが熱いぜ後藤ちゃん！　これヤバいんじゃないのぉ！？」
「我慢してください伊達さん、辛いのは火野たちだって一緒なんですから！」
「あぁ、もう。そう言われると弱音吐きにくくなるじゃないの、しゃあねぇなぁ！」
口ではそう言うが、彼の仕事は確かなものだ。本人曰く“通常の三倍の出力”は伊達ではなく、後藤一人では角度を変えるのが精一杯だった車体が、ぐんぐんと上がって行く。
「よぉし、昇って来たぜぇ後藤ちゃん。そろそろ落とすか？」
「待ってください、後少し、もう少し高くまで……」
――誰だ貴様ら！　この戦車を何処に連れて行こうとしている！？
もう良いだろうと言う伊達に対し、後藤は出来る限り高く昇ると答えるが、自分の意志とは関係のない不自然な上昇にガンガディンが気付いたらしく、彼らにライナーの砲口が向いた。あれを受けて

しまえば、いくらバースと言えどひとたまりもない。後藤は後のことをオーズ達に任せる決意を固めた。
「伊達さん、今ですッ」
「おうッ、待ってたぜぇ、その言葉！」
後藤の掛け声に合わせ、車体に突き刺したドリルを引き抜き、クレーンを巻き取る。レールを離れ、雲の上にまで行き掛けていた電車は推進力を無くし、地球の重力に従って真っ逆さまに落ちて行った。

※※※

「なな、な！　これはどうしたことだ！？　何故だ、何故重力がはたらかない！？」
電車が自由落下を始めたことで、車内の物体は重力のくびきから解放され、無重力状態に突入する。“この場の重力を操作する”ガンガディンの能力は無力化され、同時にオーズたちを押し潰さんとしていた高密度の壁が、ゆっくりと操縦席の方へと戻って行く。
「これは……後藤の奴が、やったのか？」
「ですね。さぁ、士さん、早く！」
「お、おぉ……やってやる！」
二人は纏わり付く壁を蹴り飛ばすと、ディケイドは『ファイナルアタックライド』のカードをドライバーに装填しつつ、思い切りしゃがんで力を溜め、オーズは彼の腰を両手で掴んで勢いを付ける。
「行くぞ映司！」
「お願いします！　行きますよ！」
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　「Ｄｅ－Ｄｅ－Ｄｅ－ＤＥＣＡＤＥ」
オーズはディケイドが床を跳ねて飛ぶ瞬間に合わせ、彼を操縦席のコンピュータまで投げ付ける。
投げられて勢い付き、数枚のカードを潜り抜けたディケイドは、

行く手を阻む壁ごと操縦席のコンピュータを蹴り砕いた。
「よぉし、よしよし、よっし！　取ったぜ灰色のと……『電王』のメダルだ！」
　体力の限界を迎え、自身の意思と関係なく変身を解除してしまうが、中に埋まっていたメダルは奪い返した。ガンガディンが重力を操るのに使っていたサゴーゾのメダルと、この電車を構成するのに用いていた「電王」のメダルだ。
「やりましたね士さん、さぁ、急いでここを出ましょう」
「出ろってお前、この電車の中にゃあ他のライダーメダルが積まれてるんだぞ、探さないでどうするんだ！」
「周りを見てくださいよ、早くここから脱け出さなきゃ、二人共ぺしゃんこですって！」
　二人が話している間にも、電車の落下速度はぐんぐんと早まっている。メダルは惜しいが、命には代えられない。士は今ディケイドに変身出来ないのだ。オーズは弾みを付けて操縦席に跳ぶと、嫌がる士を羽交い締めにした。
「ほらっ、早く行きますよ。暴れないでください」
「何をする、離せ映司、離せーッ！」
「命あっての物種でしょう、落ち着いて！」
「おい馬鹿やめろ、変な所触るなって、あ、あぁっ！」
　だが、それがいけなかった。暴れる士を無理矢理抑え付けようとした結果、士は手にしていたメダルのうち一枚を車両の下に落としてしまったのだ。
「馬鹿野郎、何やってんだよ！　拾え、拾えよ阿呆」
「もう無理ですって。逃げましょう、さぁ、早く！」
――クウガ！　ヒビキ！　キバ！
　オーズは士に頭突きを喰らわせて気を失わせると、『アギト』のメダルを『キバ』に変え、市松模様の壁を突き破って飛び去った。
――あ、アポロショッカーに栄光お……おあぁ、あぁ！

落下したガンガンライナーが地表に激突する。十両編成の輸送車両は粉々に砕け、貨物として積まれていたライダーメダルを巻き込んで、街にセルメダルの雨を降らせた。

※※※

「アポロガイスト様、アポロガイスト様ーッ」
オーズたちがガンガンライナーを撃破したのと時を同じくし、都内某所のとある場所では、ツタンカーメンのマスクにライオンの顔を付けた不気味な怪人が『アポロガイスト』の名を呼んで建物の中を走り回っていた。
彼は『大浴場』と書かれた看板の掛かった部屋にアポロガイストの気配を感じ、失礼しますと一声掛けて、浴場に足を踏み入れた。
「何なのだデッドライオン」アポロガイストは白い小魚がたっぷりと浮いた浴槽の中から出ることなく、彼の方へと向き直る。「入浴の邪魔をする程の事か」
「はっ、大変申し上げ難いのですが……」デッドライオンは一拍置いて答える「ガンガンライナーが……、ディケイドたちに撃墜されました」
「何だと!?」アポロガイストは驚きのあまり、小魚たちを派手に散らして浴槽から上がった。「馬鹿な、ディケイドの奴が、あれを堕としたと言うのか、あれはライダー一人に破壊出来るような代物ではない。一体どういうことなのだ」
「恐れながら申し上げます、アポロガイスト様」デッドライオンが遠慮がちな態度で言う。「ライナー撃墜に参加したのはディケイドだけではありませぬ。奴にしぶとくもまだ生き残っていた“バース”とか言う鉄屑二機、それに『オーズ』だとか言う名前の、得体の知れないライダーが一人……。あぁ、しかし、ご安心くださいませ！　残りの幹部が、許しさえ頂ければこのデッドライオンめが、奴

らを抹殺致しますゆえ」
　アポロガイストは浴槽の中を泳ぐ白い小魚たちが、熱さで湯で上がる程の怒りを露わにし、片膝を立てて座るデッドライオンに風呂桶を投げ付けた。
「オーズ、オーズだと！？　何故“奴”がこの世界に居ると私に伝えなかったのだ、デッドライオン！」
「もも、申し訳ございません。ディケイドの協力者がオーズなるライダーだと知ったのは、つい先ほどのことでしたので……」
「えぇい、言い訳なぞ聞きたくないわ。となれば、奴らの元にライダーメダルを残しておくのは危険だな。ガンガンライナーを堕とす程となれば、かなり多くのメダルを所有しているに違いない……」
　顔に焦りの色を浮かべ、一人でぶつぶつと思案するアポロガイスト。デッドライオンは全裸のアポロガイストにバスタオルを手渡しつつ、「どうなさるおつもりですか」と彼に問う。
「そんなもの決まっておるわ」バスタオルを受け取って腰に巻きつつ、アポロガイストが答える。「奴らのメダルを総取りするのだ。これ以上奴らの好きにさせておく訳にはいかん。所でデッドライオン。ガンガンライナーには『電王』のメダル以外にも、“二枚”のメダルを積んでいた……筈だな？」
「は、ははッ。アポロガイスト様に献上すべく、光のオーロラを超えて……」
「そうか、なら良い。それがこのたびの撃墜で街の何処かに散った……と」
　アポロガイストはそう言って、不機嫌そうな顔をしてデッドライオンの方を見る。彼はまた叱りを喰うのではと身構えるが、彼の思惑は外れ、アポロガイストはいきなり大声で笑い始めた。
「面白い、実に面白いぞデッドライオン。作戦は決まった、奴らを罠に嵌めるのだ。その上で奴らの協力者と、ライダーを信じる奴らに“現実”を見せつけてやるのだ。さぁ行けィデッドライオン。“あのメダル”を使うことを許可する。ディケイドと仮面ライダーオ

ーズを完膚なきまでに叩きのめすのだ！」
「はっ、ははァ！」
デッドライオンはそう言うと、風呂桶をアポロガイストに手渡して、足早に浴場を去って行く。アポロガイストは腰に巻いたタオルをタオル掛けに戻して、再び湯の中に体を埋めた。
「予想外だった……が、“計画”の成就の為にはむしろ良かったかも知れぬ。せいぜい今のうちに勝利の美酒に酔っているがいい、仮面ライダー共。最後に笑うのはこの私、アポロガイストだと言うことを思い知らせてやるのだ」
アポロガイストは手にした“緑と黒の”メダルを握り締めて、浴場の外にも聞こえそうな声で笑った。

第十話：「無重力と綱引きとあの男リターンズ」（後書き）

◆電車をけん引する戦車戦完結です。本当は二話分くらいで完結させたかったのですが、少しゆったりやって行きたかったので三回に分けました。ってか途中で遅延しちゃってすみません。

◆伊達さん登場です。現時点で一番書きにくいキャラクタはぶっちぎりで映司なのですが、伊達さんは伊達さんで、どこまで砕けたキャラクタにしていいのか悩んで迷って書いてます。若者ではないし、かといってオッサンオッサンしているわけでもないし。

◆本当は途中で“泉信吾”が装着した量産型バースが登場する予定だったのですが、色々な都合でカットしました。彼は途中で出せるのか否か。

◆順調に行けば今回か次回で全体の半分まで行くんじゃないかな……と。

第十一話：「反撃の狼煙とメダル捜索とアポロの罠」　（前書き）

オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー！　前回までの三つの出来事！

一つ！　アポロショッカーの幹部怪人・ドラゴンオルフェノクから『龍騎』のメダルを奪い、比奈から『響鬼』のメダルを受け取ったオーズは、『赤のコンボ』に変身し、ドラゴンオルフェノクを撃破！

二つ！　アポロガイストはそんな彼らを始末すべく、巨大な戦車兼電車・『ガンガンライナー』をオーズたちに差し向ける！

三つ！　後藤と伊達の協力を得たオーズとディケイドはガンガンライナーを破壊し、”サゴーゾ”のメダルを奪い返した！

第十一話：「反撃の狼煙とメダル捜索とアポロの罠」

※※※

仮面ライダーたちがアポロショッカーの輸送列車・ガンガンライナーを破壊してから数時間後。体勢を立て直しの為クスクシエに戻った映司たちは、次の戦いに備えて休息を取りつつ、敵から奪取した『サゴーゾ』のメダルの力を確かめていた。

「うわ……あぁッ！　また駄目、かぁ……」

ライダーメダルと共にドライバーに嵌め込んで読み込ませてみるが、スキャンしようとするとひとりでにドライバーから飛び出して、変身に使うことは出来なかった。

「映司くん、大丈夫ですか！？」比奈が不安気な顔で言う。「敵がいつ攻めて来るか分からないんですし、今くらいゆっくり休まなくちゃ」

「ありがとう。でも、じっとしていられないんだ。もう一回、別の組み合わせを……」

「もういい。やめたまえ火野君」手を大仰に叩いて鴻上が言う。「形は変わっても、コアメダル三枚分であることに変わりはない。無理に使役すればドライバー自体が使い物にならなくなってしまうぞ」

「鴻上さん。ですけど……」

「はやる気持ちは分かる。先の戦いでメダルを奪取出来ず、その上一枚落としてしまったのだからね。しかし、君も門矢君も連戦で疲れている。こんな状態で敵と交戦でもしたら、一枚どころか根こそぎ奪われるかもしれないよ。悪いことは言わない、休息を取りたまえ、火野君」

「……はい」

映司は彼の言葉に頷くと、ドライバーを机に置いて腰を下ろす。

優雅にティータイムを楽しむ、黒スーツに眼鏡をかけた人形が、嘲笑うような目付きで、棚の上から映司を見ていた。
「やっぱり、使えるのはライダーメダルだけ、か」
映司はドライバーからメダルを外し、ポケットの中に入れたものを合わせて手のひらの上に集めた。
クウガ、響鬼、龍騎、キバ、アギト。あの戦いで落とした『電王』と『剣』のメダルに、ライナーの中に積まれていたとされる二枚のメダル。敵の幹部二人を下し、メダルにされたとされる九枚のライダーメダルのうち半分近くを所有しているが、甲殻類メダルとサゴーゾ以外の合成コアメダルは見付からず、自分たちが休んでいる間にも、日本の主要都市は着々とセルメダルの山に変えられ続けている。戦況は未だアポロショッカー陣営に傾いているのだ。
こんな相手に勝つことなんて出来るのか。映司の心を焦燥と恐怖が駆け巡る。重苦しい表情で床を見つめる映司に、鴻上は「先刻面白い情報が入ったんだ」と彼に話し掛けた。
「君たちが落としたガンガンライナーの残骸を、我が財団で回収・調査していたのだが、その中にこんなものが積まれていてね。……現在も調査中なので、写真しか見せられないのだが」
鴻上は一枚の写真を取り出し、映司たちに見せる。車のボンネットの中に詰まった機械類のような物が彼の目に映った。乗用車一台分程の大きさだが、墜落のショックで酷く歪んでおり、そのまま使うには適さないだろう。
「これが……どうしたんですか？」写真だけではこの機械の価値は見出せず、首を傾げて問い掛ける映司。鴻上は当然だろうねと言って、そこにもう一言付け加えた。
「これはね火野君、“人や物をセルメダルに変える”装置だ。アポロショッカーが日本を瞬く間にセルメダルに出来た理由がこれだよ。圧倒的な力と機動力を併せ持ったガンガンライナーに、この装置を組み込んで、手間暇を掛けずに侵略を進めたのだろう。恐ろしい事だが」

「人や物を、セルメダルに変換する装置……」映司は少し考えた後、何かに気付いて声を上げる。「ちょっと待ってください、それが俺たちの手にあるということは」
「そう、良いところに気が付いたね！　仮面ライダーをメダルにするような代物だ。上手く使えば逆に奴らをメダルにすることだって出来るかも知れないのだよ、火野君！」
鴻上の言う通り、敵全てをメダルにしてしまえば、奴らにだってどうすることも出来はしない。終わりの見えない闘いに、微かな希望の光が見えてきた。
「解析は時間の問題さ。もう少し待ちたまえ」
「はい、ありがとうございます！」

――――そう都合良く行くもんかね。にわかにゃ信じられねーなぁ。
対策を得て気持ちが浮わつく映司に対し、二階から降りてきた士が声を掛けてきた。
「あぁ、士さん。体の方は大丈夫なんですか？」
「大丈夫だよ、大したことはねぇ。休みさえ取りゃあどぉってことは……」
得意気にそう語る士だが、そんな彼の頭を掴んで押さえ付ける者がいた。同じく二階で士の治療を行っていた伊達だ。
「何が大丈夫だ、痩せ我慢しやがって。火野の目は誤魔化せても医者の目は誤魔化せねぇぞ、もやしちゃんよ」
「誰がもやしだ誰が！　俺は士だ、門矢士！」
「何が間違ってんだ、”もん”に”や”ーに、しーだろ、しー」
「”し”じゃねぇ、”つかさ”だ、士！　何度言えば分かるんだよ！」
「それだけ騒げれば、もう大丈夫ですね」端から見れば漫才のようなやり取りに、映司の顔から笑みが溢れる。「それで、何が信じられないんです？」
「考えてもみろよ」両手を振って士が答える。「まずそこがおかし

い。そんなとんてもねぇもんを、これだけ時間が経って、取り戻しに来ないってのはどういうことだ。裏があるに決まってる」
「そりゃあそうですけど……、俺たちが居ることが奴らに知れた訳ですし、メダルを取り返すので必死なんじゃないですか？」
「なら、いいがな。だったらとっととメダルを探しに行こうぜ、映司」
「いやな、お前こそ何を言ってんだ」伊達が口を挟む。「戦ってなきゃそうやって軽口が叩けるかも知れないがよ、お前は明らかに弱ってる。これ以上奴らとやり合うのはやめろ。死にたいのか」
「大丈夫だって言ってるだろ、何度も何度も言わせンな」
「しょうがねぇな……もう。勝手にしやがれ、勝手に」
「あぁ、勝手にさせてもらうぜ。行こうぜ、映司」
士は映司の手を引いてクスクシエを出ようとするが、入口の前で里中に止められた。
「火野さん。動くにはまだ早いですよ」
「早いって何だ。動き出すのに早いも遅いもねぇだろう」
「そうじゃありません。街に大量のカンドロイドを飛ばしました。メダルをお探しなら、タカがこちらに戻ってくるまでお待ちください」
「ンな悠長なこと言ってられるかよ」士が苛立った様子で言い返す。
「メダルを狙ってるのは俺たちだけじゃねぇんだぜ」
「ですが。敵が行き交う街の中で、探す当てもないのに、どうやって見付けるおつもりですか？　まず、無理だと思いますけれど」
「あぁ言えばこう言う。こう言えばあぁ言う……って、映司の時にも言ったなこいつは。この世界の人間はやりにくくてしようがねぇ！」
何を言っても一歩も退かない里中に対し、思い切り頭を掻いて苛立ちを露わにする士。彼が窓の外に不可思議な赤い鳥を見込んだのはその時だ。あれは何だと目を丸くする士に対し、隣に立つ映司は『タカだ』と口にする。ばらばらのものが士の中で一つにまとまっ

た。
「成程、あれが”タカ”か。あいつを追ってけばいいんだな。行くぞ映司、残りのメダルを全部見付けだしてやるんだ」
「あぁっ、ちょっと待ってくださいよ、士さん！」
伊達のあの話を聞いておいて、士を一人にしておける訳がない。映司は里中たちに一礼をして、そそくさとクスクシエを出て行った。

※※※

タカ・カンドロイドに連れられて、映司と士がやって来たのは、市街地を抜けた先にある、潮風香る波止場。アポロショッカーに撃ち落とされたと思しき船を、海鳥たちが止まり木代わりに使っている。
「おいおい、どこまで連れて行こうってんだ。街抜けて港まで出ちまったぞ」
「こんなところに、メダルが落ちてるんでしょうか……」
電車が墜落した場所から、遠く離れた場所にある波止場。メダルの雨はかなり広い範囲に降り注いだが、こんな場所まで落ちるものだろうか。首を傾げて辺りを見回す二人の前に、彼らを先導したカンドロイドが再び現れた。
タカ・カンドロイドは嘴（クチバシ）で海を差し、その場でくるくると回る。探し物はこの先にあるようだ。
「おいおい、空の次は海の底かよ。どうしろってんだ、こりゃあ」
「潜って探す……と言うよりも、あれを借りるしか、なさそうですね」
映司はそう言って、波止場に止まった小さな船を指差す。
「船か。投網でメダルを採れってか。採れる位置に浮かんでりゃあいいが」
「導線を繋げば動かせそうですけど……、士さん、操縦出来ます？」
「俺に苦手なものは無い。写真を撮ること以外は、な」

「そうですか。じゃあお願いを……」

「こりゃこりゃ。誰もおらんからって、船を盗んじゃいかんぞ、若人よ」

導線を繋いで強引にエンジンを掛け、いざ出発しようとしたその時。隣に停まっていた船から白い顎髭をたくわえた老人が顔を出して、二人の男を呼び止める。

映司は申し訳なさそうに船の計器類から手を離し、士は「文句があるか」と老人に詰め寄った。

「この国がどうなるかって瀬戸際だせ。船の一艘や二艘、大目に見ろよ」

「あかんあかん。……と、言いたいところじゃが、えぇじゃろ。お主たち、こっちに来い。わしの船に乗せてやる」

「えぇっ、いいんですか？」映司が驚いて声を上げる。「でも、漁が出来なくなったら困るんじゃ」

「アポロなんたらちゅう奴らが蔓延(はびこ)ってちゃ商売上がったりじゃからな。構わんて」

「そう、ですか。助かります」

映司は丁寧にお辞儀をし、士はそれに便乗して老人の船に飛び乗る。

船は何事もなく波止場を出たが、彼らは老人の足下が水に入ってもいないのに、異様に濡れているのと、彼が士たちから見えない角度でにやりと笑っていることに気付かなかった。

※※※

「こちら、伊達。夢盛地区にてアルファベットの”T”みたいな絵柄のメダルを発見しました、どうぞー？」

「――了解。こちらも青色のメダルを取得しました。どうぞ」

映司たちが船に乗って沖に出たのと時を同じくし、伊達と比奈が

街の北に、里中と後藤が南へ、ライダーメダルを探してタカ・カンドロイドを追っていた。
　どちらの組もメダルを見付け、バッタ・カンドロイドで連絡を取り合っている。
「思ったより簡単でしたね」伊達の隣で比奈が言う。「映司くんたちもさくっと見付けているといいんですけど」
「火野たち……ね」伊達は訝しげに答える。「あのタカちゃん、どうもウソ臭ェんだよなぁ。俺たちは大勢タカを飛ばしたんだぜ。ここにも沢山タカちゃんが飛んでる。なのに、奴らの所には一羽しか来なかった。こりゃあ何かあるぜ」
「何か……って、罠だって言うんですか？　しかし、何のために」
「さぁね。火野たちが何処に行ったか、皆目見当が付かない以上は……」伊達は後ろ手で後頭部を掻きつつ、手のひらのカンドロイドに声を掛ける。「つぅわけだ。取り敢えず一旦合流しようぜ、後藤ちゃん」
「――分かりました。夢盛地区、でしたね……あ、あぁっ！」
「おい、どうした後藤ちゃん。返事をしろ、後藤ちゃん！」
　電話口の後藤の声が何の前触れもなく突然消えた。伊達は何度も後藤の名を呼ぶが、返ってくるのは電話の発信音ばかり。何がどうなってるんだと焦る二人だが、ややあってカンドロイドに着信が入る。
　伊達は後藤のものかと思い声を荒げるが、そこから聴こえてきたのは、彼のものとは程遠い不気味な声だった。
「――夢盛地区だな。教えてくれてどうもありがとう」
「何、誰だお前は！？　後藤ちゃんと里中ちゃんに何をしたんだ、答えろ、答えろ！」
　伊達の問いに、電話口の人物は何も答えない。二人の間にも緊張が走る。
「だ、伊達さん……今のって、どういうこと、なんでしょうか……」
「俺にも分からん。奴ら、後藤ちゃんたちに一体何を……」

敵は何をしたいのかと腕を組んで思案を巡らせる伊達。彼と向かい合う比奈の表情が変わったのはその時だ。伊達の背後を指差してただただ震えている。
「おい、比奈ちゃん。一体全体どうした……って」伊達はどうしたのかと振り向いて、彼女の指差す方に目を向ける。
彼が覚えていたのはそこまでだった。飛び掛かって来たツタンカーメンマスクのライオンに腹を叩かれ、意識を失ってしまったからだ。
「我々がメダルを必死に探す必要などない。こうして貴様らから奪えば良いのだからな！」
ライオンは嬉々とした表情で比奈の意識を奪うと、二人を担いで何処へと去って行った。

※※※

波止場から船を出して二十分程が経過した。船は波止場を遠く離れ、青い海以外何も見えない沖合いに出たが、彼らを先導するタカ・カンドロイドは止まらない。陸から離れれば離れる程、士たちの心に苛立ちが生じ、ある種の懸念を抱かせる。
「なぁ、映司」落ち着かない様子で士が言う。「自分の非を認めちまうようで癪だから、今まで言わなかったんだが……、ひょっとして俺たちゃ、あのタカにハメられたんじゃないか？」
「そんな馬鹿な、里中さんが飛ばしたタカですよ。カンドロイドは持ち主の命令に従って動くんですよ、俺たちを裏切る筈がありませんって」
「だと、いいがな」訝しげに水平線を見つめ、士はぼそりと呟いた。
映司にしても、懸念がないわけではなかった。ガンガンライナーの爆発で、メダルはかなり広範囲に吹き飛んだ。それは分かっている。しかし、こんな海の真っただ中にまで飛んで行くだろうか。士

の言う通り、自分たちは何かしらの”罠”に掛けられているのではないか。不安は疑念を呼び、彼も徐々に気が気ではなくなって行く。
そしてその疑惑は確信へと変わる。映司たちを乗せた船が、タカの進路とは関係なく突然停止してしまったのだ。
「おい、おやじ。何故止めた！　タカの野郎はまだ進んでいるぞ。見失っちまうじゃねぇか」
「へへへ、すいやせん。へへへ……」
老人は士の言葉に頷いて笑うばかりで、何も答えようとしない。老人の態度に腹を立てた士は、怒りに任せ彼の頬を殴り付けた。
「どうだ、これで話す気に……にッ！？」
その拳は確かに老人の頬を殴り付けた筈だった。しかし、士の手に人を殴った感触はない。あるとすればそれは、水の中に手を突っ込んだ感覚だけだ。
改めて老人の顔を見る。彼の顔の皮は剥がれ、床に落ちていた。どういうことだと驚き戸惑う士に対し、老人だった者は、彼の右拳を取り込んで、先程までとは違う、若々しい声で笑った。
「まんまと、まんまと罠に嵌ったな、仮面ライダーディケイド！それにオーズ！　貴様たちの命は今尽きた！　アポロショッカー幹部が一人”ギリザメス”。もとい……今は”ギリザメ・シャウタス”様の手によってな！」

第十一話：「反撃の狼煙とメダル捜索とアポロの罠」　（後書き）

◆順調にいけば次回か今回で折り返しでしょうか。もうちょい色々ごちゃごちゃするかと思いますが、もうしばらくお付き合いくださいませ。

第十二話：「怪奇液体ノコギリザメと起死回生の一発と黄色のメダル」（前書

カウント・ザ・メダルズ！　現在、オーズの使えるメダルは――

◎ヘッド：クウガ・コア、リュウキ・コア
◎アーム：ヒビキ・コア
◎レッグ：キバ・コア、アギト・コア

第十二話：「怪奇液体ノコギリザメと起死回生の一発と黄色のメダル」

鋭く尖った鼻先の錐に両腕で鈍い輝きを放つ鋸。眼前に広がる海原のように青く透き通った体表。それがかの老人の皮を被り、士たちを罠に嵌めた怪人・ギリザメシャウタスの正体だった。

「罠……だと？」怪人に腕を捻られつつ士が言う。「俺たちを海に連れ込んで何がしたいんだ」

「ガァブ、ガブ、ガブ……」怪人・ギリザメシャウタスが不気味に笑う。「冥土の土産に教えてやろう。お前たちを先導したあのタカ、あれは俺がそうするよう言って離したものだ。自分たちも使えるようになって失念していたようだが、カンドロイドの使用権は依然として我々にある。お前たち仮面ライダーを誘き出して街から遠ざけるのが俺の任務。今ごろ貴様たちの仲間も我々の別動隊が押さえていることだろう。諦めるのだな！」

「長々と話しておいてそれがオチか？　拍子抜けだな！」士が声を荒げて言い返す。「海に閉じ込めて得意気らしいが、当てが外れたな。俺たちゃ空も飛べるんだぜ。こっから逃げることなんか造作もねぇんだよ」

「馬鹿が、そうさせないために俺がいることを忘れたか！　お前たちを自慢の鋸で切り刻んで、魚の餌にしてやるわ！」

「そうは行くかよ、やれ！　映司」

「はい！」

――リュウキ！　ヒビキ！　アギト！

――スキャニングチャージ！

映司は士の掛け声に応じてオーズに変身。同時に三枚のメダルをスキャンしつつ飛び上がった。

彼の背から炎が噴き出し、その勢いを借りてギリザメシャウタスに跳び蹴りを見舞う。勢いは十分、外しようのない距離での一発だ。喰って無事で済むわけがない。

「セイ……ヤー、あぁ、ああっ！？」
オーズの蹴りは確かに怪人を貫いた筈だった。しかし、機械の体を蹴り砕いたと感触がない。ギリザメシャウタスの体は寒天やゼリーのように柔らかいのだ。オーズは怪人を仕留めることができないばかりか、彼のゼリー状の体に取り込まれ、勢いを殺され放り出されてしまった。
「無駄だ無駄だ。このギリザメシャウタス様にライダーキックなど無駄、無駄！」
「ギリザメ……シャウタス？」彼の名前に何かを思い出したオーズは、はっと目を見開く。「お前、まさか！」
「ガァブ、ガブガブ。その通り。俺は”シャウタ”というメダルをこの身に取り込んでいる。メダルの力で流体多結晶合金（りゅうたたけっしょうごうきん）――”液体金属”となった俺の体には、ライダーキックは元より、一切の拳も蹴りも効きはしないのだ！　くたばれィ！」
ギリザメシャウタスは鋭利な鋸が付いた頭だけ残して液状化し、船の上を跳ねながらオーズに襲い掛かる。オーズは反撃しようと手を出すが、液体金属の体の前には何の意味もなく、敵の鼻に付いた鋸で体に穴を開けられてばかりであった。
「く……そぉ、だったら、これはどうだ！」
――クウガ！　ヒビキ！　アギト！
オーズは頭のコアを『クウガ』に変えて背中の撥を抜き、襲い来るギリザメシャウタスに対し、敢えて無防備のまま立ちはだかる。オーズの狙いは、攻撃の際奴が唯一液状化させていない”頭部”。
誘いに乗ったギリザメシャウタスがオーズの腹を貫かんとするその瞬間、オーズは半身を退いて、手にした撥で、奴の鼻を挟んで受け止めた。
「ぐぬ……ぬぬッ！？」
「効かないっていうんなら、これはどうだ！」
オーラングサークルから赤い光が灯り、オーズの顔、クウガの角へと集まって行く。物理的な攻撃が通用しないのなら、雷で直接焼

いてやろうというのだ。
怪人の顔に向け、収束された雷を放つオーズ。決まり手かと思われたこの一撃も、改造人間から液状生命体と進化を遂げたギリザメシャウタスには無意味だった。彼は顔すらも液体に変えて雷をかわし、実体化させた両腕の鋸でオーズを切り裂くと、彼の体に巻き付いた上で、首先に鋸を突き立てた。
「ガァブ、ガブガブ。誰が『顔は液状化できない』と言った。俺の体は全身液体、どこを溶かしてどこを戻そうが俺の自由なんだよ！
真っ二つになってしまえ！」
オーズの首に掛かる圧が徐々に強まって行く。ライダーメダルの力で強化された体と言えど、首筋を真っ二つにされてしまってはどうしようもない。
「映司！　待ってろ、今助けて……」
士は彼を助けようとディケイドライバーを腰に巻き、ライドブッカーからカードを抜き出すが、そこで突然手が止まる。あの時はうやむやにしてはぐらかしたが、毒のせいで疲労が溜まっているのは本当だ。伊達たちも捕まっている今、むやみやたらに変身して、大事な局面で何も出来なくなる訳には行かない。
士はライドブッカーから抜いた『ディケイド』のカードを戻すと、代わりにライドブッカー自体をベルトから外し、ガンモードにして構えた。怪人が自分の方に注意を払っていない今がチャンスだ。オーズの首筋に掛かる鋸さえ撃てば彼は逃げられる。失敗は許されない。汗が額から滝のように流れ、引き金に触れた指に緊張が走る。海鳥たちのわめき声がうざったい。
ギリザメシャウタスの注意が完全に明後日の方向に向いた。撃つなら今しかない。士は引き金を引いて銃弾を撃ち込んだ。
だがそれが奴に着弾することはなかった。士が撃つことを察知した怪人は一歩引いて銃弾をかわした後、もう一方の腕を伸ばし、士の右肩に鋸を放ったのだ。ライドブッカーから放たれた弾丸は怪人にもオーズにも当たらず、海鳥たちの群れの中へと消えてしまう。

「ふはは、ははははは」ギリザメシャウタスが士のことを嘲笑う。
「舐められたものだな。俺が気付いてないと、本気で思っていたのか？　そんな筈ないだろう。くたばり損ないの仮面ライダーめ、貴様の始末は後でたっぷりとしてやる。そこで大人しく待っていろ」
援護の一撃を外した。肩の傷も相当深い。これ以上生身で怪人とやり合うのは無理だろう。しかし士は、そんなことなど関係ないとでも言うように、奴よりも大きな声で笑い始めた。
「不愉快だ。何がそんなに可笑しい」
「こんなことで俺を出し抜いた、なんて、お前が思っているのが面白くってよ。浅はかにも程があるぜ。俺が狙っていたのはお前たちじゃねぇのさ」
笑いを止め、そのことを言い終えた瞬間、士は肩の痛みを推してギリザメシャウタスたちの足元に、ライドブッカーの銃弾を何発も撃ち込んだ。
彼らの足元に亀裂が走り、撃たれた部分だけが切り離されて海に没する。ギリザメシャウタスが自慢の錐鼻で船体を荒らし回ったその結果、士の放った銃弾程度の衝撃で崩れる程脆くなってしまったのだ。

海に沈んだオーズたちにも変化が生じる。海水に沈めば沈む程、ギリザメシャウタスの拘束が緩くなっていくのだ。
確かに彼は”シャウタ”のメダルで液状化する力を得た。しかし、彼は人間ではなく『改造人間』。彼の体は『液体金属』であって、液体そのものになったのではないのだ。
海水と同化出来ないギリザメシャウタスの体と、彼に絞め付けられているオーズとの隙間に海水が入り込み、水の膜が出来上がる。水の膜は次第に膨れ上がって行き、怪人がどれだけ力を強めても、それ以上絞め付けることは出来なくなっていた。
そうなってしまえばこっちのもの。オーズは全身に力を込め、体に巻き付くギリザメシャウタスを振り払った。

「た、助かったァ」水面から船上に上がり、深呼吸をしつつオーズが言う。「それに、こんなものも拾えたし、結果オーライ、ですかね」
「あぁ、あのタカたちに謝らなきゃな。きちんと仕事をこなしてたわけだ」
士はオーズが手にした”それ”を見つめ、歯を見せてにやりと笑う。門矢士が狙っていたのは怪人の手などではなく、最初から海鳥たちの群れだったのだ。
喧しく泣き喚く海鳥たちの群れに隠れ、一匹のタカ・カンドロイドが飛んでいるのを見つけ、そいつが『何か』を咥えているのに気付いた士は、ギリザメシャウタスに感付かれる前にタカを撃ち、咥えているものを海へと落とし、オーズに拾わせようとしていたのだ。
彼らに少し遅れ、両手の鋸で船に穴を開けながら、ギリザメシャウタスが船上に登って来た。
「おのれ……この俺をあんな形で出し抜くとは、完全無敵である筈の、この俺を！」
「無敵……？　はっは、笑わせてくれるぜ」士は怪人を嘲るように鼻で笑う。「お前は確かに強いよ。今までの俺たちじゃ勝てなかったかもしれん。だがな、海鳥たちに紛れてやって来た”タカ”が、俺たちの元まで運んでくれたこいつの前にゃあ、お前の無敵もたかが知れてるンだよ。見せてやれ、映司！」
「……はい！」
オーズは『クウガ』のメダルを士に渡し、ギリシャ文字の”φ（ファイ）”が刻み込まれた黄色のメダルをドライバーに嵌め込む。
――ファイズ！　ヒビキ！　アギト！
それを嵌め込んでスキャンしたオーズの頭部は、顔一面を覆い尽くす黄色い複眼に黒い頭に変化していた。タカが拾ってきたのは『仮面ライダーファイズ』の力を宿したヘッド・コア、『ファイズ・メダル』だったのだ。
「ふん、頭が変わった所で何が違うというのだ、今度こそばらばら

に斬り刻んでくれるわ！」
　ギリザメシャウタスは容姿の変わったオーズに対し、全く臆することなく襲い掛かる。物理的な攻撃を一切受け付けない液体金属の体を持った自分が、仮面ライダーなどに負ける筈がない。彼は自身の矜持に従って動いたのだ。
　だがそれも、ファイズのメダルの前では無意味だった。オーラングサークルを通り、顔じゅうを覆う黄色の複眼から放たれた朱色の光線は、液体化したギリザメシャウタスの体を拘束し、無理矢理地に這い蹲らせたのだ。
「な、なんでだ、なんで溶けない！　液体にならないッ」
「残念だったな鮫野郎」士が横から答える。「ファイズの『フォトンブラッド』には粒子レベルでの”拘束”能力があるんだよ。お前がいくら体を液体に変えようとも、こいつの光線を浴びちまえばどうにもならないって訳さ」
「そんな馬鹿な話があるか、俺は液体だぞ。液体を捉えられるものなどありはしないのだぞ！」
　自分が仮面ライダーに遅れを取ったと信じられず、なおもオーズに挑み来るギリザメシャウタス。士は馬鹿な奴めと溜め息をつき、オーズに対し「仕留めろ」と叫んだ。
――スキャニングチャージ！
　オーズは襲い掛かる怪人を蹴り飛ばして距離を取らせると、士の求めに応じて三枚のコアをオースキャナーでスキャン。ファイズの目から放たれた朱色の光線がφの形となってギリザメシャウタスの体に貼り付き、彼の一切の動きを封じてしまう。
　同時に手にした撥を構え、勢いを付けて跳び上がるオーズ。彼は空中で二三度体を捻らせ、その勢いを借りてφのマークを撥で何度も何度も叩き付けた。
　ギリザメシャウタスの体に亀裂が走る。フォトンブラッドの効力で体組織構造を固定され、響鬼の音撃をまともに浴びたことで、形

状が維持できなくなったのだ。
「バカ、馬鹿な……。俺は無敵の筈だ。その筈なのに、なんで、なんで……こんな、こんなァあぁッ」
一瞬の絶叫の後、ギリザメシャウタスは大量のセルとシャウタのメダルを残し、無敵である筈の自分が何故倒されたのか分からぬまま、形状崩壊によって最期を迎えた。
士はセルメダルの山からシャウタのメダルを拾い上げ、オーズに手渡す。
「戦利品だ。お前のもんだぜ」
「ありがとうございます。でも……」
「あぁ、あぁ。みなまで言うな。伊達たちのことだろう。こんなところで突っ立っててもしょうがないし、とりあえず街まで連れて行ってくれるか」
「分かりました。俺に乗ってください」

――やはり貴様たちが勝ったか、仮面ライダー。
オーズはアギトのメダルの代わりにキバのメダルを嵌め、いつでも飛べるようにと『ブラッディウイング』を展開させるが、突然聞こえてきた不可思議な声に驚き、周囲を見回した。
見ると、自分たちの頭上にタカとは違う、紫色の鳥型カンドロイドが、バッタのカンドロイドを掴んで飛んでいる。『プテラノドン・カンドロイド』だ。里中が飛ばしたのはタカだけだ。プテラノドンのカンドロイドは数が少なく、鴻上ファウンデーションにしか置かれていない筈。だが今、鴻上ファウンデーションはアポロショッカーに占領されている。答えは明らかだった。
「お前、アポロショッカーの奴か」目元に皺を寄せ、士が問い質す。
「伊達やら後藤やらをどこにやった。何をしやがったんだ」
怒気の籠った士の言葉に、電話口の相手はどこか楽しげな口調で答える。
「――街の中心、夢見スクエアだよ。君たちのお仲間はこちらで預

かっている。返してほしくば――、君たちの持っているライダー及び合成コアメダル。その全てを我々に”返して”貰いたい」
「馬鹿言え。元々お前たちのものじゃないだろう。ふざけたこと言ってるとぶっ潰すぞ」
「――それはこっちの台詞だ。君たちに拒否権などない。街に仲間たちの墓標を作りたくなかったら、とっとと夢見スクエアまで来るがいい。私の名はデッドライオン。アポロショッカーの”最高幹部”だ」
電話口の怪人はそこまで言うと、士たちの返答を待たぬまま電話を切った。敵のふてぶてしさと横暴さに二人は拳を震わせるが、今はそんな場合ではない。
オーズは士を背中に乗せ、夢見スクエアへ向けて全速力で飛んで行った。

第十二話：「怪奇液体ノコギリザメと起死回生の一発と黄色のメダル」（後書）

◆ギリザメス
「仮面ライダー」第６７話・『ショッカー首領出現！！　ライダー危うし』に登場したショッカー怪人。
　ライダーキックすら返すつわもので、制作当初はかの「死神博士」の正体と設定されていたのですが、諸事情によりその設定は見送られ、『ライダーきりもみシュート』で倒される普通の怪人に。
（続く６８話で初めて遭遇した筈のイカデビルをライダーが『何度戦ったら気が済むんだ』と言ってたり、タイトルクレジットにいる筈のないギリザメスが載っていたりと、かなりギリギリになって変更したのが伺えます）
　シャウタを取り込んサメの怪人ならいくらでもいそうな気がしますが、色んな組織から引き抜いてる＋そもそもアポロガイストたちの世界のショッカーは壊滅寸前　ということで若干マイナーめな所から登板。
　ギリザメ・シャウタスで区切った方が語感が良い気がする。それだとなんだかアンノウンの名前みたいになるけれども……。

◆流体多結晶合金
　いわゆる「液体金属」。映画「ターミネーター２」を参照されたし。
　爆発物や複雑な仕組みの機械以外なら何にでも姿を変えられるそうですが、グレネード弾とか液体窒素だとか、強烈な衝撃を受けるとコピー機能が狂うそうです。ＣＰＵの場所だとか動力源の所在は謎。

◆夢見町
「仮面ライダーオーズ」において、クスクシエがある町の名前。本

編三十九話（町内会長が映司やアンクたちに退去を求める回）に於いてこっそりと紹介されています。
（オーズの世界の）東京都武蔵野市にあるんだとか。

第十三話：「強敵猫系メダルと人々の思いと登場黄色のコンボ」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、オーズの使えるメダルは――

◎ヘッド：クウガ・コア、リュウキ・コア、ファイズ・コア
◎アーム：ヒビキ・コア
◎レッグ：キバ・コア、アギト・コア

第十三話：「強敵猫系メダルと人々の思いと登場黄色のコンボ」

※※※

夢見スクエア。町の中心に位置し、人口一万八千人の夢見町民の多くが頻繁に利用する、ショッピングの集合体だ。アポロショッカーの襲来によってメダルの採石場のようになったこの場所の大広場にて、殆どの町民たちが見守る中、仮面ライダーに味方をした四人の男女が処刑されようとしていた。

伊達に後藤、里中に比奈は、ライドベンダーに乗る黒タイツの戦闘員たちに囲まれた中、一様に十字架に磔にされて括られており、彼らの足元には見ているだけで暑くなりそうなほど赤く燃えた溶岩の釜が置かれている。十字架の先には鉄製のチェーンが巻きつけられており、時間と共に溶岩の方へと下がって行く。徐々にチェーンを降ろして、死の恐怖を限界まで味合わせてやろういう魂胆か。

磔にされ、自由に体を動かせない窮屈さ、そして迫り来る溶岩の熱さに苦しむ四人の前に、ツタンカーメンマスクを被ったライオン顔の怪人が現れ、舐め回すように彼らを見た。

「くくく、いい表情だぞ。もっと苦しめ、もっと苦しめ。貴様らの苦痛に歪むその顔だ。お前らが苦しむ度に見物人共は思い知るのだ。アポロショッカーに歯向かうことなど無駄だと、アポロガイスト様に従うしか生きる術はないとな！　さあもっと怖がれ、もっと苦しめ！」

「趣味悪いね、まったく」伊達が呆れ顔でぼやく。「油断していた俺たちも悪いんだが、メダル奪って町の人たちから希望をも奪おうとはな。えげつないったらありゃしない」

「そんなことを言ってる場合ですか」隣の後藤が伊達に言う。「一刻も早くここを抜け出さないと。こんな馬鹿な遊びにいちいち付き

合う必要なんてありませんよ」
「おい後藤ちゃん、奴の目の前で言うことじゃないだろ、そういうこと」
伊達はこの状態でなんてことを言うんだと、後藤に制止を掛けるが間に合わず、彼はデッドライオンの平手打ちを喰らってしまった。
「ふふ、慌てるな慌てるな」デッドライオンは得意気な顔で後藤に言う。「貴様たちを殺すのはもう少し後だ。まだ、主賓が到着していないからなぁ」
「火野たちが来てもそんな態度でいられるといいがな。俺たちや街の人々にこんなことをしていると知ったら、奴ら黙ってはいないぞ」
「ほぉ、いいぞいいぞ。そういう他力本願で間抜けな台詞が聞きたかったんだ。もっと言え。もっと助けを求めろ。それが無駄になったと分かった時、お前は今以上に絶望するのだからな」
そう言って大笑いをするデッドライオンに対し、後藤は怒りよりも彼の底知れなさに冷や汗をかいた。生身で隙があったとはいえ、自分たち四人を瞬く間に気絶させ、この場所まで連れ去る位だ。単なる慢心ではなく、実力も相当なものなのだろう。

それから暫く、デッドライオンは後藤を小突き回して笑っていたが、何かが空を飛んで来る音を聞き付け、表情が一気に強張った。
「来たな、仮面ライダー……。お前たち、配置に付けーッ！」
戦闘員の一団はデッドライオンの号令に従い、オーズたちを迎え撃つべく十字架の前で陣形を組む。
夢見スクエアの周囲に建ち並ぶビルの合間を縫って、空の上からオーズたちが現れる。人々の歓声に包まれながら十字架から少し離れた位置に着地したオーズは、士を下ろした所で、襲い来る戦闘員の姿を目の当たりにした。
「多いですね……奴らも、見物人も」
「しゃらくせぇ。あんな黒タイツ、とっとと蹴散らしてやらぁ」
「蹴散らすって士さん、変身……するんですか？　体の方は」

「曲がりなりにも敵の幹部が襲って来てるんだぞ。生身でやれるほど甘くはないし、出し惜しみをしている場合でもねぇ。正念場だ、気合い入れろよ、映司！」
――変身
――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＤＥＣＡＤＥ」
士は肩の傷も残りの体力も気にすることなくディケイドに変身し、襲い掛かる戦闘員たちに向かっていく。辛くない筈がない、傷が痛まない訳がない。それでもなお痩せ我慢をして立ち向かっているのだ。メダルに変えられてしまった仲間たちを取り戻すために、自分自身の誇りのために。
彼の勇ましい背中に感動を覚えたオーズは、両の拳を固く握り締めて決意を新たにし、彼もまた伊達たちが捕らえられた十字架を目指して駆けて行った。

いくら戦闘員たちが束になって掛かろうとも、ライダー二人を相手にしては、まともな足止めにすらならなかった。ディケイドに切り伏せられ、オーズには稲妻や炎でその身を焼かれ、瞬く間に原料のセルメダルに戻されていく。彼らがデッドライオンの元まで辿り着くのに一分も掛からなかった。
「お招きに預かったんで馳せ参じたぜ。そこで転がってる役立たずたちみたいになりたくなきゃ、そこの四人をさっさと解放するんだな」
「もう後はないぞ！　観念しろ、デッドライオン！」
二人のライダーはそう言ってデッドライオンに人差し指を突き立てるが、彼はそうなると分かっていたのか、表情を全く崩すことなく二人に言い放つ。
「終わりだと？　馬鹿を言っちゃいけない、ここからが始まりなのだ。アポロガイスト様に仇なす愚かなライダーの生き残り共、この私が貴様らに引導を渡してくれるわ」
デッドライオンは懐から黄色とオレンジが混ざったような色合い

のメダルを取り出して、額に生じた投入口に放り込む。ツタンカーメンマスクのような硬い鬣（たてがみ）は金色に染まって刺々しく伸び上がり、腕の爪は固く太く、下半身はしなやかでバネのある筋肉へと変わり、ぐんぐんと膨れ上がって行く。

変態を遂げたデッドライオンは金の鬣から光を放つと共に、咆哮を上げて見せる。その衝撃でオーズたちは数メートル先まで吹き飛ばされ、見物人たちの列に突っ込んで行った。

「ははは、他愛もない。見たかライダー共、これがアポロショッカー最高幹部『デッドラトラーイオン』の力だ。どうだ、理解したか？　青ざめたか？　震えて声も出ないか？」

「誰が諦めるもんかよ」体を起こしながらディケイドが言い返す。

「お前より強い奴なんざ、旅先で腐るほど見てきた。大したこたぁねぇよ」

「ラトラータのメダルを使ってそれだけだとしたら拍子抜けだな。俺たちはまだやれる。御託を並べる暇があるなら掛かってこい」

怯むことなく平然と立ち上がってくる二人に対し、デッドライオンは愉しそうににやりと口を歪ませた。

「面白い、そうでなくては狩り甲斐がないというもの。ならば、恐怖を感じることすら出来ぬまま、無様に朽ち果てるがよい！」

デッドライオンはそう言うと、思い切り大地を踏み締め、両足に力を込める。動物が全力疾走を行う合図だ。それを隙と考えたオーズたちは、動かない彼に向かって剣と撥を振るうが、彼に当たるその瞬間、デッドライオンの姿は彼らの視界から消え失せた。それどころか脇腹を鋭利な刃物で抉られてしまっている。

「ふふふ、どこを見ているのだ。こっちだ、こっち」

二人のライダーが振り向くと、切り裂かれた自分たちの脇腹の肉を持って、デッドライオンが背後に立っている。ディケイドは奴が物凄い早さで自分たちの背後を取り、すれ違い様に自分たちの肉を抉ったのだと理解した。

認めたくはないが、奴は只者ではない。二人のライダーは脇腹の

痛みすら忘れ、眼前の敵に対し冷や汗をかいていた。
　このままではいけない。敵は手強いが、こちらも攻め手が無いわけでないのだ。ディケイドは不安を振り切るように頬を叩き、ライドブッカーから二枚のカードを引き抜いた。
「お前が素早いのは良く分かったよ。けどな、早いのはてめぇだけじゃあねぇんだぜ！」
――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ「ＢＬＡＤＥ」
――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「ＭＡＣＨ」
　ディケイドはカードをドライバーに装填して『仮面ライダーブレイド』に変身し、重ねて『マッハ』のカードをバックルにセットする。ジャガーの絵柄がディケイドの胸に吸い込まれ、デッドライオンにも匹敵する早さで駆け出した。
「やはりそう来るかディケイド！　相手になってやる！」
　両手の爪を鋭く伸ばし、自身も地を蹴って迎え撃つデッドライオン。その場にいた誰にも二人の姿を捉えることは出来ず、金属と金属が擦れ合う音だけが広場に響く。速さ比べは一見両者互角のように見える。しかし、デッドライオンには勝算があった。ディケイド――門矢士はカニレーザーから受けた毒の効力で体力を著しく消耗している。そんな彼が全力で動いていて、長時間戦える筈がない。
　彼の見立て通りディケイドは数分程で息を切らし、膝をついてその場に倒れ込む。『マッハ』による高速移動は、ディケイドの疲労を痩せ我慢では誤魔化し切れないほどに増やしてしまったのだ。
　デッドライオンは待ってましたと言わんばかりに、倒れ込んだディケイドを蹴り付け、体が浮き上がった所に自慢の爪を叩き込む。太く硬く鋭く尖った爪はディケイドの装甲に穴を開けるばかりか、その下にある士の肌をも裂き、彼に血飛沫を上げさせた。
「士さんッ！」飛沫を上げて倒れ込むディケイドを目にし、オーズが声を上げる。「お前、よくも……ッ！」
「無駄だ、無駄だ。諦めろ」
　ディケイドが倒されたことに怒り、策もなくデッドライオンに突

貫するオーズだったが、何の手立てもなく正面から向かって行った所でどうすることも出来ず、かわされた上で背中に大きな切り傷を負って地に伏した。
「つまらんなぁ、まったくもってつまらん」デッドライオンはオーズを足蹴にしつつ言う。「他の奴らは、メダルを持っていながら、こんな雑魚にしてやられたのか。こんな奴らを“脅威”とお考えになるアポロガイスト様の気が知れん」
デッドライオンはオーズの襟首を掴むと、スクエアの端に放り投げて高らかに笑い、それを見ていた残りの戦闘員たちも喜びの声を上げた。

※※※

仮面ライダーたちが足蹴にされる様を見て、歓声を上げていた見物人たちも何も言えず押し黙り、辺りには気まずい沈黙が流れる。彼らは皆デッドライオンの思惑通り、アポロショッカーに従うしかないのかと考え始めていた。
しかし彼らは、十字架に磔にされ、溶岩の釜に落とされかけている伊達たちは違う。彼らは――仮面ライダーたちはどんな窮地であっても乗り越え、世界を救って来た。自分たちはそれを目撃している。彼らがこんな所で終わる筈がない。そのために自分たちがすべきことは何か。自力で体に巻き付く鎖を解くのは不可能だ。バースドライバーはガンガンライナーとの戦いでの修理中であり、手元にはない。先程町中で見付けたメダルも、デッドライオンに気絶させられた際、彼らに没収されてしまった。
何処も彼処も塞がっていて、一見どうにも出来ないように思える。しかし、伊達明には打開策があった。デッドライオンの戦いを観戦し、彼が優勢になるごとに“イー”と歓声を上げる戦闘員の中に一人、灰色の小さな箱を持っている者がいる。詳しい事は聞かされて

いないが、ライダーのメダルは映司たちにとっても、アポロショッカー陣営にとっても重要なものだと言うことは知っている。となれば、奪えばすぐに首領のアポロガイストに献上されているものだと思っていた。

あの中には三枚のメダルが入っているに違いない。奪い返して映司に渡したいが、今の自分にはどうすることも出来ない。だが、メダルを映司に渡すのに彼が動く必要はない。伊達は唯一自由に動かせる口を開き、声を張り上げて“彼ら”に呼び掛けた。

「みんな！　この戦いを見ているみんな！　そこの灰色の箱を持った黒タイツ、そいつの箱を奪って、仮面ライダーに渡してやってくれ！　仮面ライダーはあんたたちみんなの為に戦ってるんだ、信じてくれ、ライダーは負けない！　アポロショッカーなんてふざけた連中に従うのを由としないのなら、みんなの手で仮面ライダーを救ってやってくれ！」

伊達の力一杯の叫び声は、誰からも答えが返ってくること無く掻き消える。この惨状を目の当たりにして、アポロショッカーに歯向かおうとする者など、見物人の中には居ないのか。虚しく消え行く叫び声を耳にしたデッドライオンは、大笑いで伊達のことを嘲った。

「無駄なことだ。この有り様を目にして、我々アポロショッカーに歯向かう奴が要るわけ無かろう。まァ、念のために言っておくとするか」

デッドライオンは箱を持つ戦闘員に指示を飛ばし、彼に箱を開けさせた上で話を続ける。

「確かに、貴様らから奪ったメダルはこの中に入っている。お前たちを始末した上でアポロガイスト様に献上する予定だったのでな。

この戦いを見ている者たち全員に告げる。一人でも奴の言いなりとなって、このメダルを奪ってみろ。お前たち全て……、そう、全てだ！　一人残らず切り刻んで、家畜の餌にしてくれようぞ。これは『忠告』ではない、『警告』だ。分かったな」

奴の言葉に伊達は「しまった」舌を打つ。オーズたちが成す術なく横たわっている今、デッドライオンにあんなことを言われて、民衆が動いてくれる訳がない。現に彼らは伊達たちから目を背け、下を向いたまま押し黙っている。最早何を言おうが無駄なのか。伊達は見物人たちに見切りを付けて目を伏せる。

だがその瞬間、箱を持った戦闘員に飛び掛かり、強引に箱を奪って逃げ出す男が現れた。伊達たちはおろか、デッドライオンすら予想だにしなかった行動に、誰もが目を見開いて彼を見る。

黒いスーツを身に纏い、やや生え際が後退した黒渕眼鏡の男は、黒タイツたちに揉みくちゃにされながらも、高台まで逃げ延びて、他の見物人たちに向かって叫ぶ。

「このままで……いいわけないだろう！　彼らは、仮面ライダーたちは、戦えない私たちの代わりに戦ってくれているんだぞ。そりゃあ私だって死にたくないし、奴らのことは滅茶苦茶怖いさ。けど、それを理由に動かないで、誰かの助けに甘えていて、恥ずかしいとは思わないのか！？　受け取ってくれ、仮面ライダーオーズ！」

黒渕眼鏡の男は、箱の中から取り出したメダルを握り締めると、遠方のオーズたちに向かってそれを投げ付ける。それまで男に群がっていた黒タイツたちは彼から離れ、皆メダルに向かって駆けて行く。

「あなたは……まさか！」男の姿と声に聞き覚えがあった後藤は、改めて男の顔を見つめる。彼はかつて『正義の味方になる』という欲望をグリードにつけこまれ、ヤミーを産み出してしまった男、『神林進』だったのだ。

そうこうしているうちに、戦闘員は男が投げたメダルに追い付き、折角取り戻したものが再び奪い返されてしまう。奴らの身体能力を考えれば至極当然の結果だ。神林にも分かっていた筈だ。そうなると分かって、何故彼はこんな真似をしたのだろう。

男は黒タイツたちが『それ』に群がるのを見、彼らの密集地帯か

ら離れた場所から駆け出した。
「残念だったなタイツ共！　それは私の『弁護士バッジ』だ！」
神林に言われ、戦闘員たちは握った『それ』をまじまじと見つめる。丸い形をしているが、メダルよりも一回り小さく、金色の向日葵を象った形状で、中心には天秤が描かれている。これは明らかにメダルじゃない。
普通に投げても戦闘員に奪われると分かっていた神林は、手のひらの中でメダルとバッジをすり替えて投げ、奴らの目をそこに釘付けにしたのだ。神林はそのままオーズたちの方に向かって駆けるが、騙されて逆上した黒タイツたちは素早く、あっという間に彼に追い付いてしまう。
必死に駆ける神林の背に、戦闘員たちのナイフが迫る。逃げるので必死の彼にナイフをかわす手立てはなく、その様子を見ていた誰もが「危ない」と目を背けてしまう。
黒タイツのナイフが神林の背に無慈悲に降り下ろされる。だが、そのナイフは彼を刺すより早く、羽織袴を纏い、鉄パイプを手にした少女に防がれた。
「あ、あなた……は？」
「行って下さい弁護士さん。そのメダルを仮面ライダーに！」
「あ……ありがとう、本当にありがとう！」
少女の助けを借りて、先に進む神林。ナイフを持った黒タイツは彼女が引き受けたが、襲い来る敵の数はまだ多い。神林の行く手を遮るべく、戦闘員同士がスクラムを組み始めた。神林の貧相な体格では、あれを潜って前に進むのは無理だろう。方向を変えようにも、右も左も囲まれていて逃げ場がない。彼は今度こそ駄目かと怯えるが、戦闘員が組んだスクラムは、異様に恰幅の良い男の体当たりを受け、ボーリングのピンのように派手に飛んで行ってしまう。
「よう。大丈夫か、正義の味方さん」男が体を起こしつつ話しかけてきた。「あんたの言う通りだ。ヒーローが頑張ってるんだから、俺たちだって頑張らなくちゃあな。うまい飯も食えなくなっちまう

しさ」
「誰だか存じませんが、ありがとうございます。それに……」
男に礼をし、神林は周りを見回す。さっきまで目を伏せて黙っていた人々が、戦闘員たちに果敢に向かって行き、神林の行く道を作ってくれているではないか。デッドライオンの言葉を忘れた訳ではない。だがアポロショッカーに従い、いつ命を奪われるかと怯える生活は御免だ。仮面ライダーを信じてみたくなったのだ。
気が付くと彼らは黒タイツの戦闘員たちに向かって行っていた。仮面ライダーの逆転を信じ、その布石となるメダルを届ける為に。

こうなると面白くないのはデッドライオンだ。彼はアポロガイストよりメダルの奪還と人々に絶望を与える命を受けていた。それに従い、二人のライダーを徹底的に叩きのめした。唯一の希望を失った民衆は絶望するしかない。
だが今はどうだ。彼らは希望を失うどころか、ライダーの逆転に賭けて、死をも恐れず戦闘員に向かって来ている。人の希望など容易く刈り取れるものと高を九々っていたデッドライオンは、臼歯が砕けんばかりの勢いで歯を食い縛る。
「えぇい、そんな男一人に何を手間取っている！　こうなったら、喰らえッ、『ライオンチェーン』！」
怒りに燃えるデッドライオンは、両手に付いたロックを外し、右腕の中にしまわれていたチェーンを引っ張り出すと、こちらに向かって来る神林に照準を合わせ、彼目掛けて鋭い爪を右手ごと放った。チェーンは瞬く間に伸びて行き、神林の心臓を狙って突き進む。
放たれた右手は寸分狂わず突き進み、神林と人一人分程の距離まで迫る。しかし、命中確実と思われたその一撃は、デッドライオンの背後から放たれた銃弾によって軌道をずらされ、神林に当たることなくタイル張りの床を砕いて止まった。
「くそッ、邪魔をしたのは誰だッ」顔を赤くして振り向くデッドライオン。彼の背後ではうつ伏せになったままライドブッカーの銃口

をこちらに向けてにたりと笑うディケイドの姿があった。
「大の男が体張ってんだ。邪魔をするのは野暮ってもんだろ」
「ぬうう、この死に損ないめが！」デッドライオンは地団駄を踏んで、再び神林の方へと向き直る。「まだ左手があるわ、今度こそ死ねィ！」
右が駄目なら左手だと、床に刺さった右手を巻き取りつつ、残った左手を放つデッドライオン。しかしこの一撃も、何処からともなく飛んで来た『クジャク』の形をしたカンドロイドに軌道を反らされ、神林の体をすり抜けてしまう。
「ぬおぉ！？　何故こんな所にカンドロイドが！　えぇい、邪魔だ、邪魔だ！」
予想外の出来事だらけで慌てふためくデッドライオンを見、十字架に磔られた里中は不敵に微笑む。こう言った事態に供え、こっそりとクジャクのカンドロイドをポケットに忍ばせていたのだ。
「里中ちゃん、グッジョブ！　いつも頼りになるねぇ」
「さすが俺の上司！」
「まぁ、これもお仕事ですから」

皆の協力を得て走り続ける神林は、漸くオーズが倒れている場所に辿り着く。彼は最後の力を振り絞り、今まで以上に大股でタイルの床を駆け抜ける。
しかし、神林がオーズにメダルを届けることは出来なかった。オーズの元に辿り着く直前、物陰に隠れていた戦闘員の奇襲を喰って、地面に叩きつけられてしまったからだ。
地面に這い蹲ると同時に、三枚のメダルは神林の手を離れ、タイルの上を転がって行く。そのうちの二つ、赤と青のメダルが黒タイツの手によって回収され、最後の一つ、銀色のメダルにも彼らの手が伸びる。
皆の力を借りてまで頑張ったのに、これで終わりなのか。自分たちただの人間は、正義の味方の手伝いすらも出来ないのか。神林は

己の無力と悔しさに涙を流していた。

――ちょっとちょっと、ちょっと、待ったーァ！

黒タイツの一人が銀色のメダルに手を伸ばし、誰もが諦めかけていたその時、戦闘員がメダルを拾うよりも先に、彼らと同じ物陰から現れた男がメダルを掠め取った。

黒タイツたちがメダルを奪われたことに気付く頃には、男はオーズの元へと辿り着き、彼の頬を何度も叩いていた。

「あの、あのあの、あの！　あんた火野映司さんでしょう？　起きて、起きてくださいよ！」

「あぁ……うん。どちらさま、ですか？」

男の言葉と頬の痛みに、オーズは意識を取り戻してゆっくりと立ち上がる。彼が目を開けた時、最初に映ったのは、黒白縞の衣服を身に纏った、七三分けの気弱そうな青年の顔だった。

「覚えてないんですか？　俺ですよ、俺俺。山金さんに追われてた奥村安二（おくむら やすじ）ですよ」

「奥村……奥村……」オーズは頭の中を必死に探り、一人の人物を思い出す。「あぁ、”ヤスさん”……ですか？」

「そうそう、そのヤスさん」

奥村安二――通称・ヤス。相棒の”山金”を警察に売り、追われていた所を助けて知り合った男の名前だ。彼が着ているのは囚人服だ。助かった後で罪を認めて自首したのか、山金に脅されて一緒に刑務所に入ったのか、それは分からない。

それよりも、彼がこんな場所で、何故自分の前にいるのか。オーズには不思議でしょうがなかった。

仮面の下から覗く彼の疑問を汲み取ったのか、ヤスは「そうだった」と思い直し、手にした銀色のメダルをオーズに手渡した。

「みんなして必死になって持ってきたんだ。早いとこカタ付けてくださいよ、仮面ライダーオーズさん」

今まで気を失っていたオーズに、このメダルが自分の元に渡るまで、どのような経緯があったのかは分からない。しかし、観衆の誰もが戦闘員と戦い、デッドライオンがその様子に怒り狂っている所から、彼らが自分の為に相当な苦労と覚悟をして、ここまでメダルを運んで来たことだけは理解できた。

戦えない人々がここまで頑張ってくれたんだ。仮面ライダーである自分が踏ん張らないわけにはいかない。オーズはヤスの手を強く握り、戦闘員に押さえ付けられて涙を流す神林に深々とお辞儀をすると、響のメダルを外し、その代わりに銀色のメダル――『電王』をドライバーの真ん中に嵌め込んだ。

「皆さんの頑張り、覚悟、痛み……無駄にはしません。見ていてください」

――変身ッ！

――ファイズ！　デンオウ！　アギト！

ドライバーから発せられた歌と共に、オーラングサークルは黄色一色となり、オーズの胸に、腕に、脚に『電車』のレールの様なものが伸びる。

伸びたレールには、ファイズメダルから発せられる『フォトンブラッド』が供給され、オーズの全身が深紅の光に包まれた。

ファイズ、電王、アギト。技に優れたテクニカルな形態・『黄色のコンボ』の誕生だ。

第十三話：「強敵猫系メダルと人々の思いと登場黄色のコンボ」（後書き）

◆「レッツゴー」のモロパクリじゃねぇか！　と言われても仕方のない展開ですみません。そう言われても、この辺の下りはどうしてもやっておきたかったので……。

◆民衆の中に混じってた名前ありの人たち

・神林進
「オーズ」本編２１、２２話に登場した知世子の旧友。「正義の味方」になることを望み、司法試験を受けて弁護士になろうとするも、何度も落ちまくってた子持ちの中年男性。
彼のキャラクタよりも、仮面ライダーシンさんに良く似たバッタヤミー、映司の「正義のためなら人間は何処までも残酷になれるんだ」という台詞の方が印象深いような気がしないでもない。
息子も出しておこうかと思いましたが尺の都合でカットしました。

・白鳥梨恵（鉄パイプで戦闘員を殴っていた少女）
「オーズ」本編１７、１８話（伊達さん本格登場回）に登場した剣道少女。顧問の橋本先生に淡い恋心を抱くも、彼が結婚を間近に控えていることを知り、そのことでウヴァに付け込まれ――
彼女が、と言うよりも堂々と女子トイレに入ってくるウヴァさんに腹筋を貫かれた視聴者は数多いはず。
某レムリアの剣を持った橋本勝先生が彼女助けに来る展開も書いてはいたのですが、これまた尺の都合でカットしました。
……すみません、嘘です。最初から書いてません。

・腹時門太（スクラムを組んだ戦闘員にタックルをかました男）
「オーズ」本編３、４話に登場した大食い男。その欲望をカザリに

利用され、ネコヤミーにされてしまう羽目に。ネコヤミーから分離させられてもあまり懲りてないようで――

最初に紹介した神林以外の人選はほとんど適当ですが、彼にしろ先の剣道少女にしろ、持ったスキルを活かせるポイントがあって本当に良かった。

・奥村安二

「オーズ」本編１９、２０話（タジャドルコンボ初登場回）に登場した男。相棒の山金を裏切ったことで彼と、彼の生み出したライオンクラゲヤミーに追われることになるも、映司たちのメダルを全部奪ったり、あっさりとカザリ側に付いたりとあんまり印象が良くない人ですね。

オーズたちを助けに来る人たちはもっとたくさん出したかったのですが、あんまり増やしすぎても“ＷＲ”みたいになっちゃうなぁと思ったのと、さすがにそこまで書ききれないなぁということでこの四人だけにしました。

◆ラトラータと勝負させるならクロックアップやアクセルフォームだろ！　と思ったのですが、両方とも序盤中盤で消化してしまったのでブレイドのマッハで代用しました。ディケイド放送当時、「アクセルフォームとクロックアップで戦いが出来るのなら、ラウズカードのマッハだって行けるだろ」と一部の人たちがやたらと言っていたのを思い出しました。あれからもう二年か……。

第十四話：「炸裂黄色のコンボとライオンの最期と裏の裏の裏」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、オーズの使えるメダルは――

◎ヘッド・コア：クウガ・コア、リュウキ・コア、ファイズ・コア
◎アーム・コア：ヒビキ・コア、デンオウ・コア
◎レッグ・コア：キバ・コア、アギト・コア

第十四話：「炸裂黄色のコンボとライオンの最期と裏の裏の裏」

「あれは……！　あの役立たず共が、しくじりよったか！　もういい、私が滅ぼして首をアポロガイスト様への手土産にしてくれるわ！」

デッドライオンはオーズが新たな姿になったと見るやいなや、伸ばしていた手を収め、太股の筋肉に力を込めて、いつでも飛び掛かれる体勢を作る。このままでは先程までの二の舞だ。

だがオーズは恐れることも退くこともなく、かかってこいと言わんばかりにデッドライオンの前に立ちはだかる。『アギト』の足から灯った光が全身に敷かれた『電王』のレールを伝ってオーラングサークルを越え、『ファイズ』の頭部に昇って、顔を覆う黄色い複眼を金色に染めた。

疾風のような早さと勢いで、鋭利な爪を武器に真正面からデッドライオンが襲い来る。彼は「これで終わりだ」と叫んで爪を突き入れるが、その爪はオーズを裂くことなくかわされてしまった。

「な、なんだ、今のは」爪を地面に刺して勢いを殺しつつ、デッドライオンが言う。「私のスピードについて来られる奴など居る訳がない！　今のはそう……、まぐれだ！　今度こそッ」

爪を地面から引き抜き、軽やかな動きで地を駆けるデッドライオン。今度は真正面からではなく、オーズの死角に回り込んですれ違い様に彼の首を千切ろうと言う算段だ。オーズは背後を見てすらいない。やはりさっきのはまぐれだ。デッドライオンはオーズの背後に回ったと同時に体を弾ませ、勢いを付けて彼の首を狙って飛びかかる。

しかしオーズは振り向くことなく腰の動きだけでそれをかわし、空振って隙だらけになったデッドライオンの腹に拳を叩き込んだ。

「うぬ……ぬぬ、こんなはずは、こんな筈は……ないッ！」

デッドライオンは腹を叩かれてよろけるも、直ぐ様体勢を立て直

し、そんなこと信じられるかと言わんばかりに三度オーズに襲い掛かる。今度はあえて真正面から突っ込み、直前で飛び上がって彼の空振りを誘発させて、隙が出来たオーズに空中から切り裂こうというのだ。

オーズの懐まで迫り、彼の体に触れるかどうかの所で跳ねて飛ぶ。デッドライオンはこれならどうだと腕を降り下ろすが、当のオーズは彼のフェイントに惑わされることなく、飛び掛かるデッドライオンの右腕を掴み、動きが止まった所で右足の前蹴りを彼の腹に叩き込んだ。

勢い余って床のタイルに後頭部をぶつけ、頭を押さえて苦しがるデッドライオンを見下ろし、彼に人差し指を突き立ててオーズは言う。

「無駄だよ。お前がどれだけ早く動こうとも、俺には全て『見えて』いるんだ」

彼の言うことはハッタリなどではない。『アギト』のメダルに元々備わっていた”見切り”の力が、『電王』のレールを通じて『ファイズ』の頭部に伝わり、彼の動き全てを完全に予測していたのだ。

個々のメダルの力を他の箇所に運んで強化する『デンオウデンレール』。それを最も効果的に行使出来る形態が、この『黄色のコンボ』なのである。

「おぉ、のぉ、れェ……！」頭と腹の痛みを堪えつつ立ち上がるデッドライオン。いくら素早く動けようとも無駄かと理解した彼は、頭部の鬣（たてがみ）に力を集中させ、熱光波に変えてオーズに放った。眩い光と凄まじい熱量に、スクエアにいた誰もが目を背けてしまう。

しかしオーズは違う。デンオウデンレールで『ファイズ』のメダルからフォトンブラッドを引き出し、全身に駆け巡らせてデッドライオンに撃ち返した。

熱線と光線が互いにぶつかり、真っ赤な火花を散らし合う。相対する二つの光は猛烈な衝撃を発して掻き消え、彼らを強く吹き飛ば

す。オーズよりも先に立ち上がったデッドライオンは、彼が起き上がるより前に、一気に間を詰めて襲い掛かった。
オーズは不意打ちにも動揺せず、横に転がって初撃をかわし、横薙ぎに振るわれた爪を蹴りで防いで起き上がった。
「そんなに勝負がしたいのなら……、やってやる！」
オーズは頭部と脚部に力を込め、デンオウデンレールを通じて両方の腕に運ぶ。形のないエネルギー体だったそれは、オーズの掌から実体化し、右手にはファイズの武器『ファイズエッジ』が、左手にはアギトの薙刀『ストームハルバード』として形を成した。
「武器を持った所で何になる！？　喰らえィ、『ライオンチェーン』！」
オーズが武器を構える間、デッドライオンは手のロックを外して、チェーンの付いた右手をオーズに放った。放たれた右手に対し、オーズはハルバードを眼前に構え、わざと絡め取らせて思い切りチェーンを引いた。
まずい、と思い逃げようとするも後の祭り。チェーンを通じて引き寄せられたデッドライオンは、右手のファイズエッジで左目から左足の先まで真一文字に斬り付けられてしまった。

「おご……おぉ、こんな……筈では……」左目を潰され、膝を付いて立ち上がることすら出来ないデッドライオン。これを勝機と見たオーズは、二つの武器をその場に放り、オースキャナーで三枚のメダルを読み込んだ。
――スキャニングチャージ！
チャージと同時にファイズの複眼が光輝き、デンオウデンレールを伝って脚部に集束されて行く。右の爪先と左の踵に仕込まれた『クロスホーンヒール』が展開し、集束されたフォトンブラッドがヒールに満ち満ちて、紅く輝く巨大な角に変化した。
オーズはそのままデッドライオンに向かって走り出し、よろよろと起き上がる彼の胸部に右足の爪先を突き刺し、引っ掛かった所で

左足を振り上げ、踵の角をデッドライオンの脳天に見舞い、タイルが粉々に砕ける程の勢いで地面に叩きつけた。

「ぐ……おぉ！　私の夢が……、いずれこの組織を乗っ取り、『デッドショッカー』として、全世界の覇権を握る私の……夢が……あぁ、あぁあ！」

デッドライオンはそのまま立ち上がることなく、大量のセルメダルへと変わって砕け散る。

オーズが右腕を上げると共に、観衆は仮面ライダーの勝利に沸いて、割れんばかりの大歓声を上げた。

「おぉい、おぉい、火野ォ。勝ち名乗りも結構だが、早いとこ俺たちを助けてくれ。足の裏が熱くって熱くって」

「あぁ……、すみません、伊達さん」

伊達に助けを請われたオーズは、ファイズの複眼から大量のフォトンブラッドを照射してマグマの釜を蒸発させると、近くに放ったハルバードで十字架を砕き、彼らの縄を解く。伊達たちは自由に動けるのを喜ぶように伸びをすると、オーズの健闘を讃えて彼の肩を叩いた。

「よぉよぉ、やったなあ火野！　お前がぶっ倒れた時はもう、駄目かと思ったぜ」

「すまなかったな、火野。俺が不甲斐ないばかりに……」

「毎回こんな危機に遭っていたら体が持ちませんし、給料の割に合いません。次からはしっかりしてくださいね、火野さん」

「皆さん、ありがとうございます。でも少し待ってください」

オーズは伊達たちや、自分に群がる見物人たちを振り払うと、床に突っ伏したまま動かないディケイドに声をかけた。

「士さん。俺、やりましたよ。ここにいる皆のお陰で、あいつになんとか勝てました」

「やったってんならよ」ディケイドはゆっくりと体を起こしつつ言

葉を返す。「俺もやってやったぜ。見ろよ」
ディケイドは手のひらに握ったものをオーズに見せる。赤に青に紫のメダル、オーズが手に出来なかった残りの三枚だ。
「お前がライオンとやってる間に奪い返してやったぜ。たくよ、体が思うように動かないってのは辛いもんだな。黒タイツ四五人倒すだけでフラフラとはよ。ここまで来ると逆に笑えてくらぁ」
「もう喋らないで下さい士さん、すぐに傷の手当てを……」
先の船での戦いで左肩を負傷し、その上今度はスーツ越しからの胸部出血と来た。無事でいられる訳がない。オーズは彼の体を気遣い、ディケイドの腕を掴んで自分の背に乗せた。
「おい、やめろよ。んなことしなくても自分で歩けるっての」
「無理しないでください。傷口に障りますよ」
「だから俺は平気だって……おぉ？」
離せ降ろせと喚いていたディケイドの口が止まる。伊達たちと共に十字架から解放された泉比奈が目の前に立っていたからだ。
「ほらよ、お前のお姫様がお待ちだぜ。俺がいても邪魔なだけだろ。降ろさないってなら勝手に降りるぞ」
「あぁもう、降りないでくださいよ士さん！　比奈ちゃん、あぁ、えぇと……今はちょっと」
今は重病人の士を治療できる場所に運ぶ方が先決だ。オーズは頼むから少し待ってくれと彼女に言おうとするが、比奈は彼の言葉を遮ってオーズに抱き付いた。
「ちょっ！　困るよ比奈ちゃん！　士さんが、士さんが大変なんだってば」
「はは、似合いだぜ。もう少しそうしてろよ」
「冷やかさないでくださいよ、もう……」
戦いが終わって気が緩んだのか、比奈に抱き付かれて戸惑うオーズを、こりゃあいいやと笑って冷やかすディケイド。だからこそ彼らは気付くことが出来なかった。目の前にいる比奈が、オーズの胸に顔をうずめる比奈が、いつもの彼女とは違う、不可思議な”気”

を放っていることに。
比奈が放っていた違和感に最初に気付いたのはオーズだ。自分の胸に顔を埋めて何も言わずにいる比奈を不審に思ったオーズは、彼女に「どうしたの」と声を掛ける。
「どうしたの比奈ちゃん。俺に言いたいことがあるのなら、ここで……」
「あぁ、すみません。私、嬉しくって……、つい」
「嬉しくって？」オーズは言葉をオウム返しにして首を傾げる。「何がそんなに嬉しいの」
彼の問いに、比奈はゆっくりと顔を上へ向ける。オーズは目を見開いて驚いた。その時彼女がしていた表情は、とても人間のものとは思えない程に暗く、おどろおどろしいものだったからだ。
恐ろしいのは表情だけではない。比奈はオーズのベルトのバックルに手を伸ばし、嵌まっていた三枚のメダルを強引に引き抜くと、高く足を上げて彼の腹を蹴り付け、強引に変身を解除させてしまったのだ。
「何が嬉しいって……」比奈と思しき人物が、倒されて何も出来ない映司を見下ろしながら言う。「労せず残りのメダルが手に入るからに決まってるじゃないですか、映司くん」
そう言って不気味に笑う彼女を見て、映司は即座に確信した。彼女は泉比奈じゃない。誰かが彼女に化けた偽物だ。確信したはいいが、胸を蹴られて呼吸がおぼつかない今、奪われたメダルを取り戻すどころか、立ち上がることすらままならない。
映司からメダルを奪ったことで、彼女の興味はディケイドに移る。ディケイドは取られてなるものかと身構えるが、立っていることすらやっとなディケイドにはどうすることも出来ず、比奈の回し蹴りを喰って地に伏し、持っていたメダルを全て奪われてしまった。
「……アポロガイスト様、メダルが全て――出揃いました」
彼らからメダルを奪い取った比奈は、スクエア周辺で唯一セルメ

ダルに変換されていない、液晶画面付きのビルの前に立ち、手にしたメダルを掲げる。同時に彼女は人の姿から、涼やかな水色の外殻に、頭から二本の触角を、両肩から三本の触手を生やし、右腕に巨大な鋏を付けた海老の化け物へと変わった。

ビルに備え付けられた液晶は彼女の声に応じるかのように一人で に起動し、浴衣を羽織った壮年の男性の顔が画面一杯に映った。

「ふふふ、よくやってくれた。さすがは私の懐刀なのだ」アポロガイストは画面下に映る海老の化け物に礼の言葉を掛けると、オーズたちと観衆全てに目を向けて言った。「これでライダーのコアメダルは全て我が手中に落ちた。そしてオーズ、貴様が大切に想っているこの女もまた、私の手中にあるのだ！　返して欲しくばこの町の外れにある『湯谷温泉ウェイランド』に来るのだ。貴様ら二人だけでな。繰り返す。メダルと女を返してほしくば、『湯谷温泉ウェイランド』まで来るのだ。いつまでとは言わないが、私は我慢弱い。待たせると両方ともどうなっているか、保証は出来ぬぞ。それでは、さらばなのだ」

「待て……この……ッ」

「比奈ちゃんを……メダルを……返せ……ッ」

液晶から男の顔が消えると共に、比奈に化けた海老の化け物も何処へと去って行く。

先程まで仮面ライダーの勝利に湧いていた大観衆も、水を打ったように静まり返っていた。

第十四話：「炸裂黄色のコンボとライオンの最期と裏の裏の裏」（後書き）

◆昨日のうちに掲載したものですが、あまりにも尻切れのラストで、読まれている方に申し訳ないと思い、改めて掲載し直しました。昨晩見てくれた方には申し訳ございませんです。

◆デッドライオン

「仮面ライダーストロンガー」第二十五話及び二十六話に登場した、ブラックサタン最高幹部。

ブラックサタン首領からの信頼も厚く、幹部勢の中で唯一首領との越権を許されていた怪人ですが、序盤から中盤まで長きに渡って活躍したタイタンや、雇われ幹部のジェネラル・シャドウに比べると実力の方はぼちぼちな印象。

本編ではストロンガーとの戦闘の最中突然フェードアウトし、ブラックサタン壊滅と共に消息を絶って、以後行方不明となる（デルザーの怪人たちに倒された様子も無し）前代未聞のラストを遂げましたが、これは『ブラックサタン壊滅』と『新組織・デルザー軍団の登場』という二大イベントが同じ話に重なって、入って然るべきのデッドライオンのトドメが尺の都合でカットされたという事情……らしいです。

当初は『トラメダル』を際立たせるべく、背中に砲門を背負ったBADANの『タイガーロイド』を彼のポジションに用意するつもりだったのですが、『デッドラトラーイオン』という本気だか冗談だか分からないネーミングが強烈に頭に残ってしまったので、彼をアポロショッカーの幹部に迎えることに。

そういえば、彼の腕は『デッドハンド』というものらしいですね。結局反映されず独自の武器を装備させてしまっているのですが。

第十五話：「僅かな希望と旧友の再会と潜入湯谷温泉」（前書き）

オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー　前回までの三つの出来事！

一つ！　怪人・ギリザメシャウタスの罠によって沖合いまで誘き出された映司と士は、ファイズメダルの力を駆使してギリザメシャウタスに勝利する！

二つ！　捕まった伊達、後藤、里中、比奈たちを救うためアポロショッカー最高幹部・デッドライオンに挑み、ファイズ・電王・アギトの『黄色のコンボ』で逆転勝利！

三つ！　奪い返して集めた八枚のライダーメダルが、比奈に化けたアポロショッカーの手下に奪われてしまった！

第十五話：「僅かな希望と旧友の再会と潜入湯谷温泉」

※※※

アポロガイストによる街頭の電波ジャックから一夜開けた朝。士と映司は町の総合病院に搬送され、治療を受けていた。

比較的軽傷だった映司と違い、左肩と胸部に深い傷を負った士は、上半身の殆どに包帯を巻き、当て木をされて、医師から絶対安静を宣告されたが、当人が首を縦に振る筈もなく、今後の策を練ろうと、映司や後藤たちを自分の病室に呼び寄せていた。

「殴り込みだ、それしかねぇ」当て木で満足に動かせない左手を強引に振り上げて、士が叫ぶ。「どのみち奴とは決着を付けなきゃならねぇんだ。さっさとケリ付けて何もかも終わりにしようぜ」

「傷だらけで無理しようとするのには今さら突っ込みませんけど……」映司は士の左手を納めつつ言葉を返す。「いくらなんでも無茶ですよ。メダルを全部奪われて、士さんもそんな状態じゃあ。確かに場所を指定して呼びつけられましたけど、裏に何かあるに違いありません。何も出来ない俺たちを一方的になぶるつもりなのかも」

「何もない？　そいつは、どうかな」士は右手で左足のポケットを探り、青と黄色のメダルをベッドの上に置いた。「希望は投げ捨てるもんじゃあねぇぜ、映司」

「これって……『ブレイド』と『ファイズ』のメダルじゃないですか、なんで士さんがこれを」

「あんまり俺を舐めるなよ。今の俺じゃあ奴らにゃ敵わねぇ、そんなことはとっくのとうに分かってんだよ。あの海老野郎が俺の手からメダルを奪う瞬間、黒タイツ共を倒して奪ったセルメダルとすり替えてやったのさ。ろくに確認もしねぇで逃げて行きやがったってよ。まったくお笑いだぜ」

「す、凄い……凄いですけど、それが俺たちの手にあるのなら、何で」
「”ここまで攻めて来ないか”……だろう？」士が口を挟む。「簡単さ。俺たちをそこまで誘ってるんだろ。お前の言う通りだよ、こいつは紛れもなく罠だ。俺たちが何もせず敗北を受け入れるわけがない。僅かでも希望が残っていたならば、仮面ライダーはきっとやって来る。そう踏んだんだろう。尤も、希望の有る無しに関わらず、行かなきゃあの娘の命が無いわけだが」
士の言葉に映司は言い返すことが出来ず押し黙る。こうしている間にも、アポロガイストの元に捕らえられている比奈は何をされているか分からない。しかし、たった二枚のメダルと傷だらけの士の二人では、正面から乗り込んでも何も出来ずに倒されてしまうだろう。
どうすべきかと頭を悩ませる彼らの前に、豪快な笑い声を響かせ、病室の扉を勢いよく開けて鴻上が入って来た。
「やぁ、門矢君に火野君！　思ったより元気そうで私も嬉しいよ！　差し入れを持ってきたよ、存分に召し上がりたまえ」
そう言って鴻上が手にした箱から取り出したのは、見るからに甘そうなホールのショートケーキ。取り皿とケーキカット用のナイフを準備しているあたり、士たち以外にも食べさせようと思っているらしいが、どう考えても見舞いに持ってくる品ではない。
「おいおい会長よぉ、見舞いにケーキはないと思うぜ」伊達が言う。「他に色々あんだろう、おでんとかおでんとか……あぁ、あと、おでん」
「いやいや、おでんはもっと見舞いに適さないのでは」すかさず後藤が突っ込みを入れた。
「ありがたくいただきます、けど」このままでは埒が明かないと、映司が彼らの間に割って入った。「鴻上さんがわざわざ来るくらいですし、ケーキを運んできただけじゃあ……無いんですよね？」
「さすがに鋭いね。その通りだよ火野君」鴻上の目が鋭く光る。「

私がここに来た目的は、奴らにメダルを奪われ意気消沈の君たちの激励、及び……、『逆転』の秘策を伝えること、だ」
彼の言葉に、病室内の誰もが色めき立つ。鴻上はそれを見てうんうんと頷くと、軽く手を叩いて「いいかね」と話を切り出した。
「君たちに朗報だ。敵の輸送列車・『ガンガンライナー』から奪取した、『物質メダル変換装置』。その修理が漸く完了したんだ。サソリに組み込んで発射すれば、数キロ先からでも奴らをメダルの塊に変えることが出来るだろう」
「凄い……！　やりましたね鴻上さん！」
映司は反撃の手立てを得て喜ぶが、士は逆に渋い顔をして鴻上に言い返す。
「待てよ。昨日も言ったが、そいつは元々奴らの所有物だぜ。デッドライオンが伊達たちを人質に取った時も、メダルは欲しがったが、そいつを持ってこいとは一言も言わなかった。ンな末恐ろしいものを取り返さず放っておくってことはだな……」
「勿論、分かっているよ」士の方に顔を近付け、鴻上が答える。「罠だと言うことだね。しかし、今の君やメダルを奪われた火野君が、アポロガイストに正面から挑んで勝てる訳がない。こういうことを当人の目の前で言うのは忍びないがね、少しでも勝てる可能性があるなら、我々はそれにすがるしか無いのだよ」
「舐めたこと言ってくれるぜ。確かに大分痛め付けられたが、それでも俺たちが負けると、そう思ってンのか？　あんた、仮面ライダーを信じているんじゃなかったのか？」
「誤解しないで欲しいね。私は君たちの力を信じていない訳じゃない、勝てる見込みがまるで無いと言っているだけだ」
「言い方を変えただけじゃねぇか、いちいち癪に障る野郎だな。まともにやり合って勝ち目が無いのは分かってるよ、だったら奇襲でも闇討ちでも何でもすりゃあいい。メダルを取り返して自力で逆転してやらぁ」
「奇襲！　そうか、奇襲か……」その言葉を待っていたとでも言い

たげな顔をし、鴻上は笑みを浮かべた。「その通り。今の君たちが奴らに勝てる見込みがあるとすれば……、闇討ちをして戦力を取り返す以外に無い。よくそこに気が付いたねぇ」
「気が付いたねえ、だと？　馬鹿にしやがって、分かってて黙ってやがったな」
「それは仕方が無いよ。こういうものは、自分で気付かなければ意味がないからね」
「いや、分かってたんなら最初から教えろよ！」
「まぁまぁ、まぁまぁ」鴻上と士の間に映司が割って入る。「俺たちが喧嘩したって何にもなりませんよ。それに奇襲を掛けるって言っても、場所が分かっているだけじゃあ無理ですよ。奴らだって馬鹿じゃない。大方の出入口は塞いでいるに決まってます」
「それもそう……だな。おい、オッサン！　あんたは俺が奇襲を掛けるって分かってたんだろう、だったらその辺はどうなんだ？」
「安心したまえ。実はここに来る前に、湯谷温泉の利権者から協力が得られてね。侵入ルートについては、彼に聞けば問題無いだろう」
「何、本当か！？　だが……」
「一体何者なんです。なんで俺たちに協力を」
「ふむ。確かに、顔合わせしておく必要はあるかな。入りたまえ」
鴻上の求めと手叩きに応じ、病室に一人の男が顔を見せる。上下揃いの黒スーツを身に纏う、映司と同じ歳くらいの男性だった。
「あ……、君は！」彼の顔に見覚えがあったのか、映司は声を上げて彼に駆け寄った。「北村、北村じゃないか！　久しぶり！」
「あぁ、久しぶり。映司こそ、代わり無いか？」
映司と親しげに話すこの男。彼の名は北村雄一。若くして不動産会社の取締役となった男で、映司が高校生の頃の友達だ。
「ちょっと待った。お前が鴻上さんといるってことは」
「あぁ、湯谷温泉ウェイランド。あれはうちの会社が買った所さ。日本全土がアポロショッカーに蹂躙されている中、俺は所有している物件の被害状況を調査していたんだが、何故かあの温泉だけ電話

が繋がったのに連絡が取れなかったんだ。他の所がみんな不通だったのにだぜ。何かある、と思って調べてみたら、案の定……」
「アポロガイストが建物を占拠してた、ってことか？」
「そう。街を好き放題に壊しまくって、どさくさ紛れに乗っ取りやがったんだろうな。それでこれが……」
北村はホチキス留めされた数枚の紙を映司に手渡して、話を継ぐ。
「こいつは湯谷温泉ウェイランドの見取り図だ。奴らが温泉を占拠してまだ日が浅い。敷地の全てを把握している訳じゃない筈だ。使ってくれ、映司」
「うん。使わせてもらうよ、ありがとう、北村」
映司は見取り図を士たちに渡し、北村の差し出した手を固く握り締める。彼を見る北村の目が妙に熱かったのだが、映司は色々あって興奮しているのだろうと思い、触れることなく流した。
受け取った見取り図を流し見した士は、それを映司に突き返すと、鴻上の持ってきたケーキに強引に手を突っ込んで口に運び、腹ごしらえをした上で映司たちに言った。
「作戦は決まった。この際だ、動かせる駒は全部動かすから、気合入れて掛かれよ、てめぇら」
彼の目に先程までのような焦りや必死さはない。今ある戦力でやれることを把握し、その上で考えての事だろう。映司たちはそれを理解した上で、彼の話す策に耳を傾けた。

※※※

湯谷温泉ウェイランド。五年ほど前にオープンした十階建てのビルで、三階層にも渡る温泉の他、トレーニングルームにバッティングセンター、ボーリングに多数のレストランを構え、宿泊施設を完備した大型レジャーランドだ。
物は決して悪くないのだが、駅からは近くても駐車場には恵まれず、遠方からの客を上手く呼び込めず、あまりに手広く広げ過ぎた

が故に維持費が経営を圧迫するようになり、遂に先月、北村の会社に吸収されてしまった。
アポロショッカーに占領され、利用客の代わりに武器を持った黒タイツたちが跋扈する温泉の入口に今、鴻上ファウンデーションのロゴが入った一台の車が突っ込んだ。

突然の襲撃に慌てふためく戦闘員たち。彼らが平静を取り戻して銃を構えるよりも先に、車のドアを毛破って、二人の仮面ライダーが姿を現した。ライダーの存在を感知したことで建物内全域に警報が鳴り響き、全ての階で待機していた戦闘員たちが一階に雪崩れ込んで来る。

「あぁ、あぁ。派手にやっちゃったねぇ。いいのかよ？」
「経費で落ちますから、問題ありません。先は長いんですから、余計な負傷は極力避けませんと」
ドアを毛破って出て来たのはディケイドたちではなく、二体のバース。その口振りと全身の赤いラインから察するに、一人は伊達で間違いないようだが、もう一人は男が装着しているにしては腰付きが細く、声にも色艶がある。後藤ではなく里中が装着しているようだ。

「りょーかいりょーかい。んじゃ早速……稼ぎますか！」
「調子に乗って足元を掬われないでくださいよ、伊達さん」
二人のバースはバースバスターを構え、波のように押し寄せる黒タイツたちに向かって行った。

第十五話：「僅かな希望と旧友の再会と潜入湯谷温泉」（後書き）

◆一日空いた上にだらだら更新で済みません。もしかしたら明日は更新をお休みするかもしれません。

◆北村雄一

「オーズ」本編３３，３４話に登場した映司の親友。引き籠りだったが映司によって夢を持つ素晴らしさを知り、若くして会社の取締役になるまでに成長。その時の礼にと、自社で買い取ったレジャーランドに映司たちを招待するのだが――

変な人枠としてどこかで出そうと考えて色々話を練っているうち、『アポロガイストが風呂に入ったりマッサージチェアにかかっている』場面を思い付いたので、せっかくだからそこで出そうと考え、こんなことになりました。

本編では映司に落としたメダルを渡して以降、プトティラに襲われ掛けた辺りでフェードアウトして、その後が一切描かれず、色々と不満が残っていたのですが、チョイ役だとしてもここで出せてそれなりに良かったと思います。

時間が許せば、もうちょい映司との絡みも書けただろうに……。

第十六話：「大暴れバースと強敵青海老と傷だらけ大逆転」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、火野映司の所持しているメダルは――

◎ヘッド・コア：ファイズ・コア
◎アーム・コア：ブレイド・コア
◎その他：サゴーゾ・コア、シャウタ・コア、ラトラータ・コア、割れたタカ・コア

第十六話：「大暴れバースと強敵青海老と傷だらけ大逆転」

※※※

「面倒臭ぇなぁ、こいつで一気にトドメを刺してやる」
――ブレスト・キャノン
――クレーン・アーム
――ドリル・アーム
――ショベル・アーム
――キャタピラ・レッグ
――カッター・ウイング

群がる黒タイツたちに辟易した伊達は、一気に五枚のセルメダルをドライバーに投入し、バース全ての装備をその身に纏わせる。重武装形態『バース・デイ』だ。

胸部に装備されたキャノンが火を噴いて、遠方の黒タイツたちを跡形もなく吹き飛ばし、飛び掛かる者には先にドリルの付いたクレーンが縦横無尽に宙を舞い、粉々に打ち砕いていく。

しかしいくら減らしても、元はセルメダル一枚から産まれた屑ヤミーもどき。代えは無尽蔵で倒しても倒しても切りがない。次々と補充され行く戦闘員たちを見て溜め息を着く伊達に、何故か建物の外に出ていた里中が声を掛ける。

「伊達さん、私たちの仕事を忘れたんですか？　最初からそんなに飛ばしていたら、後まで持ちませんよ」

「だっ、だからってなんで外に出てるのよ里中ちゃん。そう思ってるなら手伝ってくれって！　全部乗せって小回り効かなくてしんどいんだぜ」

「ご安心を。何もサボりに行った訳じゃありません。準備をしていただけです。入口から、離れた方が良いですよ」

「準備って、一体何……をぉッ！？」

何の為にと問おうとした瞬間、伊達の声は建物の外から聴こえてきた”雄叫び”に掻き消されてしまう。これはやばいと入口を離れた伊達を追うように、トラの顔を模した形状のバイクが湯谷温泉のフロントに押し入った。
「おいおい、おいおい……」伊達が目を見開いて言う。「里中ちゃん、これって」
「トライドベンダーです。私たちが直接蹴散らすよりも、こうした方が楽で良いでしょう？　ですが近付かない方がいいですよ。火野さん以外にあれは制御出来ませんからね」
伊達はその言葉を聞きつつトライドベンダーの向かった方向に目をやる。機械でありながら本物のトラ以上に俊敏な動きを見せるそれは、噛み付きや地響きで黒タイツたちを圧倒し、彼らの数をみるみるうちに減らしていった。
「うっひゃあ、凄まじいもんだぁなぁオイ。里中ちゃんの言う通り、先はまだ長そうだし、ちょこっとだけ休ませて貰おうかね」
「どうやら、そうも行かないようですよ、伊達さん」
トライドベンダーに後を任せ、腰を下ろして休まんとする伊達を、里中が待ってくださいと止める。それもその筈、白装束を身に纏い、サーベルを腰に差した口裂けの怪人が、屋根を突き破って降りてきたのだから。
「よくぞここまで。しかしお前たちはお呼びでは無い。この私、『改造ジェネラル・シャドウ』があの世に送ってやろう」
ジェネラル・シャドウと名乗る怪人は両腰からサーベルを引き抜き、切っ先をバースたちに向ける。里中たちは最初こそ面を喰らったが直ぐに持ち直し、各々武器を構えてにやりと笑った。
「面白ぇ、むしろ助かるぜ。掛かってきなよ、怪物君」
「伊達さん、奴との戦いは業務内容に含まれておりませんので、相手の方、宜しくお願いします」
「ちょっ、そりゃあ無いでしょ里中ちゃぁん、一緒に戦ってくれよォ」

「『計画』の為ですし、仕方がありせんね。ですが特別手当……、伊達さんの報酬から引かせて頂きますからね」
伊達は掛かって来いよと拳を鳴らし、里中はバースバスターを構えて、改造ジェネラル・シャドウに向かって行った。
※※※

仮面ライダーバースが激しい戦いを続けている中、士と映司は四階と五階を繋ぐ通気孔を通り、密かに湯谷温泉に潜入していた。
「さっきの銃声……かなり大きかったですね」前を進む映司が言う。
「伊達さんと里中さん、大丈夫でしょうか」
「安心しろ」後に続く士が答える。「奴らが失敗してたら、俺たちはここまで来られねぇさ。とっくに捕まってる」
「何気なく怖いこと言わないで下さいよ」
「事実を言った迄だぜ。黒タイツ共なら兎も角、『ワーム』や他の怪人たちと出くわしたら勝ち目がねぇんだからな」
物事を悪い方へ、悪い方へと考えてばかりの士に辟易とする映司。見かねた士は悪かったよと言って話を変える。
「落ち込んでる場合じゃねぇぞ映司。この作戦は俺たち全員が一丸となって当たらなきゃ成功者しねぇんだ。
伊達たちが下で暴れて、奴らの戦力を分散させる。その隙に俺たちがここに忍び込んでメダルを奪い返す。アポロガイストが慌てて俺たちを追ってきたら、屋上までゆうどうして、十キロ先の狙撃ポイントで待機している後藤が奴を撃ち抜いて、セルメダルに変えてやる。俺たちが気ぃ抜いて仕損じてみろ。それこそ伊達たちの命に関わるんだからな」
「す、すみません……」
「分かりゃあいいんだ」士が生意気そうに鼻を鳴らす。「それよりも、メダルの気配はこっちの方で合ってンのか？　俺にとっちゃあそっちの方が心配なんだがな」

「この先で間違いありません。近付いてるのが分かりますから」
ライダーメダルによってオーズに変身し、かつ二枚のメダルを持ち歩いている映司には、他のメダルの気配が掴めていた。メダル自身が怪人たちの下にいるのを由としないからだろうか。理由ははっきりしないが、敵に出会さずメダルを奪取するには絶対に必要な力であることは間違いない。
狭い通気孔の中を四つん這いになって進むうち、突然先導する映司の足が止まる。士は漸く着いたのかと身構えるが、映司はそうではないと彼に言う。
「近いです。かなり近いですけど……、この先には進めませんよ、士さん」
「何故そんなことが言える。何も変わった様子は無いが？」
「見えるんですよ。この先に張り巡らされた『不可視の赤外線センサー』が。うっかり通過して見付かりでもしたら、作戦失敗どころか逃げ場すらなくて御陀仏ですよ」
「赤外線センサー、ね……」映司の言葉を聞くうち、彼の言葉の中にある矛盾に気付いた士は、おかしいだろと声を荒げた。「待て待て。不可視の赤外線が何故お前に見えるんだよ」
「メダルの力ですよ。恐らく……ファイズのメダル。あれを身に付けているお陰で、普通は見えないものまで見えているのかも」
「成る程ね。理屈は分からんでもないが……、見えたからといってどうするんだ？　見つかるとやばいからこのまま大人しく引き下がる……とでも？」
「勿論、どうにかしますよ。士さん、悪いんですけど、俺のズボンのポケットの中からファイズのメダルを取ってもらえませんか？　こう狭いと後ろに手を伸ばすのも大変で……」
「おぉ、任せろ」
映司に言われ、彼の右ポケットを探る士。ファイズのメダルはすぐに見付かった。見付かったまでは良かったが、それと同時にヒビが入って、二枚に別れた赤色のメダルまで落ちてきてしまった。

「おっと、悪ぃ悪ぃ。何だこの……割れたメダルは」
「あぁそれは、俺の昔の相棒の形見です。御守り代わりにいつも持ち歩いてて」
「御守り……ね」士は赤色のメダルを自分の懐にしまいつつ言う。
「んじゃ、こいつは一先ず俺が借りとくぜ。祈る神なんざ居やしねぇが、気休めくらいにはなるだろうしな」
「そいつに願掛けしたら叶うどころか、逆に願いを叶えさせられますよ。それよりもファイズのメダルを」
「おぉ、悪い」
士は映司の顔の近くまで手を伸ばし、ファイズのメダルの受け渡す。映司はそれを握り締めて大きく息を吐くと、目に力を込めて紅色の光線を放って、赤外線センサーを焼き切った。
「おぉ、すげぇなそれ。外国映画の一つ目男みたいだ」
「何です、それって」
「知らないなら別にいい。それよりもメダルの方はどうだ？」
「通気孔の中にまでセンサーを張っているだけありますね。この下で間違いありません」
「よぉし、よしよし」士は映司にブレイドのメダルを手渡して言う。
「ここを突き破れ映司。一気にカタを付けるぞ」
「分かってます。行きますよ！」
ブレイドのメダルを握り締めた映司は、胸から現れた『ブレイドソード』で通気孔に穴を開け、その下に広がる空間に飛び降りる。
後はメダルを奪って逃げるだけだ。そう思って彼らが降り立った先にあったのは、奥に踊り場が設けられ、数百人もの人が収用出来そうな程大きな『宴会場』だった。
こんなところの何処にメダルがあるのかと周囲を見回すが、それらしきものは何処にも見当たらない。
「おい映司、こいつはどういうことだ。メダルどころか、怪人たちすら見当たらないじゃねぇか」
「俺に聞かれても困りますよ。おかしいな……確かにここで反応が

あった筈なのに」
――貴方の判断は間違っていませんよ、映司くん。

動揺して周囲を見回す映司の耳に、踊り場の方から女性の声が届く。気付いてそちらに顔を向けるが、そこには誰もいない。空耳だったかと振り返った映司の目に映ったのは、髪を結い、艶やかな和装に身を包んだ泉比奈の姿だった。
「比奈ちゃん！？　そうか、無事だったんだ」そこまで言いかけた映司の口を隣に立っていた士が塞ぐ。
「姿形に惑わされるな。奴は泉比奈じゃねぇ、人に擬態する能力を持った怪物・ワームだ」
「ワーム？　ってことは、比奈ちゃんは……」
「その通り」比奈の姿をした怪人が映司に言う。「本物の泉比奈はアポロガイスト様の元で貴方達のお着きを待っています。すぐにでもご案内したいところですが、その前に貴方達がお持ちになられている二枚のメダル。それをこちらまで渡して頂きたいのです」
密やかにメダルを回収するつもりが、今の時点で一番手強い怪人と鉢合わせしてしまった。体勢を立て直して逃げようにも、彼女から逃げ切れる自信はない。かといって負けを認め、彼らの言いなりになってしまうのは嫌だ。正面から迎え撃つしかない。
覚悟を決めた二人の男は、ワームの問いに対して首を横に振った。
「案内なんか必要ない。比奈ちゃんは俺たちだけで迎えに行く」
「ついでにお前の持ってるライダーメダル、そいつをいただいていくぜ」
あくまで抵抗を決め込む二人に対し、ワームは表情を変えることなく「そうですか」と呟いた。
「なら、貴方達を始末して頂くことにします。宜しいですね」
そう言った瞬間、ワームの体は和装の比奈から、水色で全身に斑点の入ったの体表に、頭から二本の触角を、両の肩口から三本の触手を生やし、右腕に巨大な鋏を備えた、”海老”のような姿へと変

わる。
映司は迎え撃つべくブレイドソードを構えるが、士は「お前はいい」と手で御した。
「何をするんです士さん、これ以上変身したら、あなたは」
「”クロックアップ”持ちを変身せずに倒せるもんか。腹ァ括れよ映司、俺はもう括ったぜ」
――変身！
――ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　「ＤＥＣＡＤＥ」！
士は映司の制止を振り切り、左手の当て木を強引に引き千切ってディケイドに変身。傷だらけの体で単身海老のワームに向かって行った。
ワームの体が一瞬ぶれたように震え、姿が消える。逃げたのかと思われたがそうではない。その証拠に、ディケイドが見えない何かに、反撃も防御も出来ないままたこ殴りにされているのだから。
仮面ライダーカブトに変身して、自身もクロックアップで対抗出来れば良いのだが、今の彼にクロックアップやファイズ・アクセルフォームは負担が大きすぎる。高速移動で対抗するのは不可能だ。
「ちきしょう、好き放題やりやがって……あぁ、痛てェ」ディケイドはふらつく体に鞭打って立ち上がる。「このままで済むと思うなよ、くそッ」
「やっぱり無茶ですよ士さん！　いい加減逃げた方が」
「腹は括ったっつったろうが、こんなもん屁でもねぇ。それにな、反撃の手が無いわけじゃねぇんだよ。耳貸せ映司」
比奈の姿になって迫り来るワームを前にし、ディケイドは勝機ならあると映司に耳打ちをする。最初こそ驚いたものの、自身の役割に納得した映司は、剣を構えたまま引き下がり、ディケイドはゆっくりと体を起こしてワームの方へと歩を進めた。
「作戦会議は終わりましたか？　何をしても無駄だと思いますけど」
「無駄かどうかは、こいつを見てから言ってもらおうか、覚悟しな！」

――ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ「ＫＡＢＵＴＯ　ＭＡＳＫＥＤ」
自信満々にそう言い放ち、フォームライドカードをバックルに装填。六面体の輝きに包まれたディケイドは、堅牢な鎧を身に纏った赤のライダー『カブト・マスクドフォーム』へと姿を変えた。
マスクドフォームに変身したディケイドは、ワームの攻撃を避けることなく正面から迎え撃つ。超高速移動・クロックアップが使えない代わりに、外装が強化されたマスクドフォームには、ワームの攻撃も殆ど効いていないのだ。
しかし、ワームの方もそれに甘んじる程愚かではない。彼らから奪って己の身に取り込んだ『クウガ』メダルの雷を、迫り来るディケイドに放ったのだ。物理的な攻撃なら受け流せるも、体表を通して体内を焼く電撃まで防ぎ切ることは敵わず、火花を散らして大きくのけ反ってしまう。
しかしディケイドは倒れない。両足で地を踏み締めて耐え、それでも尚前へ前へと進んで行く。こんな行為に何の意味があると言うのか。そうこうしているうちに、ワームの懐に潜り込んだディケイドは、腰のライドブッカーを抜いて、奴の体を袈裟に斬る。傷口から少量のセルメダルが飛び出たが、奴が飲み込んだコアメダルは体の中で止まったままだ。
「面倒ですね。一気に叩き潰して差し上げます」
ワームの姿のまま比奈の声でそう言って、奴の姿がディケイドたちの視界から消え失せ、彼の体が左右に揺れる。クロックアップ攻撃がまた始まったのだ。倒されはしないものの、この中に電撃攻撃を織り交ぜられては耐えられない。このまま成す術なく倒されてしまうのだろうか。
「映司、今だ！　頼んだぞ」
「は、はいッ！」
――ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「ＣＡＳＴ　ＯＦＦ」
彼らは諦めてなどいなかった。クロックアップしたワームに対抗

すべく、ディケイドは『キャストオフ』のカードをドライバーに装填。纏った装甲を弾き飛ばして、敵の攻撃を防ぐ。
そしてそれと同時に、彼の指示を受けた映司がブレイドソードにファイズのメダルを嵌め込み、剣の切っ先からフォトンブラッドの光線を放った。
放たれた光線は、弾け飛んだマスクドフォームの装甲に反射して、フォトンブラッドの網となって周囲に広がり、視認出来ない程の速さで動き回るワームの足を止めた。
「見えました！　右斜め４５度ですッ」
「よくやったぞ映司！　そおら、よッ！」
その隙を二人が逃す筈がない。ディケイドは映司の声に応じ、奴の方に顔を向けることなく、手にしたライドブッカーはワームの脇腹に突き刺さり、『カブト』のメダルを吐き出させることに成功したのだった。
「おうおう、まだ倒れてくれるなよ。これで終いにしてやるんだからなァ！」
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「Ｋａ－Ｋａ－Ｋａ－ＫＡＢＵＴＯ」
脇腹を押えて苦しがるワームに向け、飛び蹴りを見舞うべく飛び上がるディケイド。蹴りの軌道は真っ直ぐワームの頸を狙っており、この距離ならば外しようがない。
空中より放たれたディケイドの右足が宴会場の床を貫く。しかし、それでもワームは生きていた。絶対に外しようのないこの距離で、ディケイドは何故飛び蹴りを外してしまったのか。
理由は簡単だ。ディケイドは飛び蹴りを見舞おうとしたその瞬間、ワームが擬態した人物の姿を目にし、『自分から』蹴りの軌道を反らせてしまっていたのだ。
舞い散る埃が晴れ、周囲の状況が露わになって行く。第三者である映司の目に映ったのは、飛び蹴りを外して右足を畳にめり込ませたディケイドと、彼と同じくらいの背格好をした青年の姿、だった。

「――残念だったなァ、士。俺はクウガのメダルも飲み込んでいるんだぜ。こんなもん、朝飯前なんだよ」
謎の男は荒々しい口調でそう言うと、めり込んで動けないままのディケイドを蹴り飛ばす。彼の名は『小野寺（おのでら）ユウスケ』。門矢士と共に世界を巡る旅を続けていた仲間であり、「仮面ライダークウガ」に変身することの出来る青年だ。
ワームは人間に「擬態」することが出来る地球外生命体だ。本来その人物を視認していないと擬態出来ない筈だが、奴は今、仮面ライダークウガ・小野寺ユウスケのメダルをその身に取り込んでいる。そこから情報を読み取れば、見たことがなくとも擬態することは造作もないのだろう。
普段のディケイドなら、それでもお構いなしに飛び蹴りを見舞っただろう。しかしいざ飛び蹴りが当たるその瞬間を狙われては、いくらディケイドであろうと、例え偽物だと分かっていても、彼が動揺しない訳がない。完全に不意を突かれてしまったのだ。
殴られて床に突っ伏し、足を抜かんと四苦八苦するディケイドに、鋭く大きな鋏が迫る。ワームはディケイドの恐怖に慄（おのの）く顔を見ようと、彼の顔を鷲掴みにして引き寄せる。しかしどういう訳か、ディケイドは恐れも焦りも見せず、ただただワームの顔を見て笑っていた。
「どうした？　何がそんなにおかしい」ユウスケの声でワームが言う。「万策尽きて笑うしかなくなったか？　あァん」
「馬鹿言え、俺は最後まで諦めねぇよ。それこそ最後の最後の最期までな。それにな、万策尽きたってんなら、俺よりもお前の方がヤバいんじゃあねぇか？　見ろよ、あれ」
「あれ？」
ディケイドに促され、自身の背後に目を向けるワーム。奴がその時目にしたのは、先程ディケイドによって吐き出された『カブト』のメダルに加え、『ファイズ』と『ブレイド』のメダルをドライバ

ーに嵌め込んだ火野映司の姿だった。

「士さん、ここからは俺に任せてください。変身！」

――ファイズ！　ブレイド！　カブト！

第十六話：「大暴れバースと強敵青海老と傷だらけ大逆転」（後書き）

◆伊達＆ａｍｐ；里中対ジェネラル・シャドウとの戦いは余裕があれば書き足します。もしかしたらカットされるかも知れません。

◆クロックアップしたワームを、マスクドフォームで倒すというカブト本編第一話の殺陣がとても好きだったので、アレンジして突っ込んで見たのですが、強引というか、無茶苦茶と言おうか。なかなか上手く行きません。

◆作中で明言していないと言うか、明確に描いていないのでここに書いておきますが、今回登場したワームは、カブト本編で（未遂とはいえ）ガタックを抹殺した憎きアイツです。次回以降紹介を追加するかも。

第十七話：「登場甲虫青コンボと必殺の一撃とシスコン兄貴」

――ファイズ！　ブレイド！　カブト！

ディケイドが取り返した『カブト』のメダルを手にし、『ファイズ』と『ブレイド』のメダルをバックルに嵌め込んでオースキャナーを読み込ませる。

円形になった仮面ライダーファイズ、ブレイド、カブトの紋章が映司の体に取り込まれ、仮面ライダーオーズへと姿を変えた。

「まだ歯向かうつもりですか。いいでしょう、貴方から始末して差し上げます」

比奈の声でそう言ったワームは『クロックアップ』を用い、オーズに襲い掛かる。視認することすら出来ない早さに抵抗すら出来ず、オーズはワームの巨大な鋏に首を挟まれて、宴会場の壁まで叩きつけられてしまう。

ワームはそのまま彼の首を千切り飛ばすべく力を込めるが、オーズは難なく鋏を引き剥がし、がら空きになった腹部を蹴り付けて距離を取った。

「お前だけが素早く動けると思うなよ。これで……どうだ！」

オーラングサークル下部のカブトのマークが赤く輝き、オーズの脚に収束して行く。オーズの姿が宴会場の中から消えた。先程までのワームと同じ現象だ。『カブト』のメダルで変身したオーズは、彼固有の力・クロックアップまで使いこなせるようになっていたのだ。

ワームの方もクロックアップで彼に対抗するが、クウガの雷と肥大化した右腕の鋏だけでは、ファイズの複眼から放たれるフォトンブラッドの光線に、両腕から迫り出すブレイドソードに、クロックアップの有り無し問わず放たれる素早い足刀を捌き切ることは出来なかった。

反撃の手立てなく、脇腹を押さえて横たわるワームに対し、ブレイドソードを構えたオーズが無慈悲に迫る。雷で動きを遮っては見るが、それも無駄な足掻きだった。

しかし、奴には切り札があった。ディケイドにしたのと同じ手だ。どさくさ紛れに比奈に擬態してしまえば、偽者だと分かっていても虚を突かれて手が止まる筈。その隙にドライバーからメダルを奪い、変身を解除させてしまえばこちらのものだ。

ワームはオーズが剣を振り上げたその瞬間、和装の比奈へと姿を変え、やめて下さいと涙目で訴え掛けた。

振り上がったオーズの手が、ワームに触れる直前で突然止まる。仮面ライダーとは言え一人の人間。感情に働き掛ければちょろいものだ。奴は比奈の仮面の下でほくそ笑み、オーズのベルトのバックルへと手を伸ばす。

しかし、ここで予想外の事態がワームを襲う。オーズが手を止めたのはあくまでフェイント。彼はブレイドソードを手の中に戻し、ワームの右頬を思い切り殴り付けたのだ。

肌の下の細かな骨や節が砕け、口から緑色の体液を噴いて床に叩き付けられる。ワームは和服の袖で鼻や口を流れる体液を拭うと、オーズに対し『どうしてだ』と問い掛けた。

「わたしの顔を忘れてしまったんですか！？　映司くん、わたしは、わたしは……」

「もう、喋らないでくれよ」オーズは左の頬を殴り付けた上で言葉を継ぐ。「痛いか？　痛いだろうね。でも俺は……比奈ちゃんをこの手で殴らなければいけないこの俺の心は！　お前よりももっと痛いんだッ」

偽者とは言え、助けを請う比奈を殴らなければいけない。今の言葉も鼻水を啜る音が入り雑じっている。オーズとて辛くない筈が無いのだ。かし、今自分が倒されたら、誰にもこのワームを倒せなくなってしまう。例え誰が相手になろうと、負けるわけには行かないのだ。

どうしてだと狼狽え戸惑うワームに対し、オーズは右足を振り上げ、奴の脳天に踵落としを叩き込む。その衝撃はワームの体を通じて地面に伝わり、踊り場の床を砕いて奴を下の浴場に叩き落とした。
オーズは逃がしてなるものかと後を追い、頭を打ってふらつくワームに右と左の連撃を浴びせ、和服の襟首を掴んで頭突きを叩き込んで、回し蹴りで『草津の湯』と書かれた浴槽に奴を放った。
湯に顔を付け、息が出来なくなった所を狙い、オーズは奴の顔を鷲掴みにして、そのまま握り潰さん勢いで力を込めた。
「や……、やめて、やめてください映司くん！」
いくら悲痛な声で訴えようとも、オーズは止まらない。ワームは泣き落としは無駄と理解し、比奈から元の海老の姿に戻り、右腕の鋏でオーズを無理矢理振り払った。
予期せぬ一撃を喰い、オーズ水飛沫を散らせて頭から湯を被ってしまう。その間に体勢を立て直したワームが彼に迫る。しかし彼はそれに動じることなく、右手に掴んだ一枚のメダルを奴に見せ付けた。
「俺を突き飛ばしたのは失敗だったな。士さんの友達は返してもらったよ」
彼の手に握られていたのは、ワームが取り込んでいた『クウガ』のメダル。今のいざござで奴の体の中から奪い返したのだ。
オーズがクウガのメダルを取り返したのを見、上の階からディケイドが声を上げた。
「映司、頭のメダルをクウガに変えろ。クウガ、ブレイド、カブト。九枚メダルの最後のコンボだ。一気に畳み掛けてやれ！」
ディケイドの言葉に頷き、メダルを取り換えんと、バックルの方に目を向けるオーズ。しかし彼がオースキャナーを手に取るよりも早く、何処からともなく現れた無数の海老ワームに押し潰されてしまった。
その様子を見て、浴槽の中にいるワームが不敵に笑う。メダルを使ったのはオーズだけではなかったのだ。

「残念でしたね、映司くん。わたしの手にあるのが仮面ライダーのメダルだと思いましたか？　アポロガイスト様はこういった事態を想定して、わたしにもう一枚、メダルを託してくれたんですよ。この、『ガタキリバ』のメダルをね」

予兆なく突然現れた無数の分身。あれがガタキリバの能力のものだとすれば得心が行く。あのまま戦っていてもワームには勝ち目がなかっただろう。良い判断だ。

しかし、だからこそディケイドはワームに向かい「甘いんだよ」と吐き捨てた。

「仮面ライダーがンな攻撃で倒れるもんか。てめぇの分身たちがどうなってるか、自分で確かめてみな」

ディケイドの言うことは本当だった。ワームの山の中から閃光が輝き、オーズを押し潰すワームたちが一瞬のうちに消し炭へと変わったのだ。黒焦げになって動かなくなったワームたちを押し退け、オーズが姿を見せる。

『クウガ』の頭は二本の角が増えて、より威圧的な顔付きになり、『ブレイド』の手には、防御に使っていた扇状に広がる「ラウザーシールド」が展開しており、『カブト』の脚はすらりと伸びて、よりしなやかに変質していた。

オーラングサークルの外枠が青一色に変化した甲虫系稲妻ライダーの形態・青のコンボだ。

「姿が変わったから何だと言うのです。分身はいくらでも増やせるのですよ」

言うが早いか、ワームは再び十数体の分身を産み出してオーズを襲わせる。その全てが鋏の先に何らかのエネルギーを宿しているのが見て取れる。ただ押し潰すだけでなく、分身もろともオーズを吹き飛ばすのだろう。

そんなものは御免被る。オーズは足に力を込め、再びクロックアップの世界へ消えた。

手首の中にしまわれていた刃が伸び、雷の力を宿して真っ赤に輝く。コンボとなって先程以上に素早くなったオーズに、ワームの分身体たちは触れることすら出来ず、皆雷の一閃をその身に浴びて跡形もなく消え去った。

――スキャニングチャージ！

瞬く間に分身を消し去られ、慌てふためくワームを尻目に、オーズは再びオースキャナーを真一文字に滑らせると、思い切り胸を張って、両の腕を背中まで引いた。

頭、腕、足から精製された雷が切っ先に集まり、オーズの二三倍はあろうかという巨大な金色の剣となった。彼はそのまま引いた腕を戻し、敵を掴むクワガタの顎のように、他の分身たちをも巻き込んで眼前のワームを挟み込む。両腕で必死に抵抗するも敵わず、ワームの体は胴から下を真っ二つに切り裂かれ、大量のセルメダルへと姿を変えてしまった。

オーズはその中から『ガタキリバ』のメダルを探し出すと、勢いを付けて跳び、宴会場まで戻ってきた。

「よぉ、大変だったな」うつ伏せになったままのディケイドが、戻ってきたオーズに言う。「今回ばかりは俺もダメかと思ったぜ」

「士さんのお陰ですよ。俺の手柄じゃありません」

「そうかい。んじゃ、そういうことにさせてもらうかね。しかしまぁ、どうするよ」

「どうする……と言いますと？」

「残りのメダルの在りかさ。ワームの奴を倒して、他のメダルはどこにある。手がかりを失っちまったんだぜ」

「あぁ、それなら心配ないと思いますよ。きっと……あそこです」

オーズは自信ありげに宴会場の天井を指差す。そこから導き出される答えは一つしかない。

「この温泉のてっぺん、ってことか。また罠だったらどうするつもりだ？」

「先ほど以上に強い気配を感じます。今度こそ間違いないですよ」
力強くそう語るオーズに対し、ディケイドの方が折れて頷いた。
「オーケイ、信じるよ。んじゃあ、先に行っといて貰えるか？　オッサン臭くて嫌だが、疲れちまってよ。休まなきゃ動けねぇんだ」
「そう、ですか……」オーズは心配そうな目でディケイドを見るが、当人はやめてくれよと手で御する。肩で息をしており、話す言葉も絶え絶え。大丈夫とは到底思えない。
仮面ライダーディケイド、門矢士は強情な男だ。一緒に戦う仲間であっても、弱いところは見せたくなかったのだろう。
ディケイドの顔とその様子に彼の思いを感じ取ったオーズは、「行ってきます」と一言かけて、クロックアップで宴会場から立ち去った。

「さぁ……てと。だましだましやって来たが、そろそろ限界、だな。よくもまぁ、ここまで良く持ったもんだ、すげぇよ、俺」
ディケイドはそこまで言うと、大の字になって寝転がり、ゆっくりと目を閉じた。

※※※

「フハハ、仮にも仮面ライダーを名乗っているくせに、この程度か、仮面ライダー・バース！」
「なわきゃねぇだろ、こっからが本番なんだよ！」
その頃、湯谷温泉の一階では、伊達・里中のバース二機と、アポロショッカー最後の刺客・改造ジェネラルシャドウが戦いの火花を散らしていた。とは言え、トランプを用いたジェネラルシャドウの変幻自在な攻撃に、索敵能力を持たない伊達たちは苦戦を強いられ、攻めあぐねていた。
焦りに駆られ、勢い任せな伊達のドリル・アームが飛ぶ。しかしジェネラルシャドウは半身を引いて難なくかわし、自慢の剣で伊達

のドリルを叩き斬ってしまった。
「なッ！　俺のドリルが……一撃でェッ！？」
「敵を前にそうも呆けていられるとは、余裕だなッ」
ジェネラルシャドウの攻撃は尚も続く。伊達が先の折れたドリルに気を取られた隙を突き、胸の大砲を横薙ぎに裂いたのだ。ブレスト・キャノンの砲口は上と下でぱっくりと分かれしまっており、このまま発射したとしても、ジェネラルシャドウを穿つのは不可能だろう。
「ちきしょう……あの口裂けトランプマンめ、調子に乗りやがってからに」バースの鎧の中で、伊達は悔しそうに唇を噛む。「おぉい里中ちゃんよ、あぁいうのを黙らせる武器、何か付いてねぇのかなあ」
「カッター・ウィングで室内を飛び回る訳には行きませんし、あぁも素早い相手を捉える武装はバースにはなかった筈です」
「おいおい、そりゃあねぇよ里中ちゃん。負け認めて尻尾巻いて逃げろっての？」
「そうは言ってません。力付くで敵を抑えられないのなら、隙を突いて叩けばいいだけじゃないですか」
「フハハ。貴様ら、敵を前に仲間割れとは随分と余裕だな。まぁ、それも良かろう。こちらの準備はとっくに終わっているのだからな」
ジェネラルシャドウの言葉を聞き、伊達と里中は自分たちの周囲を見回す。二人はいつの間にか、人一人位に大きい、絵柄が全て『スペードのキング』の八枚のトランプに囲まれていた。
「な、なんだよこりゃあ……。手品でもやろうっての！？」
「手品……そうだな、手品だ」ジェネラルシャドウが不敵に笑う。「貴様らに見せてやろう、背筋も凍る我が奇術をな。必殺・『トランプフェイド』！」
技の名前を叫んだと同時に、ジェネラルシャドウの体はトランプの中に消え、一瞬のうちにバースたちの背後に回って、彼らを背中から斬り付ける。

里中は逃げ去るシャドウに向け、手にしたバースバスターの引き金を引くが、ジェネラルシャドウは銃弾が当たる寸前にまたもトランプの中に消え、今度は右斜め前のトランプから姿を見せて、バースバスターを里中の手から振り落とした。
「こんな……、馬鹿なッ」
「フフン、驚くのはまだ早いぞ小娘。そぉら、お返しをしてやろう」
「お返しとは何だ」と里中が言おうとした瞬間、彼女たちの目の前のトランプから、先程当たらずに消えたバースバスターの銃弾が襲ってきた。さっき撃ち込んだ所と別の場所から、自分の撃った銃弾が返ってくる。これは一体どういうことなのか。
ジェネラルシャドウの猛攻は続く。自分たちに向けて放たれた銃弾の謎を解き明かす間も無く翻弄され、慌てふためく里中とは対照的に、伊達は落ち着き払って彼女に言った。
「冷静になれよ里中ちゃん。あいつが何をして来ようが関係ねぇ、奴があの八枚の中から出て来るんならよ、待ち構えて撃ち抜けば良いだけの話だ。俺と背中合わせになれ。俺が四つ、里中ちゃんも四つ。確率は二分の一だ、大したこたぁねえ」
大雑把ではあるが、伊達の言うことは尤もだ。隙を窺って突くことしか活路がない今、敵自ら隙を見せてくれると言うのなら、それを突かない手はない。里中は「すみませんでした」と一礼し、払い落されたバースバスターを再び構えた。
伊達から見て左斜め、スペードのキングからジェネラルシャドウが顔を出す。相手が剣を出すよりも早く、伊達は左手のショベルアームで奴の顔を殴り付けた。
顔の形が変わるほどの力で殴られ、金属と金属がぶつかり合って砕けたかのような嫌な音を響かせつつ、トランプの中から奴が顔を出す。伊達はこのまま止めだと更に振り被るが、スペードの絵柄の中から出て来たそれを見て手が止まった。
「おいおいおい、なんだよこいつは！」
「シャドウの……マスク！？」

伊達が殴り倒したのは確かにジェネラルシャドウだった。しかし、シャドウなのは顔だけで、首から下は黒タイツのそれとなっている。どういうことだと戸惑う二人の背後から、本物のジェネラルシャドウが飛び出し、またも彼らの背中を斬り付けた。

「フハ、ハハハ。出てくるのが私だけだと誰が言った。まんまと罠に掛かりよって、今度こそ終わりにしてやる！」

動けないでいる二人のバースに、『シャドウ剣』を構えたジェネラルシャドウが迫る。対抗しようにも、何度も背中を斬られて立ち上がれず、かわすことすら敵わない。最早どうすることも出来ないのか。

少なくとも、ジェネラルシャドウはそう思っていた。何も出来ず無様にうつ伏せになった彼らに何が出来る。

だがここで、シャドウはおろか、伊達すらも予想外の出来事が起こった。彼らに止めを刺そうとしたジェネラルシャドウが、トランプの壁を突き抜けて飛んできた光弾によって、温泉の受付カウンタまで吹き飛ばされてしまったのだ。同時にシャドウの力で実体化していたトランプも、硝子が砕けるように粉々に散ってしまう。

もうダメかと挫けそうになっていた伊達は、いつまで経っても襲われないことに疑問を抱いて体を起こし、シャドウがカウンタの奥で動けないでいる事に気付く。

どうなっているんだと目を白黒とさせる伊達とは対照的に、里中はゆっくり体を起こして「間に合ったみたいですね」と呟いた。

「間に合った……ってぇ、どういうことだよ」伊達は訳が分からないと里中の襟部分を掴んで問う。

「あの方ですよ、ほら」

里中はそう言って伊達の目を入口の方に向けさせる。そこに立っていたのは、ブレスト・キャノンの反動で床に手を付き、肩で息をする仮面ライダーバースだった。

「後藤ちゃん！？　なわきゃあ、ねぇよな……。ありゃあ一体何者だ」

「そのことは後で追々……。取り敢えず今は」
「おぉ、分かってるよ。任せときな！」
里中に言われ、伊達はジェネラルシャドウの方へと向き直る。不意の一撃で相当な深傷を追ったらしく、剣を杖によろよろと体を起こしている最中だ。これ以上の隙は無い。
伊達は背中のカッター・ウィングを取り外して投げ付け、シャドウの右腕ごと斬り裂くと、ショベル・アームでウィングが刺さった壁まで押し込んで、シャドウを壁に釘付けにした。
「ぐ……おぉ、お……」
「散々手こずらせやがってからに……、これで、仕舞いだぜ！」
伊達は左足のキャタピラ・レッグをシャドウの腹部に押し付けた上で右腕を思い切り引き、先の折れたドリル・アームを奴の顔に叩き込んだ。
先が折れたとは言えその威力は凄まじく、ドリルはジェネラルシャドウの顔を骨ごと捩って回転し、首と胴体を千切り飛ばして彼をメダルの山へと変えた。
「どうだい口裂け男、先が折れたってドリルはドリルなんだぜ。舐めんなよ」
伊達はそう言って大きく息を吐き、変身を解除して入口で膝を付くバースに声を掛けた。
「よぉ、助かったぜ。あんた、一体何者だい？」
「いや、あの……」バースは顔も上げられないまま答える。「すみません、これ、どうすれば元に戻れるんですかね……？　重くって、重くって」
「なんだァ、ずいぶんと弱々しいな。レバーを引いて中のセルメダルを抜けばいいんだよ、ほら……」
自分の力で変身を解けないバースに代わり、伊達がバックルの中からメダルを排出させる。バースの鎧の中から姿を見せたのは、伊達もよく知る男で、それ故にここにいること自体が予想外の人物だった。

「お前……、アンコじゃねぇか。なんでお前がここにいるんだよ！消えたんじゃなかったのか！？」
「えぇ、まぁ……実はそれには深い訳がありまして」
「言い訳ぇ？　どんな奴なんだ、それは」
「あぁ、それは私の方から説明させて頂きます、伊達さん」
バースの変身を解いて現れたのは、かつての戦いで命を散らした鳥類系グリードの『アンク』その人。髪の色は金ではなく黒なのだが、他人の空似にしては似過ぎている。この顔を見間違う筈がない。
伊達が驚くのも無理はない。彼はアンクの体の『器』にされていた『泉信吾』刑事。彼が今まで”アンク”として認識していた人物自身なのだから。
疲労からか上手く説明出来ないでいる信吾に代わり、里中が事の次第を伊達に話す。
警察官としてアポロショッカーと相対し、深刻な被害を受けた地域の人々の避難誘導に努めていた信吾は、映司が湯谷温泉に潜入する少し前に、里中の報せで妹の比奈がアポロショッカーに捕らえられたことを知り、鴻上から預かった量産型バースドライバーを受け取ってここまでやって来ていたのだ。
先の里中の一事退避は、トライドベンダーを召喚するだけでなく、鴻上の元に向かった信吾を湯谷温泉に誘導するためでもあったのだ。
「成る程ねぇ……。そうならそうと、早く言ってくれよ。里中ちゃん」
「説明する暇がありませんでしたし、第一伊達さん、あの口裂け男との戦いで手一杯だったじゃないですか」
「言うことがきっついねぇ。まぁ、実際その通りだったんだから、文句は言えねぇんだけどよ」
「それで……、これからどうするんです？」休んで息を整えた信吾が伊達に聞く。「上で戦っている映司君の応援、ですか？」
信吾の問いに対し、伊達は自分や信吾、里中の装備と体調を顧み

た上で、首を横に振った。
「いいや、俺たちはここで残りの黒タイツ退治だ。さっきの妖怪口裂け男に散々な目に遭わされてぼろぼろになっちまったからな。無理に加勢したって、奴らの足手まといになるだけだよ」
「しかし、彼らだけでアポロガイストたちに勝てるかどうかは……」
「俺たちの仕事は雑魚たちをここに釘付けにしておくことだぜ、比奈ちゃんの兄ちゃんよ」伊達は信吾の言葉を遮って言う。「あんただって火野の力はよぉく知ってるんだろう？　だったらそいつを信じてやろうぜ。火野やもやしちゃんが後ろを気にせず戦える為にも、俺たちはここで体を張るんだよ。ご不満かい？」
「い、いえ。不満だとは……。それが私たちのやることだと言うなら、任務の遂行に全力を尽くします」
「そうかい、だったらいいんだ。さ、休憩時間は終わったぜ。今度は途中でバテてくれるなよ、シスコンお兄ちゃん」
「そ、その言い方は止して下さい！　私は別に……」
二人の男はそこまで言うと、ジェネラルシャドウの残骸から数枚のセルメダルを掴み取って再びバースに変身し、倒されても倒されても沸いて出る黒タイツの戦闘員たちに向かって行った。

第十七話：「登場甲虫青コンボと必殺の一撃とシスコン兄貴」（後書き）

◆お待たせして本当に申し訳ございませんでした。なんとかバースとジェネラル・シャドウとの戦いを付け加えられましたが、これがまた適当になってしまって……。

◆キャマラスワーム

『仮面ライダーカブト』本編３３、３４話に登場。『海老』に似た地球外生命体で、ウカワーム／間宮麗奈の側近。

水色の体表に涼やかで愛らしい鳴き声が印象的で、何よりエンディングテーマ「ＲＯＤＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＳＰＥＥＤ」をバックに、歌っている本人を抹殺したという、仮面ライダーガタック好きには因縁の相手。

『ガタキリバ』のメダルを持った相手として、昆虫の怪人を配することは最初から決めており、今までの流れから昭和の昆虫怪人を配置する予定だったのですが、全体の流れの中で平成作品の怪人が異様に少なくなってしまい、元々決まっていたものを急きょこのワームへと差し変えました。

クワガタでもバッタでもカマキリでもないこいつが選ばれた理由は特にありません。

◆ジェネラル・シャドウ

『仮面ライダーストロンガー』中盤から最終回直前までストロンガーと戦い続けたブラックサタンの雇われ幹部及び後続組織『デルザー軍団』の改造魔人。

トランプによる撹乱とシャドウ剣の流麗な剣捌きにより、ストロンガーをたびたび窮地に陥れた。同じくブラックサタンの幹部に当たる百目タイタンとは仲が悪く、足を引っ張って作戦を不意にして

しまう所が目立つ。

元々、ジェネラルシャドウは物語の序盤で『ブレイド』のメダルを持った怪人として登場させるつもりで構想していたのですが、話の流れの変更や登場怪人の増減によって二転三転し、ブレイドのメダルは士に持たせることにして参戦を見送っていました。

ところが、今話及び前話でバースたちと戦う相手が必要になり、その中で強敵で何か出せないかと考え、宙に浮いていた彼が登板することとなりました。故に彼はライダーのメダルも合成コアメダルを何も持っていません。もう少し活躍させてあげたかった。

第十八話：「登場アポロガイストと総力戦と絶体絶命」

※※※

湯谷温泉ウェイランド最上階。それなりに広いもののビルとビルとに挟まれ、見映えの悪いこの場所に、アポロショッカー首領・アポロガイストはいた。映司たちから奪い取った九枚のライダーメダルは、幾何学的な模様の石盤に嵌められてアポロの目の前に置かれている。

捕らえた比奈を絢爛な純白の衣装に着替えさせ、十字架に張り付けにした上で、彼女の苦悶に歪んだ顔を肴にし、下の階から持ち込んだ七輪で焼肉を口に運んでいた。

「まァ、そう睨むな」肉を咀嚼しつつアポロガイストが比奈に言う。「心配せずとも、奴らは必ずやって来る。我々は肉を食いながらただ待っておれば良い。お前も食うか？　南瓜と豚肉の脂身の部分ならくれてやるのだ」

比奈は差し出された南瓜に口を付けず、首を横に振って言う。

「メダルを全部奪って、わたしを拐って……。臆病なんですね。そこまで仮面ライダーが、映司くんたちが怖いんですか？」

「違う違う。あれは『保険』なのだ」アポロガイストはそう言うと、銀杏切りの南瓜を口に運び、嫌そうな顔で咀嚼した。「確かに、ライダーメダルさえあればディケイドは這ってでもここに来るだろう。しかし、その確率は百パーセントではない。だからお前をここに呼んだのだ。奴らに来て貰わねば、私の『計画』は成就しないからな」

「計画……、それは一体何なんです」

「まだ秘密に決まっているのだ。ディケイドたちがこの場所まで来られれば自ずと分かること。もう暫く待っておれ」

とぼけた振りをしていても、流石は敵の頭目。易々と情報は引き出せそうにない。　しかし比奈は、今の司分に出来ることを全うす

べく、尚も食い下がった。
「じゃあ、じゃあ。もしも門矢さんと映司くんがここまで来なかったら……、一体どうするんです」
「万に一つも有り得んが、『もし』そうだったなら」アポロガイストは、比奈に箸先を突き立てて言った。「泉比奈、貴様を私の”妾”として迎えるだけなのだ。常人離れしたその怪力、この状況でまだ、奴らの為に情報を引き出さんと思案するその度胸！　お前なら良い改造人間に成れるだろう。楽しみだぞ」
「……ちょッ、何をするんですか！？　やめてください！」
比奈が動けないのを良いことに、彼女の顎先を親指で押し上げ、無理矢理唇を重ねんとするアポロガイスト。嫌がって首を左右に振るも、もう一方の手で固定され、それすらも出来なくなってしまう。『初めて』の相手が兄でも恋人でもなく、こんな男になってしまうとは。比奈は悔し涙を流して歯噛みするが、二人の唇が重なりあうことはなかった。
アポロガイストはもんどり打って宙を舞っており、比奈の体は十字架を離れ、何者かに抱き抱えられていた。ややあって状況を把握した比奈は、誰がこんなことをしてくれたのかと、自分を抱き抱える人物の方に目を向ける。クワガタムシを模した一本角に赤色の複眼、中世の騎士を思わせる鎧を纏った仮面ライダーの姿がそこにあった。
「比奈ちゃん、大丈夫？　どこか痛くない？　もう安心だよ」見覚えのないライダーの口から発せられる優しげな声。自分を助けてくれたのが仮面ライダーオーズ・火野映司であることに気付いた比奈は、先程とは別の意味で目を潤ませ、彼の体に抱き付いた。
「映司くん……、無事だったんですね。良かった……！」
「なんとかね。比奈ちゃんはどう？　酷いことされてない？」
「わたしは別に……あ、いや！　そんなことより、そこに、メダルが」
「あぁ、それなら問題ないよ。すぐに……」

心配してくれるのは有り難いが、問題ないとはどういうことか。不意を突かれて吹き飛ばされたアポロガイストが、ライダーの存在に気付き、メダルが嵌まった石盤まで戻ろうとしているではないか。これで何故問題ないと言えるのだろう。

アポロの指が石盤に伸びるが、オーズは比奈を抱き抱えたまま微動だにしない。それもその筈、アポロガイストが石盤に触れるよりも早く、水色の眼に純白の鎧、背に体よりも大きな一対の翼を持った仮面ライダーが、横から石盤を掠め取ったからだ。

「悪いな、こいつは返してもらうぜ」

「ぬうぅ……おのれ、ディケイドぉ……」

『電王・ウィングフォーム』 から元の姿に戻ったディケイドは、石盤を床に叩き付け、嵌められたメダルを抜き出すと、これ見よがしに人差し指を突き立てた。

「人質なんて狡い真似しやがって、だがこれで終わりだぜ」

「比奈ちゃんはここにいるし、メダルは士さんの手の中。お前の野望もここまでだ、観念しろアポロガイスト！」

二人のライダーはお前の敗けだとアポロガイストを糾弾するが、当の本人は悠然と散らばった肉と野菜と七輪を片し、「甘いな」と鼻で笑った。

「追い詰めた？　お前たちが、この私を？　違う違う、追い詰められたのは貴様たちなのだ、ディケイドにオーズ」

「何だと」彼の言葉にオーズが声を荒げる。「それは一体どういうことだ」

オーズの問いに、アポロガイストは可笑しくて堪らないと言った表情を浮かべ、「分からないか」と言葉を返した。

「私をそんじょそこらの馬鹿と一緒にするな。勝ち目が無いならとっくに逃げている。それをしないのは何故か……。わざわざ口にしなくとも、貴様らには理解出来よう」

アポロガイストは懐から赤一色のメダルと、真ん中を境に緑と紫に分かれた二色のものを取り出して、二人のライダーに見せ付ける。

「そんなバカな」とディケイドが戦慄く姿を横目に見つつ、アポロガイストは更に続ける。
「この『タジャドル』メダルのお蔭なのだ。私はこのメダルに選ばれた。タジャドルが持つ炎の力を、私は誰よりも強く引き出せる。仮面ライダーオーズ、当然貴様よりもな。更にはこの『W』のメダルも我が手中。断言しよう。お前たちが残りの九枚全てを駆使しようが、どの様な小細工を企てようが、私を倒すことは絶対に出来ない。絶対にな！」
――アポロ・チェンジ！
掛け声と共に二枚のメダルを額の投入口に投げ入れ、両手を背中に回して構えを取る。
アポロガイストは冴えない壮年の男から赤い兜に黒いアーマースーツ、脹ら脛まで伸びた純白のマントに身を包んだ怪人に姿を変えた。しかし、彼の変化はまだ終わらない。タジャドルメダルの力なのか、アポロガイストは周囲が溶け出しそうな程の熱を放出すると、顔の鎧に鳥の嘴型（くちばし）の外装甲が纏われ、眼は真っ赤に燃え上がり、足には猛禽類（もうきんるい）の如き、大きく鋭利な鉤爪を生やし、背中のマントは透度の高いオレンジ色に輝く、三対の翼を生み出した。
おまけに体の中心を境にして、右が燃えるような赤、左側が堅牢そうな銀色の体表となり、変身仕立ての時とは別人かと思う程に姿が変わる。
「本当にこいつはアポロガイストなのか」と驚く二人に対し、彼は自分の力を誇示する為にと、両足と両手の詰めを擦り合わせた。
「聞いて驚け恐怖しろ。これか私の真の姿・アポロガイスト改め……『タジャブルガイスト』様の神々しい姿なのだ」
「タジャブル・ガイストだと……」ディケイドが悔しげに歯噛みして言う。「お前、仮面ライダーWまでそんなものに変えちまったのか！？」
「その通り。お前が我々の世界から逃げ去った後もしぶとく抵抗を続けていたものでな、私自ら動いて、物質変換装置でコアメダルに

変えてやったのだ。見物だったぞ、成す術無くセルとコアに分解され行く奴の姿は！」
「もういい、喋ンなよ」ディケイドは沸き立つ怒りを必死に堪え、無理矢理抑えた声で言う。「お前は俺たちが完膚無きまでに叩き潰してやる。メダルになんか変えてやるもんか。行くぞ、映司！」
「はいッ！」
溜めに溜めていた怒りを吐き出し、アポロガイストに向かう二人のライダー。ディケイドはライドブッカーで真正面から斬り掛かり、オーズは『クロックアップ』を用い、奴が捉え切れない程の早さで屋上を駆ける。
しかし、二人の攻撃はタジャブルガイストの堅牢な装甲を貫くことは出来ず、弾かれるばかりで傷を負わせることすら敵わない。いくら素早く動けても、ダメージにならないのなら意味はないのだ。

「どうしたどうした仮面ライダー。貴様らの本気はその程度かァ？」
「これが本気だぁ？　まだに決まってんだろ馬鹿野郎」苦しそうに息を切らし、肩で息をしつつディケイドが言った。
「堅くて効かないと言うなら……こいつはどうだ！」
――スキャニングチャージ！
アポロガイストの意識がディケイドの方に向いた隙を突き、三枚のメダルを一気にスキャン。オーズは頭、腕、足から発せられる雷をブレイドソードの切っ先に集め、金色のエネルギー態を作り出した。
両手の剣に溜まったエネルギーは、二つが螺旋状に絡まり合うことでドリルのような形状を成す。　オーズはドリルを叩き込まんと突っ込むが、アポロガイストは上半身を軽く左に逸らした上でそれを掴み、雷のドリルを易々と叩き折ってしまった。
「な……何ッ！」
「甘い甘い甘い。そんな力では何発喰らおうとも、私の体を傷つけることは出来ぬ！　絶対に出来ぬのだ！」

オーズはアポロガイストの高笑いを聞きつつ、コンボを用いても傷一つ付けられない事実に歯噛みするが、ディケイドはそんな彼に『電王』と『キバ』のメダルを投げ付けた。
「馬鹿野郎、何ぼけぇっとしてんだ！　効かなかったが狙いは悪くない、武器を使って押し切れ！」
「は……はいッ！」
――クウガ！　デンオウ！　キバ！
ディケイドの声に応じ、『ブレイド』と『カブト』の代わりに『電王』と『キバ』のメダルを嵌めて読み込ませる。力のある形態の中で『響鬼』を選ばなかったのは、炎を操るタジャドルの力を得たアポロガイストには、同じく炎を宿した響鬼ではダメージを与えられないと判断したからだろう。
電王のメダルの力で全身を駆け巡った『デンオウデンレール』により、クウガのメダルから『タイタンソード』が、キバのメダルから『ドッガハンマー』が呼び出され、オーズはそれらを伴ってアポロガイストに挑みかかる。エネルギー体だった雷とは違い、さすがに武器そのものまでは折ることが出来ないようで、剣による一撃はアポロの肉を裂き、槌（つち）による衝撃は外装甲の下にまで響き、奴の膝を折らせる程のものであった。
「ふぅ……む。なかなかやるではないか。では私も、少し本気を出してやるとしよう」
刺さりこそするも血は流れず、膝を折らせはしたものの、装甲に軽い凹みを与えただけで、アポロガイスト自身は全くと言って良いほど手傷を受けていない。それでも、オーズが自分に刃向って来られると理解したアポロガイストは、赤色の右半身を黄色に変色させた。
勿論、変わったのは色だけではない。それまでただ堅いだけだったアポロガイストの左半身が鞭のように湾曲し、伸び始めたのだ。伸びただけなら良かったのだが、鞭のようにしなるそれは、オーズの攻撃を持ってしても貫けなかった堅牢なる銀の鎧。『それ』が床

に当たるや否や、瓦礫を散らして粉々に砕ける程の破壊力を持っていた。
鋼鉄の鞭がオーズを襲う。鞭は十字に組んだ腕も、その先にある腹筋すらも貫き、彼をこの敷地の端まで吹き飛ばした。
「映司！　ちきしょう、待ってろ！」
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「Ｄｅ－Ｄｅ－ＤＥＣＡＤＥ」
腹を叩かれて踞（うずくま）るオーズを見兼ね、ディケイドはファイナルアタックライドのカードを装填して飛び上がった。何枚ものカードがアポロガイストに向かって伸び、ディケイドはその中を勢いを付けて一枚ずつ通過して行く。
「死に損ないの癖にちょろちょろと……、うっとおしいのだ、ディケイド！」
そんな彼を疎ましく感じたアポロガイストは、両手を十字に組んで力を溜める。今まで鞭として使っていた銀色の左半身が、一瞬のうちに青一色へと変わった。
その上で足先をディケイドの方に向ける。同時にアポロガイストの足首は拳銃のような形状に様変わりし、銃口部分から黄色の光弾が放たれた。
放たれた光弾はひとりでに角度を変えてディケイドの背後に回り、カードを潜り抜けてキックを放たんとする彼の背を撃ち抜いた。
悲鳴を上げてアスファルトの床に落下するディケイド。しかし、彼もただやられているだけではない。
「映司、黄色のコンボを使え！　接近戦だ！」
接近戦だと言って、ディケイドが投げて寄越したのは、『ファイズ』と『アギト』のメダル。成る程、”見切り”の力で敵の懐に潜り込み、鞭も銃も役に立たない肉弾戦をしろと言うわけか。彼の意図を即座に理解したオーズは、クウガとキバのメダルを抜いて、二枚のメダルに入れ換えた。
――ファイズ！　デンオウ！　アギト！

オーラングサークルが黄色く光り、フォトンブラッドがデンオウデンレールを通じて全身に駆け巡る。黄色のコンボの登場だ。
「ほぉ、それも『コンボ』か。面白い、受けて立ってやるのだ」
アポロガイストは足の銃口をオーズに向け、辺り構わず撃ち始めた。オーズはその一つ一つを目ではなく『間隔』で見切り、丁寧に捌いてかわして行く。
光弾は皆オーズに弾き飛ばされ、拳と拳がかち合う距離まで近付いた。オーズの拳がアポロの顔を捉えて飛ぶが、彼はそれを片手で抑えて止めると、可笑しくて堪らないとほぐそ笑む。
「見切り……か、中々面白い力を持っている。だが、それだけではこのタジャブルガイストは倒せんぞ」
「何を言っている。この距離じゃ自慢の鞭も銃も使えないんだぞ
「解って居ないのは貴様の方だオーズ。まだ私の攻撃は終了していないのだ。後ろを見ろ！」
この自信は何なんだと、ちらと自身の背後に目を向けるオーズ。見ると、先程弾き飛ばした筈の光弾たちが、アポロガイストの号令を待つかのように空中で待機しているではないか。
オーズの注意が光弾に行った隙を突き、鞭のようにしなるアポロの右足が彼に迫る。”見切り”の力でそのことを予期していたオーズは、飛び退くことで不意打ちを防いだものの、それが大きな仇となった。
アポロガイストが右手をさっと振り上げた瞬間、空中の光弾が上下左右あらゆる方向からオーズに向けて飛んできた。
いくら敵の攻撃を見切れるとはいえ、四方八方から雨のように降り注がれては、完璧にかわせる道筋など見付けようが無い。オーズはかわしきるのを諦めると、負傷の残る両腕を十字に組んで体を丸め、かわし切れなかった光弾を受け切ることに決めた。
光弾の雨は狙いが逸れたり、弾同士がぶつかり合って相殺されることもなく、オーズの体を正確に貫いて行く。
光弾の余りの威力に膝を付くが、ここで終わる訳には行かない。

オーズはアギトのメダルを抜いて再び『キバ』のメダルを嵌め込んだ。
――ファイズ！　デンオウ！　キバ！
脚の『ブラッディ・ウィング』を展開し、『ガルルセイバー』と『ファイズエッジ』を構える飛び上がる。アポロガイストに空中戦を仕掛けようと言うのか。
「ほぉ、ここまでやられておいて、私と空の戦いを所望するか。受けて立ってやろう！」
アポロガイストは体の色を赤と銀に戻し、背の翼を広げて舞い上がる。両手に剣を構えるオーズと、手刀と掌から放つ炎の弾を携えたアポロガイストが、湯谷温泉の上空で交錯する。
二人の勝負はすぐに決着が付いた。飛行能力に長けたタジャドルのメダルを持つアポロガイストと、『亜種形態』に過ぎないオーズとでは素早さと力量に差があり過ぎたのだ。オーズは脚の羽をもがれて地に伏し、アポロは彼を見下し「つまらない」と溜め息を着いた。
「仮面ライダーの力を結集してもこの程度とは、この世界のオーズは戦っていて張り合いがないな。私が凄まじく強くなっていることを差し引いても、だ。……もう良い。トドメを刺してくれる」
――ギン！　ギン！　ギン！　ギン！　ギン！　ギン！
ギガスキャン！
アポロガイストは自分の体からセルメダルを七枚抜き取って、左手の手甲『タジャスピナー』にそれを嵌め込み、強力なエネルギー弾としてオーズに放った。
床に突っ伏して動けず、無防備のままそれを喰らったオーズは、一瞬のうちに変身を解除させられ、持っていたメダル全てを床に散らしてしまう。
「ふふ、ふ。これで七枚。残りの二枚は……」
奪われたメダルはオーズとディケイドが二人で持っていた。映司が持っていたファイズとブレイド、そしてカブト。ディケイドから

渡されたファイズ、キバ、電王、アギト。残りの二枚はディケイドが持っていると見て間違いない。
「さぁて、死に損ないのピンク頭よ、龍騎と響鬼のメダル、即刻こちらに渡してもらおう」
「ピンクじゃねぇ……」最早立ち上がることすらままならず、ディケイドは膝を付いて息を大きく乱しながらも答える。「俺のこれはマゼンタだ！　こいつは絶対に、渡さねぇ」
「そうか、そうか。貴様は楽に死ぬより苦しんで死ぬ方を望むか。それも良い。ならば少し、私も楽しませてもらうとするか」
　アポロガイストは懐から緑と黄色が混ざり合ったメダルを取り出してディケイドに見せる。先程オーズから奪ったライダーのメダルではない。”トラ”と”バッタ”の模様が刻まれ、三日月のような形をした不完全なものだ。
「なんだよ、そいつは。俺ァそんなもん、見たことねぇぞ」
「それはそうだろうな。こいつは合成コアメダルというには不完全。三枚揃いでコンボメダルになり損ねた”余り物”なのだからな。単体じゃあ使い物にならないが……」
　言うと、アポロガイストは何の前触れもなく、何の未練もなく、自身の左足を斬り落として大量のセルメダルへと変え、その中に不完全なメダルを放り込む。体内の他のメダルが補ったからなのか、彼の足は程無くして元通りに修復された。
　しかし、それは今問題にすべきことではない。セルメダルの山に放られた不完全なコアは、見る見るうちに形を成し、上半身はトラ、下半身はバッタの筋骨隆々とした怪物へと変貌したのだ。
「な……なんだァ、こいつは」ディケイドが息を呑む。
「名付けるならばそう、『トラバッタヤミー』と言ったところか。欠けた体を満たしたいという欲望と、私の持つ欲望を糧として動く怪物だ。さぁ行けィ、ディケイドを八つ裂きにし、奴の体からメダルを奪い取るのだァ」
　アポロガイストの掛け声に応じ、トラバッタヤミーは遠くのビル

まで聞こえる程の大音声で雄叫びを上げた・

第十八話：「登場アポロガイストと総力戦と絶体絶命」（後書き）

◆トラバッタヤミーは、オーズ本編に登場した『ライオンクラゲヤミー』からたてがみとクラゲを抜いて、上半身をリペイントしたものと、『バッタヤミー』の下半身スーツを合成した（というイメージ）です。イカジャガーヤミーから流用するとなんだか違う気がするので……。

◆アポロさんはこの世界に何をしに来ているんだろう。

第十九話：「アポロの野望と士の消滅と謎の腕」（前書き）

久々に。

◎ヒビキ・コア

パワー系に属するアーム・コア。

使用者に炎と清めの力を与え、特に腕力が著しく強化される。専用武器『ヒビキオンゲキボー』による中～近距離戦を得意とする。

龍騎・キバのメダルと組み合わせることで、元から凄まじい腕力が更に強化され、驚異的な力を発揮するようになる。

◎リュウキ・コア

パワー系に属するヘッド・コア。使用者に炎の力を与える。

響鬼、キバのコアと組み合わせることで、強大な炎の力を解放し、肩に付いた「ドラグショルダー」を第三第四の腕として使役することが可能になる。

◎アギト・コア

テクニカル系に属するレッグ・コア。

右足の爪先と左足の踵に備え付けられた暗器『クロスホーン・ヒール』で、刃の通じない超近距離での戦いが可能となり、多人数戦で効力を発揮する。

だが、その真価はファイズ・電王のコアと組み合わせることによって最大限に発揮され、それらを組み合わせて黄色のコンボを形成した場合、数秒先の敵の行動を予測し、巧みにかわして戦闘を優位に進めることが出来るようになる。

◎ファイズ・コア

テクニカル系に属するヘッド・コア。

顔全体を覆う複眼には高純度のフォトンブラッドが流れ込んでおり、それを放って直接攻撃することも、逃げ回る相手や流体の敵を固定することも可能。

フォトンブラッドは頭部からしか放てないが、電王・アギトのメダルと組み合わせることで、全身に駆け廻らせることも可能。

また、変身せずに使用した場合は、不可視のものを見破ったり、目から微量のフォトンブラッドを放つことが出来る。

残りの二つはまた後ほど。

第十九話：「アポロの野望と士の消滅と謎の腕」

※※※

トラバッタヤミーが満身創痍のディケイドと戦っていたのと時を同じくし、湯谷温泉から十数キロ近く離れた場所の廃ビルの上では、後藤と鴻上が『物質変換装置』を組み込んだＣＬＡＷｓ・サソリにエネルギーを充填させ、発射に向けての最終確認を行っていた。

「現在、エネルギー充填率８８％。ＣＬＡＷｓ・サソリ、各駆動系統、問題ありません」

「宜しい。さすがはドクター・真木の遺したサポートロイドだ、別世界の技術にも対応していようとはね」

後藤は「ドクター・真木の」と言う部分に取っ掛かりを覚えるも、今は関係無いかと流して、「それにしても」と鴻上に話を振る。

「火野たち……、大丈夫なんでしょうか。殆どのメダルを奪われて、門矢士もあの状態じゃあ、流石に……」

「愚問だね後藤君」鴻上は後藤の言葉をくだらないと一蹴した。「彼らは仮面ライダーだ。どんな逆境に立とうが、必ず勝って戻ってくる。不安に思う必要はない。私たちは彼らの無事を信じ、彼らの手助けに尽力すれば良いのだよ後藤君」

鴻上の言葉を聞き、後藤は「すみません」と頭を下げる。こんなところで砲撃手をやるよりも、伊達たちと一緒にバースとして戦いたかった。映司たちのことは良く知っているし、信頼の置ける者たちだ。

これは自分にしか出来ない仕事だ。ならば細かいことは放っておき、自身に与えられた任務に尽力するだけ。後藤は迷いを振り切り、砲台の点検と照準の確認作業に戻る。

彼が、照準から湯谷温泉の屋上の様子を見たのはその時だ。映司はベルトを腰に巻いたまま立ち上がれず、ディケイドはトラとバッ

タが掛け合わさったかのような怪物に襲われて、いつ倒れてもおかしくない状態まで追い込まれている。
後藤はその様相を見て慌てふためき、ＣＬＡＷｓ・サソリの発射ボタンに指を掛ける。彼の様子がおかしいことに気付いた鴻上は、焦る後藤に「待て」と大声で叫んだ。
「どうしたと言うんだ後藤君。一人で慌てていないで説明したまえ」
「映司と火野が危ないんです、このままじゃ彼らの命が」
「成る程。だから充填完了を待たずして物質変換光線を放とうとした訳か」鴻上は溜め息を着き、やれやれと両手を振った。「いいかね、後藤君。ここから湯谷温泉の屋上までは、光線の射程ぎりぎりなんだ。十分にエネルギーが溜まっていなければ、奴をメダルに変えるどころか、不発に終わった上にこちらの切り札を曝してしまうことになる。
我々は発射の瞬間まで見付かってはいかんのだ。分かるかね？」
「分かります。分かってますけど……」
充填が済むまで何も出来ないのは理解している。しかしこのまま、危機に瀕した映司たちを放っておけと言うのか。後藤は彼らに何もしてやれない自分に腹を立て、歯噛みして拳を硬く握り締める。
鴻上は、そんな後藤に「安心したまえ」と穏やかに声を掛けた。
「さっきも言ったが、彼らは仮面ライダーだ。こんな所でやられたりはしない。信じて待つことだ、後藤君」
鴻上が何故そうも二人を信じられるのか、それは分からない。しかし、後藤にも一つ分かったことがある。火野映司はかつて一緒にグリードたちと戦った仲間だ。彼が人々を理不尽に襲う連中に屈する訳がない。
後藤は腹を決め、いつでも光線を放てるようにと、ＣＬＡＷｓ・サソリの前に座り込んだ。

※※※

ドクトルGから受けた毒が全身に回り、度重なる戦闘で体力を消費し切っていたディケイドに、トラバッタヤミーは容赦なく襲い掛かる。今までの奴らに比べ圧倒的に弱いはずのこの怪人に、彼は成す術もなく、立つことも拳を握ることすら出来ないでいた。
バッタの跳躍力から放たれる跳び蹴りが鎧を砕き、トラの鋭い爪がその下の肉を裂く。この一発が決め手となり、遂にディケイドの変身すらも解除されてしまう。
トラバッタヤミーは、アポロガイストの求めに応じ、うつ伏せに横たわる士の襟首を掴んで、彼の元まで放り投げた。
「ふふふ。今までずいぶん手こずらされたが……、今度こそ最期だな、ディケイド」
アポロガイストは不気味な笑いを絶やすことなく、士の胸倉を掴んで持ち上げ、上機嫌に話を続ける。
「疑問だったろうな。私が何故、物質変換装置（あのきかい）をお前たちの元に残したのか、メダルが足りていないと分かっていながら、追手を出さず、わざわざ貴様たちが来るのをここで待っていたのか。全てわざとだ。私の計画成就の為のな。
お前たち仮面ライダーが最後まで抵抗したあの戦いを覚えているか？　貴様以外のライダーをメダルに変え、その力で次元の扉を開けようとしたあの時だ。装置も、それを動かす動力も完璧の筈だった。ならば何故失敗したか、何が足りなかったのか？　私はずっと考えていた。そしてあの時……そう、仮面ライダーWを始末してメダルに変えた時、私はあることに気付いたのだ。
旧ショッカーが作った装置も、動力たる仮面ライダーのメダルも完璧だったが、発生させた次元を『繋ぎ止める』力が足りなかったのだ。それは装置でも、他のライダーメダルの力を用いてもカバー出来ない大きな壁だった。
だからこそ私は貴様を追った。変換装置が貴様らの手に渡ったと聞いた時、あえて手を出さずに残しておいた。わざと全てのメダルを奪わず、数枚をお前たちの元に残した。少しでも希望が残ってい

れば、お前たちライダーはこの世界を見捨てないだろうからな！
さらばだディケイド！　メダルとなって我が野望の礎となるが良い！」
アポロガイストは、満身創痍で抵抗すら出来ない士を、自身の背後に放り投げる。偶然か必然か、その先にあったのは、アポロガイストに向かい放たれた七色の光線であった。

※※※

アポロガイストが士を放り投げる、ほんの少し前、ＣＬＡＷｓ・サソリのエネルギー充填は臨界点に達し掛けていた。
「９８、９９……１００！　エネルギー、充填完了しました！」
「うむ、よくぞ辛抱したね後藤君！　さぁ、もう遠慮はいらない、いつでも撃ちたまえ！」
「そうさせて頂きます。ＣＬＡＷｓ・サソリ、物質変換光線……照射！」
後藤がボタンを押すと同時に、サソリの尻尾、ドリル・アームの先端から七色の光線が放たれ、湯谷温泉に向かって一気に突き進んで行く。アポロガイストは士に気を取られてこちらを見ていない。これで当たらない筈がない。
物質変換光線は、確かに湯谷温泉屋上の、アポロガイストの元まで届いた。しかし、彼と光線との間に士が挟まったことにより、アポロガイストがセルメダルと化すことは無かった。
「これは……そんな、馬鹿なッ！」事の次第を見守っていた後藤が声を上げる。「ここから湯谷温泉まで十キロ以上はあるんだぞ、狙撃のポイントもいくらだってある。何でこちらの狙撃位置があんなにも正確に分かったんだ！」
「分かった、か……」鴻上は顎先に指を掛けて思案を巡らせる。「あるいは……”見えていた”か。だがまぁ、今となってはどうでも良いことだろうね。むしろ今問題なのは……」

鴻上はＣＬＡＷｓ・サソリに備え付けられた望遠鏡を覗き、湯谷温泉の屋上を見る。七色の光線に包まれて悲鳴を上げる士の姿がそこにあった。

「我々は最後の切り札を無くした、ということだ。最早アポロガイストは誰にも止められないだろう。この状況でもまだ何か出来るとすれば――」

鴻上は変身を解除して仰向けに伏したままの映司に目線を移した。

※※※

――あれ？　俺、なんで寝てるんだっけ……？

――なんだろう、あの虹色の光……。凄く、綺麗だなぁ。

――中心に、光の中に誰かいる。誰……だったかなぁ。

――あれは……、あれは！

夢現（ゆめうつつ）の世界にいた映司は、門矢士が七色の光に包まれているのを見て覚醒し、傷付いた体を推して立ち上がる。

光線を浴びる士の脚が、徐々にセルメダルとなって崩れて行っているのが見える。何故かは分からないが、彼はアポロガイストに使う筈だった物質変換光線を浴びているに違いない。このままでは彼も他のライダー同様、物言わぬコアメダルにされてしまう。それだけは阻止しなくては。

映司は歯を食い縛って痛みをこらえ、士の元まで駆け出した。しかし、彼の行く手をトラバッタヤミーが阻んだ。

「お前は……！　やめろ、離せ！　離せよッ！」

映司はヤミーの腰を掴み、引き剥がそうとするも、力負けして放り投げられ、ついでにトラの爪を胸に喰らってしまった。

口や胸から勢い良く赤黒い血を吐いて、床に突っ伏してしまう映司。彼が行動を起こしたことに気付いた士は、物質変換光線に耐えつつ、映司の方に目をやった。

――映司、お前……。オーズにもなれないくせに何やってんだよ……。無茶しやがって。
――何とかしてやりてぇが、今の俺にゃあ、自分のことだけで精一杯だ。どうにも出来ねえ。
――悪ィな、付き合わせてしまったばっかりに……。三途の川の畔(ほとり)でも謝るからよ。
――……ん？
士は抵抗することすら諦め、目を閉じようとしたが、同時に、自分のズボンの右ポケットが燃えるように熱くなっているのに気付く。何があったかと思い返し、通気孔の中で御守り代わりにと”割れたタカ・コア”を預かっていたことを思い出した。
そして同時にこうも考える。人間を直接メダルにするには時間が掛かるが、セルメダルの塊であるヤミーは、この光線を浴びた瞬間、メダルの山に戻るんじゃないだろうか。コアメダルには光沢があるし、この光線では分解されない筈だ。ほんの少しなら跳ね返して角度を変えられるのではないかと。
そうと決まれば善は急げ。士は必死に右ポケットを探ってタカ・コアを取り出すと、映司とヤミーとの間に当たるよう調整して、光線を跳ね返した。
士の思惑は当たっていた。変換光線を浴びたトラバッタヤミーは、叫び声を上げる間すら無く、一瞬のうちに二枚のコアと大量のセルメダルへと分解されてしまった。
「ぬぬ！？　おぉ、おのれディケイド！　まだこんな無駄なことを！　大人しくメダルになってしまえ！」
しかし、アポロガイストがそれを見逃す訳がなかった。トラバッタヤミーの消滅に激怒したアポロは、士の体に強力な炎の弾を放つ。今の今までは気合いでなんとか繋ぎ止めて来たが、連続して放たれる炎の弾に、とうとう限界を迎え、門矢士は無念の悲鳴と共に、大量のセルメダルを周囲に散らし、『ディケイド』のコアメダルに変質させられてしまった。

同時に、エネルギーが切れてしまったのか、変換光線の七色の光が掻き消える。湯谷温泉の屋上には、感極まって高笑いをするアポロガイストと、あまりのことに途方に暮れ、何も言えない比奈と、絶望し、膝を付いて項垂れる映司の三人が残された。

「やった……とうとうやったぞ！　ディケイドめ、貴様の天下もここまでなのだ！」

アポロガイストは勝利に震えて大笑いをし、セルメダルの山からディケイドのメダルを抜き取った。

「漸く、漸くだ。遂に来るぞ、我が野望の達成する時が！」

抜き取ったディケイドのメダルを天に掲げる。同時に床から引力を発する不気味な銀色の柱が、空から見て正三角形になるような形で三本現れる。九枚のメダルが柱の引力で宙に浮き、柱の周辺を円を描いて回り始めた。

天に掲げたディケイドのメダルも、それらの引力に引き寄せられるかのようにアポロの手を離れ、九枚のメダルの中心に位置し、それらのエネルギーを吸い上げて、湯谷温泉の遥か上空に、凄まじい数のオーロラを生み出した。

「ふふふ。いいぞ、良いぞ。九枚のライダーメダルのエネルギーを吸い上げ、ディケイドのメダルで増幅させ、並行世界の入り口を増やすのだ！　もっと……もっとだ！」

無尽蔵に増えて行く光のオーロラを前に、顎が外れそうな程大笑いをするアポロガイスト。

彼はその様子に満足しつつ、思い出したように後ろを振り返った。

「ディケイドがメダルに変わった今、貴様にはもう用はない。仮面ライダーオーズ。本当はヤミーの奴に始末を任せたかったが、仕方がない。この私直々にあの世に送ってやるのだ」

顔を上げる気力すら失せた映司に、真っ赤に燃えるアポロガイストの右手が迫る。今の映司があれを喰らえば、あっという間に消し炭にされてしまうことだろう。

「映司くん、逃げてください！　映司くんッ！」
逃げてくれと必死に叫ぶ比奈の声も、自分のせいで士を失ったと消沈する映司の耳には届かない。
アポロガイストが右拳を握り締め、映司に向って放って来た。最早彼には逃げようがない。

しかし、それが映司を貫くことはなかった。アポロの拳は『赤く輝く鳥の羽』に阻まれ、彼の体まで届かなかったのだ。
「むむ……むッ！？　何者だ、何者なのだ、貴様はッ！」
「なに……もの？」アポロの妙な言葉に反応し、映司は顔を上げて眼前の様子に目を向ける。
目の前に映っていたものを見て、映司も思わず声を上げる。彼とアポロガイストを挟んで立っていたのは、この場には絶対にいる筈のない人物だったからだ。

――あ……あぁあ、あ……『アンク』！？

第十九話：「アポロの野望と士の消滅と謎の腕」（後書き）

◆やっとというか、今更と言うか……、『あの人』登場です。何で出て来られたのか、一体何がしたいのかは次回に。

◆アポロガイストについては、最早普通に悪役をしている方が違和感を感じるようになってしまいました。本当はもうちょっと悪役然とした人なのに、なぁ。

第二十話：「タトバの力と映司の決意と発現・新世代ライダーコンボ」（前書き）

前回の続きで。

◆デンオウ・コア

テクニカル系に属するアーム・コア。専用武器を一切持たない代わりに、このメダルを装備すると同時に『デンオウデンレール』が全身に駆け廻り、そこを経由することで、他のメダルが持っていた能力や固有武器を顕現させて使役させることが出来る。

ファイズ・アギトコアと組み合わせ、『黄色のコンボ』として運用することで、全身にフォトンブラッドを纏わせ、敵の攻撃を巧みに見切ってかわす力を使えるようになる。

◆カブト・コア

昆虫系に属するレッグ・コア。超加速能力『クロックアップ』を使用できる唯一のメダル。

どのメダルと組み合わせてクロックアップを使用することは可能だが、クウガ・ブレイドとの組み合わせで『青のコンボ』とすることで、超加速だけでなく、メダルを持った怪人級の相手をも焼き焦がす凄まじい電撃を放つことが可能となる。

第二十話：「タトバの力と映司の決意と発現・新世代ライダーコンボ」

映司と比奈は自身の目を疑った。アポロガイストの燃え盛る拳から映司を守ったのは、金色掛かった茶髪に、風も吹いていないのに、左側に靡(なび)いた前髪。比奈の兄、泉信吾の体を借りて顕現した鳥類グリード・アンクその人だったのだから。

アンクは拳を防いだ赤い羽根でアポロガイストを吹き飛ばすと、どこか憂いのある表情で映司の顔を見る。驚いて尻餅をついたままの映司は、彼の顔を見て我に返った。

「なんだよ、何なんだよその顔は。答えろよ、答えてくれよ、アンク！」

映司の言葉に、アンクは何も答えない。答えない代わりに、目線を映司の顔から更に下へ向けた。

「足下……？　足下に何がある……って、あっ、あぁ！」

アンクの目線の先、映司の足下に転がっていたのは、赤と黄色と緑の三色が混ざり合ったメダル。彼はこの色合いをよく知っている。”コンボ”でありながら特殊な力を持たず、連続して使用出来る唯一の形態。『タカ』と『トラ』と『バッタ』のコアから成る『タトバ』のコンボだ。何故こんなものが転がっているのか。映司は頭の中で思案を巡らせる。

門矢士は割れたタカ・コアを用いて変換光線の光を反射させ、トラとバッタのメダルから生まれたヤミーを、再びセルメダルの塊へと戻した。

士が分解される際、アポロガイストの放った炎の弾のせいで、セルとコアが派手に散ったのも目撃している。

映司は床に散らばった四枚の合成コアメダルを見、輸送ヘリに乗って日本に向かう途中、鴻上から聞いた言葉を思い出す。砕けて、崩れ去ろうとしたメダルたちが、消えたくないという欲望で引き合い、一枚のメダルとして形を成したのが、あの合成コア。トラとバ

ッタだけ数が合わず、中途半端な形でアポロガイストの手にあった。
漸く答えが見えてきた。ヤミーからコアとセルに分解されたトラバッタ・コアは、士の消滅の際、完全な状態になるべく、割れたタカ・コアと引き合ったのだ。意思のない二枚と違い、割れたタカ・コアにはアンクの意識が綴じ込まれている。融合の影響で一時的に幻影として現れたのだ。
だとしたら、アンクのこの表情は何か。言葉を用いずただ哀れんだ目で見つめる彼の真意は何なのか。
考えなくても分かる。人々を護ると言っていながら、諦めて死のうとした自分に呆れているのだ。
あれだけ言ってのけたのだから、最後まで志を貫き続けろ、諦めるなと、無言の圧力を掛けて来ているのだ。
今、自分の手の中には士から託された『タトバ』のメダルがある。それだけじゃアポロガイストに勝てないかも知れない。しかし戦う力を得られたのは確かだ。ならば項垂れて膝を付いているわけには行かない。映司の腹は決まった。
「ぬぐぐ……、ディケイドにつづいて貴様までも！　許さん、絶対に許さないのだ！」
突き飛ばされたアポロガイストが怒り狂って戻ってきた。不意打ちが決まった先程までと違い、相手にも遊びは無い。だが映司に迷いや怖れはなく、来るなら来い、迎え撃ってやるとタトバのメダルを握り締める。
手に炎を纏わせて、アポロガイストが殴り掛かってきた。普通なら恐ろしさに気圧され、どうにもならなかったことだろう。しかし、タトバのメダルの力を引き出した映司には、相手の拳の軌道が読めていたのだ。
映司は寸での所でそれをかわし、黄色いエネルギーに包まれた自身の拳を叩き込む。鋭く研ぎ澄まされて“爪”のような形を成したそれは、アポロガイストの右足の付け根に深々と突き刺さった。
「ぐぅ……、おぉお、っ！？」

「俺の声を聞いてくれ、仮面ライダーW」映司はアポロガイストにではなく、彼の中に埋め込まれたWのメダルに対して呼び掛ける。
「こんな奴の良い様に使われてちゃ駄目だ。俺に力を貸して下さい。みんなを護るための力を！」
Wのメダルに対しそう呼び掛けた映司は、アポロの足に突き刺さった黄色の“爪”を袈裟に引き抜く。彼の体に溜まったセルメダルと共に、緑と紫の二色混ざりのコアが飛び出した。
「“ダブル”のメダル……！　ありがとう、仮面ライダーW」
「おのれ……、よくも私のメダルを……！　返せ、返すのだッ」アポロガイストが激昂して襲い来る。メダルが奪われたことで、『W』と『タジャドル』のメダルの力を行使する“タジャブルガイスト”から、『タジャドガイスト』にされてしまったからだ。
ライダーメダルが外れて能力が落ちたとはいえ、強いのは相変わらず。生身の映司が彼の攻撃をまともに受ければ、致命傷は避けられないだろう。そんなものは御免被る。映司はタトバメダルの『バッタ』の力でアポロガイストを跳び越し、彼の後頭部を蹴りつけて着地した。
「おぉお、おのれ！おのれ！おのれぇえええッ！」
数々の屈辱的な扱いに、アポロガイストの怒りは爆発寸前。だが次の瞬間、今以上に彼の怒りと言う名の炎に油を注ぐ出来事が起こる。ディケイドのメダルから発せられる光のオーロラが、突然歪んで形状を維持出来なくなり始めたのだ。
見ると、ディケイドのメダルに力を送る、三本の柱のうち一本に泉比奈がしがみつき、叩き折ろうと力を込めている。常人ならまだしも比奈程の怪力となれば、折られる可能性は十分にある。
今の彼がそこまで考えていたかどうかは不明だが、激情に駆られたアポロガイストは右手に膨大な炎のエネルギーを集束させ、柱にしがみ付く比奈に向けて放った。
「比奈ちゃんッ」映司は声を上げ、炎弾に向かって跳ぶが、後手を踏んでしまったが為に、今から追っても間に合わない。彼の叫びも

虚しく、炎弾は比奈のしがみ付く柱に着弾し、赤黒い煙を上げた。
煙が晴れ、周囲の様子が露わとなる。柱が砕けたことで、発生しかけたオーロラは消え去り、引力を発して浮いていたメダルたちは、皆その周囲に散らばっている。アポロガイストは「愚か者めが」と笑い、仮面の下で歯を見せるが、その先に広がる光景を目にした瞬間、彼の顔から笑みが消えた。
確かに、炎弾を受けた柱は消し炭になって砕けた。しかし、彼が抹殺しようとしていた泉比奈は、アンクの赤い羽根に阻まれて無傷、だったのだ。
「あ、アンク……！」先の映司と同じように、目を見開いて驚く比奈。そんな彼女の様子とは裏腹に、アンクは何も言わず無表情のまま、散らばったライダーメダルの方を指差した。
「そうだ」と叫び、比奈はアンクが指差した方に向かって行く。彼女の行く手をアポロガイストが追うが、『タトバ』と『W』のメダルの力を宿した映司に羽交い締めにされた。
「行かせない、これ以上は、行かせないッ」
「おぉ、おのれッ！　離せ、離さぬか！」
映司の腕を振り払うべく、アポロガイストは自身の肘で彼の腹を何度も叩くが、映司の腕は緩まない。”W”のメダル、とりわけ『メタルメモリ』の力が宿った映司には、その程度の攻撃など通用しなかったのだ。

「映司くん、これ！　受け取ってください！」
セルとコアの山から『ディケイド』のコアを探し出した比奈は、それを映司に投げ付ける。映司は『バッタ』の力でアポロガイストを蹴って引き剥がすと、腰に巻いたドライバーにタトバ・ディケイド・ダブルの順にメダルを嵌め、右手でオースキャナーを力強く握り締めた。
「仮面ライダーW、士さん、それに……アンク。行こう、皆で一緒に！」

――――変身！

――タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！

――KAMEN RIDE「DECADE」！

――［DOUBLE］！

――――タァアアアアアアッ、ディィイイイイイイ、ブルゥウウウウウウウッ！

　映司がオースキャナーでドライバーを読み込ませたその瞬間、凄まじい光が湯谷温泉の屋上を包み、その場にいた誰もが目を瞑る。光が止み、彼らが再び目を見開くと、『タトバコンボ』のタカ・ヘッドに、『仮面ライダーディケイド』の胴体、『仮面ライダーW・ヒートメタル』の脚部、虹色のオーラングサークルを備えた、全く新しいオーズが立っていた。

第二十話：「タトバの力と映司の決意と発現・新世代ライダーコンボ」（後書き）

◆次回、最終決戦！

◆本来、前回の話と合わせる予定の話だったのでかなり短めです。
その反動か、詰まりに詰まった次回の話は思い切り長くなるやも……。

◆メダルから力を吸い上げる三本の柱は、『ＲＸ』第一話に登場した例の柱のイメージで書いています。

第二十一話：「世界の破壊者と風都の風と無限大の王」（前書き）

カウント・ザ・メダルズ！　現在、オーズの使えるメダルは――

◎ヘッド・コア：タトバ・コア
◎アーム・コア：ディケイド・コア
◎レッグ・コア：ダブル・コア

第二十一話：「世界の破壊者と風都の風と無限大の王」

映司たちがディケイドのメダルを手にする少し前。十数キロ先のビルの屋上では、後藤が失意のあまり膝を付き、肩を落として項垂れていた。

「あいつの言う通りだったのか。あんな強力な武器を何もせず放っておく訳がない。アポロガイストの罠にまんまと嵌まり、俺は……門矢を、この世界を……！」

故意では無いにしろ、アポロガイストの思惑に乗せられ、士をメダルに変えてしまったことを歯噛みして悔やむ後藤。鴻上はそんな彼の肩に優しく触れて、「顔を上げたまえ」と力強く言った。

「さっきも言った筈だよ後藤君。火野君も門矢君も、栄光の十二人ライダーの一人なんだ。私利私欲で世界を奪わんとする者に、彼らが負ける訳がない」

「ですが会長」消え入りそうな声で後藤が言い返す。「火野はメダルを奪われ、門矢はメダルにされてしまったんですよ。こんな状態になっても何で、彼らの勝利を信じていられるんです」

「何度も言わせないでくれたまえ後藤君。それは彼らが、仮面ライダーだからだよ。彼らはまだ負けてなどいない。ここからが『始まり』なのだ。あれを見たまえ、後藤君！」

「『あれ』？」

自信たっぷりな鴻上の言葉を聞き、後藤は再び湯谷温泉の屋上に目を向ける。先程まで空一杯に広がっていた光のオーロラが、何の前触れもなく消え去っているではないか。

こんなことが出来るのは、現場にいる映司しかいない。変身出来ずとも、彼はこれだけの事をやってのけたのだ。確かに鴻上の言う通りかも知れない。

それに比べて自分はどうだ。あれだけ共に戦って来ていて、そんなことも気付かなかったのか。後藤は自身の不甲斐なさに改めて落

胆する。
　ややあって、湯谷温泉の屋上が眩い虹色に輝いた。いったい何だと、ＣＬＡＷｓ・サソリに取り付けられた望遠レンズに目を向ける。後藤の目に映ったのは、『Ｗ』のメダルを奪われて尻餅を付くアポロガイストと、煤けてぼろぼろになった衣装を身に纏った比奈。そして、見たこともない奇抜な鎧に身を包んだ、仮面ライダーオーズの新たな姿だった。

「あれは……！　オーズの、新しい姿、なのか？」
「どれ、私にも見せたまえ後藤君」鴻上は後藤を強引にどかして望遠レンズを覗き込み、やはりねと一人頷いた。「言った通りだったろう、後藤君。オーズはまた一つ上の段階に進化したのだ。今の彼ならば、アポロガイストなど敵ではないだろう」
　鴻上はそう言うと、一抱えもある長物が入った箱と、バースドライバーを何処からともなく取り出して、後藤に手渡した。
「これはそんな火野君に贈る、私からのささやかなプレゼントだ。バースに変身し、これを彼の元まで送り届けてくれるかね、後藤君」
　久々に押し付けられた配達の依頼。断って、自身もバースとして戦いに参加したかったのだが、鴻上のいつになく熱く燃える目差しを目にして気が変わった。それほど重要なものなのだろう。
　後藤は仮面ライダーバースに変身して、鴻上のプレゼントを小脇に抱えると、「承りました」と一礼して、湯谷温泉へと飛び去っていった。

※※※

　オーズ・タトバコンボの『タカ・ヘッド』に似た顔に、虹色の複眼。仮面ライダーディケイドの胴体に酷似した胸回り。ベルトから下の足回りは中心線を境に赤と銀の二色に分かれている。
　これこそが新世代ライダー系コンボ『タディブル』なのだ。

「タディブル……、タディブルだと！？」アポロガイストがゆっくりと立ち上がる。「そんなもの、恐るるに足りぬわ。私の手には他の九枚のメダルがあることを忘れたか。貴様一人、私が手を下す必要もないわ。出でィ、ダークライダー達よ！」
――クウガ！　アギト！　リュウキ！　ファイズ！　カブト！　デンオウ！　キバ！
――ギガスキャン！　ダークライダー！
アポロガイストは手にした九枚のメダルのうち、『剣』と『響鬼』を除いた七枚を左手のタジャスピナーに嵌め込み、七人のダークライダーを呼び出した。
黒い目のクウガ・アルティメットに、アナザーアギト、リュウガにオーガ。ダークカブト、ネガ電王、ダークキバと続く。アポロガイストの闇の意思によって変換されて解き放たれた、質量ある幻影だ。
獣のような雄叫びを上げ、先ずはクウガとアナザーアギトがオーズに挑み来る。クウガが右手をかざした瞬間、オーズの体が炎に包まれた。標的を体内から焼き尽くす「超自然発火能力」だ。
あまりの火力にオーズの足が止まる。だがそれも一瞬の出来事だった。オーズはWのメダル、『ヒート』の力を発現させ、発火能力以上の炎を発し、それを無理矢理掻き消したのだ。オーズは炎に構わず接近し、右腕からクウガ以上の炎を燃やして彼を殴り付ける。
クウガの膝が『く』の字に折れるが、オーズの殴打は止まらない。彼の一発はアルティメットフォームの再生力をも越え、殴られた箇所が徐々に焦げ始めた。それを嫌い苦し紛れにクウガの右手が飛んだ。オーズは左肘で軌道をずらし、代わりに自身の右拳をクウガの腹部に叩き込む。金の彫像が施されたバックルに亀裂が走り、腹を押さえてその場にうずくまった。
バックルを砕かれうずくまるクウガに代わり、アナザーアギトが空から飛び蹴りの体勢で襲い来る。オーズは敵の姿を見ることなく、下半身の右側を”赤”から『黄色』に変え、鞭のようにしなる左足

で脇腹を打ち、アナザーアギトを叩き落とした。
起き上がるアナザーアギトに対し、しなる両足を代わる代わるに打ち付け、敵に反撃の隙を与えない。オーズは彼が疲れ果てて立ち上がれなくなったのを見計らい、左足の『メタルシャフト』を棒状に伸ばして縮こませ、床のアスファルトが陥没する程の勢いで、アナザーアギトのバックルを思い切り踏み抜いた。
アナザーアギトは最上階から三階下まで落ちて行き、瓦礫に押し潰されてメダルの雨に変わり、更に下の階に降り注いだ。
倒したは良いが、あまりにも勢いよく左足を突き刺したが為に、刺さったまま引き抜けなくなってしまい、その隙を狙ってクウガが襲い掛かってきた。オーズはそれならばと、下半身の右側を”緑”に変えて、刺さったままの左足を軸にして振り返り、クウガの拳をかわしつつ、右手で彼の頭を鷲掴みにする。
『サイクロン』の力を発揮し、クウガの周りに凄まじい風を発するオーズ。ベルトを砕かれ満身創痍のクウガは、風にさらわれてセルメダルへと分解されていった。

クウガを降し、左足を地面から引き抜いたオーズに、剣を構えたリュウガとダークキバの二人が背後より挑み来る。オーズは二人の太刀筋を読んで右へ左へ紙一重て左でかわすと、左腕の前腕部から『ディケイドライバー』のバックルを模した盾を装備して身を守り、彼らを蹴り飛ばして距離を取った。
「これは……、よぉ、し！」
――ＷＥＡＰＯＮ　ＲＩＤＥ「ＤＯＲＧ－ＳＡＢＡＲ　ＳＵＲＶＩＶＥ」
――ＷＥＡＰＯＮ　ＲＩＤＥ「ＺＡＮ－ＢＡＴ　ＳＷＯＲＤ」
今の衝撃によって、手と前腕側から現れた不可思議なカードを目にし、この盾が何なのか「だいたい」分かったオーズは、二枚のカードを目の前に放る。タカの目ならぬ『タトバ・アイ』は、ディケイドのカメンライドカードを読み込み、物質として変換することが

出来るのだ。
　リュウガとダークキバに対抗してオーズが召喚した武器は『ドラグセイバー』と『ザンバットソード』。彼はこの二つの剣で敵を蹴散らした後、盾中央にある赤い宝玉に触れる。
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「Ｒｙｕ－Ｒｙｕ－Ｒｙｕ－ＲＹＵＫＩ」
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「Ｋｉ－Ｋｉ－Ｋｉ－ＫＩＶＡ」

　盾の赤い宝玉に手を触れると同時に、右の剣に炎が灯り、左の剣の刀身が真っ赤に染まる。オーズは彼らと距離を取ったうえで、刀に宿った炎と赤きエネルギーを、波動としてリュウガたちに放った。
　二体のダークライダーは胴から上とその下で真っ二つにされ、波飛沫のようにメダルを散らして消え去ってしまう。
　息着く間も無く、ダークカブト、ネガ電王、オーガの三体がオーズに襲い掛かる。オーガの剣・『オーガストランザー』の刀身が長く伸び、横薙ぎにオーズを襲う。二本の剣で防いでなお吹き飛ばされ、浮いた隙を狙って、ダークカブトがクロックアップで斬り掛かってきた。
　着地の際によろけ、床に尻餅を付いたオーズに向かい、ネガ電王の武器、ネガ・デンガッシャーの刀身が迫る。敵のコンビネーションに圧倒されるオーズだが、彼も押されてばかりはいられない。『オーズは宙を舞う刃を人差し指と中指の間で掴んで止め、ネガ電王に投げ返す。胸の装甲を貫いて、仰向けに倒れる電王を尻目に、オーガの伸びる刃を左腕の盾と右肘でいなしつつ『タトバ・アイ』で、超高速で動き回るダークカブトの周囲に目を向ける。
　タトバのタカの目がクロックアップ中のダークカブトの姿を捉える。オーズはあえて何もせず、背後から迫る奴の手を両腕で掴み、右足を一歩先に踏み込んで、一本背負いの要領でダークカブトを投げ飛ばした。

「後はお前たちだけだ、一気に決めてやる！」
――ＷＥＡＰＯＮ　ＲＩＤＥ「ＰＥＲＦＥＣＴ　ＺＥＣＴＥＲ」
――ＷＥＡＰＯＮ　ＲＩＤＥ「ＦＡＩＺ－ＢＬＡＳＴＥＲ」
オーズは左腕の盾から二枚のカードを取り出してタカの目で読み込ませる。彼の身の丈程もある巨大な銃、『パーフェクトゼクター』と『ファイズブラスター』がオーズの手に収まった。
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「Ｋａ－Ｋａ－Ｋａ－ＫＡＢＵＴＯ」
――ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ「Ｆａ－Ｆａ－Ｆａ－ＦＡＩＺ」
銃の柄で盾の赤い宝玉に触れると同時に、「ファイナルアタックライド」の電子音が鳴り響く。二挺の銃から放たれた竜巻のような螺旋と、フォトンブラッドの紅い極太の光線は、横一列に並んだ三人のライダーを挟み込むように進み、真中にいたネガ電王をも巻き込んで、一瞬で彼らを蒸発させてしまった。

「なな、こんな馬鹿なッ！　く、くそォ……こうなったら、こうなったならッ」
召喚したダークライダーが全て倒されたのを見、焦燥に駆られたアポロガイストは、無謀と知りつつクジャクの翼と炎弾を用いてオーズに戦いを挑む。一組織の首領であるが故の矜持（プライド）が、彼の頭から逃走という手段を忘れさせていたのだ。
オーズは放たれた炎弾を盾で弾きつつ、左足を地面に突き刺し、右足の緑の力で竜巻を起こさせて、アポロガイストの羽根を穿って叩き落とした。
「これで決まりだ。行くぞ、アポロガイスト！」
――タトバ！　ディケイド！　ダブル！　スキャニングチャージ！
「ぬうぅ、スキャニングチャージだと！？　そんなもの、出される前に潰してくれるゥ」
竜巻に煽られて落ち行く中、オーズがメダルをスキャンするのを

見たアポロガイストは、爪先と踵にしまわれていた強靭な爪を展開し、落下の勢いを逆に利用して体を捻らせオーズに襲い掛かる。
アポロガイスト渾身の一撃だったのだが、オーズは彼の更に一歩先を行っていた。アポロの爪がオーズを捉えんとしたその瞬間、彼の体はオーラングサークルを境目にして切り離されてしまったのだ。
切り離された上半身は空へと飛び、残された下半身は緑と紫のエネルギーを放出しつつ、人の姿を形作って行く。アポロガイストの強靭な爪は、オーズの残された下半身から現れた、『ダブル・サイクロンジョーカーエクストリーム』の”プリズムビッカー”によって止められた。
「ぬぉ……おッ！？　何故貴様らがここにいる！　私がメダルに変えてやったというのに！」
狼狽えるアポロの言葉に、仮面ライダーWは何も答えず、プリズムビッカーに填まった四本のガイアメモリを押し込んで叫ぶ。
――ビッカー・ファイナリュージョン！
Wの叫びと共に、爪を受け止めている盾部分から七色の光線が飛び出し、アポロガイストを遥か上方まで押し上げる。光線に身を焼かれ、不死鳥型の外装がどんどん崩れて行くが、それだけでは終わらない。アポロガイストが飛ばされ行く空の上には、今まさに飛び蹴りを放たんとしている『ディケイド・コンプリートフォーム』と『オーズ・タトバコンボ』の二人がいたからだ。
――喰らえぇぇぇぇッ！
――せいやぁぁぁあッ！
ディケイドとオーズの強烈な一撃を喰ったアポロガイストは、屋上の床を砕き、そこから四階程下の層まで落ちて行ってしまう。二人のライダーは着地してWと共に向かい合うと、手と手を合わせて健闘を称え合い、実体を失ってオーズの体の中に吸い込まれていった。
※※※

アポロガイストが落下し、大穴の開いた場所を覗き込む。穴の近くで粉微塵になったタジャドルメダルを見付けた。オーズの力だけではメダルを砕けなかったのだが、『世界の破壊者』ディケイドの力を得たことにより、それすらも可能になっているようだ。

オーズは砕けたメダルを拾い上げ、物憂げな目付きでそれを見る。アンクの意思はこの中には無いし、ドクター・真木と戦ったあの時に消滅して然るべきものだと言うことも理解している。言葉にして表現出来ない不可思議な気持ちが、オーズの心の中で渦巻いていた。

何はともあれ、アポロガイストたちとの戦いはこれで終わった。ライダーメダルを元に戻すのは、鴻上たちに任せておけば大丈夫だろう。オーズは漸く終わったと安堵の溜め息を漏らし、柱の側に座り込んでいる比奈に声をかけた。

「比奈ちゃん、やっと終わったよ！　これでもう、日本は皆のものに戻ったんだ」

「え、え……映司くん、うし、うし……後ろ……」

大手を振って喜ぶオーズとは対照的に、比奈はと言うと、彼の方を見て震えている。オーズは何をそんなに怖がっているんだと振り返るが、首を曲げたその瞬間、オーズは太く力強い”前足”に蹴りつけられ、湯谷温泉の屋上から叩き出されてしまった。

「おぉわわっ！？　なんなんだ今のッ」

不意を突かれて蹴られはしたが、オーズは冷静に右足を『黄色』に変えて伸ばし、残されていた柱のうち一本に括り付け、なんとか屋上に舞い戻った。

地に足を付け、改めて『それ』の姿を見込む。右はオーズの胴体程も、ゴリラの如く力強い腕。左は鯱（シャチ）のような顔をした腕に、『タコ』の無数の触手が蠢いており、脚に至ってはチーターの細くしなやかな足が、バッタの下半身に三対となって生えている。

何より驚くべきはその顔だ。立派な金色の鬣（たてがみ）を顔に生やし、目に当たる部分から『ウナギ』のようにぬるりとはみ出た不気味な眼球。

とても人のものとは思えない。だが、一つだけ分かることがある。これは『サゴーゾ』『シャウタ』『ラトラータ』『ガタキリバ』のコアメダルを取り込んだ、あの『アポロガイスト』であると。
「はは、あは。あはははは」気味の悪い声でアポロガイストが笑う。
「これで勝ったと思うなよ仮面ライダーオーズ。タジャドルや他のメダルに気を取られ失念していたようだな。私が他の合成コア全てを手中に収めていたことに！」
確かに合成コアメダルのことは失念していたが、それ以上に不可思議なことがある。
「おい、ちょっと待てよ」オーズは彼にそのことを問い質す。「合成コアメダル四枚……、合計で十二枚のコアメダルだぞ。そんなものを一気に呑み込んで無事な訳がない、なんでお前は暴走しないんだ」
「下らん、貴様の常識でものを測るな。自分の欲望を抑え切れずに暴走するだと！？　私はそんな器の小さい男では無ァい。私が求めるのは平行世界の全て！　こんなものでは足りん、全く足りんのだ！」
凄まじく醜悪な姿になりながらも、理性を保ち、自身の欲望に忠実であり続ける。この男は強い。合成コアメダルを四枚も取り込み、こんな化物になってまで自身の欲望を叶えようとするアポロガイストに対し、オーズは身震いを止めることが出来なかった。

「何を怯えている。来ないなら此方から行くぞ、仮面ライダーオーズ！」
気圧されて動けないオーズに向かい、アポロガイストの巨大な前足が迫る。途中で気が付き、寸での所でかわせたものの、アポロの前足はオーズの時以上の穴を開け、湯谷温泉の屋上を完全に破壊してしまう。
オーズは抵抗出来ずに落ちて行く比奈を『黄色（ルナ）』の右足で絡め取り、偶然近くにあったドクター・フィッシュバスの上に彼女を退避

させる。
「絶対にそこを離れないで。動かないで待ってて、比奈ちゃん！」
「映司くん……そんなこと言われても、あっ、あぁ……ひゃんっ」
「あなたはどうするんですか」とオーズに問おうとした比奈だったが、足の裏や脇の下に入り込んで来たドクター・フィッシュに邪魔をされ、何も言えずにオーズを行かせてしまう。

「こっちだ、アポロガイスト！　降りて来い、下まで降りて来いッ！」
比奈の身を守るべく九階を離れ、オーズはアポロガイストを下の階へと誘う。五階の『大型トレーニングルーム』で彼の足が止まる。ライダーたちの武器を自由自在に扱える『ディケイド』のメダルの力は強力だ。しかし、カードを盾から取り出して読み込ませるには、ほんの少しだけ時間が掛かる。数多くのトレーニング器具が集まったこの場所でなら、身を隠し、隙を窺いつつ戦えると踏んだからだ。
ランニングマシンが密集した場所に屈み、アポロガイストを倒せる武器は無いかと探る。オーズの目に響鬼の『装甲声刃（アームドセイバー）』のカードが留まった。

「この期に及んでこそこそ逃げ回るとは」周囲を見回しつつ、アポロガイストが苛立った様子で言った。「えぇい猪口才（ちょこざい）な！　出てきたくなければ、私が引きずり出してやるのだ」
業を煮やしたアポロガイストは、腕を水平にし、右に左に力強く振り回す。数百数千の金を掛けて揃えたであろうトレーニング器具が、一瞬で鉄屑に変わっていく。
「見付けたぞ、そこにいたなッ！」
あっという間に視界は開け、隠れていたオーズの姿が顕になる。捕まるよりも先にカードを読み込ませようとするオーズの健闘も虚しく、アポロガイストの左腕の触手に縛り付けられ、頑強な右拳が彼の腹筋を貫いた。

『ディケイド』の腕からカードのバリアを展開して押し戻そうとするが、掛かる圧は凄まじく、オーズの体が徐々に床にめり込んで行く。
「えぇい、しぶとい奴め。いい加減、ぶっ潰れるのだ！」
アポロの右腕が真白く光る。同時に腕の重みが何倍にも増し、バリアすらも易々と砕いて行く。『サゴーゾ』メダルの重力操作能力だ。オーズはとうとう抑え切れなくなり、力尽きて地面にめり込んでしまった。
アポロガイストはやったぞと声を上げ、左手の鯱を突き出して言う。「貴様もこれまでだな？　仮面ライダーオーズ。お前を喰らってディケイドの力を直接私の中に取り込み、私自身がこの世に並ぶべき者の無い存在になってやるのだ」
鋭い歯が大小びっしりと生えた口を大きく開け、オーズを飲み込まんと近付いてくる。一時的に気を失い、五階の床下に押し込まれたオーズに、助かる手立ては無いのだろうか。
どうしようもないことだ。起死回生の一手などある筈もない。そう、彼自身には――

「そんなこと、させるものかッ！」
――ブレスト・キャノン、シュゥウウト！
青緑の閃光と共に、アポロガイストの体が右に大きくよろけた。彼の合間をすり抜け、オーズの前に聞き覚えのある声と、見覚えのある顔が現れる。仮面ライダーバース、後藤慎太郎だ。
「後藤さん、なんでここに」
「細かい事は後にしろ、それより」後藤は鴻上から預かった箱を手渡して続ける。「会長からの贈り物だ。使ってくれ、火野」
「これは……、何ですか、後藤さん」
「それは俺にも……おぉっ！？」
この箱は一体何だと聞くより先に、不意打ちから立ち直ったアポロガイストの触手が彼らを襲う。

その勢いと崩れ行く天井を目にした後藤は、話は後だと胸のキャノンを構えた。
「俺があいつを抑える。お前は奴をどうにかしてくれ。会長のことだ、俺やお前に無駄骨を折らすことだけは無いはずだ」
「は……、はい！」オーズはそう言って箱の包装紙とリボンを解き、中に入っているものを取り出す。
これには見覚えがあった。かつて、後藤と自分が初めて出会った際、今と同じように鴻上から贈られた白銀の剣、セルメダルを投入して使う『メダジャリバー』だ。
オーズは同時に、上の階で散らばったままのライダーメダルのことを思い出す。メダジャリバーはセルメダルのエネルギーを用いる武器だが、もしもコアメダルを代用することが出来たなら。
いや、迷っている暇はない。後藤だっていつまで持つか分からないからだ。オーズは空に向かって手を伸ばした。
「俺の元に集まってくれ、九枚のライダーメダル！」
オーズの声に呼応し、至る所に散らばったメダルたちが彼の手に集まっていく。『ディケイド』コアの能力の一端だ。
「よぉし、それにこいつだ！」
――ＷＥＡＰＯＮ　ＲＩＤＥ「ＴＡＪＹＡ－ＳＰＩＮＡＲ」
オーズは九枚のメダルを握り締め、左手の盾から一枚のカードを引き抜いてタカの目で読み込ませる。彼の右手にタジャドルコンボの専用武器・タジャスピナーが装備された。
――クウガ！　アギト！　ファイズ！　ヒビキ！　カブト！　デンオウ！　ギガスキャン！
六枚のメダルをタジャスピナーに嵌め込んで蓋を閉じ、オースキャナーで読み込ます。仮面ライダーのエネルギーが渦を巻き、みるみるうちに集束されていく。
「後藤さんッ、離れてください、」
「あぁ、任せたぞ火野ぉ」
後藤が離れたのを見計らい、タジャスピナーに溜まったエネルギ

ーを放つ。六色に輝く光の弾は二つ三組に分裂し、アポロガイストに向かっていく。
「小賢しい。こんなもの、屁でもないのだ！」
アポロガイストはそれに対抗すべく、シャチの口から強力な雷を放つ。光弾のうち一組とかち合い、猛烈な火花を散らした。
だが、そこまでだった。ぶつかり合った光弾は徐々に形を成して行き、アポロガイストの放った雷を押し返す。ファイズ・ブラスターフォームとカブト・ハイパーフォームの姿となった光弾は、『パーフェクトゼクター』と『ファイズブラスター』を構えて極太の光線を発射し、アポロガイストの両腕を消し飛ばした。
光弾の猛攻は止まらない。その隙にアポロの背後を取ったもう一組は、装甲響鬼と電王・クライマックスフォームの姿となって、バッタとチーターの下半身を斬り落としたのだ。腕と脚を斬られ、力無く落下するアポロガイストを狙い、クウガ・ライジングアルティメットとアギト・シャイニングフォームの飛び蹴りが迫る。アポロガイストは残った頑強な装甲をも剥ぎ取られ、空高くに放り出されてしまった。

――リュウキ！　ブレイド！　キバ！
――トリプル！　スキャニングチャージ！
残る三枚のメダルをメダジャリバーに投入し、オースキャナーで刀身をなぞる。赤青赤の三つのリングが浮かび上がって、赤青二色のエネルギーを伴って、メダジャリバーの刃が三倍近くまで一気に伸びた。
「今度こそ……、本当に終わりだ、アポロガイスト！」
オーズはタトバの赤黄緑の翼で飛び上がり、雲の中にまで飛ばされたアポロガイストの体を袈裟に一回、逆袈裟にもう一回斬り裂いた。
「ぐっ……おぉ、おおぉっ！　おおおッ！？」
斬られたアポロガイストが驚き狼狽えるのも無理はない。彼の傷

口から溢れ出したのは血でもセルメダルでもなく、先程三本の柱で発生させていた”光のオーロラ”だったのだから。
　彼の傷口から発生したオーロラは、互いに一つにならんと、四つに分かれたアポロガイストの体を吸い込みつつ、徐々に引き合って行く。
「何だこれはッ、私をどこに連れて行こうと言うのだ！？　こんなところで死ねるものか、私はまだ何も達成していないのだ。全ての並行世界に君臨し、全世界一”迷惑な奴”になるという夢が……」
「一生叶わないよ、そんなもの」メダジャリバーを懐に収め、オーズが抑えた声で言う。「お前はもう、どこに行くこともない。生きることも……死ぬこともないんだ」
「生きることも死ぬこともないだと！？　それは一体どういうことなのだ、答えろ！　答えるのだ仮面ライダー……」

　アポロガイストは答えを得ること叶わず、メダジャリバーによって生じた”空間の裂け目”の中に飲み込まれ、この世界から姿を消した。ややあって、裂け目の中から耳をつんざく爆発音が鳴り響き、豪雨と見紛う程のセルメダルが、アポロガイスト爆散による眩い光と共に降り注ぐ。
　次元の裂け目はその後も暫く残り、数多くの人々の犠牲の元に成り立った欲望の豪雨を、いつまでもいつまでも降り積もらせていた。

第二十一話：「世界の破壊者と風都の風と無限大の王」（後書き）

◆次回、最終回！

最終回：「お別れとお帰りと俺の名は仮面ライダーオーズ」

「おぉい、おいおい。一体どうなってやがんだよ、こいつは」
「黒タイツたちが……消えた？」
仮面ライダーオーズがアポロガイストを降したことで、湯谷温泉一階において、戦闘員相手に戦いを続けていた伊達たちの戦況にも、大きな変化を及ぼしていた。
作り主たるアポロガイストが消滅したのと同時に、セルメダルで出来た戦闘員たちは、一瞬のうちにメダルに戻ってしまったのだ。
「お二人とも、見てください」驚く伊達と里中に、先んじて外に出ていた泉信吾が言う。「メダルです。メダルの大雨がこのビルの上から滝のように！　これって、もしかして……」
「貴方の考えている通りでしょう、泉刑事」メダルの雨に手をかざしつつ、里中が言う。
「あぁ。火野たちの野郎、やりやがった！」伊達は戦いでぼろぼろになった装甲を無理矢理引き剥がし、「やったぜ」と両腕を高く上げる。
不可思議なことは尚も続いた。嵐のように大地に注ぐ欲望の雨は、ひとりでに集まって山を成し、人の姿へと変貌しているではないか。
アポロガイストがメダルとして取り込んでいた人々が解放され、人の形を取り戻したのだ。メダルの山は徐々に姿を消して行き、気を失って突っ伏す老若男女に変わって行く。
何故こんなことが起こったのかは分からない。だが今の伊達たちにとっては、そんなことなどどうでも良かった。バースとして戦っていた三人は、映司たち仮面ライダーの勝利にただただ湧いていた。

※※※

仮面ライダーオーズ――火野映司は、タカの羽根で欲望の塊を弾

きつつ、比奈の待つ湯谷温泉の九階へと降り立った。笑い疲れ、どこか宙を見て浴槽に浮かぶ比奈を、オーズは優しく抱き上げる。
「映司くん、アポロガイストは……」
「大丈夫。終わったよ、全部ね」
「そう、ですか」比奈は安堵の溜め息を漏らしつつ、オーズの体に抱き付いた。「良かった、本当に良かったです。ありがとうございました、映司くん」
「『俺だけ』、じゃないよ」映司はすかさず付け加える。「ライダーメダルに士さん、後藤さんや伊達さん。鴻上さんや里中さん、町の皆だってそうだし、それに……比奈ちゃん。皆が俺に手を貸してくれたから勝てたんだ」
オーズは彼女の手を握って言葉を続ける。「だから、さ。俺にも言わせてよ。助けてくれて、ありがとう。比奈ちゃん」
「いいえ、こちらこそ」比奈はそう言って微笑み、オーズの手を握り返した。
丁度その時だった。オーズのベルトに嵌まったメダルが、何の前触れもなく勝手に外れ、セルメダルの雨の中に消えてしまったのだ。バックルの中の三枚だけに留まらず、タジャスピナーの中の六枚、メダジャリバーの中の三枚も、何かに引き寄せられるかのようにして消えていく。
「ちょっ！　嘘でしょ、なんでこんな！」
『タトバ』メダル以外のコアを全て失い、変身を解かれた映司は、何処へ行くんだ。アポロガイストはもういないじゃないかと、消え行くメダルを追う。
降り積もるセルの雨量が凄まじかったからか、メダルを追うことしか頭になかったからか、九階の中央に大穴が開いていることを忘れ、足を踏み外して穴に落ちてしまった。
「映司くんッ」比奈は浴槽から上がって映司を追うが、長い間湯を吸った純白のドレスは予想以上に重く、所々に亀裂の走った地面に足を取られ、鼻先を打つ程の勢いで転んでしまう。

映司の方も掴まる場所を探し、あちらこちらに手を伸ばすが、掴まれる場所などどこにもなく、降り注ぐセルメダルが重しとなって落下速度は増す一方だ。
比奈が叫び、映司は死んでたまるかと手を伸ばし続ける。後数メートルで五階の床に叩き付けられんとし、もう駄目かと思いかけた、まさにその時。
――おいおい、最後の最後で何やってンだ。ヒーローが転落死なんて、格好悪いにも程があるぜ。
映司の伸ばした手を掴み、上の階へと引き上げる者がいた。自分が誰かに引っ張り上げられていることに気付いた映司は、自分の右腕を掴む者の顔を見る。ピンク色の顔に黒い縦縞、緑色の複眼の仮面ライダーがそこにいた。
「うわ、うわぁあ、あぁ！」映司は大層驚いて縦に横にと激しく揺れる。
彼を引き上げる仮面ライダー――ディケイド・門矢士は、「失礼な奴だ」と憤慨した様子で言う。
「なんだその反応は。俺ァ生きてるぞ。下を見ろ下を、足だってちゃんとついてるだろ」
「いや、そうじゃなくて……」映司は若干申し訳なさそうに言う。
「目の前にちかちかするしましまピンクが現れたから、面食らっちゃって」
「なんだその理由は！　それにな、この色はピンクじゃねぇ、マゼンタだ！　色の三原色・シアン、イエロー、マゼンタのうちの一つなんだぞ、断じてピンクじゃねぇ！」
「すみません士さん、そんなにデリケートな問題だとは……」色くらいで何だと思いつつ、失礼なことはと頭を下げる映司。同時に、この場にディケイドがいることに疑問を感じ、「そういえば」と彼に問い掛けた。
「どうして士さんがここにいるんです。アポロガイストにメダルに変えられたんじゃあ」

「もっと早く気付けねぇのかお前は」ディケイドはやれやれと溜め息を着いて言う。「まぁ、いいか。そんなに知りたきゃ教えてやるよ。そぉらっと」

ディケイドは映司を九階で降ろし、「あれを見ろ」と映司の目を温泉の一角に向けさせる。ディケイドとオーズを除く十人の仮面ライダーが、いつの間にかここまで登ってきた後藤と談笑し、うち数人が怯える比奈の周りをぐるりと囲っていた。

「――よぉ、まァた助けられちまったな、オーズ」

そんな中、右半身が緑、左半身が黒の仮面ライダー・Wが、ライダーたちの輪を抜け出して映司に声を掛けてきた。

映司は見覚えも聞き覚えもないのに、自分の名を知り気さくに話し掛けてくる彼の言動に違和を覚えるが、程なくして彼自身が――正確には彼の”右半身”が先の言葉に「それは違う」と突っ込んだ。

「ショウタロウ、彼は僕たちの世界にいた『彼』とは違うんだ。僕らのことを知っている訳がないよ」

右半身の赤い複眼が赤く点滅し、左半身をたしなめるように言う。先程映司に声を掛けた時とは違う、変声し切っていない無邪気な子どもの声だ。彼は一体何なんだと顔に疑問符を浮かべる映司に対し、Wの右半身は「混乱させてしまったね」と再び声を掛ける。

「僕とさっきの彼――ショウタロウは『二人で一人の仮面ライダー』。僕たちは以前、君でないオーズと力を合わせて戦ったことがあったから、僕の相棒は勘違いをしてしまったみたいなんだ。驚かせて済まなかったね」

「あ……、ご丁寧にありがとうございます。あぁでも、別に気にしてませんよ。それに……」

映司の関心事は別にあった。別の世界の仮面ライダーオーズ、か。こうして見間違えられるくらいなのだから、自分と瓜二つなのだろうな、”彼”は。平行世界に暮らすオーズはどんな人物で、どんな世界を生きているのだろうか。映司は出会いようのない別世界の自分に少しだけ思いを馳せる。

そして同時に、映司は比奈が残りの仮面ライダーに輪になって囲まれ、不安気な顔をしているのに気が付いた。
「えっ、ええ、映司くん……」比奈は映司が無事生還したこと以上に、自身の周囲を囲う九人の異形に驚き狼狽えている。
「そいつらは全員仮面ライダーだぜ。何をそんなに驚いてやがるんだよ」ディケイドは怯える比奈に落ち着けよと促すが、ライダーたちの中で取り分け異様な彼の言葉は、かえって比奈の恐怖を煽ってしまう。
「ひぃいっ、ピンクの化物ぉ」
「またかよ！　ちきしょう、失敬だ！　この世界の奴らは失敬にも程がある！　格好いいだろ、マゼンタだって格好良いだろう！」
怯えてたじろぐ比奈を目にし、腹立たしいぞと彼女に詰め寄るディケイド。映司は彼をなだめ、「そんなことよりも」と話を振った。
「さっき教えてくれるって言ったじゃないですか。何故士さんがここにいるんです」
「あぁ……、そういやそうだったな」
ディケイドは後手で後頭部を軽く掻いて答える。
「前にも言ったよな。俺たちはアポロガイストの奴によって体をセルに、精神と能力をコアメダルに分解され、奴のいいように使われていたんだ。残ったセルはご丁寧に奴が吸収してな。だがアポロガイストはもういない。お前と俺たちでやっつけたんだからな。
奴が倒れて、奪われてメダルに変換されていたセルも飛び出した。そうなりゃあ自分の体に戻るのが筋ってもんだろ。そういうことだ」
映司はそんな突飛なことが本当にあるのか、と口を滑らせそうになったが、今更言うべきことではないと思い返し、頭の隅に追いやって流した。「それよりも、毒の方は……大丈夫、なんですか？」
「あぁ、そのことなら心配するな。体を蝕む毒も、蝕むべき体が無くなっちゃあどうしようもねぇ。今はもうピンピンしてらぁ」
言いながら軽く宙返りをして見せるディケイド。立ち振舞いにも息遣いにも無理はない。痩せ我慢ではなく本当に治ったようだ。

映司はほっと胸を撫で下ろすと、空に開いた次元の裂け目と、そこから降り注ぐセルメダルの雨を見つつ、しみじみと言葉を紡ぐ。
「終わったんですね。全部」
「どうだかな。俺たちにとっちゃ確かに終わったがよ、お前らこの世界の住人はそうは行かないだろ。行方不明者の捜索だの瓦礫の撤去だの。面倒なことはいくらでもある」
「ですね。けど……」九階の窓から地上を見下ろしつつ、映司が言う。「大丈夫ですよ。この世界に生きる人々なら、きっと。見てください、あれを」
映司につられ、ディケイドも地上に目をやる。未だ降り続くセルメダルの雨の中、助かった人々同士が手を繋ぎ喜びを分かち合っている。
ディケイドの言う通り、敵の頭目を倒したとはいえ、未だ問題は山積みで、手離しに解決したとは言い難い状況だ。しかし、彼らは一人じゃない。手を繋ぎ、喜びも悲しみをも分かち合える人々がいる。彼らならきっと大丈夫。映司だけでなくディケイドにもそう思えて来た。
窓から地上を見下ろしていてふと、ディケイドは降り積もるメダルの量が減ってきていることに気付き、空を見上げる。湯谷温泉上空でぽっかりと開いていた次元の裂け目は先程までの半分までの大きさに縮んでおり、未だ縮小し続けているではないか。
「そろそろ潮時か」ディケイドは一人そう呟くと、映司の方に向き直った。
「じゃあ、ま。俺たちがすべき事は終わったし、そろそろ帰らせてもらうぜ。色々と世話になったな」
「帰るって……、どうやって帰るんです？　士さんたちは『別世界の人間』なのに」
「あぁ、それについては心配するな。……ユウスケ、おいユウスケ！　ちょっとこっち来い」ディケイドは比奈とお手玉をして遊ぶ、赤色の体に金の二本角のライダーを『ユウスケ』と呼んで、こちら

に来るよう促す。
「仮面ライダークウガ」は、比奈に「また今度ね」と手を振って別れると、面倒臭そうな声で何だと食って掛かった。
「なんだよ、せっかく遊んでたってのに……」
「まぁ、そう言うな。お前にしか頼めない仕事があったんでな」
「俺にしか頼めない？　そりゃあどういうこったよ」
「こういうことだ」
――ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ「Ｋｕ－Ｋｕ－Ｋｕ－ＫＵＵＧＡ」
ディケイドが『ファイナルフォームライド』のカードをドライバーに装填すると同時に、クウガの体は一瞬のうちに、甲虫型の乗り物・クウガゴウラムへと変わってしまう。
「仮面ライダーが乗り物に」と口を大きく開けて驚く映司と、慣れた様子で「いきなり何なんだよ」と怒るクウガを尻目に、ディケイドは『アギト』と『カブト』のファイナルフォームライドカードをバックルの中に投げ入れる。
――ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ「ａ－ａ－ａ－ＡＧＩＴＯ」
――ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ「Ｋａ－Ｋａ－Ｋａ－ＫＡＢＵＴＯ」
彼らの意思などお構い無しに、二人は乗り物型の機械・『アギトトルネイダー』と『ゼクターカブト』に姿を変えられてしまう。ディケイドはこれら三つの乗り物を指して映司に言った。
「ここに残りの奴らも乗せて、あの次元の裂け目に入るんだよ。途中でこいつらを元いた世界に戻しながらな」
「あ、あの。乗り物になっちゃった人たちは」
「放っておけば勝手に戻る。心配はいらん」
「本当にそうなのか」一抹の不安が過ったが、あんな姿をしていてもディケイドと普通に会話をしている三体の乗り物たちを目にし、士さん言うのなら大丈夫なんだろう、と一人で納得してしまう。
そう結論付け、一人で頷く映司に対し、ディケイドはありがとう

と手を差し出した。
「今度こそ、本当にあばよだ。不謹慎かも知れないが、お前と一緒に戦ったこの二日間、なかなか楽しかったぜ」
その言葉に映司は、少し嬉しそうな表情を浮かべて「実を言うと」返す。「俺もです。また、お会い出来ると良いですね」
「だな」ディケイドは身を翻してクウガゴウラムの背に飛び乗り、若干の間を置いて言う。「でもよ、それはつまり……また戦いがあるかも知れないって事だぜ。それでも会いたいか？」
「心配入りませんよ、士さんたちが一緒なんですからね。どんな相手にだって負けません」
映司の発した何気無い言葉に、ディケイドは少し照れ臭そうに目を細め、再び彼に背を向けた。
「あばよ、仮面ライダーオーズ。この世界は任せたぜ」
「任されました。皆さん、お気を付けて」
別れの挨拶を交わしたディケイドは、それ以上何も言わず、他のライダーたちを引き連れ、裂け目の中に消えていく。映司たちは大手を振って栄光の仮面ライダーたちを見送った。
セルメダルを際限なく降らせていた次元の裂け目は程無くして消え去り、夢見町の空に陽光が戻る。映司は深呼吸の上に大きく伸びをすると、背後に立つ比奈と後藤に声を掛けた。
「さぁ、降りよう。下で皆が待ってるよ」
「そうですね……はっ、はっ、はくちゅ」言い終える前にくしゃみをして体を震わせる比奈。上から下まで濡れ鼠になっている彼女を、これ以上そのままにしておくわけには行かない。エレベーターが止まっている今、映司はどこか降りられる場所はないかと辺りを見回すが、のんびりと脱出口を探す暇は彼らにはなかった。突如足下に亀裂が走り、九階の床が崩れ始めたからだ。オーズとアポロガイストとの激しい戦いによって疲弊し、耐えきれなくなったのだろう。
「比奈ちゃん！」床の異変に気付き、直ぐ様比奈の元へと駆ける映司。床の崩壊が思ったよりも早い。映司の足では彼女が落下するの

を止められそうにない。
　どうすればいいんだと慌てる映司の背後を、仮面ライダーバースに変身した後藤がすり抜けた。
「火野、掴まれッ！」
――カッター・ウイング
――クレーン・アーム
　変身すると同時に、バックルに二枚のセルメダルを投入してダイヤルを回す。ウイングを装備して映司の体を掴んだ後藤は、右腕のクレーンで比奈を捕まえ、崩れ行くビルの中から飛び出した。
「間、一髪……でしたね」余程肝を冷やしたのか、蒼い顔をして比奈が言う。「このまま下まで降りましょうよ」
「あぁ。そうしたいのは山々なんだが……」
「えっ、それってどういう……うぅわっ！？」
　何故そんなことを言うのかと聞こうとした瞬間、燃費の悪そうな音を響かせ、バースの体が大きく揺れる。オーズを庇ってアポロガイストと対峙し、避けたとは言えタジャスピナーから放たれた光弾の余波を喰い、加えて今の無理な離陸が重なったことにより、限界が来てしまったのだろう。
　カッター・ウイングのエンジンは三人を支えるだけの力を無くし、バースと彼に抱き付いた二人は、地球の重力に従って真っ逆さまに落ちていく。
「後藤さん、これって」
「……駄目だ、出力が上がらない！　このままじゃあ、ただ勢いを付けて落下していくだけだ。くそッ、何か……何かないのか！？　出力を上げる方法は……」
　激突してたまるか。後藤は落下速度が増す中、かつて熟読していたマニュアルの中身を思い返さんとする。しかし如何せん時間がない。彼らが地表にぶつかるまで残り三十秒もないのだ。
　何ら対策を見出だせず、ただただ恐れ慄く後藤に対し、映司は腹を決め、「対策ならありますよ」と凛とした表情で言った。

「『出力が』上がらないんでしたよね、後藤さん。このままじゃ皆ぺしゃんこだ。だったらやるべきことは一つだけです」
映司はそう言って、二人に『ごめん』と言い残して頬笑み、後藤の横腹を蹴りつけてバースの体を離れた。突然の行動に比奈と後藤は大きく狼狽える。
「何をするんだ！　待ってろ、今助けてやる」と手を伸ばすも、映司はそれを拒んで首を横に振る。それもその筈。映司が離れたことでカッター・ウイングの出力はぎりぎり安定し、勢いを殺せるようになったのだから。
今ここで彼の手を掴めば、また出力オーバーでどうにかなってしまうだろう。だからこそ彼は後藤の助けを拒んだのだ。
映司が離れたことによって、後藤の体は漸く安定し、逆噴射で勢いを殺すことが出来た。だが彼から離れた映司はそうは行かない。地上にいる人々の顔が、地面の模様が鮮明に見えてきた。今からではもう間に合わない。
誰もがもう駄目かと顔を伏せたその時。映司の体が重力に逆らってふわりと浮いた。どうしたのだろうと頭上に顔を向ける。後藤から離れた時、咄嗟に握り締めた『タトバ』のメダルから、赤、黄、緑の三色の翼が生え、空中で映司の体を支えていた。
――まったく、無茶しやがるぜ。俺はお前の便利屋じゃあねぇんだぞ。
――まぁ、お前らしいっちゃあ、らしいがな。
――今回だけだ。次に何をやらかそうが、俺は知らねぇからな。
声が聞こえた、気がした。聞き覚えのある、嫌味たらしく高圧的な声だ。映司はその声の主を知っている。憎たらしすぎて忘れようがない。
「やっぱり、助けに来てくれたんだな。アンク」
三色三枚一対の羽根を目にした映司は、その先にうっすらと見える人物に、ありがとうと言って微笑んだ。『彼』はふんと鼻を鳴らして踵を返し、気恥ずかしそうに頭を掻くと、地面まで後二メート

ルで映司から手を離す。
映司は受け身も取れずに背中から落下してしまい、痛みに目を見開き、芋虫のよう地面をに転がった。
「火野！？　大丈夫なの……おぉわッ」体勢を保てずに着地したのは後藤も同じだった。映司の無事を見てウイングの故障のことが疎かになったその時、遂にバースの耐久力が限界を越え、同じく地面から二メートル程の距離で変身が解除されてしまったのだ。
抱き抱えた比奈だけは守ろうと、肩に手を回して掴まっているのをお姫様抱っこの体勢に切り替え、両の足で大地を踏み締めて着地する。
比奈を守ることは出来たものの、自分と彼女の体重を二本の足だけで支えた代償は余りにも大きかった。後藤は腰を痛め、比奈を抱えたまま仰向けに倒れ、そのまま自力で起き上がることが出来なくなってしまった。
「後藤さん、大丈夫ですか！？　顔は真っ青ですし、額にすごい冷や汗が……」
「大丈夫、大丈夫……。比奈ちゃんが無事なら、俺はそれで……」
本当は大丈夫ではないのだが、彼女に気負いさせたくないと、後藤は無理に笑顔を見せた。「それよりも、火野の方を……。あいつ、俺よりも酷い着地をしただろう？　だから……」
「あっ、それなら大丈夫です。映司くんなら……」比奈は後藤の顔を映司の方へと向けさせる。
「やったな、火野！　お前なら必ず行けるって信じてたぜ、おい！」
「火野さん、お疲れ様でした。私の残業代その他諸々、貴方と伊達さんのお金から頂かせてもらいますから、そのつもりでお願いしますね」
「久しぶりだね、映司君。所でさっき、空に人影が浮かんでたように見えたんだけど、一体誰と話していたんだい？」
「あぁもう、そんなことはあとあと！　めでたいわ、お祝いよ！

アポロショッカーをやっつけた映司君の為のお疲れパーティーの始まりよ！」
伊達に里中、千世子に信吾。彼と十一人の仮面ライダーに救われた人々が、彼を囲んで割れんばかりの歓声を上げていた。
「あそこまで来ると、流石に壮観だな」
「ですね……」
「だが、まぁ」呆れた声で後藤が言う。「皆の喜びに水を指すようで気が引けるんだが……、救急車を呼ぶ方が先なんじゃないか？火野の奴、泡噴いてるぞ」
「ですよ、ねぇ……」
数分後、比奈の呼んだ救急車が湯谷温泉前に到着。観衆の「何をするんだ」、「ちゃんと祝わせろ」という怒号を遮り、痛みで気を失いかけていた映司を再び病院へと搬送していった。

※※※

映司の怪我は大したものではなく、朝日が昇り切って西の空に沈む頃には、千世子の主催するクスクシエでのお疲れパーティーに出席出来る程に回復していた。
伊達に里中、泉兄妹に加え、彼らと面識のある人々を招き入れたクスクシエは、今までとは比べ物にならないくらいの客入りを見せ、誰もが仮面ライダーオーズの勝利に湧いていた。
因みに、後藤は病院に搬送後、数日間の絶対安静を言い渡されたのだが、折角だから皆で楽しもうという伊達と千世子の強い推しによって、毛布にくるまれたままクスクシエに連れて行かれることと相成った。
当然ながら一人では食事すらままならないため、店の女性陣に手伝ってもらっている。
世の男性諸志にはさぞ羨ましく感じられるだろうが、時たま女性陣に混じり、伊達が熱々のおでんを後藤の口に放り込んだり、彼女

たち自身このようなことに不慣れなため、上手く口に入らない、箸が頬や顎に刺さる、そもそも箸に食べ物が乗っかっていないなど、かなり苦しい立場に立たされていた。映司は女性陣の玩具にされる後藤に心の中で謝って、深々と頭を下げた。

あれよあれよのうちに夜が明けて、東の空から太陽が昇り始めた。ある者は酔い潰れ、またある者は疲れ果てていびきをかいて眠る中、映司は一人皆を起こさぬよう、密やかに店を出た。

看板の前で可愛らしくちょこんと座る、パーティー用の燕尾服を纏い、鼻眼鏡をかけた人形をいとおしそうに撫で、外で待機していた里中に声を掛ける。

「お待たせしてすみません。それでは、お願いします」

「私は別に構わないのですが……」里中が目を細めて言う。「火野さんはいいんですか？　皆さんにお別れを言わなくて」

「いいんです。面と向かうとなかなか出られなくなっちゃいますから」

二人がそんな話をしていると、彼らの頭上から風が吹き荒れ、轟々とした音が響く。『鴻上ファウンデーション』の輸送ヘリがクスクシエの前に降り立ったのだ。

輸送ヘリの操縦士に促され、里中は後部座席のスライドドアを開き、中にいた鴻上をヘリから降ろす。鴻上は背中に何か入っているんじゃないかと思うくらい直立した姿勢を保ち、いつもの調子で言葉を紡ぐ。

「こちらの準備は完了したよ、火野君。批判は全てこちらの方で何とかしておくから、気兼ねせず行って来ると良い」

「我が儘を言ってすみません。でも、あの人たちにはどうしても俺の口から『ただいま』を言っておきたかったので……」

「構わんさ。それもまた欲望！　行って、存分に欲望を満たすといい。ハッピバースディ！」

アポロショッカーを壊滅させた仮面ライダーオーズの活躍は瞬く

間に日本中に知れ渡り、日本政府では英雄オーズに国民栄誉賞を授与したいと、変身者に名乗り出るよう求めていた。
鴻上の口伝いでそれを知ることとなった映司は、『折角ですが』と首を横に振る。何も賞賛される為に戦った訳ではないし、アポロショッカーが滅びたとは言え、彼らに街を破壊され、元の暮らしに戻れない人々がたくさんいる今、自分がそんなものを受け取るわけには行かないと固辞したのだ。
その代わりにと映司が要求したのは、アポロショッカー襲撃前まで滞在していた、遊牧民たちの待つあの高原に連れて行ってもらうこと。
事情があったとはいえ、行き先も告げずに立ち去ってしまったことが映司の中で相当心残りになっているらしく、「ただいま」を言いたいと嘆願。鴻上は二つ返事でそれを受け入れ、この国を救った英雄のためだと、映司が乗ってきたものよりも早いヘリを準備していたのだ。
映司は重ね重ね礼をすると、上着からオーズドライバーのバックルを取り出した。
「これはお返しします。鴻上さんの御先祖様のものですし」
「いや、その必要はない」鴻上映司の差し出した手を引っ込めさせて続ける。「資格のない私が持っていても、何の意味もないからね。君が好きに使うといい。それに……」
――映司くん！
鴻上が何か言葉を言おうとした矢先、クスクシエの店先から飛び出した比奈が声を上げる。ヘリの音に目を覚まし、映司がそこにいないと気付いたからだろう。
比奈は焦る映司に喋らせる間を与えず、悲しげな顔をして「酷いです」と続けた。
「ずっとこの町に居てとは言いません。けど、何も言わずに出ていくなんて……、わたしたちのことなんて、どうでもいいんですか？」
「そんなわけないよ。ただ……」

「皆の顔を見ると、別れが辛くなっちまうから……だろ？」寝起きのぼさぼさ頭を軽く撫で、伊達が口を挟む。「お前の考えていることくらいお見通しなんだよ」
「そうよ、そうよ」簀巻きにされた後藤を担ぎ、千世子が店の中から飛び出した。「水臭いわよ映司くん、誰も止めやしないし、寂しいのだってみんな一緒なんだから。またいつでも戻ってらっしゃい。うちはいつでも大歓迎よ」
「こんな姿で済まないな、火野」海苔巻きのようにくるまった掛け布団から顔を出して、後藤が言う。「俺も頑張る。だからお前も頑張れ。達者でな」
「みんな……」
俺は馬鹿だ。何も言わずに出て行かれて、皆が悲しまない訳がないじゃないか。映司は目頭を押さえて暫しうつむくと、思い切り頭を下げて言った。
「また……いつかまた、必ず戻って来ます。皆さんこそ、お元気で」
潤んだ瞳でそれだけ言うと、映司は振り返ることなくヘリに飛び乗り、操縦士に離陸を請う。ヘリは風を掴んで力強く飛び、あっという間に雲の向こうへと消えて行った。
「ふぅ、む」鴻上はヘリに向かって手を振りつつも、眉間に皺を寄せて何かを思案する。
「そんなに顔をしかめて……どうかしたんですか？　会長」
「いやね、火野君にまだ何か……、言い忘れたことがあった気がしてね」
「何のことです？　会長がそうも熱心に悩むということは」
「あぁ、いや。忘れてくれたまえ。思い出せないということは、特に重要なことじゃあないんだろう。それにしてもこの歳にして物忘れとは、私も老けてしまったな」
「若さは気から。そんなこと言ってると今以上に老けてしまいますよ、会長」
「それもそうだ。まぁ、火野君については大丈夫だろう。……多分」

鴻上はどこかもやもやとした気持ちを残しつつ、里中たちと共にクスクシエの中へと入って行った。

※※※

ひやりとした空気が気持ちの良い、青々とした草が生い茂る穏やかな高原。遊牧民たちは草を食む羊に歩幅を合わせ、のんびりと南へ進む中、彼らの上空を一機の輸送ヘリが横切った。羊や馬たちはおろか、その飼い主たちまで驚き戸惑う中、ヘリは彼らから少し離れた所に着陸し、後部座席の引き戸を開け、火野映司が軽く伸びをしながら現れた。

「……エイージ？」家族のまとめ役、白顎髭のサヴァンが映司に気付いて声を上げる。「エイージ、エイージじゃないか！　おぉいみんな、早くこっちに来い。エイージが帰ってきたぞ！」

「いや”映司”、なんですけど……まぁ、いいか」

映司が戻ってきたことで、家族全員が活気付き、彼を囲んで騒ぎ出した。

中でも彼の帰還を最も喜んだのは、家族で最も小さいパドル少年だ。パドルは笑顔で映司の背中に抱き付いた。

「おかえり、エイージ！」

「パドル！　良かった、お前も無事だったんだな！」

「僕たちなら大丈夫だよ、エイージが守ってくれたもん！　それよりさ、それよりさっ！」

パドルは宝石のように目を絢爛に輝かせて言う。「またオーズのお話聞かせてよ！　僕、ずうっと良い子で待ってたんだよ！　ね、ね、いいでしょー？」

「あぁ、勿論！　沢山あるぞ、お前に全部聞き切れるかな？」

「あったり前さ！　どーんと来いよ！」

「よぉおし、じゃあ行くぞ！　まずは……どうするかな」

話すことならいくらでもある。映司は平和の大切さを噛み締めつつ、何から話していいものかと思案を巡らせる。よし、今回の戦いのことを話そう。彼を楽しませるだけでなく、この一件を自分の心にしっかりと刻み込んでおくためにも。

「うん、じゃあ……パドルもちょっと観ていたあの戦いからだ。ええっと、あれは……」

ならばまず最初から。映司は門矢士――仮面ライダーディケイドと共に、アポロショッカーの幹部・ドクトルGと戦った時のことを話して聞かせようとするが、彼の話を遮るかのように、遠方で大きな爆発が起き、黒い煙を濛々（もうもう）と上げた。

「うわーっ、うわーッ！　エイージ、エイージ！　今の音、凄かったね。一体何なんだろ」

普段角笛の音色以上に大きな音を聞かないこともあり、爆発現場を興味津津に眺めるパドル。一方で映司はそれに何か嫌なものを感じ、黒い煙を訝しげな目で見つめる。

彼の予想は的中した。黒い煙が上がった場所から、二十数人近い数の黒タイツが駆けて来て、遊牧民の一団をあっという間に取り囲んでしまったのだ。

「あわ、あわわわ……」

「なッ、何なんだお前らはッ！　大勢で来たって羊たちは渡さないぞ」

訳も分からず自分たちを取り囲む、見たこともない異形に恐れ慄（おのの）く遊牧民。

うち二人が囲いを外れ、サヴァンたちに襲い掛かって来た。映司は「そうはさせるか」と二体に掴みかかり、一体を急所を狙った横蹴りで、もう一体を敵から奪った剣で袈裟に裂いて、寸でのところでセルメダルに戻す。

「なんで奴らがここに」と困惑する映司の前に、黒タイツの人だかりを割って、一体の怪人が姿を現す。両手に鋭利な鎌を持ち、緑色の体表に、胸部から内部機械が露出した「カマキリ」型の怪人は、

遊牧民たちを嘲笑うように自慢の鎌を振り上げた。
「ふはは、ははははは！　俺様は“アポロショッカー“行動隊長、カマキリガン！　この草原はアポロショッカーの前線基地の予定地だ。邪魔な人間は全て、この俺が、アポロガイスト様の為に、排除してくれるッ！」

「ねぇ、ねぇ」パドルが怯えた様子で映司に問う。「あいつ、アポロショッカーって言ってるよ。アポロショッカーってのは、エイージたち仮面ライダーがやっつけたんじゃないの！？」
「その筈だ。そのはず……なんだけど」映司はそこまで言いかけ、ふと、士と鴻上が言っていた台詞を思い出す。
――――あばよ、仮面ライダーオーズ。この世界は任せたぜ。
――――資格のない私が持っていても、何の意味もないからね。君が好きに使うといい。それに……。
日本で聞いた時は、冷やかしか何かだと思っていたが、まさか現実になってしまうとは。
よくよく考えてみると、アポロショッカーという組織は規模こそ小さいものの、合成コアやライダーコアの力を用いて、この世界全てを手中に収めようとしていたのだ。そんな奴らが日本の征服で満足する筈がない。この結果はむしろ必然とも言えるだろう。
ならばどうする。別世界の友からこの世界を任せられた自分は。仮面ライダーオーズの証・オーズドライバーを鴻上から託された自分は。
答えは最初から決まっている。映司はパドル少年を自分の背後に下がらせ、不安がる彼の頭を撫でてこう言った。
「お話はまた今度だ。けど、その代わり……、仮面ライダーオーズとしての戦いを、今、ここで見せてあげるよ」
「エイージ。それって、まさか……」
「そのまさかさ」バックルを腹部に押し当て、ズボンのポケットから『タトバ』の合成コアメダルを取り出して映司は言う。「俺がい

いって言うまで、絶対にそこを動くんじゃないぞ。パドル」
「うん！」
先程戦闘員を倒して手に入れたセルメダル二枚をバックルの両端に、タトバのコアを真ん中に嵌めこみ、オースキャナーでそれを読み込みつつ、彼は叫ぶ。
――――変身ッ！
――ギン！　ギン！　タトバ！
――タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！
来るなら来い。お前たちがどこで、どんな悪さをしようと、俺が全て撃ち砕いてやる。人と人との絆を奪わせやしない。
俺はオーズ。仮面ライダー・オーズだ。

◎オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー・了

最終回：「お別れとお帰りと俺の名は仮面ライダーオーズ」（後書き）

◆これにて、本編は終了となります。一ヶ月近くの間お付き合いくださって、誠にありがとうございました。

◆後二編、『あとがき』と『設定まとめ』のようなものを掲載する予定ですので、宜しければそちらもご覧ください。

特別付録１：「あとがきと解説とこのお話が出来るまで」　（前書き）

◆これは”後書き”です。無駄に長いので、この先にある”設定まとめ”をご覧になられる方は読み飛ばすことをお勧めします。大した話は書かれていません。

特別付録1：「あとがきと解説とこのお話が出来るまで」

◆話を起こす前に、一つ謝っておきます。

「オーズ・ディケイド・平成ライダー」とタイトルを冠しておきながら、平成十二人ライダー（厳密にはオーズを抜いた十一人）が集まるのが、結局最終回のみに留まってしまってすみません。

後書きなので正直に話しますと、「メダル」としてオーズやディケイドに手を貸す、と言うのが本作の『平成ライダー』にとって一番重要でことと考えており、彼らが集合して戦うという点については、最初からあまり重要視していませんでした。ユウスケ・翔太郎&フィリップ、アスムを除いて各種ライダーたちの出自が不明で台詞がないのもそのためです。

オールライダーものって、書いてみると予想以上に厳しいです。一人ひとりに何かそれらしき台詞を言わせてあげたかったのですが……。

◆前置きが少々長くなってしまいましたが、ここからが後書きの本文になります。

連載期間一カ月弱、初っ端からお読みくださった方も、途中から追ってくださった方も、ここまで読んでくださって誠にありがとうございました。毎回毎回やっつけ更新みたいになっててすみません。

ほぼ一日一更新を成立させるべく、予定していた展開やセリフを削ったり、大好きな戦闘描写をお座なりにしてまでなんとかやってきましたが、それでも終盤は酷いのなんの……。

……とまぁ、このままだと延々と愚痴語りをしてしまいそうなので、一旦中断。何を書いていいか分かりませんが、とりあえず『この話が出来るまで』の経緯を徒然と記していこうかと思います。

◆本小説を書き始める一年前、僕は『仮面ライダーＷ　Ｒの脅威／帰って来てくれ仮面ライダー』（以下”ＷＲ”）という、「仮面ライダーＷ」の二次創作を執筆していました。

どういうものか掻い摘んで話すと、『４８話と最終回の間の空白の中、Ｗ本編には存在しなかった”平成ライダーの記憶を宿したガイアメモリ”を使う敵と、左翔太郎の変身する仮面ライダージョーカーが戦う』というものです。

「カプセルトイの玩具を使った創作物」自体あまりなかったのと、掲載時期がＷ本編最終回寸前で、”ラストは一体どうなるんだ”と皆の期待が一番高まっている時期だったこともあって、多くのご支持を受け、その反響の大きさに書いている本人が一番驚いていました。

ＷＲはＷＲで、自分のやりたいことをかなり詰め込んで形にし、それなりに満足出来るものになったのですが、仮面ライダーＷの最終回前を舞台設定に決めたこともあり、“Ｗらしさ”を優先させるあまり、『折角ライダーのメモリを持っているのに、設定上主人公たちが使えない』ことに、少しだけもどかしさを感じることもありました。

食玩・カプセルトイに平成ライダーのコアメダルがある、と知ったのはそれから暫くしてから。二番煎じになると分かっていながらも、”これをオーズが使って変身したら、どんな形態になるのだろう”と、文章の制作予定もないのに、ただただ思案を巡らせていました。

一応（去年の冬の時点で）ＷＲのようなものを制作してみようとしたのですが、オーズという物語の中では何をして良いのか、ライダーのコアメダルはどう出せばよいのか、そもそも誰を敵に据えれば良いのか？　などと、考えども考えども話はまとまらず、他にも連載作品を抱えていたので、ずっと保留にして頭の片隅に追い遣っ

ていました。

◆再び設定が転がり始めたのは、１１年の４月に「オーズ・電王・オールライダー　レッツゴー仮面ライダー」を鑑賞した時です。“ディケイド”のあの物議を醸した最終回において、一際異彩を放った『アポロガイスト』の復活に、細かいことはとりあえず放って集結した（ほぼ）オールライダーの皆さん。そして岩石大首領の登場と共に火口へと落ちて行く幹部一同。

　これならいける。なんでそう思ったのか、今となっては全く分かりませんが、とりあえず……

・敵の首領はアポロガイスト

・冒頭でＯＯＯ本編には登場していない亜種形態を多く出して戦うも、アポロガイストに倒されて全てのメダルを奪われ、アンクも彼らの組織に捕らわれる。

・奪ったコアをアポロ配下の怪人が吸収し、強力な怪人となって映司に襲い掛かる。

・絶体絶命の最中、別世界からやって来た門矢士が映司の前に現れて――

……という展開を、同年５月中の時点で考えていたのですが、話として全くまとまらず、丁度この時期体調が思わしくなかったのもあり（それでなくとも、同時期にいくつか連載を抱えていたので暇がありませんでした）、一部の設定は本作に反映されているものの、結局これも没として闇に消えました。

◆話が最も大きく動いたのは、仮面ライダーＯＯＯ最終回を視聴した８月の２９日。

『これ以上はいい……俺は暴走する気はない』、『（ウヴァの怯える声）』など、せっかく完全態になったのに、オーズにぼこぼこにされて弱気になるウヴァさん、映司とアンクの別離に皆が釘付けになる中、僕は『タジャスピナーから放たれた恐竜メダルの攻撃で、

ドクター真木が他のコアと共にブラックホールの中に消えて行く』場面を見て、一人で唸っていました。
『これだ！　これならやれる！』、その最終回を見た勢いで“オーズ・デイケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー”のあらすじを構想し、本格的に話が動き出しました。
とはいえ、丁度その頃（９月一杯）連載作品の更新が三作立て続けになっていて書き出す暇がなく、本作の製作は１０月に入るまでお預けになりました。

◆その後、九枚のメダルの特性と何処に配置するのかを大まかに決めて製作を開始。１０月１３日に見切り発車で掲載し始めたのですが、書き出したら書き出したで、ほぼ毎日、０時には更新するという自分ルールを決め、一人で勝手に墓穴を掘ったり、元々構想していた話を面白いと感じられなくなり、加筆校正で忙しくなって実生活の睡眠時間等を削らざるを得ず、執筆終盤には普通に起きてて目眩や立ちくらみに悩まされるようになるなど、今回は相当酷い目に遭わされました。文章量だけなら（この後書きも含め）ＷＲの倍程度なのに、この差はなんなんだと。

◆ただ、『オーズの最終回後』と曖昧に決めた世界観で、『出自不明のディケイド』を映司と絡ませ、アポロガイストの怪人軍団と戦わせた本作の展開は、（掲載に間に合わせるためにいくつかカットしたものの）自分勝手に好き放題やれたので気に入っています。『電車をけん引する戦車』だの『温泉でくつろぐラスボス』だの『メダルの奪い合い』だの……、やりたいことをやりたいようにやれて、疲労で体が弱って行く以上に楽しかったです。もうこんなこと二度と出来ないんじゃなかろうか。

◆重ね重ねになりますが、このような『オーズ』でも『ディケイド』でも『平成ライダー』であるかすらアヤしいお話を、最後まで読ん

でくださって本当にありがとうございました。これを読んで少しでも“面白かった”、と思っていただければ幸いです。

◆ちなみに、本編では語られないまま終了してしまいましたが、伊達さんが日本に帰国したのは、“紛争地帯や途上国に『病院』を作るための資金を、鴻上が一部工面する”と言ったためで、映司が日本を去った際にそれを貰っているのですが、里中の残業代その他雑費によって、うち半分が消えています。
遊牧民である『サヴァン』や『パドル』にはこれと言った元ネタやモチーフはありません。それらしい人物の名前として設定しただけです。

◆もう少し余談。ＷＲの際、数合わせのために出したは良いものの、紙面の都合で使ってあげられなかった反省からか、『ファイズ・ブレイド・アギト』のコアは、他のメダルよりも意図的に魅せ場を増やしています。読者様から見て、増えているように見えているかは分かりませんが……。
　オーズが倒した怪人たちが爆発せずにメダルに変わるのは、『こんなご時世だし、凄惨な展開なぞ無しに面白いものを書きたい』……という意図と、本作構想中に観た『スコット・ピルグリムＶＳ邪悪な元カレ軍団』の影響です。
　ついでに言うと、ブレイド・コアを映司が初めて手にした時、剣の柄が胸から出てくるのも上記映画のワンシーンからの影響です。色々な意味で凄まじい”オタク映画”なので、興味のある方は是非ＤＶＤ／ＢＤでご鑑賞を。

特別付録２：「ライダーメダルとアポロショッカー怪人と設定まとめ」（前書

◆本作におけるライダーメダルや合成コア・メダル、アポロショッカー等の設定まとめです。一部以前にあとがきで書いた部分と重複しているかもしれません。

◆基本的にネタバレには配慮していないので、本編を全てお読みになった上でご覧下さい。

特別付録２：「ライダーメダルとアポロショッカー怪人と設定まとめ」

◆ライダー・コア

十一人の平成ライダーが、アポロガイストとの戦いでその能力（ちから）と意思をメダルに綴じ込められた姿。怪人は体のどこかに出来た投入口に投げ入れることで、オーズは変身に使用することで、そのライダーが使っていた能力を引き出すことが出来る。

火野映司の「人々を護りたい」という欲望に呼応し、彼の力となる。基本的に他の人間に使用することはできない。

メダルにはそれぞれ組み合わせによる強さがあり、ある特定の組み合わせで変身することで、個々の能力を最大限に発揮させることが出来る。劇中には『パワー系赤のコンボ』、『テクニカル系黄色のコンボ』、『甲虫系青のコンボ』、『新世代ライダー系コンボ・タディブル』の四つが登場した。

ただし、コンボ形態では一部の固有能力が使用出来なくなるため、それらを活用するためには、必要に応じて亜種形態に切り替えなければならない。

以下、登場したライダーメダルを入手順に表記する。

◎クウガ・コア

昆虫系に属するヘッド・コア。使用者に雷の力を与え、自在に雷を発生させることができる。

変身前でも発動出来るが、使用後のノックバックが強く、多用は出来ない。

ブレイド・コア、カブト・コアと合わせて使用することで『甲虫系青のコンボ』に変化する。

◎ブレイド・コア

昆虫系に属するアーム・コア。変身時にはスライド式で迫り出す

剣「ブレイドソード」が出現し（実写版『トランスフォーマー』のオプティマス・プライムのものを想像してもらえば分かりやすいだろうか）、咄嗟の防御に使える『ラウザーシールド』を扇状に展開することが出来る攻防一体のアーム・コア。
クウガ・コアと同じく雷の力を宿しており、クウガ・コアを組み合わせることで刃に雷を纏わせることも可能。
　ブレイドソードは変身前でも使用出来るが、戦闘能力は使用者の力量に準ずる。
クウガ・コア、カブト・コアと合わせて使用することで『甲虫系青のコンボ』に変化し、他の形態では隠れていたラウザーシールドが常時展開するようになる。

◎キバ・コア
　パワー系に属するレッグ・コア。拘束具で封印された「ブラッディ・ウイング」を解放することにより、空中を自在に飛ぶことが可能となる。
　また、他のコアメダルの潜在的な力を覚醒させる効力を持つ。
リュウキ・コア、ヒビキ・コアと組み合わせ、『パワー系赤のコンボ』に変化。キバ・コアの力で前二枚の力を最大限に引き出せるが、反面ブラッディ・ウイングは展開せず、空中戦は不可能となる。

◎ヒビキ・コア
　パワー系に属するアーム・コア。
　使用者に炎と清めの力を与え、特に腕力が著しく強化される。手から迫り出す『ヒビキオニヅメ』て敵を裂き、専用武器『ヒビキオンゲキボー』による中～近距離戦を得意とする。
　リュウキ・コア、キバ・コアと組み合わせ、『パワー系赤のコンボ』に変化。ただでさえ強い腕力は数十倍に強化され、全形態中最大の直接打撃力を発揮する。

◎リュウキ・コア
パワー系に属するヘッド・コア。使用者に炎の力を与える。
ヒビキ・コア、キバ・コアと組み合わせ、『パワー系赤のコンボ』に変化。強大な炎の力を全身に宿すことが出来、肩に付いた「ドラグショルダー」を第三第四の腕として使役することが可能になる。

◎アギト・コア
テクニカル系に属するレッグ・コア。
右足の爪先と左足の踵に備え付けられた暗器『クロスホーン・ヒール』で、刃の通じない超近距離での戦いが可能となり、多人数戦で効力を発揮する。脚力が他の形態以上に強化され、この形態のスキャニングチャージのの殆どがキック技である。
だが、その真価はファイズ・コア、デンオウ・コアと組み合わせることによって最大限に発揮され、それらを組み合わせて黄色のコンボを形成した場合、数秒先の敵の行動を予測し、巧みにかわして戦闘を優位に進めることが出来るようになる。

◎ファイズ・コア
テクニカル系に属するヘッド・コア。
顔全体を覆う複眼には高純度のフォトンブラッドが流れ込んでおり、それを放って直接攻撃することも、逃げ回る相手や流体の敵を固定することも可能。
フォトンブラッドは頭部からしか放てないが、デンオウ・コア、アギト・コアと組み合わせることで、全身に駆け廻らせることも可能。
また、変身せずに使用した場合は、不可視のものを見破ったり、目から微量のフォトンブラッドを放つことが出来る。

◎デンオウ・コア
テクニカル系に属するアーム・コア。専用武器を一切持たない代

わりに、このメダルを装備すると同時に『デンオウデンレール』が全身に駆け廻り、そこを経由することで、他のメダルが持っていた能力や固有武器を顕現させて使役させることが出来る。
ファイズ・コア、アギト・コアと組み合わせ、『黄色のコンボ』として運用することで、全身にフォトンブラッドを纏わせ、敵の攻撃を巧みに見切ってかわす力を使えるようになる。

◎カブト・コア
昆虫系に属するレッグ・コア。超加速能力『クロックアップ』を使用できる唯一のメダル。
どのメダルと組み合わせてクロックアップを使用することは可能だが、クウガ・ブレイドとの組み合わせで『青のコンボ』とすることで、超加速だけでなく、メダルを持った怪人級の相手をも焼き焦がす凄まじい電撃を放つことが可能となる。
（※厳密には、原典のカブトが放つのは“電撃”ではなく、“タキオン粒子”です）

◎タトバ・コア
ディケイド・ダブルとしか組み合わせられない特殊なヘッド・コア。変身後はタトバ・アイによる分析・顕現機能により、「ウエポンライド」カードを読み込んで、武器として権限させる役割を担う。
アンクの意思が内包されているタカ・コアの力が強く、他の形態の能力は殆ど見せていない。
映司は最終話において、セルメダル二枚とこのメダルを嵌め込むことで、オーズ・タトバコンボへと変身していた。

◎ディケイド・コア
タトバ・ダブルとしか組み合わせられない特殊なアーム・コア。変身後はファイナルアタックライドカードにも似たバリアを精製して敵の攻撃を防ぎ、左手の『スライドライバー』からカードを呼び

出し、タトバ・アイの力で武器として呼び出す。
「ウエポンライド」で召喚した武器は、スライドライバーの中心にある赤い宝玉に触れることで、「ファイナルアタックライド」として発動させることが出来る。

◎ダブル・コア
タトバ・ディケイドとしか組み合わせられない特殊なレッグ・コア。変身直後は『ヒート』と『メタル』、その他右側を『サイクロン』と『ルナ』に、左側を『トリガー』に変更させて戦う。

◆亜種・コンボ形態
タディブルコンボを除き、特に名前は設定されていないので、各人ご自由に名付けてくださって構いません。というよりも、自分の中で格好良い名前が思いつきませんでした。

●亜種形態一覧
◎クウガ＋ブレイド＋キバ
劇中最初に登場した形態。クウガの電撃エネルギーをブレイドの剣に纏わせて戦う。キバ・コアの力での空中戦も可能。
◎クウガ＋ヒビキ＋キバ
ドラゴンオルフェノクとの戦いで使用。腕力が著しく強化され、電撃の力を纏ったオンゲキボウの威力はかなり高い。
◎リュウキ＋ブレイド＋アギト
ガンガンライナー乗車直後に使用。リュウキ・ヘッドによる火炎攻撃、ブレイドとアギトによる刃で遠・中・近距離全てに満遍なく対応出来るバランスの良い形態。
◎クウガ＋ブレイド＋アギト
ガンガディンとの戦闘中に使用。ブレイドの剣だけでなく、アギトのクロスホーン・ヒールにも電撃の力を付加できるが、未使用。

◎クウガ＋ヒビキ＋アギト
　同上。重力負荷で思うように接近出来ないことから、壁伝いに遠距離攻撃を行うべく映司が選んだ形態。
◎リュウキ＋ヒビキ＋アギト
　ギリザメシャウタスとの戦いで使用。スキャニングチャージ時はオーズの背から炎が噴き出し、ライダーキックの威力を倍増させる。
◎ファイズ＋ヒビキ＋アギト
　同上。他の形態では捉え切れないギリザメシャウタスに止めを刺した。
◎ファイズ＋ヒビキ＋キバ
　夢見スクエアに向かう際に使用した形態。フォトンブラッドの力を持ってしても、デッドラトラーイオンのスピードを捉え切ることは出来なかった。
◎クウガ＋デンオウ＋キバ
　アポロガイストとの最終決戦で使用。『デンオウデンレール』で“クウガ”のタイタンソードと“キバ”のドッガハンマーを呼び出すことが出来る。
◎ファイズ＋デンオウ＋キバ
　同上。ファイズの武器とキバの武器を用いて空中戦を挑むが、タジャドルとWのメダルを持つアポロガイストには敵わなかった。

●コンボ形態一覧
・パワー系赤のコンボ
　龍騎・響鬼・キバの組み合わせで発動する形態。オーラングサークルが真っ赤に染まり、リュウキ・ヘッドに装備された『ドラグショルダー』が腕として展開する。
　直接打撃力は全コンボ・全形態中最強だが、反面キバ・レッグの飛行能力は失われ、動きは全体的に重い。リュウキ・ヘッドの火炎攻撃、ヒビキ・アームのオニヅメ・オンゲキボーを用いた中～近距離戦が得意。

必殺技はキバの紋章と龍騎の炎で相手を捕え、ヒビキオンゲキボーで清めの音撃を流し込む『ライダー・ブレイジングウェイブ』。

・テクニカル系黄色のコンボ
ファイズ・電王・アギトの三枚で発動。オーラングサークルの色は黄一色。
仮面ライダーファイズ宜しく全身にフォトンブラッドが流れ、並みのオルフェノクなら触れただけで灰化する。また、『デンオウデンレール』を通じてファイズ・ヘッドにアギトの『見切り』の力を転送することで、敵の動きを先読みし、かわしたり反撃に転じさせることも。一対一では圧倒的な強さを誇る。
デンオウデンレールでファイズ・アギトの武器を顕現させて戦うことも出来るが、使用できる武装は近距離戦用のものに限られ、パワーも残り二つのものにはやや劣る。
必殺技はファイズのフォトンブラッドをデンオウデンレールを通じて、アギトのクロスホーンヒールに集束させ、右足左足の順に突き刺して敵を引き裂く『ライダー・クリムゾンブレイク』。

・甲虫系青のコンボ
クウガ・ブレイド・カブトの三枚で変化する形態。『剣』の力を強く受けており、オーラングサークルは他二枚を無視して真っ青に染まる。
全形態中、最もクロックアップを効果的に運用できる他、全身に強力な雷が渦巻いており、合成コア持ちの怪人をも一瞬で消失させるほどの雷撃を放つ。
必殺技はブレイドの剣で敵を串刺しにし、強力な電撃を放つ『ライダー・ライジングシュート』。

・新世代ライダー系コンボ・タディブル
タトバ・ディケイド・ダブルの三枚でのみ発動する特殊なコンボ。

オーラングサークル及び複眼の色は虹色。
左手に装備された『スライドライバー』を引くことで、最大二枚のカードを呼び出し、“タトバ・アイ”でそれを読み込ませ、平成ライダーの最強武器を顕現させて使用出来る他、ダブル・レッグからはサイクロン、ヒート、ルナ、メタル、トリガーの五つのメモリの力を互い違いに発動することが出来る。
（※メタル、トリガーを用いる場合はそれぞれ、伸縮自在の鉄棒と足先が銃口へと変化する。また、サイクロンとヒートの力は脚だけでなく、腕からも発動が可能）
必殺技はオーズ・タトバコンボ、ディケイド・コンプリートフォーム、ダブル・サイクロンジョーカーエクストリームに分割し、ダブルが『ビッカーファイナリュージョン』を、オーズとディケイドが空中からキックを放つ『トリプルライダー・ジェネレーションアタック』。

◆合成コア・メダル
『ＯＯＯ』本編に於いて、ドクター真木との戦いで消えた１７枚のメダルが、ブラックホールの中で分解され、その中で生じた『生き延びたい』という欲望に沿って、各々が相性の良いメダルと合体融合して産まれたもの。

・甲殻類系合成コア
ドクトルＧが所持していたカニ・エビ・サソリの合成コアメダル。使用者に堅牢な外装甲と、チタン合金すら容易く砕く一対の鋏を与える。
『ＭＯＶＩＥ大戦ＣＯＲＥ』に於いて破壊されたこのメダルが、如何様にしてアポロショッカーの手に渡ったかは不明。
（※本作の設定を踏まえると存在している筈が無いのですが、このお話に於ける『ルール』をさらりと伝えるために敢えて登場させま

した）

・重量系合成コア

怪魔ロボット・ガンガディンがアポロガイストから与えられたサイ・ゴリラ・ゾウの合成コアメダル。使用者に重力を自由に操作する力を与える。

ガンガディンはこれと『デンオウ・コア』の力を組み合わせて、組織の強襲用巡航戦車・ガンガンライナーを構成していた。

非常に強力な能力だが、操れる重力は自身が目視出来る範囲に限られているらしく、専ら侵入者の排除に使われている。

・水棲系合成コア

ギリザメスがアポロガイストから与えられたシャチ・ウナギ・タコの合成コアメダル。使用者を液状に変える。強力な電撃も放つことが出来るが、ギリザメスとは相性が悪かったらしく、使用していない。

打撃攻撃全般を無効化する強力な能力。オーズ／火野映司のような人間であれば完全な液体に変わるのだが、ギリザメスは改造人間だったがために、変化は”流体多結晶合金”（液体金属）に留まった。

・猫系合成コア

アポロショッカー最高幹部（自称）・デッドライオンが、アポロガイストから与えられたライオン・トラ・チーターの合成コアメダル。使用者の速力を高め、強烈な熱光波を放てるようになる。

能力こそ地味だが、鬣（たてがみ）から放たれる熱光波は戦車をも溶かし、『カブト』のクロックアップや『ファイズ』のアクセルフォームと互角のスピードを獲得しており、決して弱くはない。

・昆虫系合成コア

キャマラスワームが最終決戦に際し、アポロガイストから与えられたクワガタ・カマキリ・バッタの合成コアメダル。電撃を放つ力は失われているが、分身精製には更に磨きが掛かっており、ほぼ無尽蔵に分身を増やすことが出来る。
劣勢に追い込まれたキャマラスワームが一発逆転にと使用したものの、クウガ・ブレイド・カブトの『甲虫系青のコンボ』の敵では無かった。

・鳥系合成コア
『仮面ライダーダブル』のコアと共にアポロガイストが所持していたタカ・クジャク・コンドルの合成コアメダル。炎の力と最高時速マッハ3での飛行能力を獲得すると共に、専用武器『タジャスピナー』を用いて他のコアを使役することも可能。
使用者であるアポロガイストとの相性は最高で、ダブル・コアを組み合わせ、残りのコア全てを所持するオーズと満身創痍のディケイドを完膚無き迄に叩きのめした。

・トラバッタ・コア
オーズとドクター真木との戦いでブラックホールに飲み込まれた際、メダルの数が足りずに不完全な形で融合してしまった『トラ』と『バッタ』のコアメダル。
これだけではメダルとしての力を引き出せないが、多量のセルメダルを注ぎ込むことによって『トラバッタヤミー』として映司に襲い掛かった。

◆アポロショッカー
『オーズ・電王・オールライダー　レッツゴー仮面ライダー』に於いて、大首領出現と共に火口に墜ちたアポロガイストが、偶然別世界から現れた合成コアメダルを得て復活し、ショッカー連合軍の残

党ら怪人を引き抜いて興した組織。
組織と言っても、ショッカーの主要幹部がことごとく倒された後、元々連合軍の一幹部でしかない自分に賛同する者だけを集めたにすぎず、ドラコンオルフェノクのように自身の楽しみの為に手を組んでいる者や、デッドライオンのように表面上は忠誠を誓いつつも、虎視眈々と首領の座を狙う者がいて、支配体制は磐石な物とは言い難い。
自身が手にした合成コアを部下に貸し与えて平成の十二人ライダーを粉砕し、他の世界をも支配下に置こうとしたが、メダルの力を正確に把握していなかったが故に失敗。その後は十二人ライダーの中で唯一逃げ延びたディケイドを追って、多くの世界を荒らし回っていた。
コアメダルを飲み込んで融合した怪人は、体組織までヤミーとほぼ同様のものになっているが故に、オーズの強力な攻撃を受けると、大量のセルメダルに分解されてしまう。
（※但し、その世界の理に影響されないディケイド、及びその力を持つライダーに倒された場合は爆発四散する）

◆アポロショッカー　構成員（本編での登場順）

●ドクトルG
『デストロン』から引き抜かれた幹部怪人。人間態は顎髭を蓄え、片手斧を武器とする筋骨粒々とした武人。アポロガイストの命により、世界各地を逃げ回るディケイドを追っていた。彼を将と認めており、反抗を企てることはなかった。

・カニレーザー／超装鋼カニレーザー
ドクトルGの怪人態。頭丁部より生える猛毒を含んだ弁髪風の毒針と、額から放たれるレーザー光線を用いる怪人。

『甲殻類合成コア』を取り込み、並の攻撃を全く寄せ付けない硬度を手に入れた。

●ズ・ゴオマ・グ（究極態）

コウモリ種グロンギ。元は組織の下級怪人に過ぎず、他のグロンギに虐げられていたが、ショッカー連合軍壊滅と共にグロンギの一団も自然消滅。その中で「我が組織でなら貴様も十二人分に成り上がれる」とアポロガイストに勧誘されて成り上がり、『キバ』のコアメダルを得るまでとなった。

『より多くの人間を殺すことが出世の近道』と教えられており、後述のガンガンライナーを除いて、最も多くの人間を殺害している。

最後の最期まで出世に拘っていた辺り、組織内での地位は然程高く無かった模様。

●ドラコンオルフェノク

凄まじき力を誇る組織屈指のパワーファイター。触れたものを灰に変える能力を持つ。原典のものよりも更に幼いが、灰化能力は自在に調節出来ているらしい。

彼とアポロガイストは主従の関係に無く、『付いて来れば今よりずっと楽しめる』とアポロガイストに唆されただけに過ぎない。

オーズの世界の日本を制圧した後、自分達に反抗的な人間を捕らえた牢獄の番人となり、『腕相撲で勝てば解放してやる』と嘯いて好き勝手に人々を殺害していた。アポロガイストのことは信用していなかったが、彼の作る世界にはそれなりに理解を示していた模様。

例外的に『龍騎』と『アギト』の二枚のコアを与えられていた辺り、アポロガイストから一定の信頼を得ていたと思われる。

●怪魔ロボット・ガンガディン

『クライシス帝国』で製造されていたものをアポロガイストが回収し、人工知能を改造して彼らの配下となったロボット。自意識はあ

るが、基本的にアポロガイストの命によってしか動かない。怪人というよりも、アポロショッカー所有の兵器に近い。
『電王』のメダルを体内に取り込んで“ガンガンライナー”となり、この世界での日本制圧の際の要となった。

・ガンガンライナー
ガンガディンがデンオウ・コアとサゴーゾ・コア、及び多量のセルメダルを飲み込んで巨大化した姿。
五両編成で運転席が全長５００ｍ、牽引される四両に至っては１ｋｍもの長さを誇る、アポロショッカー最強の強襲用兵器にして輸送用“戦車”。
後部二両に物資が積まれ、中央二両にはそれを守る戦闘員たちが数多く駐留し、要となる一両目にはガンガディン自体が配置され、侵入者の排除を行っている。ガンガンライナーそのものが本体となっているため、倒しても外装のセルを剥がして部品に変え復活し、何度でも襲いかかる。

●ギリザメス
『ショッカー』から引き抜かれたサメの改造人間。ライダーキックを無効化する『ライダー返し』という技を持つが、単体では如何せん戦闘能力が低く、組織の中では軽視されがち。

・ギリザメシャウタス
メダル強奪作戦に於いてアポロガイストから得た『水棲系コア』を用いて強化変身した姿。自身の体を限りなく液体に近い状態に変え、ライダーキックどころか打撃技全般を完全に防ぐ能力を獲得した。
能力そのものは最強に近いが、反面攻撃そのものは強化されていないため、決定力を持たない。

●デッドライオン
『ブラックサタン』から引き抜かれた、自称・アポロショッカー最高幹部。着脱可能な『ライオンチェーン（※原典における“デッドハンド”と同じもの）』を武器とする奇怪人。
特にこれと言った特殊能力を持たないものの、アポロガイストのために甲斐甲斐しく働くため、彼からの信頼はそれなりに厚い。劇中では完全に彼の小間使いと化していたが、密かにアポロガイストを倒し、アポロショッカーをデッドショッカーに作り替えると言う野心を持っている。

・デッドラトラーイオン
デッドライオンがアポロガイストから『猫系合成コア』を与えられて変化した姿。
合成コアメダルの猫系合成コアの項を参照されたし。

●キャマラスワーム
ショッカー連合軍の解体後、アポロガイストが直々に捕獲した彼の懐刀。地球の『エビ』の特性を備えたワーム。
アポロショッカーのメダル強奪作戦の最後の駒であり、比奈に擬態することで映司からほぼ全てのライダーメダルを奪い、クウガのメダルをその身に取り込むことで、小野寺ユウスケにも擬態し、仮面ライダーディケイドの動揺をも誘った。
戦いの最中。ディケイドにカブトのメダルを、オーズにクウガのメダルを奪われて、青のコンボへの変身を許してしまい、擬態による揺さぶりも看破され、ライダー・ライジングシュートにより倒された。

◆アポロガイスト
元『ＧＯＤ機関』所属の幹部怪人であり、アポロショッカーの首領。

偶然手に入れた『鳥類系合成コア』の力でライダーたちを圧倒し、残党の怪人を引き入れて、一組織の首領にまで登り詰めた男。
彼らを倒して得た九枚のコアを用い、他の並行世界にも自身の力を見せつけようとしたが、メダルの暴走により失敗。
唯一の討ち仕損じであるディケイドを追い、『オーズの世界』に襲来。その後、この世界を活動拠点にしようと考え、手始めに日本を壊滅寸前に追い込んだ。
以降は侵略活動を部下たちに任せ、自分は『湯谷温泉ウェイランド』で療養し、贅の限りを尽くしている。

・タジャブルガイスト
アポロガイストが『鳥類系合成コア』と『W』のメダルをその身に取り込んだ形態。
タジャドルコンボの力を象徴するかのように、顔の甲冑にはタジャドルと同じ『ビークシェイド（バイザー）』が付き、背中には三枚二対の羽根が生え、中央には分割線が真一文字に入り、右側が赤、左側が銀色になっている。Wのハーフチェンジ宜しく、体の色はアポロ自身の意思で変化する。

・タジャドガイスト
オーズにWのメダルを奪い取られ、タジャドル単一の力しか発揮できなくなった形態。弱体化したものの、それでも尚数多くのダークライダーを生み出して使役するなど、高い戦闘能力を誇る。

◆アポロショッカー戦闘員
アポロガイストがかつて所属していた『ＧＯＤ機関』のものではなく、『ショッカー戦闘員』のものを素体として作り上げた雑兵。
姿形は違うが、原理そのものはかつてウヴァが作り出した『屑ヤミー』と同様のもので、倒すとセルメダル一枚となって消滅する。

特別付録２：「ライダーメダルとアポロショッカー怪人と設定まとめ」（後書

◆本作の更新は以上で終了となります。最後までお付き合いくださいまして、本当にありがとうございました。
もしも次回作があれば、そちらでお会いできればと。

◆なお、先んじて言っておきますが、”アストロスイッチ”で何かする予定は今のところありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5226x/

オーズ・ディケイド・平成ライダー　火を噴け！　栄光の十二人ライダー

2011年11月24日01時06分発行